

熊本県文化財調査報告第185集

まんらくじでぐち
万楽寺出口遺跡

やまかいどう
山海道遺跡

熊本県教育委員会

まんらくじでぐち

万楽寺出口遺跡

やま かい どう

山 海 道 遺 跡

農村活性化住環境整備事業(寺迫地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査



序 文

熊本県教育委員会では、県農政部の依頼を受け、農村活性化住環境整備事業（寺迫地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

大規模な事業計画と広範囲に存在します埋蔵文化財の保護に、幾度の協議を重ねながらの調査でありましたが、県農政部農村整備課・県熊本事務所耕地課・熊本市北部総合支所経済課ならびに寺迫地区の方々のご協力により、多くの文化財が盛り土保存され、後世に伝えられることとなりました。報告書の刊行に当たり、まず、関係各位の皆さまにお礼申し上げます。

万楽寺出口遺跡では、弥生時代の甕棺墓より出土した人骨、また山海道遺跡では縄文時代の集石や土偶・装飾品類などが多数出土し、地域の歴史を知るうえで貴重な資料が発掘されております。

この報告書が、埋蔵文化財及び文化財の保護について知る契機として活用されることを願ってやみません。

末尾となりましたが、長期にわたり発掘作業に従事していただいた作業員の皆さま並びに御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げたいと思います。

平成12年3月

熊本県教育委員会

教育長 佐々木 正典

例 言

- 1 本書は、農村活性化住環境整備事業(寺迫地区)に伴い実施した、万楽寺出口遺跡及び山海道遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は熊本県農政部の依頼を受けて、熊本県教育委員会が行った。
- 3 万楽寺出口遺跡の調査は、平成6年度に実施し、長谷部善一、北原美和子、吉本智明、緒方 徹が担当した。
- 4 山海道遺跡の調査は、平成6・7年度に実施し、長谷部・緒方・山下義満・水野哲郎・木村元浩・安達武敏・福田信子・古森政次が担当した。
- 5 現地での図面作成は、担当で分担したが、一部有限会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 6 現地での写真撮影は担当で分担したが、空中写真は、有限会社土地開発プランに委託した。
- 7 報告書作成業務は、平成10年度に熊本県文化財収蔵庫で実施した。出土遺物の整理作業は、主に今福英子・上村孝子・興侶富貴子・淵上慶子・宮本幸子・村山紀子・山内洋子・吉岡直子が担当し、作図の整理作業及びトレースを宮嵯まい子・米倉早苗・外山裕子・古嶋 章・廣吉 禎が行った。
- 8 出土遺物の実測は、担当の他、有限会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 9 出土遺物の写真撮影及び遺構・遺物写真の焼き付けは、福田を中心に整理担当者が行った。
- 10 本書の執筆および編集は、木村元浩・福田信子が行った。なお、第1章第1節は課長補佐 島津義昭が執筆した。
- 11 甕棺墓出土の人骨分析を山口県豊浦郡豊北町立土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに委託し、第VI章に松下孝幸館長の玉稿を掲載している。
- 12 山海道遺跡では、自然科学分析を実施した。調査は、株式会社古環境研究所に委託した。その結果は、第VII章に掲載している。
- 13 整理後の遺物は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市渡鹿3丁目15-12）に保管されている。

凡 例

- 1 方位は、磁北を示す。
- 2 掲載図面の縮尺は、各キャプションに併記した。
- 3 遺構図におけるスクリーン等々の表記法は主として、粘土・焼土・焼土ブロック・炭などの部分に使用したが、何を表すのかについてはその横に記した。
- 4 土器及び土製品の色調については、農林水産省水産技術会議事務局 監修 『新版 標準土色帖』(1996) に準拠した。

本文目次

序文	第5節 古代以降の遺構とその遺物 62
例言・凡例	1 溝 62
本文目次	第6節 弥生時代以降の包含層出土遺物 . . . 65
挿図目次及び第Ⅵ章・第Ⅶ章総目次	1 土器 65
表目次	2 石器 65
写真図版目次	3 その他 68
	第Ⅳ章 山海道遺跡の調査成果
第Ⅰ章 調査の概要	第1節 基本土層 75
第1節 調査の経緯 1	第2節 旧石器時代の遺物 75
1 遺跡の発見 1	第3節 縄文時代の遺構とその遺物 77
2 調査に至る経緯 1	1 竪穴住居跡 77
3 事業の目的 4	2 埋甕 81
4 事前の協議 4	3 土壙 95
第2節 調査方法と経過 4	4 焼土坑 96
第3節 調査組織 12	5 土坑 96
1 万楽寺出口遺跡の調査体制 12	6 溝 101
2 山海道遺跡の調査体制 18	7 石組炉 101
3 整理体制 18	8 集石 101
第Ⅱ章 遺跡の概要	第4節 古代以降の遺構とその遺物 . . . 114
第1節 遺跡の環境 19	1 溝 114
第Ⅲ章 万楽寺出口遺跡の調査成果	2 周溝を持つ遺構 117
第1節 基本層序 21	3 道路 118
第2節 旧石器時代の遺物 21	第5節 包含層出土の縄文時代遺物 . . . 119
第3節 縄文時代の遺物 21	1 土器 119
1 土器 21	2 石器 124
2 石器 21	3 土偶 133
第4節 弥生時代の遺構とその遺物 27	4 装飾品 142
1 竪穴住居跡 28	第Ⅴ章 総括
2 甕棺墓 39	第Ⅵ章 万楽寺出口遺跡の甕棺墓出土の人骨
3 土壙 50	第Ⅶ章 山海道遺跡における自然科学分析
4 木棺墓 53	抄録 162
5 炉 56	
6 焼土 57	
7 土坑 58	
8 配石 60	

挿図目次及び第Ⅵ章・第Ⅶ章総目次

第 1 図 周辺地形図	2	第 41 図 14号住居跡出土土器	38
第 2 図 万楽寺出口遺跡調査区位置図	3	第 42 図 18号住居跡実測図	38
第 3 図 万楽寺出口遺跡1区遺構配置図	5	第 43 図 1号甕棺墓実測図	39
第 4 図 万楽寺出口遺跡2区遺構配置図	6	第 44 図 1号甕棺実測	39
第 5 図 万楽寺出口遺跡3-1区遺構配置図	7	第 45 図 2号甕棺墓実測図	40
第 6 図 万楽寺出口遺跡5区遺構配置図	8	第 46 図 2号甕棺実測図	40
第 7 図 万楽寺出口遺跡7区遺構配置図	9	第 47 図 3号甕棺墓実測図	41
第 8 図 山海道遺跡調査区位置図	11	第 48 図 3号甕棺実測図	41
第 9 図 山海道遺跡1区遺構配置図	13	第 49 図 5号甕棺墓実測図	42
第 10 図 山海道遺跡2・3・4区遺構配置図	14	第 50 図 5号甕棺実測図	42
第 11 図 山海道遺跡5区Ⅳ・Ⅴ層検出遺構配置図	15	第 51 図 6号甕棺墓実測図	43
第 12 図 山海道遺跡6区遺構配置図	16	第 52 図 6号甕棺実測図	43
第 13 図 山海道遺跡2・3・4区検出集石位置図	17	第 53 図 7号甕棺墓実測図	44
第 14 図 遺跡位置図 1	19	第 54 図 7号甕棺実測図	44
第 15 図 遺跡位置図 2	20	第 55 図 8号甕棺墓実測図	45
万楽寺出口遺跡		第 56 図 8号甕棺実測図	45
第 16 図 基本土層模式図	21	第 57 図 9号甕棺墓実測図	46
第 17 図 7号住居跡覆土出土の台形石器	21	第 58 図 9号甕棺実測図	46
第 18 図 5区表採の台形石器	21	第 59 図 10号甕棺墓実測図	47
第 19 図 石鏃実測図	23	第 60 図 10号甕棺実測図	48
第 20 図 十字形石器実測図	24	第 61 図 11号甕棺墓実測図	49
第 21 図 磨石実測図	24	第 62 図 11号甕棺実測	49
第 22 図 異形石器実測図	26	第 63 図 土壇・木棺墓配置図	50
第 23 図 1号住居跡実測図	28	第 64 図 1号土壇実測図	51
第 24 図 1号住居跡出土土器	28	第 65 図 2号土壇実測図	51
第 25 図 2号住居跡実測図	29	第 66 図 3号土壇実測図	51
第 26 図 2号住居跡出土土器	29	第 67 図 4・5号土壇実測図	52
第 27 図 3・5号住居跡実測図	30	第 68 図 1号木棺墓実測図	53
第 28 図 4号住居跡実測図	31	第 69 図 2号木棺墓実測図	53
第 29 図 6号住居跡実測図	31	第 70 図 3・4号木棺墓実測図	54
第 30 図 7号住居跡実測図	32	第 71 図 4号木棺墓出土石器	54
第 31 図 8号住居跡実測図	33	第 72 図 1号炉跡実測図	56
第 32 図 9号住居跡実測図	34	第 73 図 1・2号焼土実測図	57
第 33 図 10号住居跡実測図	34	第 74 図 1号焼土出土土器	56
第 34 図 10号住居跡出土土器	34	第 75 図 2号焼土出土土器	56
第 35 図 11号住居跡実測図	35	第 76 図 1号土坑実測図	58
第 36 図 11号住居跡出土土器	35	第 77 図 1号土坑出土土器	58
第 37 図 12・13・15・16号住居跡実測図	36	第 78 図 2号土坑実測図	58
第 38 図 13号住居跡出土土器	37	第 79 図 3・4号土坑実測図	58
第 39 図 15号住居跡出土土器	37	第 80 図 5号土坑実測図	59
第 40 図 14・17・19号住居跡実測図	38	第 81 図 6号土坑実測図	59

第 82 図 7号土坑実測図	59	第 125 図 5号埋甕検出図	84
第 83 図 8号土坑実測図	59	第 126 図 5号埋甕実測図	85
第 84 図 9号土坑実測図	60	第 127 図 5号埋甕出土石器	85
第 85 図 10号土坑実測図	60	第 128 図 6号埋甕実測図	85
第 86 図 11号土坑実測図	60	第 129 図 6号埋甕検出図	86
第 87 図 1号配石実測図	61	第 130 図 8号埋甕検出図	86
第 88 図 2号配石実測図	62	第 131 図 8号埋甕実測図	86
第 89 図 1号溝実測図	63	第 132 図 9号埋甕検出図	87
第 90 図 2号溝実測図	64	第 133 図 9号埋甕実測図	87
第 91 図 3号溝実測図	64	第 134 図 10号埋甕検出図	87
第 92 図 4号溝実測図	64	第 135 図 10号埋甕出土石器	88
第 93 図 5号溝実測図	65	第 136 図 11号埋甕検出図	88
第 94 図 5号溝出土土器	65	第 137 図 12号埋甕検出図	88
第 95 図 6号溝実測図	65	第 138 図 12号埋甕実測図	89
第 96 図 磨製石鍬実測図	66	第 139 図 13号埋甕検出図	89
第 97 図 石剣実測図	68	第 140 図 13号埋甕実測図	89
第 98 図 柱状片刃石斧実測図	68	第 141 図 14号埋甕検出図	90
第 99 図 石斧類実測図	69	第 142 図 14号埋甕実測図	90
第 100 図 砥石・石皿実測図	72	第 143 図 15号埋甕検出図	90
山海道遺跡			
第 101 図 基本土層模式図	75	第 144 図 15号埋甕実測図	91
第 102 図 5区表探のナイフ形石器	75	第 145 図 16号埋甕検出図	91
第 103 図 包含層出土のナイフ形石器	75	第 146 図 16号埋甕(上蓋)実測図	91
第 104 図 山海道遺跡出土のナイフ形石器	75	第 147 図 16号埋甕(下棺)実測図	91
第 105 図 1号住居跡実測図	77	第 148 図 17号埋甕検出図	92
第 106 図 1号住居跡出土土器	77	第 149 図 17号埋甕実測図	92
第 107 図 1号住居跡出土石器	77	第 150 図 18号埋甕検出図	93
第 108 図 2号住居跡実測図	78	第 151 図 18号埋甕実測図	93
第 109 図 3号住居跡実測図	78	第 152 図 19号埋甕検出図	93
第 110 図 4号住居跡実測図	78	第 153 図 19号埋甕実測図	93
第 111 図 5号住居跡及び9・10号土坑実測図	79	第 154 図 20号埋甕検出図	94
第 112 図 5号住居跡出土石器	79	第 155 図 20号埋甕実測図	94
第 113 図 5号住居跡出土土器	80	第 156 図 21号埋甕検出図	94
第 114 図 5号住居跡出土石器	80	第 157 図 21号埋甕実測図	95
第 115 図 1号埋甕検出図	81	第 158 図 1号土壙実測図	95
第 116 図 1号埋甕実測図	81	第 159 図 1号焼土坑実測図	96
第 117 図 2号埋甕検出図	82	第 160 図 2号焼土坑実測図	96
第 118 図 2号埋甕実測図	82	第 161 図 2号焼土坑出土土器	96
第 119 図 2号埋甕出土石器	82	第 162 図 3号焼土坑実測図	96
第 120 図 3号埋甕検出図	82	第 163 図 1号土坑実測図	97
第 121 図 3号埋甕実測図	83	第 164 図 2号土坑実測図	97
第 122 図 4・7号埋甕検出図	83	第 165 図 2号土坑出土土器	97
第 123 図 4号埋甕実測図	84	第 166 図 2号土坑出土石器	97
第 124 図 4号埋甕出土土器	84	第 167 図 3号土坑実測図	98
		第 168 図 4号土坑実測	98

第 169 図	5号土坑実測図	98
第 170 図	6号土坑実測図	98
第 171 図	7・8号土坑実測図	99
第 172 図	6号溝実測図	100
第 173 図	1号石組炉実測図	101
第 174 図	1号石組炉出土土器	101
第 175 図	1号集石実測図	102
第 176 図	1号集石出土土器	102
第 177 図	1号集石出土石器	102
第 178 図	1号集石出土土器	103
第 179 図	2号集石実測図	103
第 180 図	2号集石出土土器	103
第 181 図	3号集石実測図	103
第 182 図	4号集石実測図	104
第 183 図	5号集石実測図	104
第 184 図	6号集石実測図	104
第 185 図	7号集石実測図	105
第 186 図	7号集石出土土器	105
第 187 図	8号集石実測図	105
第 188 図	8号集石出土土器	105
第 189 図	9号集石実測図	105
第 190 図	10号集石実測図	106
第 191 図	11号集石実測図	106
第 192 図	12号集石実測図	106
第 193 図	13号集石実測図	107
第 194 図	14号集石実測図	107
第 195 図	15号集石実測図	107
第 196 図	16号集石実測図	107
第 197 図	17号集石実測図	107
第 198 図	18号集石実測図	108
第 199 図	19号集石実測図	108
第 200 図	20号集石実測図	108
第 201 図	21号集石実測図	109
第 202 図	21号集石出土土器	109
第 203 図	22号集石実測図	109
第 204 図	23号集石実測図	110
第 205 図	24号集石実測図	110
第 206 図	25号集石実測図	110
第 207 図	26号集石実測図	111
第 208 図	27号集石実測図	111
第 209 図	28号集石実測図	111
第 210 図	29号集石実測図	111
第 211 図	30号集石実測図	112
第 212 図	31号集石実測図	112

第 213 図	31号集石出土土器	112
第 214 図	32号集石実測図	112
第 215 図	33号集石実測図	113
第 216 図	34号集石実測図	113
第 217 図	35号集石実測図	114
第 218 図	35号集石出土土器	114
第 219 図	36号集石実測図	114
第 220 図	1・2・3号溝実測図	115
第 221 図	4・5号溝実測図	116
第 222 図	3号溝出土石器	117
第 223 図	周溝を持つ遺構実測図	117
第 224 図	1号道路実測図	118
第 225 図	石鍬実測図	124
第 226 図	石皿実測図	125
第 227 図	石斧類実測図	126
第 228 図	扁平打製石斧実測図	127
第 229 図	砥石実測図	132
第 230 図	土製品(土偶)実測図 <1>	133
第 231 図	土製品(土偶)実測図 <2>	135
第 232 図	土製品(土偶)実測図 <3>	137
第 233 図	5区出土の装飾品	142
第 234 図	5区出土の装飾品分布図	145

第VI章 熊本市万楽寺出口遺跡出土の弥生時代人骨

第 1 図	遺跡の位置	148
表 1	年齢区分	147
図 2	人骨の残存部	149
表 2	大腿骨計測値	150
表 3	脛骨計測値	151
表 4	脳頭蓋計測値	152
表 5	大腿骨計測値	152
表 6	脛骨計測値	152
表 7	四肢骨比	152
表 8	形態小変異	152
	写真図版	155

第VII章 山海道遺跡の自然科学分析

第1節 山海道遺跡の火山灰分析

図 1	〇トレンチ北壁の土層柱状図	156
表 1	山海道遺跡〇トレンチ北壁のテフラ検出分析結果	157
表 2	山海道遺跡の火山ガラス比分析結果	157
表 3	山海道遺跡の屈折率測定結果	157
図 2	山海道遺跡の火山ガラス比ダイヤグラム	157

第2節 山海道遺跡の植物珪酸体分析

図1 山海道遺跡、Oトレンチ北壁の植物珪酸体分析結果 ・ 159

表1 熊本県、山海道遺跡の植物珪酸体分析結果 ・ 160

表 目 次

第 1 表	事業の内容	1
第 2 表	山海道遺跡土製品（土偶）一覧	
第 3 表	5区出土の装飾品（玉類）観察表	145

写 真 図 版 目 次

山海道遺跡周辺空中写真

万楽寺出口遺跡

図版 1	1区調査区	10
図版 2	7区調査区	10
図版 3	7号住居跡出土の台形石器	22
図版 4	5区表採の台形石器	22
図版 5	石鏃1（左）	23
図版 6	石鏃2（右）	23
図版 7	石鏃	23
図版 8	十字形石器	24
図版 9	磨石1	24
図版 10	磨石2	24
図版 11	石匙	25
図版 12	打製石斧	25
図版 13	扁平打製石斧	26
図版 14	異形石器	26
図版 15	使用痕のある剥片	26
図版 16	勾玉（左）	27
図版 17	勾玉出土状況（右）	27
図版 18	図版17の拡大	27
図版 19	1号住居跡完掘状況	28
図版 20	1号住居跡出土土器	28
図版 21	2号住居跡完掘状況	29
図版 22	2号住居跡出土土器	29
図版 23	3号住居跡完掘状況	30
図版 24	5号住居跡出土石器	30
図版 25	6号住居跡出土土器	32
図版 26	7号住居跡出土石器	32

図版 27	9号住居跡出土石器	33
図版 28	10号住居跡出土土器	34
図版 29	11号住居跡出土土器	35
図版 30	12・13・15・16号住居跡完掘状況	37
図版 31	13号住居跡出土土器	37
図版 32	15号住居跡出土土器	37
図版 33	14号住居跡遺物出土状況	38
図版 34	14号住居跡出土土器	38
図版 35	1号甕棺墓検出状況	39
図版 36	1号甕棺	39
図版 37	2号甕棺	40
図版 38	3号甕棺墓検出状況	41
図版 39	3号甕棺	41
図版 40	5号甕棺墓検出状況	42
図版 41	5号甕棺	42
図版 42	6号甕棺	43
図版 43	7号甕棺墓検出状況	44
図版 44	7号甕棺出土状況	44
図版 45	7号甕棺	44
図版 46	8号甕棺墓検出状況	45
図版 47	8号甕棺	45
図版 48	9号甕棺墓検出状況	46
図版 49	9号甕棺	46
図版 50	9号甕棺	46
図版 51	10号甕棺墓検出状況	47
図版 52	10号甕棺人骨出土状況	47
図版 53	10号甕棺	47
図版 54	10号（左）・11号（右）甕棺墓検出状況	49

図版 55	11号甕棺	49	図版 98	3号埋甕	83
図版 56	土壌・木棺墓検出状況	50	図版 99	4号埋甕検出状況	83
図版 57	1・2・3・4号木棺墓検出状況	54	図版 100	4号埋甕	84
図版 58	4号木棺墓出土石器	54	図版 101	4号埋甕出土石器	84
図版 59	3・4・5号土壌検出状況	55	図版 102	5号埋甕検出状況	84
図版 60	1号木棺墓検出状況	55	図版 103	5号埋甕	85
図版 61	3・4号木棺墓検出状況	55	図版 104	5号埋甕出土石器	85
図版 62	1号焼土出土石器	56	図版 105	6号埋甕	85
図版 63	2号焼土出土石器	56	図版 106	6号埋甕検出状況	86
図版 64	1号配石近景	58	図版 107	8号埋甕検出状況	86
図版 65	1号土坑出土石器	60	図版 108	8号埋甕	86
図版 66	1号配石遠景	60	図版 109	9号埋甕	87
図版 67	2号配石遠景	62	図版 110	10号埋甕	87
図版 68	5号溝完掘状況	65	図版 111	12号埋甕検出状況	88
図版 69	5号溝出土石器	65	図版 112	12号埋甕	88
図版 70	磨製石鏃1	66	図版 113	13号埋甕	89
図版 71	磨製石鏃2	67	図版 114	14号埋甕	90
図版 72	丹塗り壺	67	図版 115	15号埋甕	90
図版 73	赤色土器・線刻土器	67	図版 116	16号埋甕検出状況	91
図版 74	底部	67	図版 117	16号埋甕(下棺)	91
図版 75	石剣	68	図版 118	17号埋甕検出状況	92
図版 76	柱状片刃石斧	68	図版 119	17号埋甕	92
図版 77	石斧類1	70	図版 120	18号埋甕	93
図版 78	石斧類2	70	図版 121	20号埋甕	94
図版 79	石包丁	71	図版 122	21号埋甕	94
図版 80	砥石	71	図版 123	2号焼土坑出土石器	96
図版 81	砥石・石皿	73	図版 124	2号土坑出土石器	97
図版 82	調査風景	74	図版 125	2号土坑出土石器	97
図版 83	調査区風景	74	図版 126	6号溝出土石器	101
図版 84	1区調査区風景	74	図版 127	1号石組炉出土石器	101
山海道遺跡			図版 128	1号集石出土石器	102
図版 85	尖頭器	76	図版 129	1号集石出土石器	102
図版 86	包含層出土のナイフ形石器	76	図版 130	1号集石出土石器	103
図版 87	5区表採のナイフ形石器	76	図版 131	2号集石出土石器	103
図版 88	山海道遺跡出土のナイフ形石器	76	図版 132	6号集石検出状況	104
図版 89	1号住居跡	77	図版 133	7号集石出土石器	105
図版 90	1号住居跡出土石器	77	図版 134	8号集石出土石器	105
図版 91	5号住居跡出土石器	79	図版 135	9号集石検出状況	105
図版 92	5号住居跡出土石器	80	図版 136	10号集石検出状況	106
図版 93	5号住居跡出土石器	80	図版 137	12号集石検出状況	106
図版 94	1号埋甕	81	図版 138	13号集石検出状況	107
図版 95	2号埋甕	82	図版 139	16号集石検出状況	107
図版 96	2号埋甕検出状況	82	図版 140	17号集石検出状況	107
図版 97	2号埋甕出土石器	82	図版 141	18号集石検出状況	108

図版 142	20号集石検出状況	108	図版 186	勾玉・小玉・管玉・素材	143
図版 143	21号集石出土土器	109	図版 187	勾玉出土状況	144
図版 144	22号集石検出状況	109	図版 188	擦切技法	144
図版 145	25号集石検出状況	110	図版 189	装飾品素材一括	144
図版 146	26号集石検出状況	111			
図版 147	31号集石出土土器	112			
図版 148	35号集石出土土器	114			
図版 149	3号溝出土石器	117			
図版 150	周溝をもつ遺構	117			
図版 151	条痕文土器	119			
図版 152	鳥井原式土器	120			
図版 153	天城・古閑式土器	120			
図版 154	御領式土器	121			
図版 155	紡錘車・注口土器	121			
図版 156	底部1	122			
図版 157	底部2	122			
図版 158	底部3	123			
図版 159	石鏃1	124			
図版 160	石鏃2	124			
図版 161	石皿1	125			
図版 162	石皿2	125			
図版 163	石皿3	125			
図版 164	石斧類	126			
図版 165	扁平打製石斧	127			
図版 166	打製石斧1	128			
図版 167	打製石斧2	128			
図版 168	打製石斧3	129			
図版 169	円盤状石器	129			
図版 170	十字形石器	130			
図版 171	磨石・敲石	130			
図版 172	スクレイパー	131			
図版 173	石錘	131			
図版 174	原石	131			
図版 175	磨石	131			
図版 176	砥石1	132			
図版 177	砥石2	132			
図版 178	土偶頭部表面(上)・裏面(下)	139			
図版 179	土偶体部表面	139			
図版 180	土偶体部裏面	140			
図版 181	土偶体部出土状況1	140			
図版 182	土偶腕及び足	140			
図版 183	土偶頭部出土状況(左1・右2)	140			
図版 184	土偶体部出土状況2	140			
図版 185	5区出土の装飾品	143			

第I章 調査の概要

第1節 調査の経緯

1 遺跡の発見

万楽寺出口遺跡は、以前より富田紘一らにより甕棺が出土する場所として知られていたものの、農村活性化住環境整備事業に伴い熊本市教育委員会が行った事前調査で正式に確認された。一方、山海道遺跡の発見は上野辰男によりなされた。熊本市北部地域を精力的に踏査していた上野は1963（昭和38）年にこの地で土偶を採集し、一帯が縄文後・晩期の遺跡であることを想定した。上野はこの遺跡を知る前、この遺跡に隣接する太郎迫遺跡を昭和20年代から注目し、多くの資料を採集したが、その後、彼の薫陶を受けた吉田雅人・福田正文らも盛んに踏査を繰り返した。上野辰男の採集品は、1986（昭和61）年、富田紘一が上野の収集品図録を刊行するに及び明らかにされ、考古学界に多大の利益を与えている。富田が1996（平成8）年に著した書籍から、山海道遺跡に該当部分を抜粋する。

縄文後晩期の大規模遺跡と思われるが、具体的な遺跡のようすは不明。全体的な出土遺物については不明であるが上野辰男・福田正文の採集資料に少量

の土器がみられる。縄文後期後半の三万田式から晩期前半までの土器が存在する。また、特殊遺物に収録した土偶が注目される。以上が、今回、調査以前の考古学会での状況である。

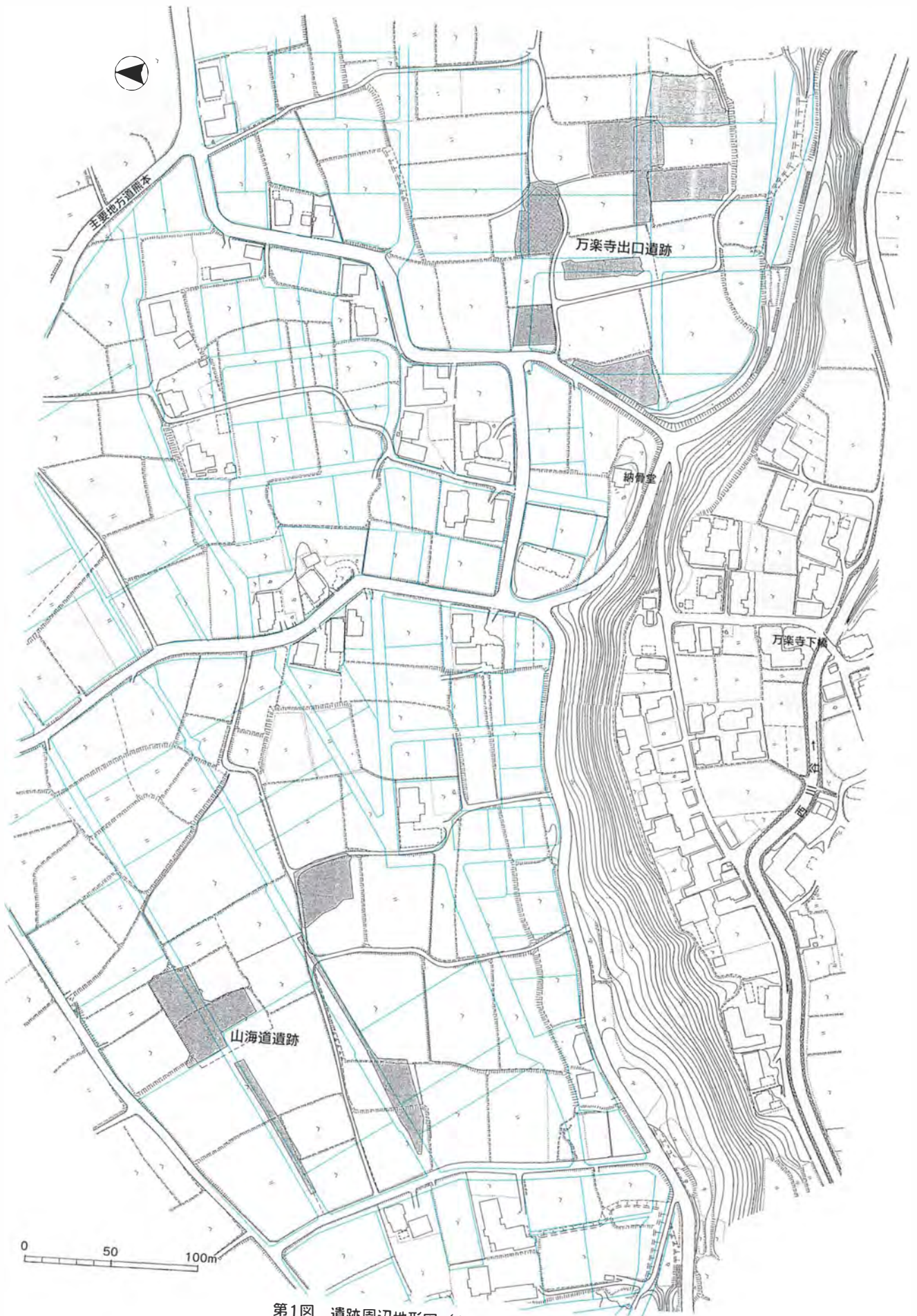
2 調査に至る経緯

この地区に県営農村活性化住環境整備事業の計画がなされたのは、1971（昭和46）年のことであったが、地元への説明や事業実施に伴う同意等が整い、事業申請がなされたのは1993（平成5）年7月9日である。熊本県農政部が作成した当該事業地（寺迫地区）の概要及び目的は、次のとおりである。

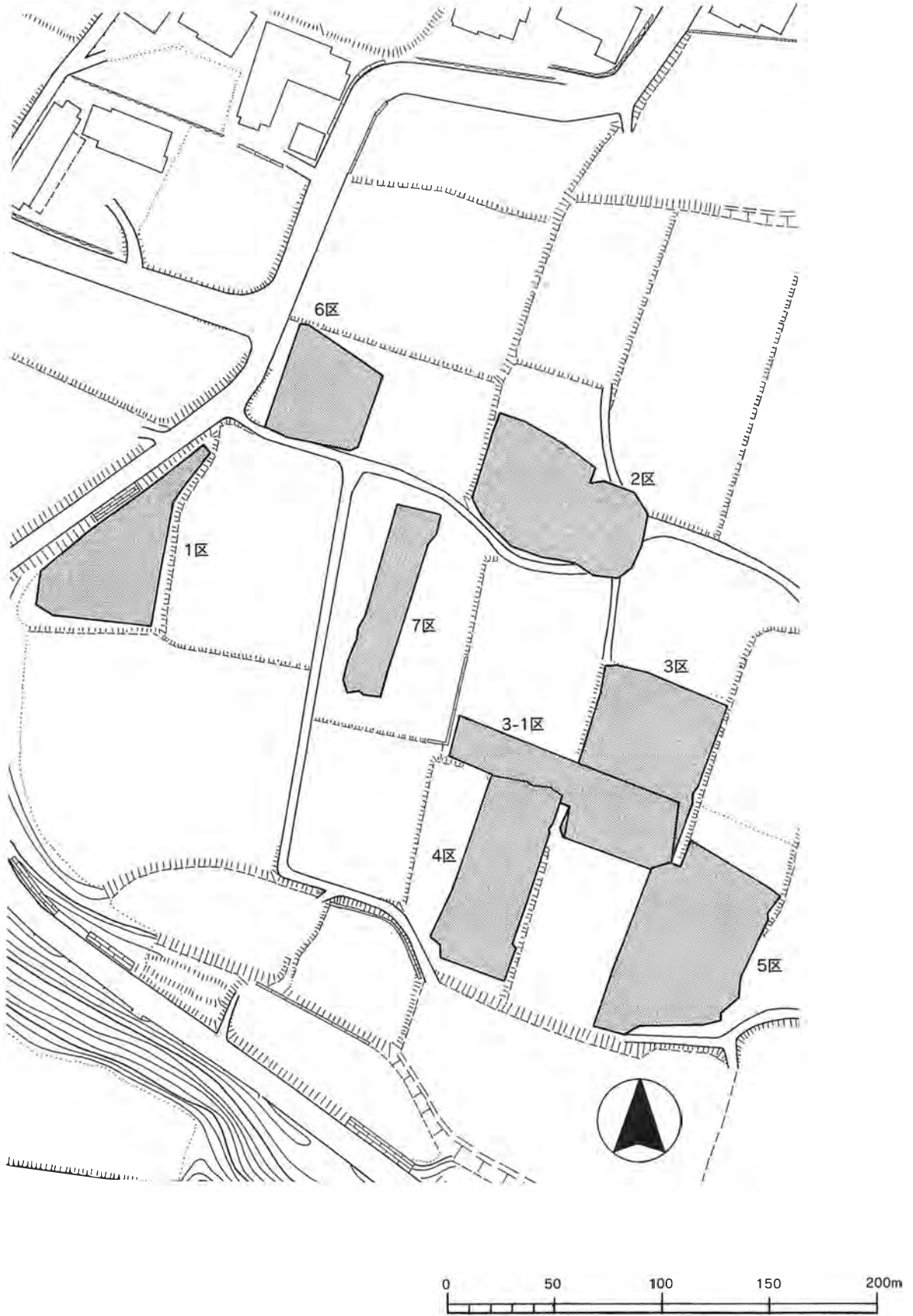
両遺跡の所在する熊本市太郎迫町及び万楽寺町は、熊本市街地から北方に約6km、熊本市北端に位置し、鹿本郡植木町と隣接した都市的農村地帯である。地域は植木台地の一郭にあり、標高は40m～140m、地形は西から東に傾斜をなしている。気象概要は年平均気温16℃、年間降水量1,930mm、初霜11月14日、晩霜4月4日である。営農は施設野菜と稲作の複合経営が行われているが、なかも昭和45年頃から導入された集約的農業が意欲的に取り組まれている

第1表 事業の内容

事業名・事業量	事業費（千円）	主要工事
1 農業生産基盤整備 51.8ha 1) ほ場整備	1,477,000	50×60m区画 パイプライン 中継槽・加圧p
2 農村生活環境整備 1) 集落道路 1,485m 2) 集落排水 240m 3) 用地整備 58,600m 4) 集落防災 2カ所	125,250 4,100 41,320 9,120	街灯整備
3 農村環境施設整備 1) 農村公園 10,435㎡	95,850	緑地整備4 児童公園2
4 特認事業 1) 集落緑化 1,985m	112,360	緑道
5 全体実行設計費	2,000	
計	1,885,000	



第1図 遺跡周辺地形図 (1/3000)



第2図 万楽寺出口遺跡調査区位置図 (1/2000)

る。現状耕地は、開田及び畑地帯からなり、1/40～1/120の傾斜地に階段状に形成されており、区画は不整形で、土壌は金峰山火山灰からなる多湿黒ボク土壌である。営農用水はさく井による地下水を水源として、ポンプ及び配管による配水を行っている。農地の排水は、排水路が未整理のため主に既存道路に排水処理されている。

3 事業の目的

優良農地の確保・保全を図りながら、地域が有している自然や空間を活かした快適な居住環境を創出して、定住化・活性化を誘導する。この為、事業実施区域を農用地区域と居住地区域に区分し、良好な営農条件並びに、快適な居住環境等の確保のための整備を行い、調和のとれた土地利用を促進するものである。事業の内容は第1表の通りである。

4 事前の協議

県営農村活性化住環境整備事業・寺迫地区が、埋蔵文化財包蔵地であり、しかも重要な遺跡を含んでいる為、当該地の削平部分については、事前の発掘調査が必要であることは、この計画が県文化課に通知された時点で県農政部に回答したところであった。

事業規模も大規模で長期の調査が予想される為、事業実施を行う熊本県熊本事務所耕地課と熊本市文化課を交えて協議を行った。その結果、①調査は県文化課が直営で行う②農政部事業は、調査完了の後行う③遺跡が大規模であるので、当該地区調査については、熊本市文化課は調査員を派遣する、という調査についての大綱が決定した。

第2節 調査方法と経過

1 万楽寺出口遺跡

① 調査区（第2図）

当初、8つの調査区が設定され、1～7区及び3-1区と名付けられた。3-1区及び7区は道路部分の、他の区はほ場の調査である。調査は、1区より開始されているが、後半は複数区を同時に調査していった。なお、3・4・6区については、表土剥ぎの段階で終了することとなった。これは、表土剥

ぎ終了後の遺構の密度が極端に高く、調査を遂行すれば相当の調査期間が必要となり、調査の早期終了を強く要望されていた地権者及び農政部との再協議で、盛土保存となった結果である。なお、5区の遺構残存度は低く、大部分が表土直下に礫層が現れた。

本調査の段階にこのような状態になったことは、予備調査との関連も深い。当地の営農条件がビニールハウスであることに加え、ほぼ年間を通して、作物栽培がなされることから、十分な確認調査が難しかったことを物語っている。

② 調査方法

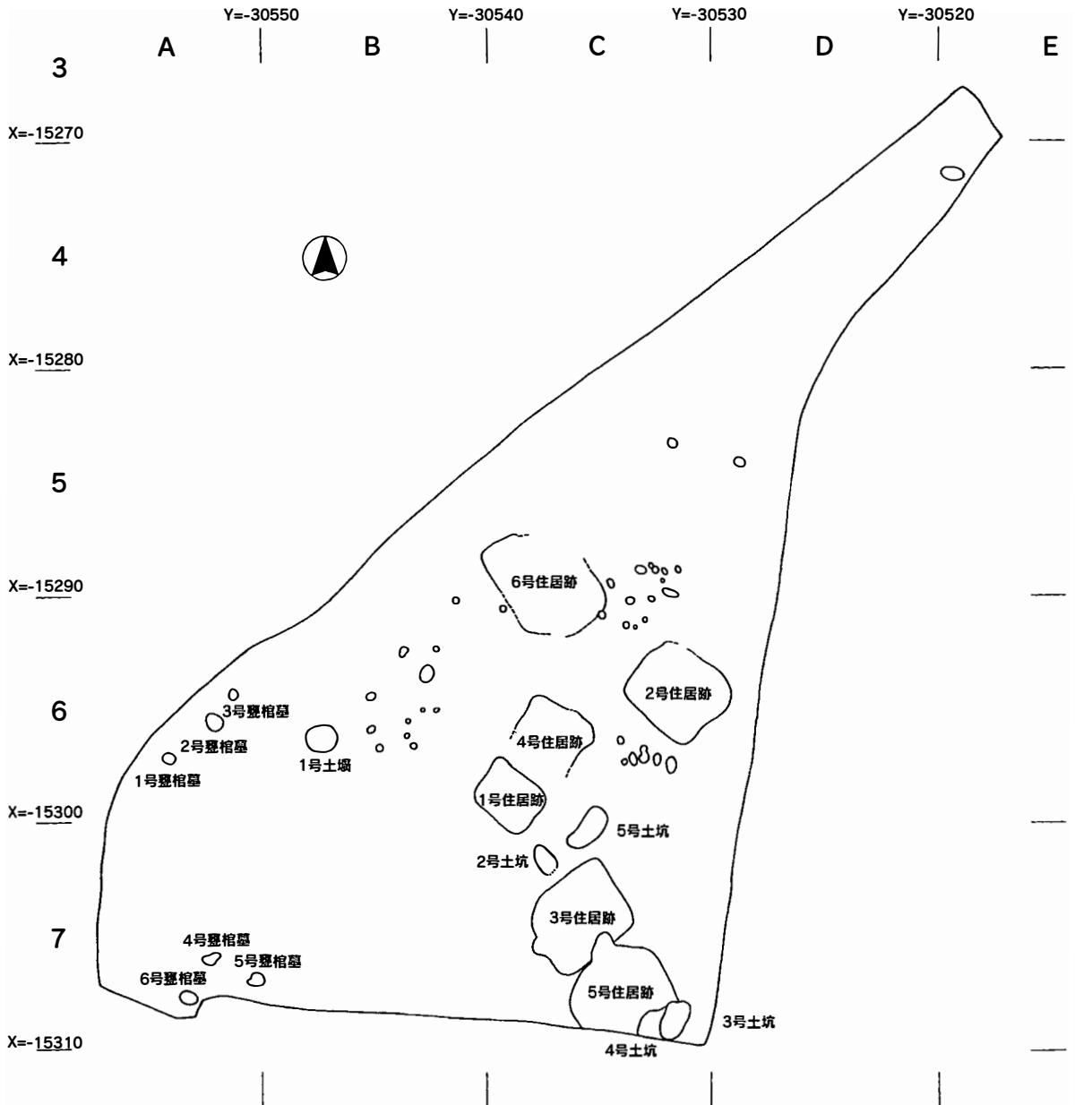
重機により表土剥ぎを行う。次にジョレン・移植ゴテによる遺構検出作業を行う。Ⅳ層上面で最初の遺構検出作業を行う。当層で検出できなかったところについては、順次掘り下げながら遺構検出に努める。最終の遺構検出面は、Ⅸ層で、ここで確認できた遺構も少なくない。検出した遺構は、セクションベルトを設定し掘削する。上部より出土する遺物は、遺構内一括遺物として取り上げる。このような状態で完掘できたものは、覆土の堆積状況を示す土層断面図及び必要に応じて土層断面写真の撮影を行う。セクションベルトを取り除いた後、実測を行う。

また、公共座標に沿った基準杭を設定し、10m×10mを1つのグリッドの基本（基本グリッド）としている。検出遺構・出土遺物の実測や取り上げについては、個々に判断されるが、基本グリッドによるもの他、1m×1mの単位で100の小グリッドごと、あるいは、トータルステーションを使用したものがある。各遺構実測図・遺物取り上げのカードには、公共座標を換算した簡易な数字を用いたグリッド座標ともいうべきもので対応している。

なお、報告に当たっては全調査区をカバーし、西から東に向かってA・B…、北から南に向かって1・2…として、その交点を読み表すものと、公共座標の両方を記載している。万楽寺出口遺跡の場合は、10m×10mを基本グリッドとしている。たとえば、A5で表す基本グリッドは、X=-15290 Y=-30550 と同一である（第2図参照）。

③ 調査期間及び経過

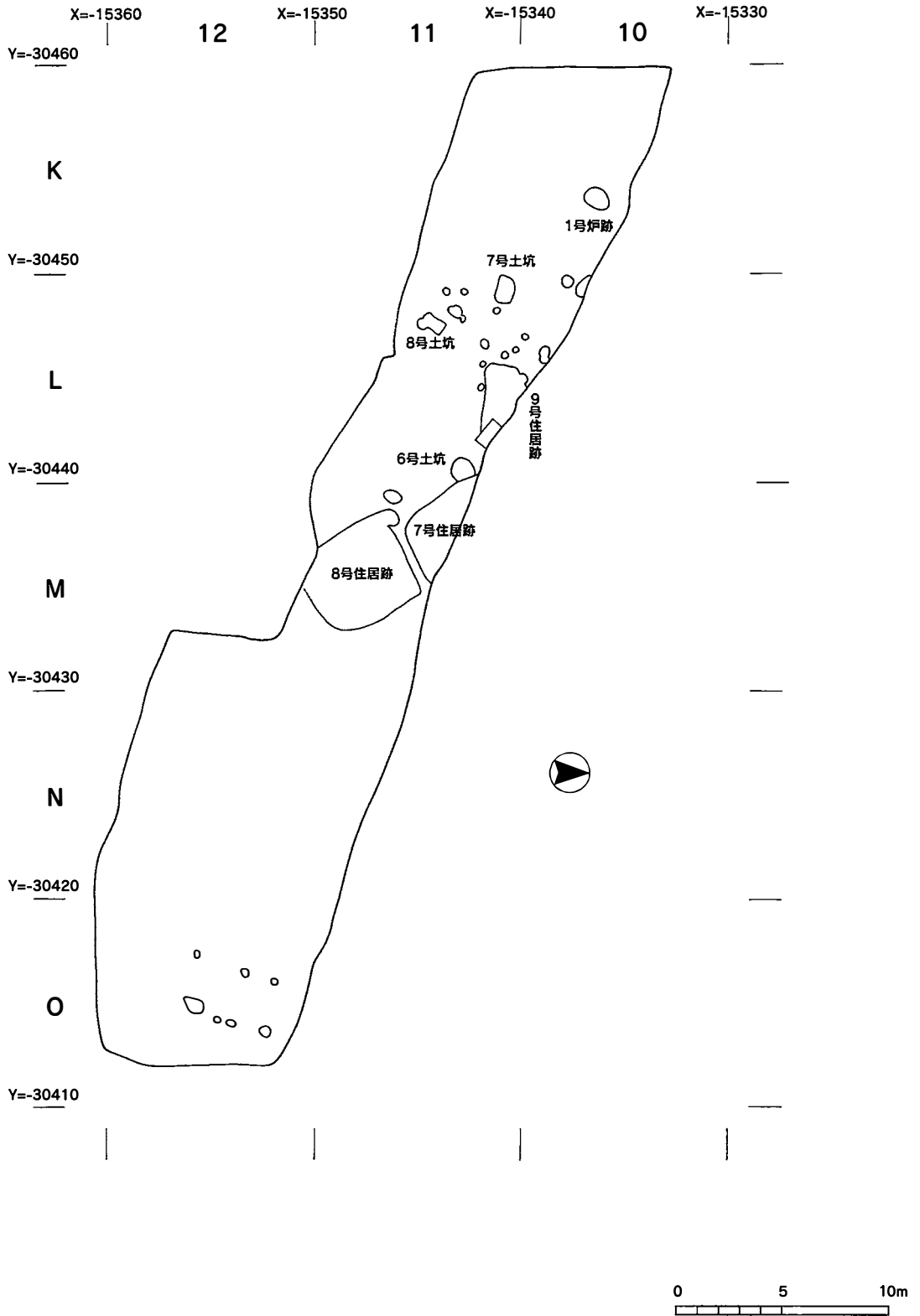
本調査を実施した各調査区の調査期間は、次のと



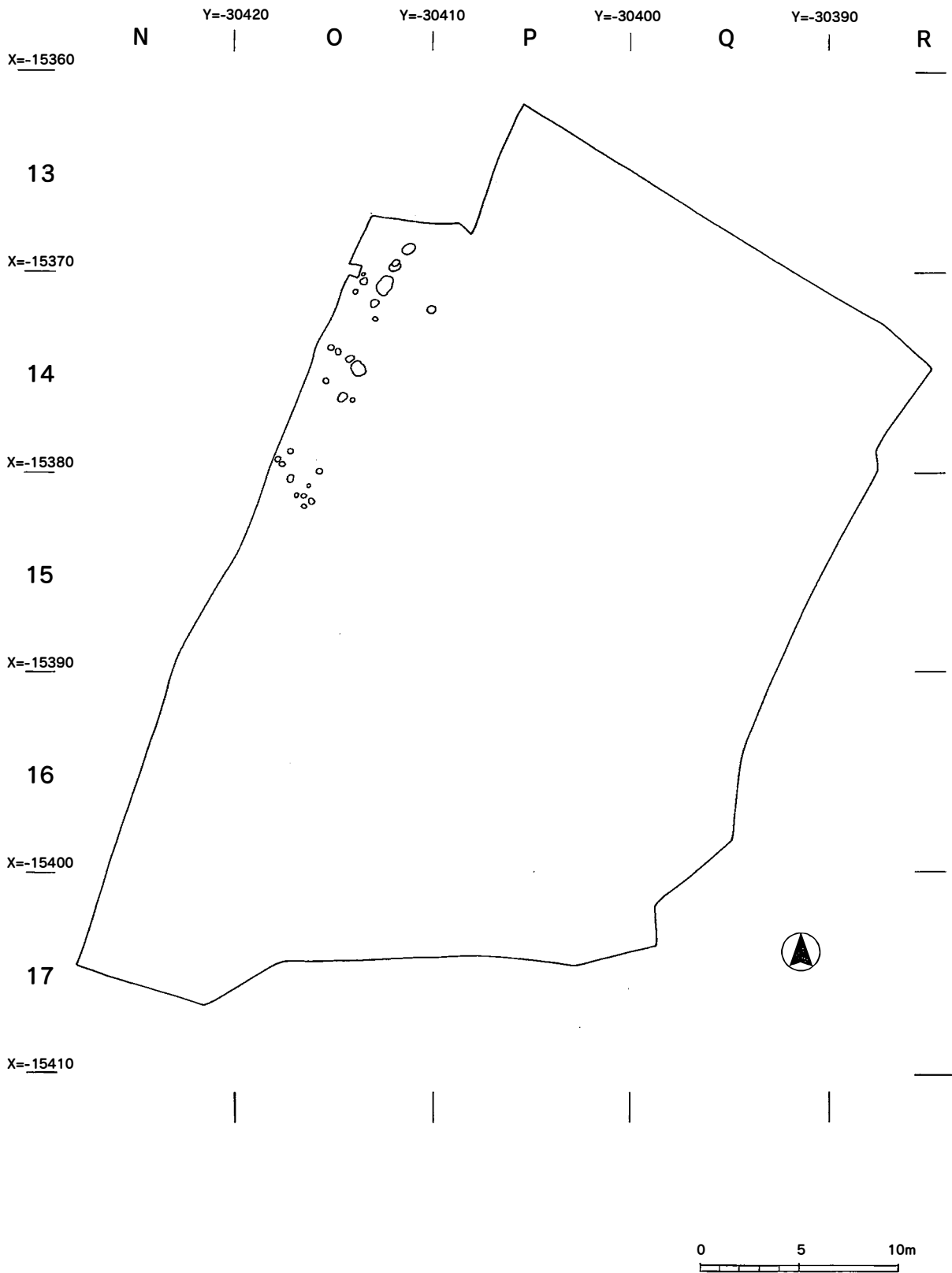
第3図 万楽寺出口遺跡1区遺構配置図 (1/300)



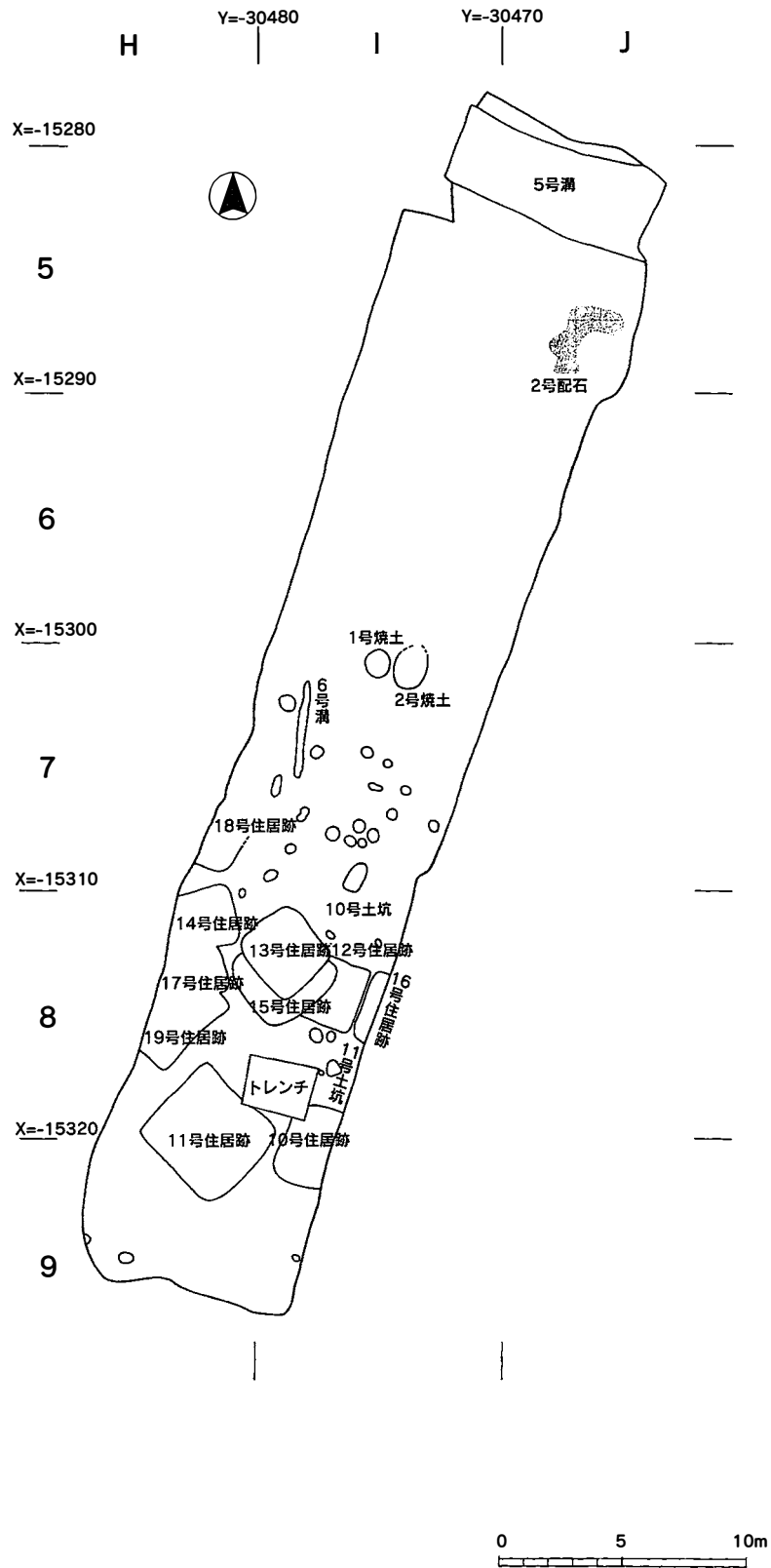
第4図 万楽寺出口遺跡2区遺構配置図 (1/300)



第5図 万楽寺出口遺跡3-1区遺構配置図 (1/300)



第6図 万楽寺出口遺跡5区遺構配置図 (1/300)



第7図 万楽寺出口遺跡7区遺構配置図 (1/300)



図版1 1区調査区



図版2 7区調査区

おりである。

1区 (平成6年5月19日から平成6年10月13日)

2区 (平成6年6月14日から平成6年12月13日)

3-1区 (平成6年9月30日から平成6年10月20日)

5区 (平成6年9月6日から平成6年10月14日)

7区 (平成6年10月26日から平成7年1月20日)

調査経過は、以下のとおりである。

1区の調査から開始する。5月下旬には住居跡・甕棺墓などを検出する。掘削・実測作業を行いながら、6月中旬、2・3・4・5区の表土剥ぎ作業に入る。7月に入り、2区の遺構検出作業に入る。弥生時代中期の遺物が多く出土する。土壙・木棺墓・配石遺構等を検出した。1区は、遺構の調査終了後、IV層の掘り下げを行いながら、下層に出てきた遺構の調査を行う。8月に入り、調査対象地区外の工事箇所から、須久式・黒髪式の甕棺が発見される。中旬の4日ほどかけて緊急的にこの調査に入る。なお、県文化課丸山課長補佐が来跡される。9月に入り1区も図面作成を急ぎ終盤になる。5区及び3-1区の調査にかかる。3-1区からは住居跡が検出され、実測に入る。10月になり、2区の木棺墓の掘削を行う。覆土は、ふるいにかける微細遺物の検出に努めた。下旬より、7区の調査にかかる。2区の調査を継続しながらも、山海道遺跡1区の表土剥ぎ作業にとり

かかる。

2 山海道遺跡

① 調査区 (第8図)

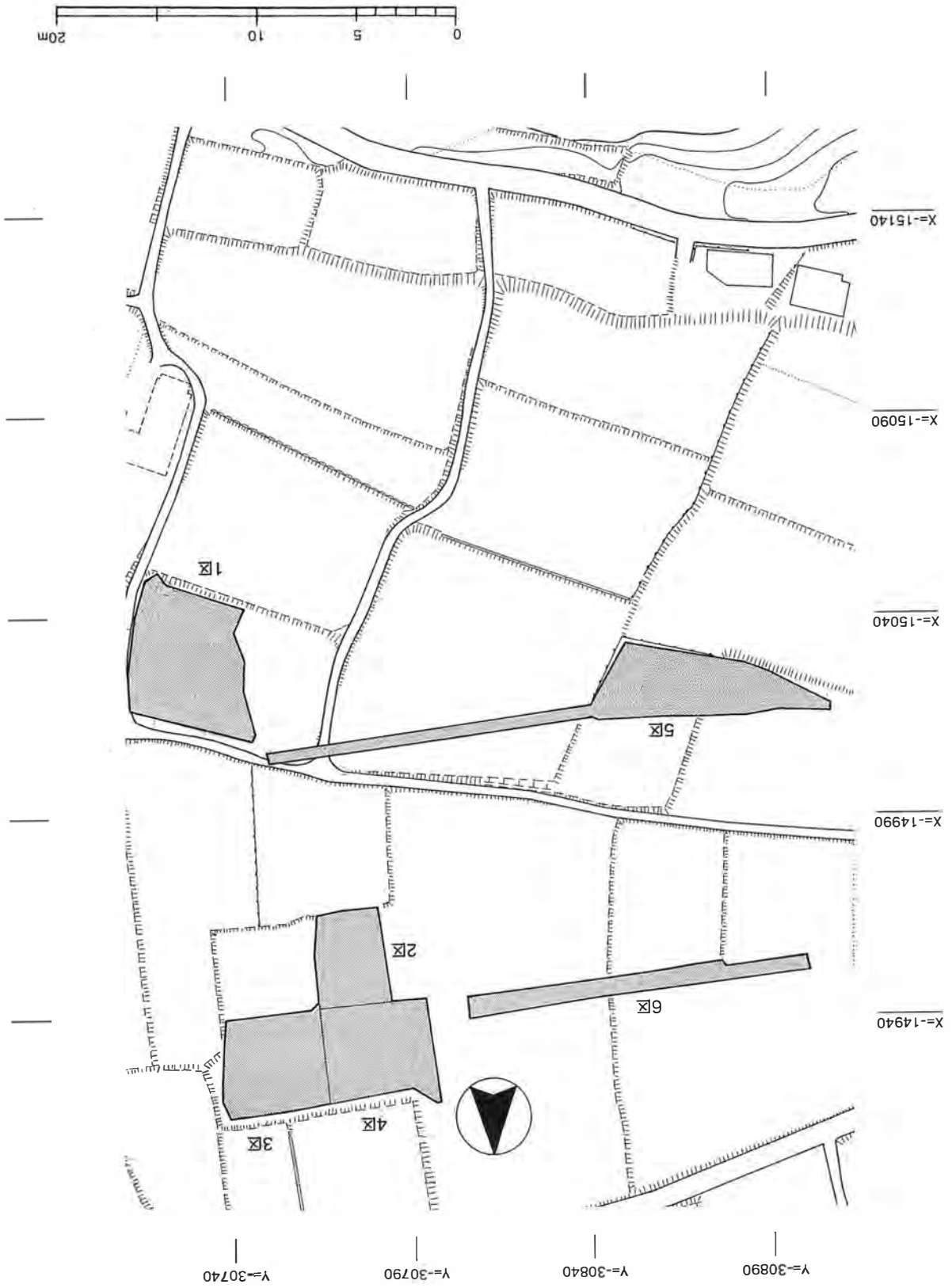
6つの調査区を設定した。1～6区である。ただし、2・3・4区は一つの大地区を便宜上分けたものであり、大きく、1区、2区・3区・4区、5区、6区の4つに分けられる。6区は道路部分、他は5区の長狭な東側の水路部分を除きほ場の調査区である。

② 調査方法

重機により表土剥ぎ作業を行う。すなわち、I・II層を除去後、III層は下部まで遺物の出方を見ながら下げた。III層には、あまり多くの遺物は含まれていない。III層下部からは、ジョレン・移植ゴテによる掘り下げ作業を進め、IV層上面で遺構検出作業を行う。なお、遺構検出面としては、原則、第一回目をIV層上面、次にV層上面、そしてVI層上面さらにIX層上面とした。検出した遺構は、セクションベルトを設定し掘削する。上部より出土する遺物については、遺構内一括遺物として取り上げる。このような状態で完掘できたものは、覆土の堆積状況を示す土層断面図及び必要に応じて土層断面写真の撮影を行う。セクションベルトを取り除いたあとに、実測を行う。

また、公共座標に沿った基準杭により基本グリッドを設定しているが、調査区によって異なる。これは、担当者及び遺構密度・出土遺物数と関連するものであった。すなわち、1～4区までは10m×10m、5区はこれを南北に2分割した5m×10m、6区では1m×1mを基本グリッドとしている。検出遺構・出土遺物の実測や取り上げについては、個々に判断されるが、基本グリッドによるものの他、1～4区までは1m×1mの単位で100の小グリッドごと、またトータルステーションを使用したものがある。各遺構実測図・遺物取り上げのカードには、公共座標を換算した簡易な数字を用いたグリッド座標ともいべきもので対応しているが、5区に関しては、5m×10mの基本グリッドに①・②…と番号を付して、作成図面・遺物取り上げカードの記載事項を簡潔にした。

なお、報告に当たっては全調査区をカバーし、西



第8図 山海道遺跡調査区位置図 (1/300)

から東に向かってA・B…、北から南に向かって1・2…として、その交点を読み表すものと、公共座標の両方を記載している。山海道遺跡の基本グリッドは5m×10mに再編して掲載している。たとえば、P1で表す基本グリッドは、X=-14915 Y=-30760と同一である(第8図参照)。

③ 調査期間及び経過

調査期間は次のとおりである。

1 区(平成6年11月25日から平成6年12月22日)

2.3.4区(平成6年12月21日から平成7年3月31日)

〃(平成7年5月10日から平成7年7月31日)

5 区(平成7年8月1日から平成7年10月30日)

6 区(平成7年12月18日から平成8年2月19日)

調査経過を記すと、以下のとおりになる。

11月下旬に1区の調査に入る。分層発掘を行いながら、第Ⅲ層下部より順に下げていく。第Ⅳ層上部で遺物が出土しているが、攪乱がひどい。地形は北から南に向かって傾斜しており、南側に包含層が残る。天草郡倉岳町の文化財保護委員の来跡あり。12月下旬になり、2区の調査に入る。やはり、Ⅳ層で出土遺物が多い。10×10mを大グリッドとしてその中を1×1mの小グリッド100に分けて遺物を取り上げる。年が明けて2区の調査を継続しながら、3区・4区の調査に取りかかる。4区では、溝・埋甕などが検出され始める。また、土偶の出土も目立ってくる。2区では、集石が検出される。寒さが厳しく、調査も思うように進まない。Ⅳ層で出土した遺物は、ドット取り上げを行う。2月にⅣ層の掘り下げを進める。集石の検出数も多くなる。縄文時代後期から晩期にかけてのものと、早期のものがありそうだ。3月に入って、Ⅳ層の中部から下部にかけて埋甕が複数検出された。多数の集石とともに実測に取りかかる。年度末となり、一旦現場を閉じる。5月中旬より、新しい調査体制のもと、調査が継続される。集石・埋甕等の実測に取りかかる。旧地形にかなりの凹凸があることから、トレンチを設定し、基本土層の把握及び下位層での遺構・遺物の有無を確認する。7月下旬には、5区の表土剥ぎを平行しておこない、7月末までに2・3・4区の調査を終了する。8月中旬には、5区の第Ⅲ層の調査も終了し、

いよいよⅣ層での遺構検出作業に入った。埋甕、住居跡等が見つかる。Ⅳ層自体が遺物包含層であるため、土器の出土も多いが、管玉などの装飾品類の出土が多い。中旬、鹿本郡市文化財保護委員の来跡がある。また、文化課で主催した発掘現場見学会の週には、中学の生徒が体験発掘をおこなった。

9月に入り、Ⅳ層の調査を終えると一部を残して、あまり遺物がでてこない状況となった。しかし、中央部に設定したトレンチのⅥ層中からも遺物の出土があり、Ⅵ層残存部の範囲については調査を急ぐ。そして10月下旬に調査を終了した。

6区は、表土剥ぎ直後、西部に遺物が始端、溝などを検出した。年が明け、集石・住居跡・埋甕が見つかる。下旬より掘削・実測作業を急ぎ、中旬に終了した。

第3節 発掘調査の組織

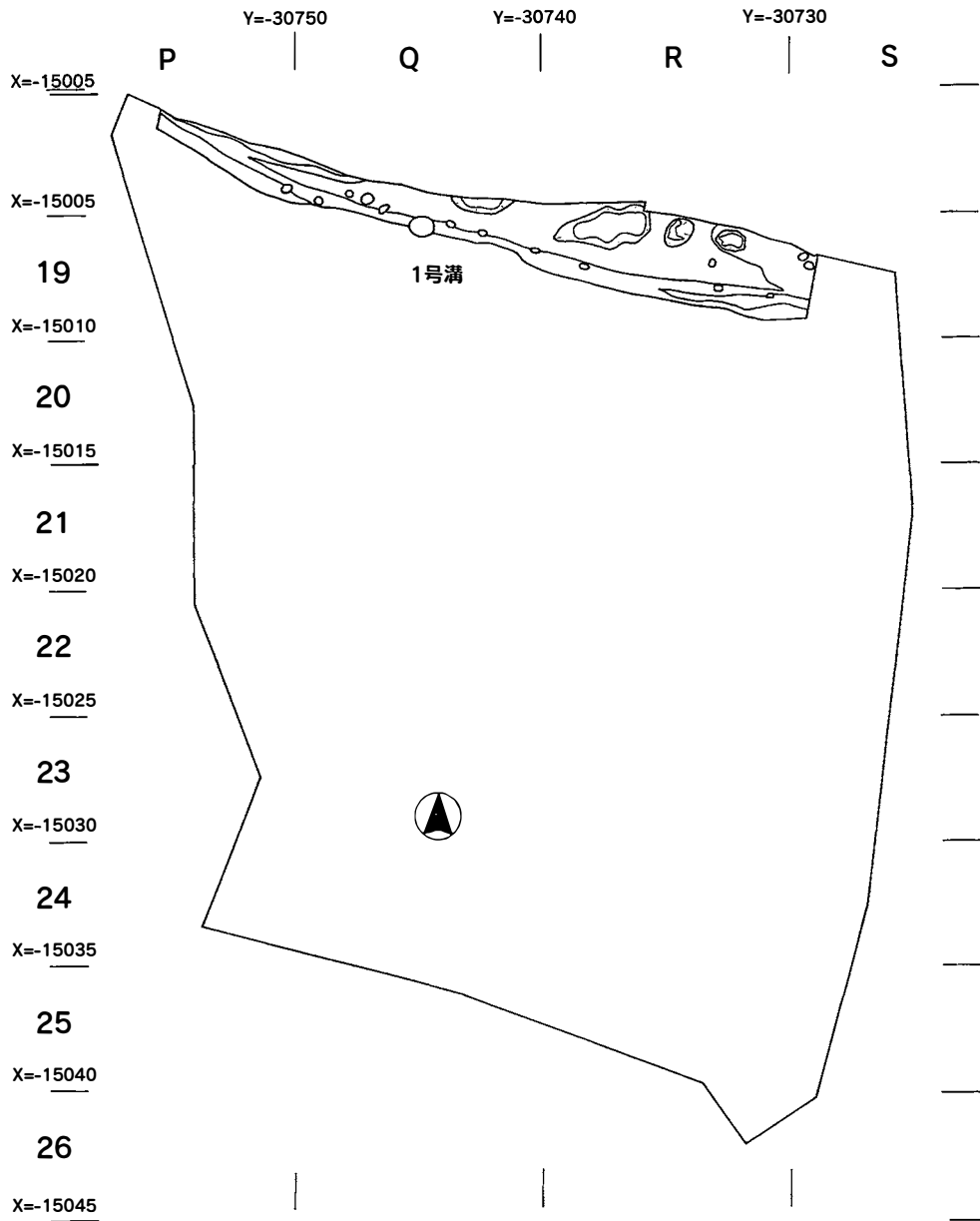
発掘調査及び報告書作成業務は、以下の体制で行った。なお、所属等は当時のものである。

1 万楽寺出口遺跡の調査体制(平成6年度)

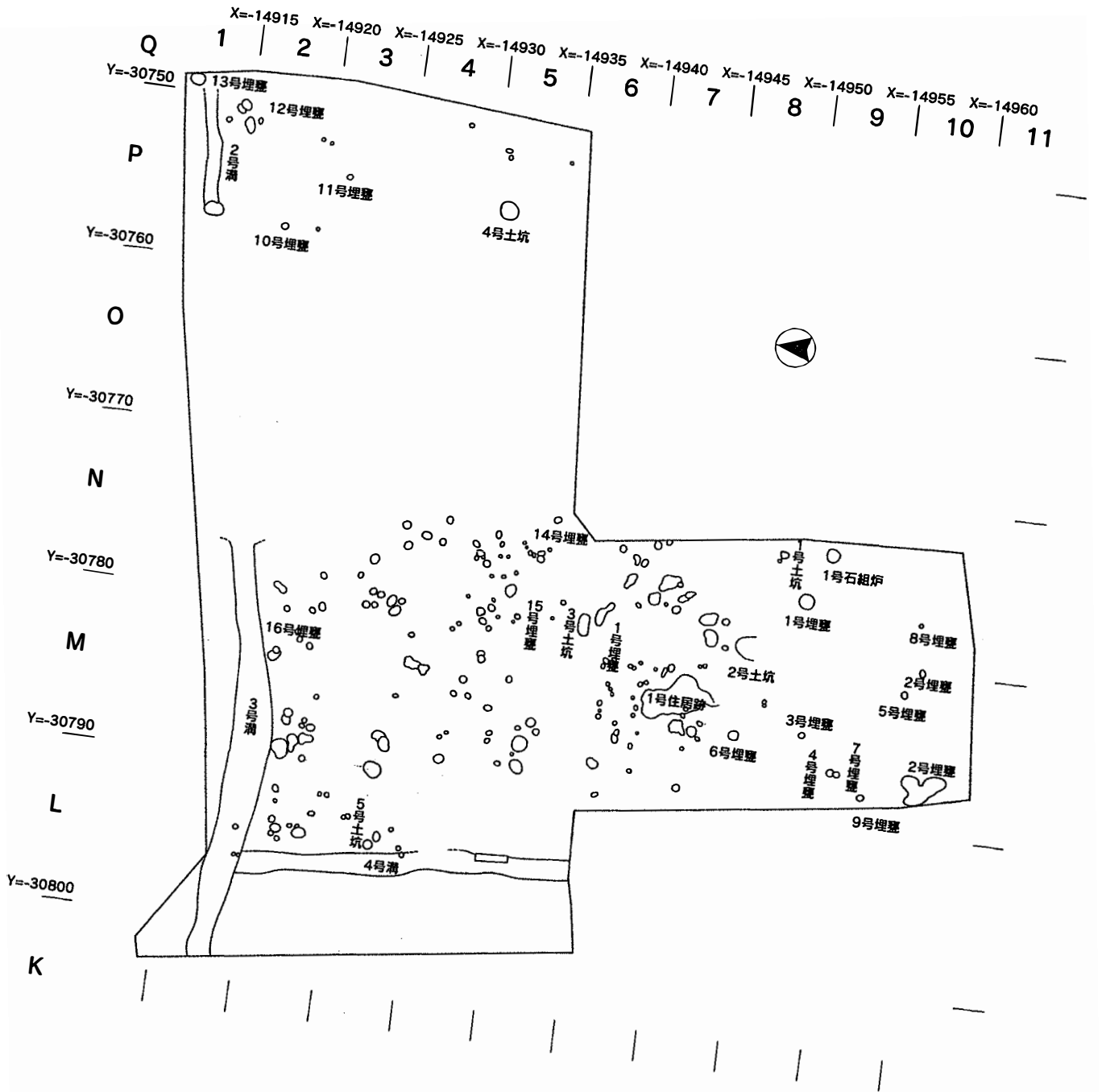
調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	桑山裕好 文化課長 丸山秀人 課長補佐
調査総括	島津義昭 主幹(文化財調査1係長)
調査担当	長谷部善一 学芸員 北原美和子 嘱託 緒方 徹 嘱託 吉本知明 嘱託
調査事務	白井哲哉 教育審議員(課長補佐) 木下英治 主幹(経理係長) 高浜保子 参事 高宮優美 主任主事

発掘作業

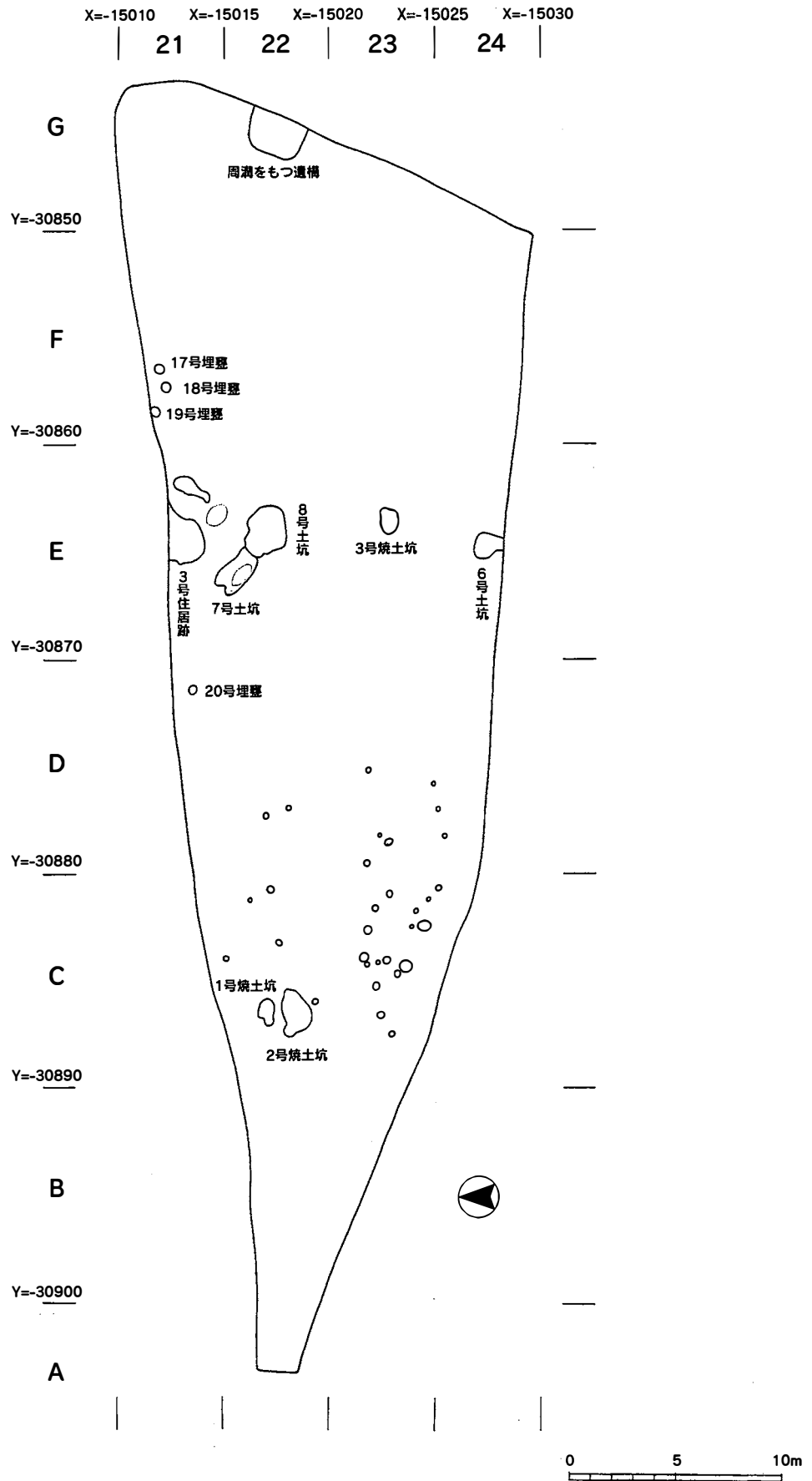
磯野富子 内田君子 内田ヒデ子 内田益子
内田マチ子 川田邦代 古西久男 高木博敏
田尻貞子 田尻 智 田尻セツコ 田尻信義
田尻ハツミ 寺本和代 野口アキ 野口いつえ
野口末広 野口二人 野口ツユ子 野口義秋
野田アサノ 藤森トリエ 松本喜伝 松本リツ子



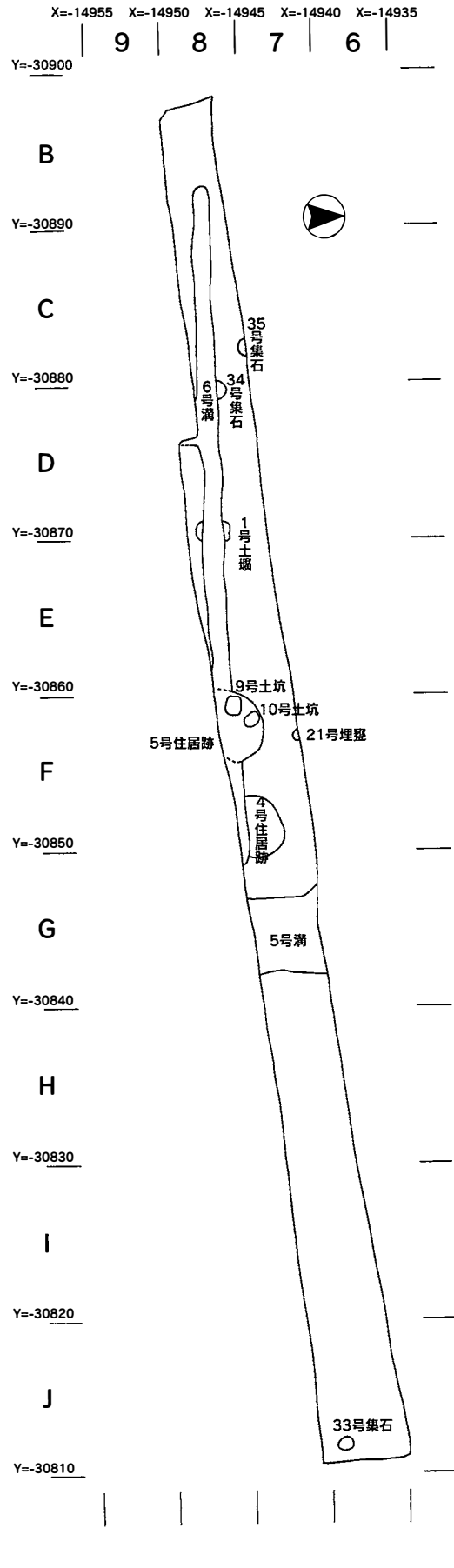
第9図 山海道遺跡1区遺構配置図(1/300)



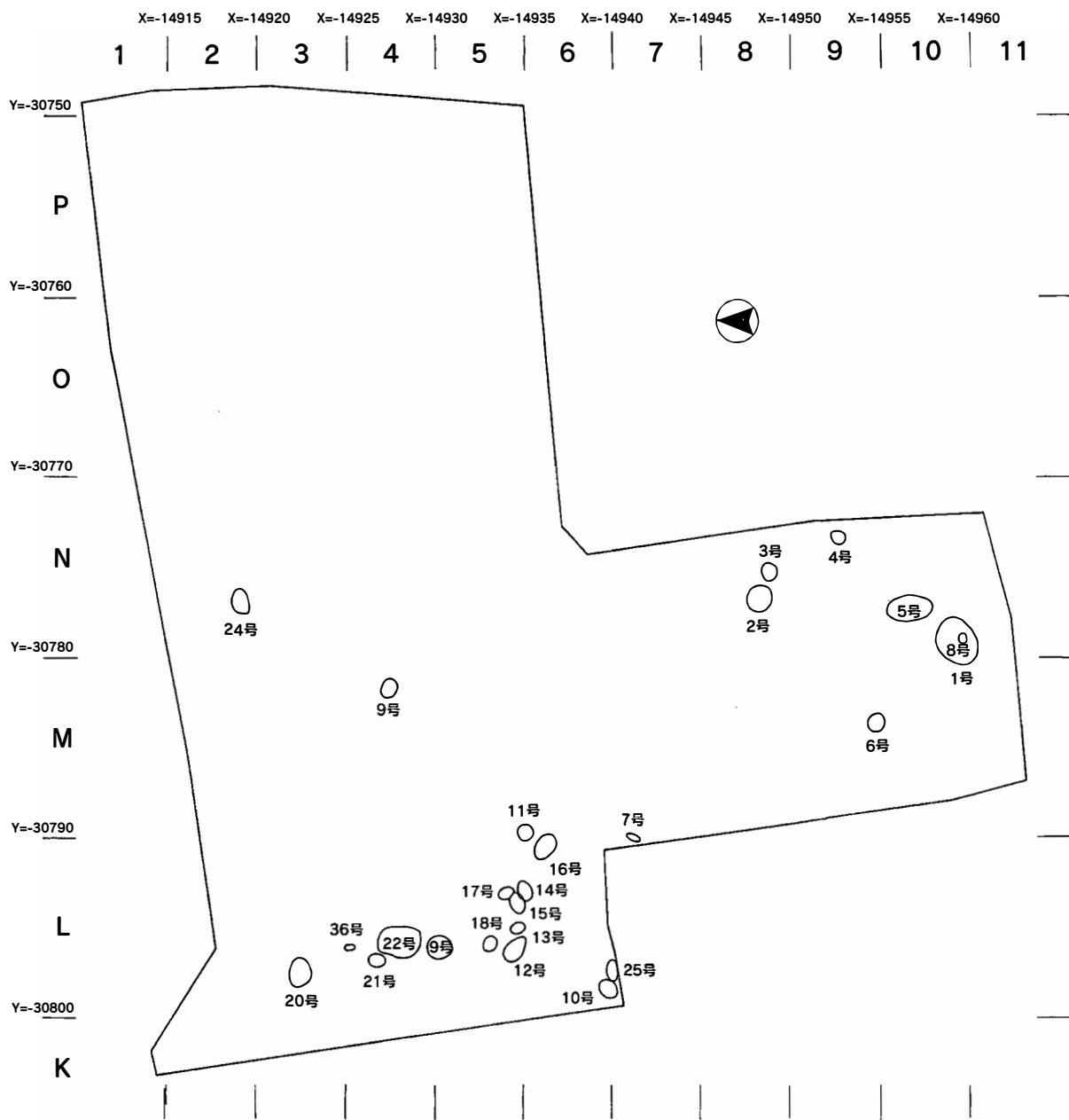
第10図 山海道遺跡2・3・4区遺構配置図 (1/380)



第11図 山海道遺跡5区V層検出遺構配置図 (1/300) (延長部を除く)



第12図 山海道遺跡6区遺構配置図 (1/430)



第13図 山海道遺跡2・3・4区検出集石位置図 (1/380)

無田京子 村上美代子

調査指導及び協力者

甲元眞之（熊本大学文学部教授） 富田紘一（熊本市立博物館） 竹田宏司（熊本市教育委員会）
金田一精（熊本市教育委員会） 高木正文（熊本県教育委員会） 県農村整備課 県熊本事務所耕地課熊本市教育委員会文化課 熊本市北部総合支所経済課

2 山海道遺跡の調査体制（平成6・7年度）

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 桑山裕好 文化課長
丸山秀人 課長補佐

調査総括 島津義昭 主幹（文化財調査1係長）

調査担当 古森政次 文化財保護主事
山下義満 文化財保護主事
水野哲郎 文化財保護主事
木村元浩 主任学芸員
長谷部善一 学芸員
安達武敏 嘱託
福田信子 嘱託
吉本智明 嘱託

専門調査員 木村幾太郎（大分市歴史資料館長）

調査事務

白井哲哉 教育審議員（課長補佐）
木下英治 主幹（経理係長）【平成6年度】
藤本和夫 主幹（総務係長）【平成7年度】
高濱保子 参事
中村幸宏 参事
高宮優美 主任主事

発掘作業

磯野富子 内田君子 内田ヒア子 内田 益子
内田マチ子 川田邦代 古西久男 高木 博敏
田尻貞子 田尻 智 田尻セツコ 田尻 信義
田尻ハツミ 寺本和代 野口アキ 野口いつえ
野口末広 野口二人 野口ツユ子 野口 義秋
野田アサノ 藤森トリエ 松本喜伝 松本リツ子
無田京子 村上美代子 稲田正広

調査指導及び協力者

中原幹彦（植木町教育委員会） 竹田宏司（熊本

市教育委員会） 村崎孝宏（熊本県教育委員会）

県農村整備課 県熊本事務所耕地課 熊本市教育委員会文化課 熊本市北部総合支所経済課

3 整理の組織（平成10年度）

主 体 熊本県教育委員会

責任者 豊田貞二 文化課長
川上康治 課長補佐

総 括 松本健郎 課長補佐（調査1係担当）

報告書担当 木村元浩 主任学芸員

福田信子 嘱託

宮崎まい子 嘱託

米倉早苗 臨時職員

外山裕子 臨時職員

古嶋 章 臨時職員

廣吉 禎 臨時職員

調査事務 伊津野 博 課長補佐

小斉久代 総務係長

緒方宜成 参事

岸本誠司 主事

川口久夫 主事

整理作業担当

今福英子 上村孝子 興梠富貴子 洲上慶子

宮本幸子 村山紀子 山内洋子 吉岡直子

調査指導及び協力者

牛嶋 茂（奈良国立文化財研究所） 竹田宏司（熊本市教育委員会） 河村好光（石川考古学研究会）

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

熊本市太郎迫町及び万楽寺町に所在する山海道遺跡及び万楽寺出口遺跡は、熊本市の最北端に位置し、鹿本郡植木町と接する。平成3年2月の合併までは飽託郡北部町であった。

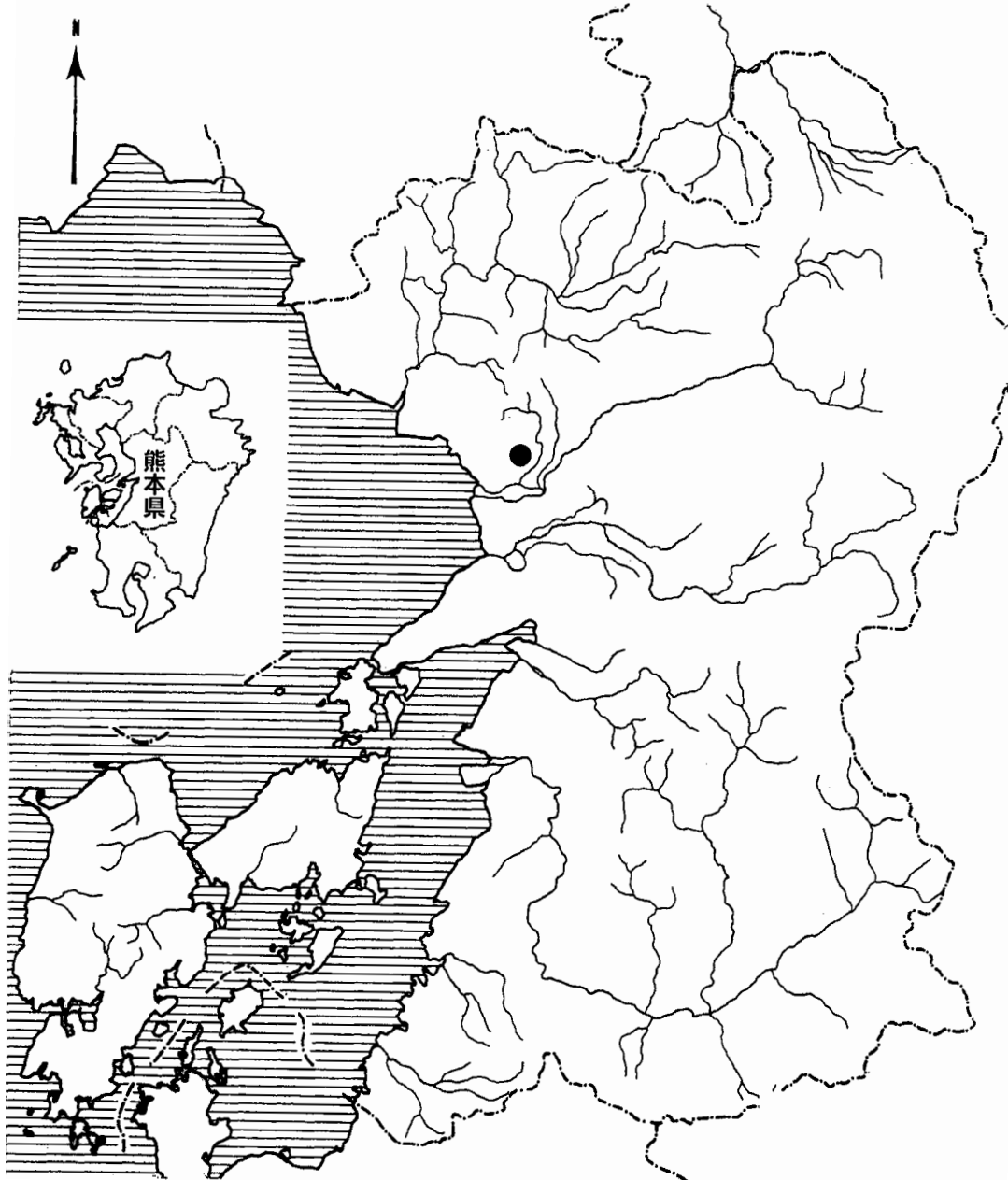
一帯は、ビニールハウスで栽培されるスイカ・メロンといった生産物で有名な地域である。

また、120年ほど前のいわゆる西南戦争ではその激戦地の一角ともなった地域で、鉄砲玉が発掘調査中に見つかるということもあった。

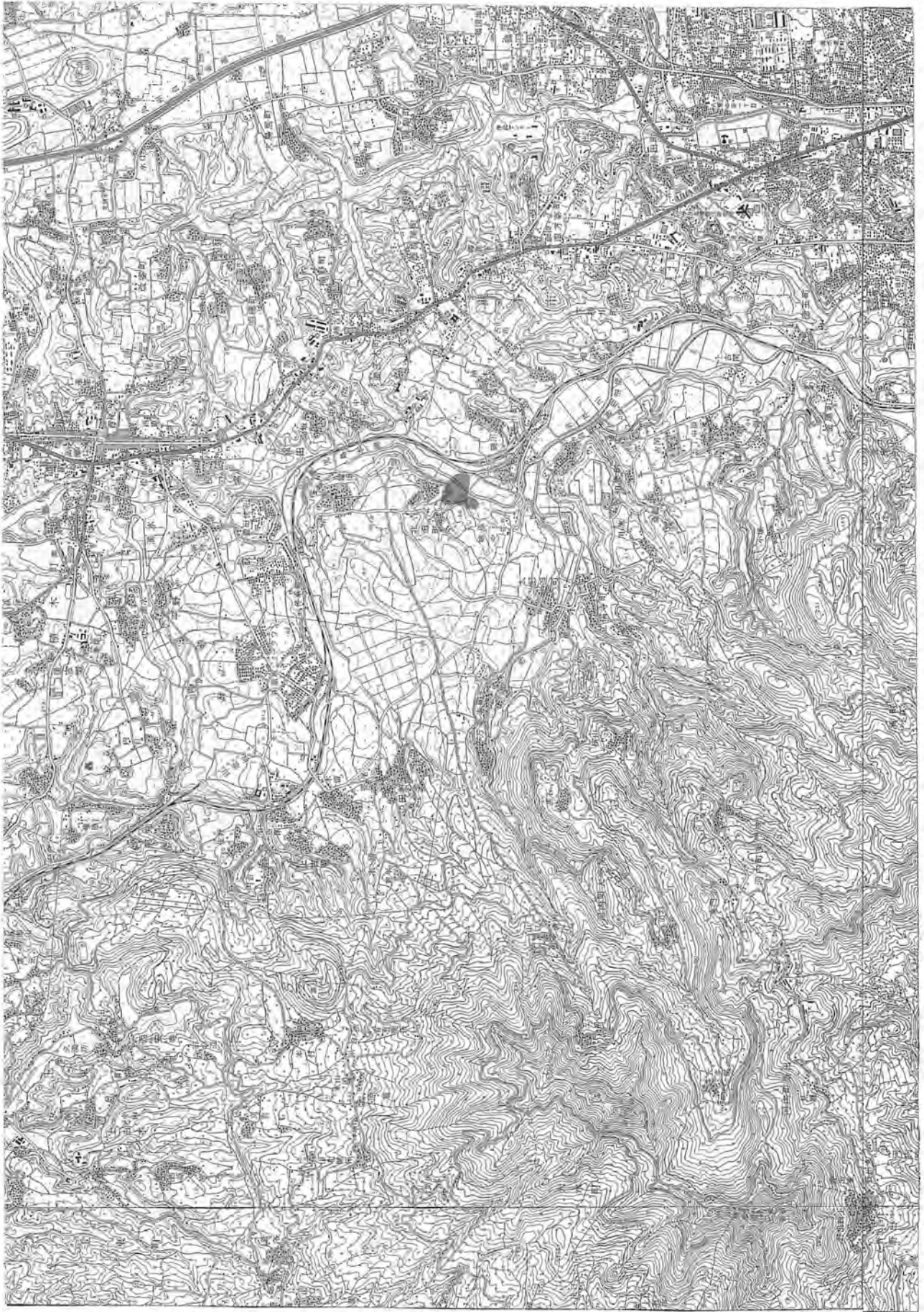
山海道遺跡は金峰山の三ノ岳から延びる丘陵上に存在し、また万楽寺出口遺跡は山海道遺跡の南側に広がる台地平坦部に存在する。すなわち標高からも山海道遺跡が上段に位置するという立地である。

両遺跡の発見については、第1章で詳しく述べられているが、熊本市教育委員会によりほぼ同時期に調査されたより太郎迫遺跡・妙見遺跡の調査報告書のなかでも詳細な記載がありここでは割愛したい。

参考文献 『太郎迫遺跡・妙見遺跡』 1999年
熊本市教育委員会



第14図 遺跡位置図 1



第15圖 遺跡位置圖 2 (1/25,000)

第三章 万楽寺出口遺跡の調査成果

第1節 基本層序

当地の基本層序は、第16図に示したとおり第I層から第IX層として捉えられる。

- I層 現在の耕作土である。
- II層 以前の耕作土で、一部客土も含める。
- III層 弥生時代以降の遺物を含む。
- IV層 縄文時代後期から晩期の遺物を含む。
- V層 遺物包含層。縄文時代後期のものがある。
色調がIV層よりやや濃くなる。

VI層～IX層 無遺物層

この基本土層図は地区・地点によって、層序が異なるところを含めたうえで、再編したものである。

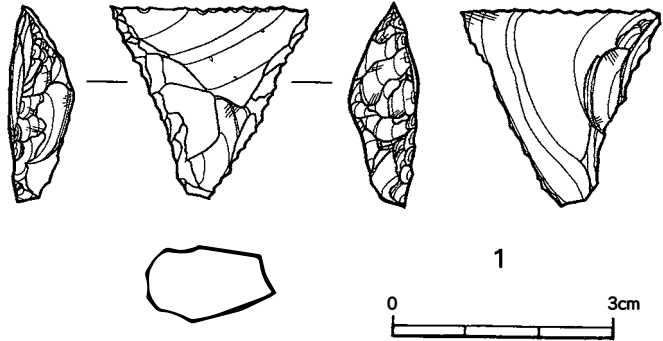
I	耕作土
II	旧耕作土・客土
III	黒褐色土
IV	暗褐色土
V	暗褐色土
VI	暗褐色土
XII	黒褐色土(ニガ土)
XIII	暗褐色土
IX	黄橙色土(ローム)

第16図 基本土層模式図

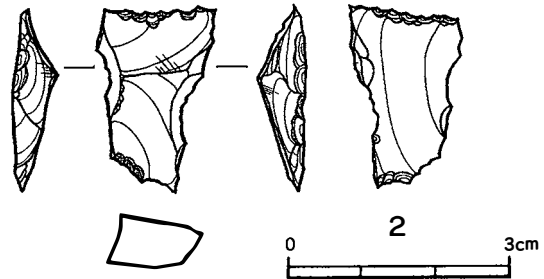
第2節 旧石器時代の遺物

台形石器及び台形様石器の計2点が出土した。7号住居跡覆土中のものと5区表採のもので、原位置は保っていない。1は、7号住居跡覆土出土の台形石器で、右側縁は急斜度で丁寧なブランディングが入る。一方、左側縁は緩やかで大きな剥離で構成され、特に下部で顕著である。刃部は後の剥落のほか使用時と思われる刃こぼれが残る。最大長2.5cm、最大幅2.7cm、最大厚0.95cm、黒曜石製。

2は5区表採の台形様石器である。刃部の大きな剥離は使用痕と考えられる。両側縁の加工は、急斜



第17図 7号住居跡覆土出土の台形石器 (1/1)



第18図 5区表採の台形石器 (1/1)

度であるが大まかである。なお、左側縁下部はブランディングではない。最大長2.4cm、最大幅1.6cm、最大厚0.6cm、黒曜石製。

第3節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺構は検出されなかったが、弥生時代の遺構覆土及び遺物包含層より縄文土器及び石器が出土している。ここでは、特徴的なものだけに説明しておく。

1 土器

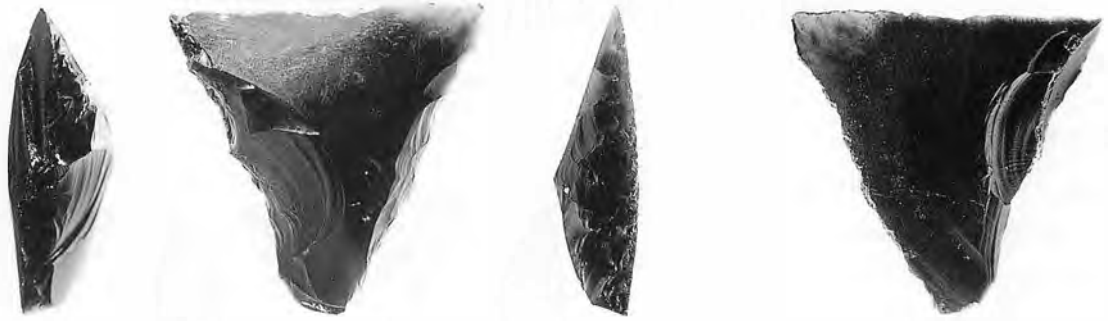
さほど多くは出土していないが、一番古く位置づけられるものとして、楕円押型文土器が1点ある。

また、後期から晩期にかけての一群があり、西平式などがある。

また、注口土器の注口部が1点ある。

2 石器

石匙・打製石鏃・横刃形石器・石錘・スクレイパー(使用痕のある剥片)及び不明のものがある。石



図版3 7号住居跡出土の台形石器



図版4 5区表採の台形石器

錘とスクレイパー（使用痕のある剥片）及び不明のものについては縄文時代に帰属する可能性が高いということで、ここに説明しておく。

打製石鏃は81点出土した。うち黒曜石製の未成品が3点含まれる。石材別では、黒曜石製53点、安山岩製16点、チャート製1点である。

出土層位は、Ⅲ層・Ⅳ層及び攪乱・表面採集のもので、ほとんどは原位置を保っていない。うち実測図2点、図版26点を示す（第19図、図版7）。1は、層出土の製鋸歯鏃である。片脚先端と一部欠損する。抉りは浅く大きく広がる。全面に緻密な剥離痕が見られる。2は、未製品とも捉えられるものである。長狭で、抉りは浅い。側縁の剥離は整然と緻密であるが、全体的に大まかな剥離によっており、一部素材面を残している。石鏃の石材は黒曜石と安山岩で占められる。石材による器形・大きさ等についての違いは、特に見られないが、抉りの深さについては黒曜石製のものに深いものが多い。

石匙は3点出土した。横刃形2点、縦刃形1点である。いずれも安山岩製で、出土位置不明の1点を

除きⅢ層出土であり、本来の位置は保っていない。横刃形の2点は、刃部が厚みを持つものと、傾斜の緩やかな割合大きな剥離を断続的に施した薄形のものがあり、対照的である。

第20図、図版8は、十字形石器である。4つの張り出し部のうち、1つが抉入部から欠損している。対抗する張り出し部の先端は、黒く粗くなっており、火を受けた可能性も考えられよう。

打製石斧は、19点出土した。のちに欠損があるが、製品として完成しているものが9点、制作途中の大形品が10点ある。完製品は1点を除き、短冊状を呈するものである。

石材については、安山岩系が15点と大半を占める。他のものは、緑泥片岩系である。

石錘は、1点ある。有溝砥石。小型の円礫の中央部に全周小溝が巡る。

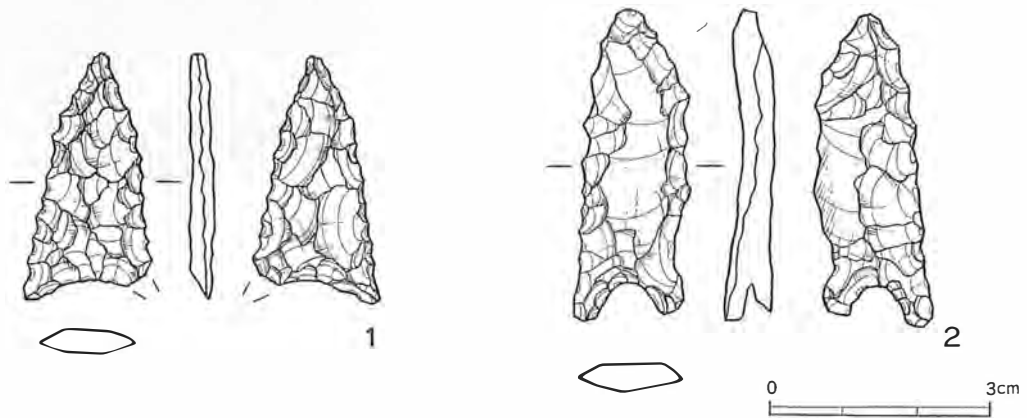
スクレイパー（使用痕剥片）は、19点ある。割合大きな素材の周縁部にしっかりした剥離を施しているものをスクレイパーとして捉えると安山岩製のもので3点ある。また、それ以外のものを使用痕のある剥片とすると16点ある。これらの石材は全て黒曜石製である。

不明品として以下のものがある。

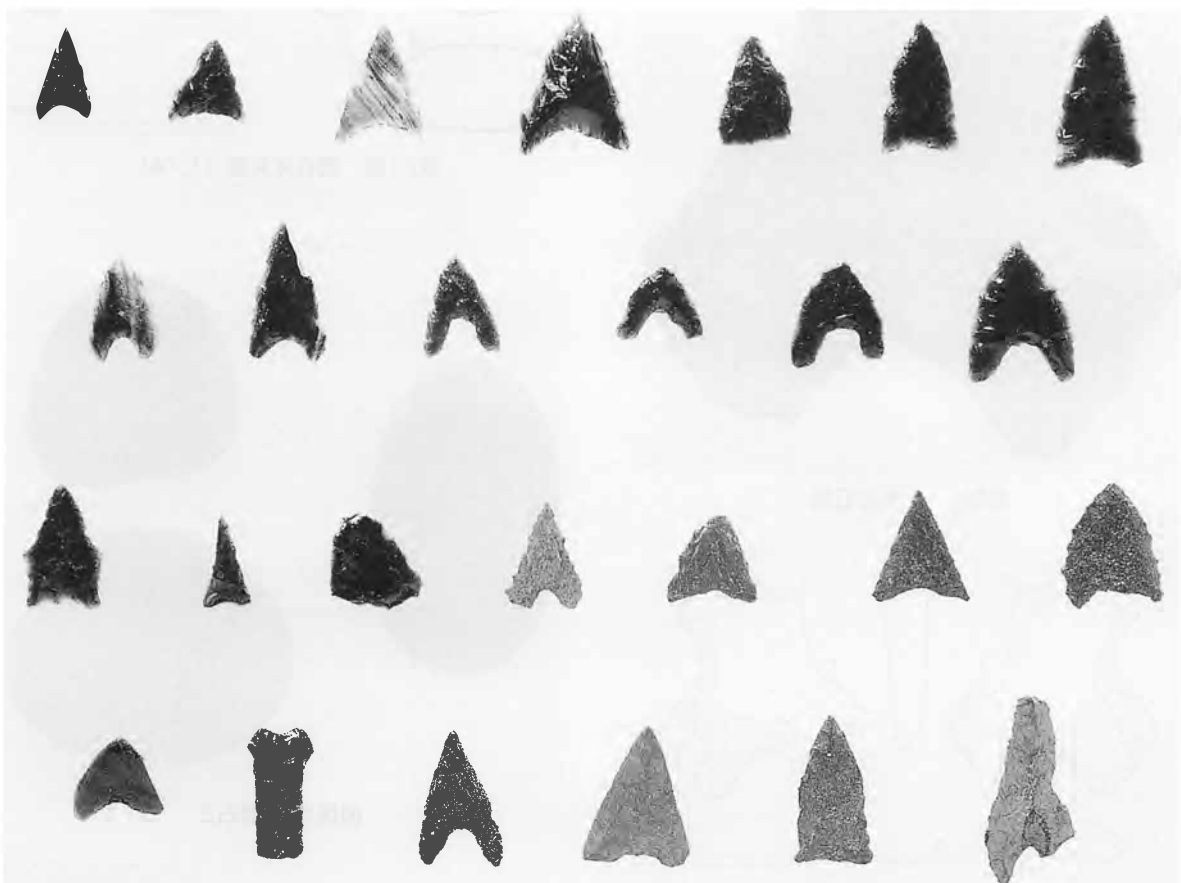


(左) 図版5
石錘1

図版6
(右) 石鏃2



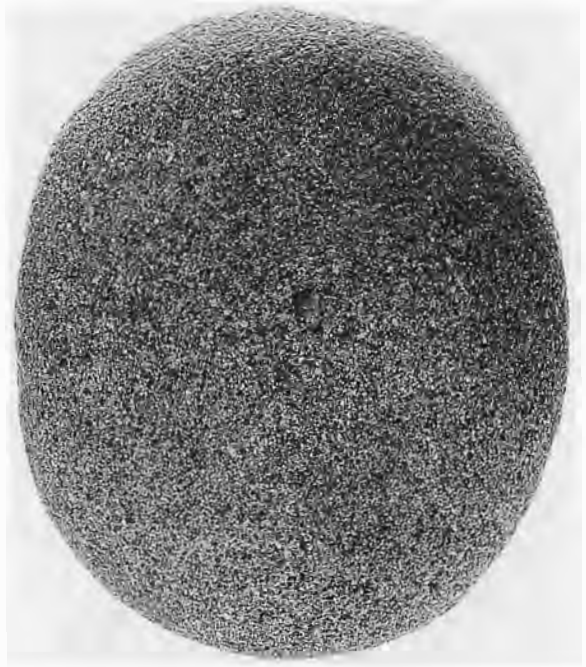
第19図 石鏃実測図 (1/1)



図版7 石鏃

1. 横刃で上部に背面、対する下端に刃部を作った横刃形石器として捉えられるものである。石包丁（石鎌）と同様の使用法も推測可能である。

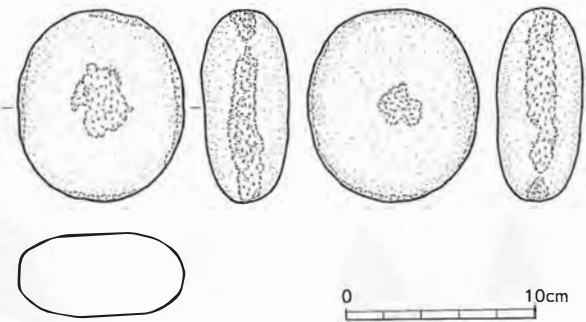
2. 全てを加工した棒状の厚みあるもので、一端は欠損しているが、他の一端には細かなノッチを入れ、柄を作り出しているものである。



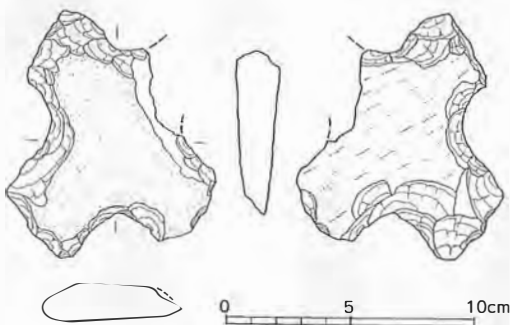
図版9 磨石1



図版8 十字形石器



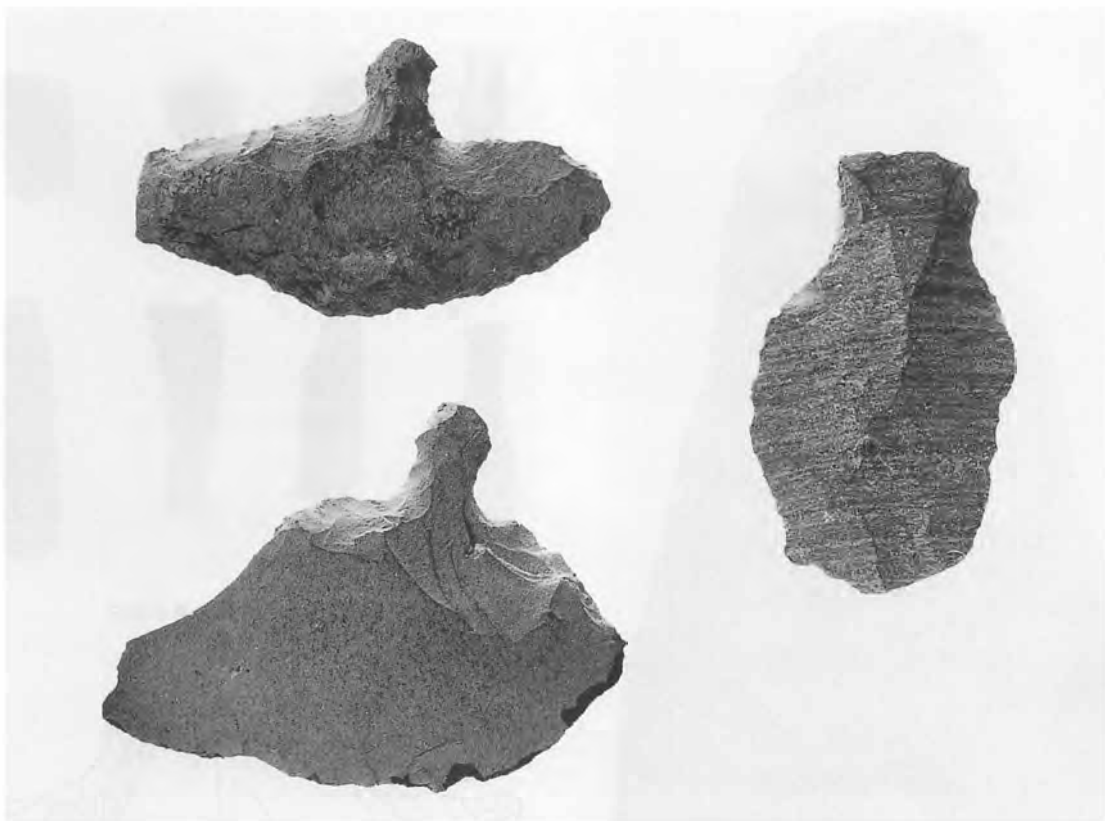
第21図 磨石実測図（1/4）



第20図 十字形石器実測図（1/3）



図版10 磨石2



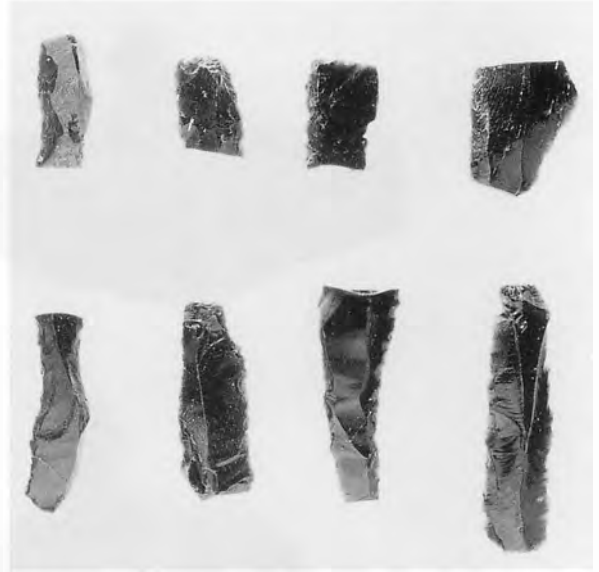
図版11 石匙



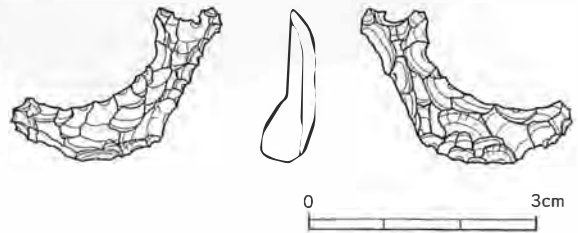
図版12 打製石斧



図版13 扁平打製石斧



図版15 使用痕のある剥片



第22図 異形石器実測図



図版14 異形石器

第4節 弥生時代の遺構と遺物

検出した遺構は、住居跡19・甕棺墓11・木棺墓4・土壇5・配石2・溝6・焼土2・土坑10である。



(左) 図版16 勾玉

(右) 図版17 勾玉出土状況

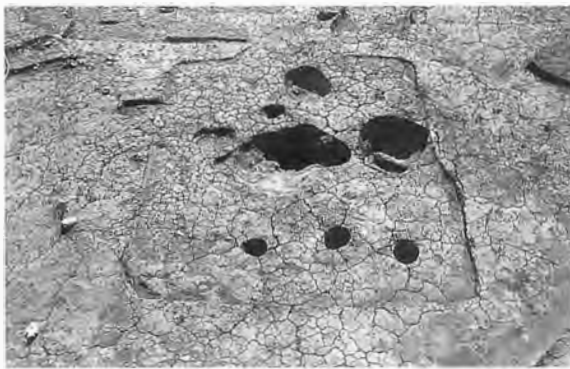


図版18 図版17の拡大

1 竪穴式住居跡

全部で19軒以上検出されているが、ここでは確実なもの19軒について報告する。時期の所属は、出土遺物から、弥生時代中期の中頃から後頃にかけてのものである。検出した調査区は、1・3-1・7区のみで集中が認められ、住居域として考えることができそうだ。検出層は、Ⅳ層及びⅨ層で、Ⅸ層確認のものが多く、結果的に壁高の残存度が低くなっている。住居跡としての認定は、①硬化面の存在とその広がり②焼土(炉)の存在③貯蔵穴の有無④平面形態⑤柱穴の有無などによる。全てがこの条件を満たしているわけではないが、ここでは、これらの視点をもって、報告することとした。

平面形態は、切り合いがあつたり、調査区外に広がるものが多いが、長方形を呈するものが圧倒的に多い。なお、実測図については、原則として完掘状

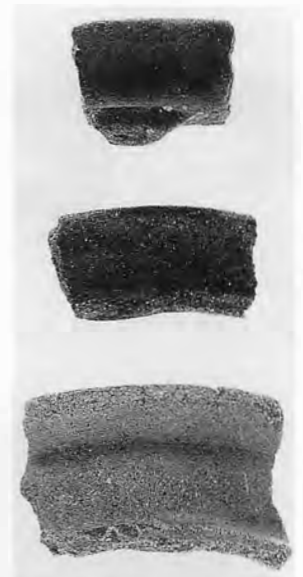


図版19 1号住居跡完掘状況(南西から)

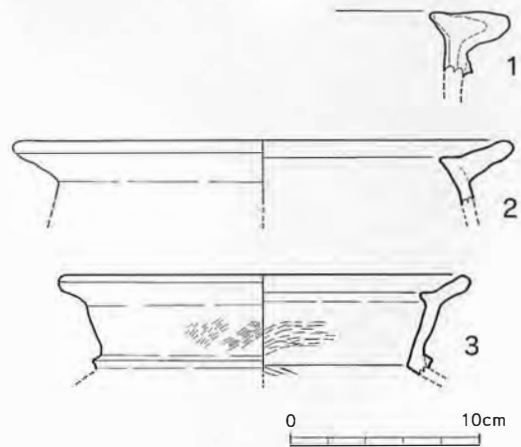
態を掲載している。また、掲載した出土遺物の実測図については、住居跡床面・底面及び貯蔵穴出土のものに限っている。

1号住居跡

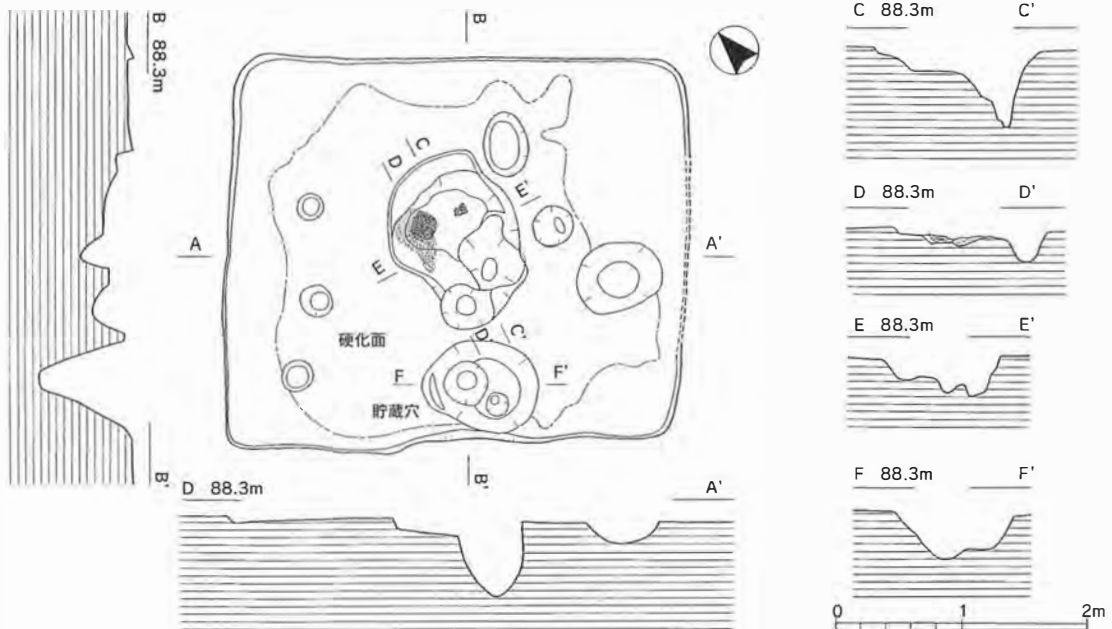
平面形はほぼ正方形で東西軸3.5m、南北軸3.0mである。検出面からの深さは6cm程度で



図版20 1号住居跡出土土器



第24図 1号住居跡出土土器(1/4)



第23図 1号住居跡実測図(1/60)

ある。床面のほぼ全面で硬化面が検出できた。南壁には深さ40cmをもつ貯蔵穴がありまた8つの柱穴が確認されたが、主に家屋を支える柱穴は不明である。また、焼土及び焼土ブロックが中央やや北寄りに見られ、これが炉と考えられる。なお、断面図E-E'にかかる焼土は極わずかで、断面図では表せない。出土遺物は、土器・石器など多数あるが、ここでは、3点の土器を図化した。1は、弥生時代甕形土器の口縁部で、口縁部外面に断面が三角形の突帯を張り付けたものである。また内側に張り出しをもつ。2は、弥生時代甕形土器の口縁部で、口縁外側の突帯が細長くなり、また、強く内傾し、くの字に近い形態と

なる。また、内側に張り出しをもつ。3は、壺形土器の口縁部で、鋤状口縁であり、上面がくぼむ。なお、口縁部内面上部には赤色顔料の残存がある。

2号住居跡

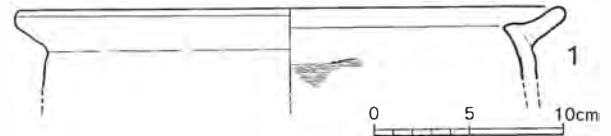
平面形はやや南北に長い長方形である。南北軸4.0m、東西軸3.6mである。検出面からの深さは11cm残存する。硬化面は南側を除きほぼ全域で確認された。北東隅に貯蔵穴と考えられるものがあり、深さ30cmで



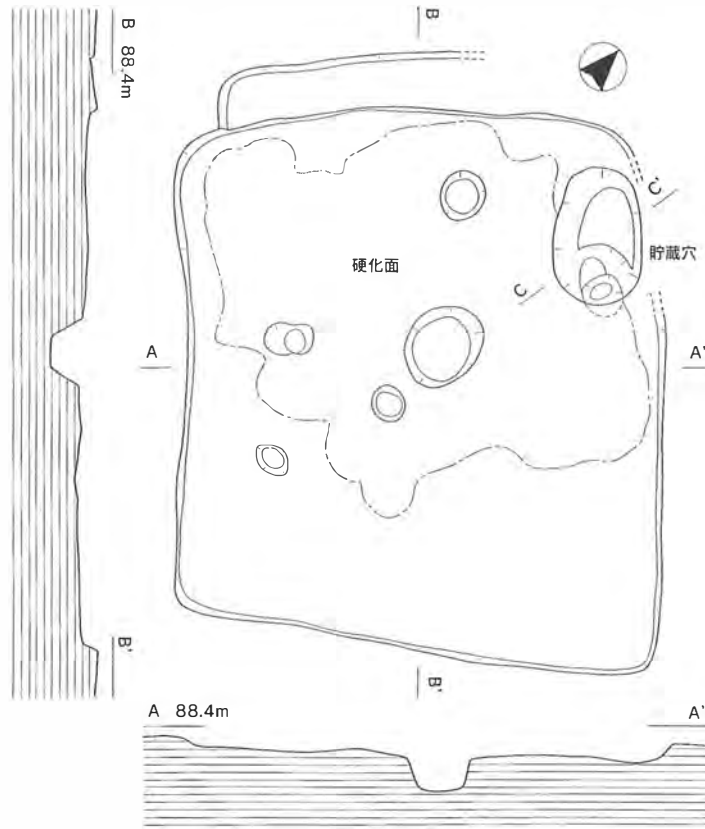
図版21 2号住居跡完掘状況（南西から）



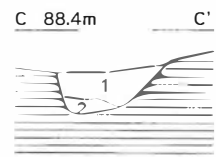
図版22 2号住居跡出土土器



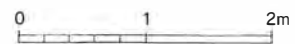
第26図 2号住居跡出土土器（1/4）



第25図 2号住居跡実測図（1/60）



- 1.褐色土（ニガのブロックを少量含む。粘性若干あり）
- 2.褐色土（ニガのブロックを少量含む。粘性若干あり）
1層に比べやや暗い

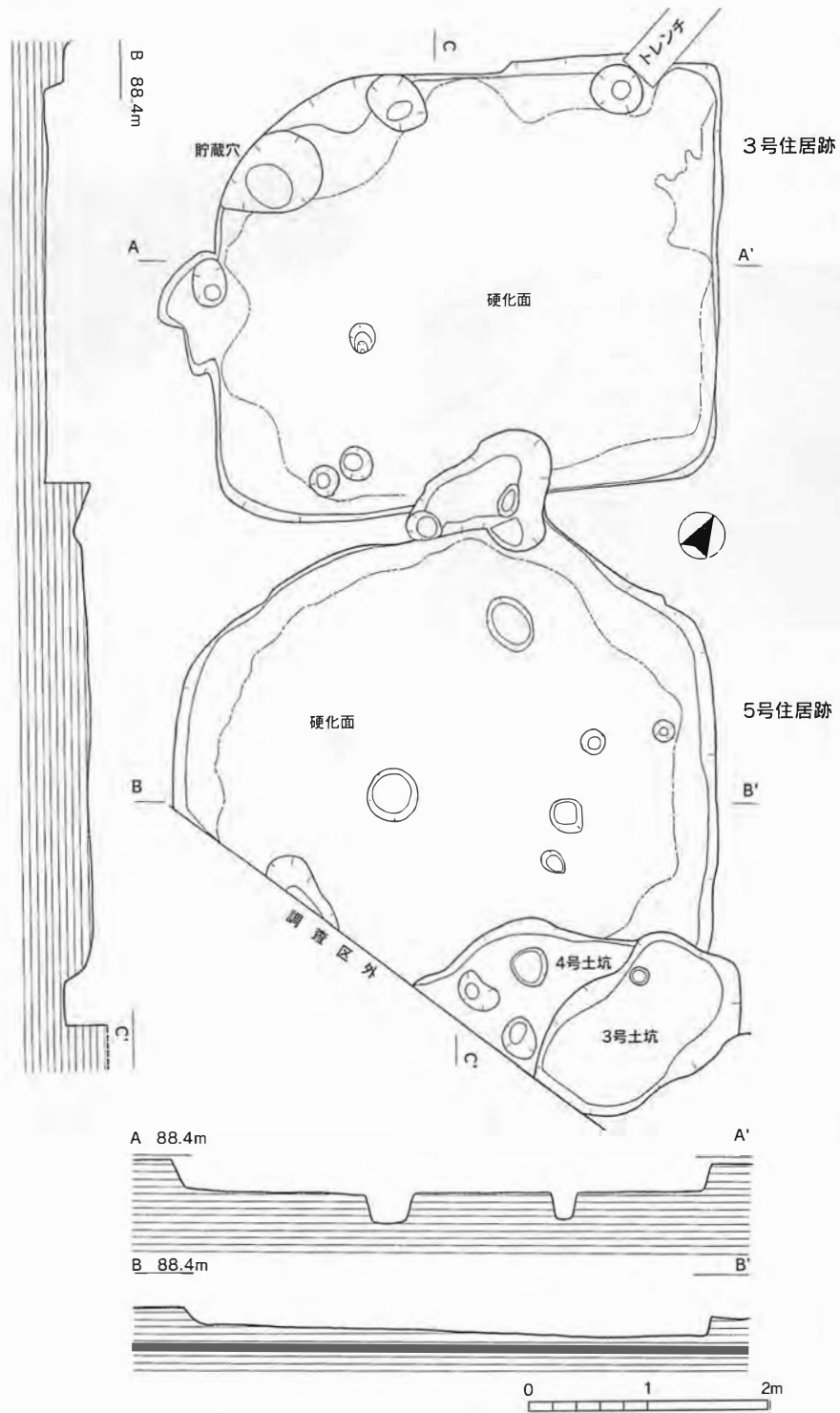




図版23 3号住居跡完掘状況



図版24 5号住居跡出土石器



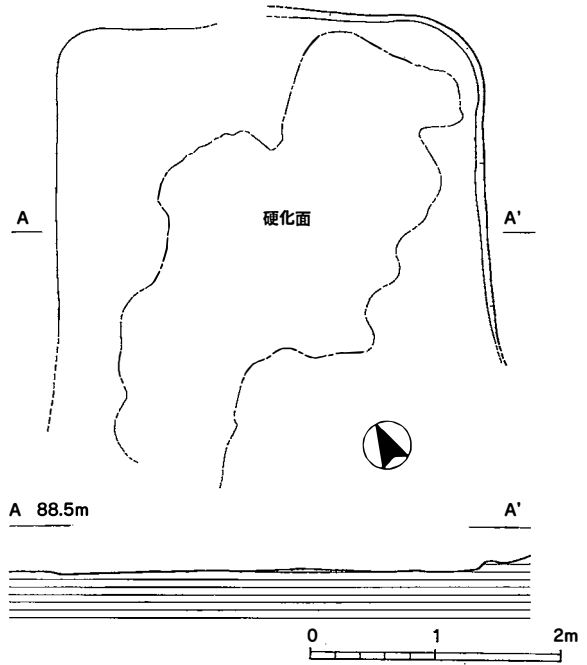
第27図 3・5号住居跡実測図 (1/60)

2層に分かれる。この他に6つの柱穴が検出できた。主柱穴となるものは不明であり、どの柱穴が住居跡に伴うかははっきりしない。なお、北部で見られる切り合い関係は、切られた遺構は住居跡である可能性もあるが、判然としない。

出土遺物としては、弥生時代黒髪期の口縁部・底部・高坏脚部・磨製石鏃・磨製石斧がある。土器の器形では、壺形土器・甕形土器が存在し、甕形土器口縁部のしゃくれや底部の上げ底状態がいわゆる脚台化している事から、これらの時期を、黒髪式の後半の時期と考えておきたい。

高坏脚部には、全体的に赤色顔料の痕跡が見られる。

1は、弥生時代甕形土器の口縁部で、口縁外側の突帯が細長くなり、また、強く内傾し、くの字に近い形態となる。また、内側に張り出しをもつ。

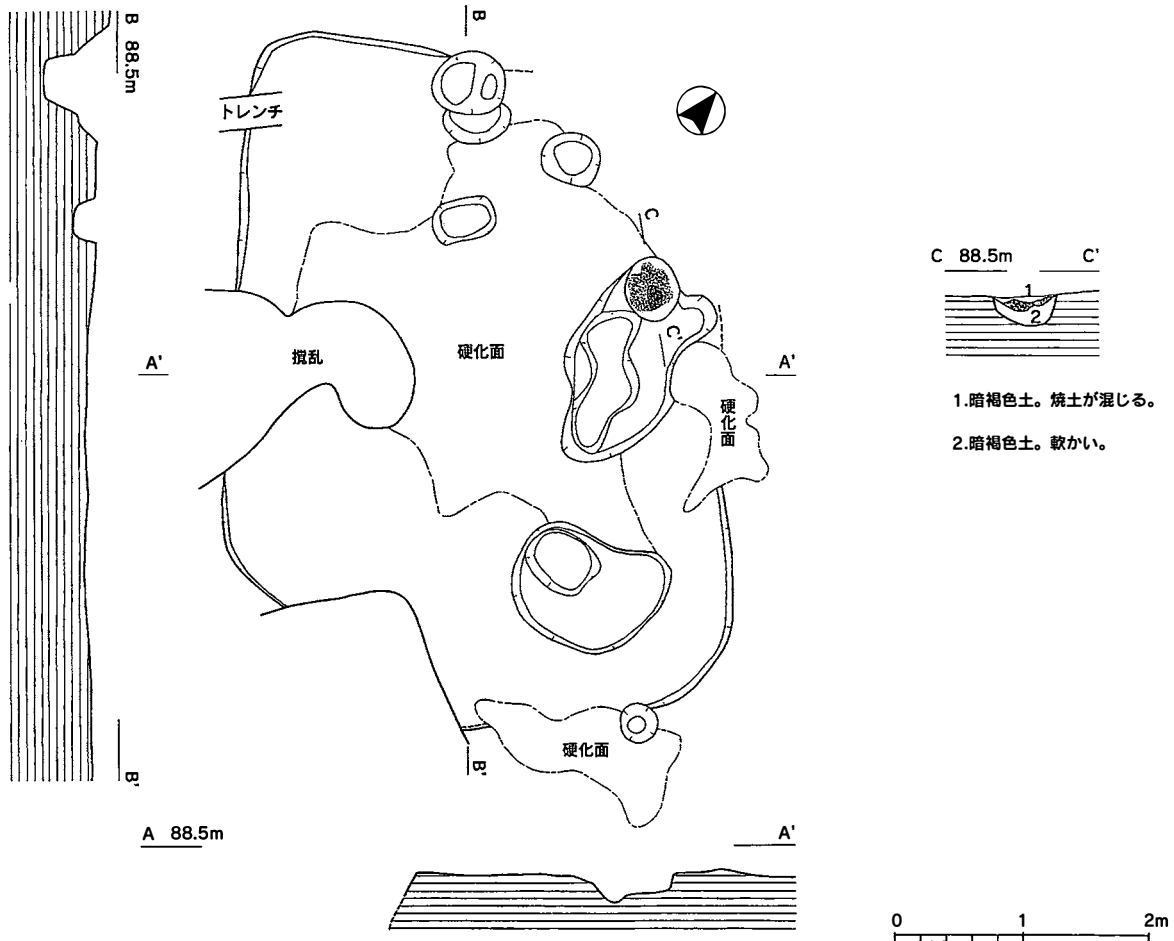


第28図 4号住居跡実測図 (1/60)

3号・5号住居跡

3号住居跡と5号住居跡は切り合っており、5号住居跡が新しい。3号住居跡の平面形はやや東西に

長い長方形である。推定で東西軸3.4m以上、南北軸3.3m以上ある。検出面からの深さは5cm程度残存する。硬化面がほぼ全面にわたって検出できた。北西



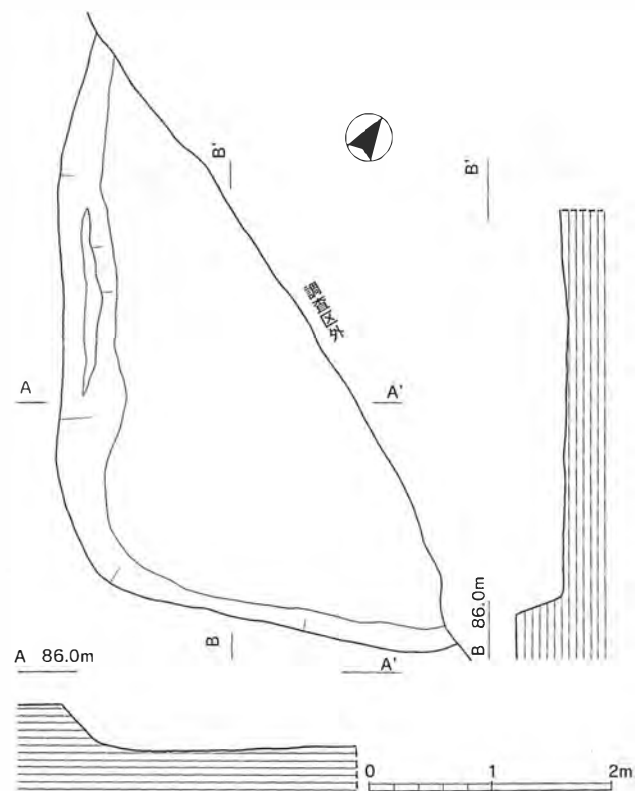
第29図 6号住居跡実測図 (1/60)

隅の壁ぎわには貯蔵穴と考えられるものがあり、深さは40cm程度ある。また、5号住居跡の平面形態は楕円形を呈するものであろう。調査区外にも広がり、3号及び4号土坑に切られているので、詳細不明だが、直径2.3m以上ある。また壁高が21cm残存している。硬化面はほぼ全域で確認されて、柱穴も複数検出されているが、家屋を支えるのがどの柱穴かはっきりとしない。3・4号土坑内に見られる柱穴も住居跡に伴うものかどうかも含めて不明な点が多い。

3号住居跡の出土遺物には、弥生時代の壺形土器、甕形土器があり、口縁部片・底部片及び石包丁・敲石・鉄器がある。甕形土器の口縁部形態及び底部から黒髪期の早い段階のものであることが伺える。また、甕形土器の1点には、口縁部に焼成後の穿孔が1カ所残存しており、蓋とセットで使用されるものであろう。概してこの復元口径は、他の出土甕形土器と比較して小さい。

底部は、明瞭に長く作り出すものと平底のものがあるが、いずれもごく浅い、上げ底程度で、底部厚のものである。

石包丁は欠損著しい。刃部には使用痕と考えられる微細な剥落が見られる。



第30図 7号住居跡実測図 (1/60)



図版25 6号住居跡出土土器

5号住居跡からは、壺形土器・甕形土器・石包丁・敲石がある。弥生時代黒髪期のもので、甕形土器口縁端部のしゃくれが見られる。底部は浅い上げ底状である。3号住居跡との切り合いから、3号が古いので、5号住居跡のしゃくれた口縁部を基準とすると、黒髪期の後半に5号住居跡の時期をもつてくることができる。

4号住居跡

平面形はやや南北に長い長方形と推測される。南半部は全く不明で、西半部もわずかに下端が確認できる程度であった。南北軸4.0m、東西軸3.6m以上の規模を持つ。検出面からの深さは11cm残る。硬化面は割合広範囲で検出できたが、焼土・貯蔵穴・柱

穴は検出されていない。出土遺物は、磨石(敲石)が1点出土している。楕円を呈するもので、周縁の対する頂部には敲打痕が残る。また、両面は、磨った痕跡が残るが、浅いくぼみが存在する。



図版26 7号住居跡出土石器

6号住居跡

平面形はやや東西に長い長方形になると考えられるが、判然としない。東西軸3.5m、南北軸

3.0mである。検出面からの深さは6cmある。硬化面は、中央部で確認されたが、東端・南端にもこの住居跡の平面プランにかかるように2カ所見られる。別の住居跡との切り合いをもつ可能性を残している。柱穴も複数検出されているが、まず、住居跡に伴うものかどうかも、どれが柱として成り立つものかよく分からない。焼土が東隅にあり、炉と考えられる。

C-C'には掘り込みがあり、2層に分けられる。1層の下部には堅く焼けた焼土及び焼土ブロックがレンズ状に堆積していた。出土遺物は、甕形土器・鉢形土器・敲石がある。甕形土器のしゃくれある口縁端部及びやや脚台化しつつある幅広の上げ底で底部厚という底部形態から弥生時代黒髪期中頃ではないかと考えられる。特に底部に残存する内面上部の砂が特徴的である。鉢形土器は2点ありうち1点は口縁部に焼成後の穿孔がある。

7号住居跡

平面形態は方形を呈するものと考えられる。北半

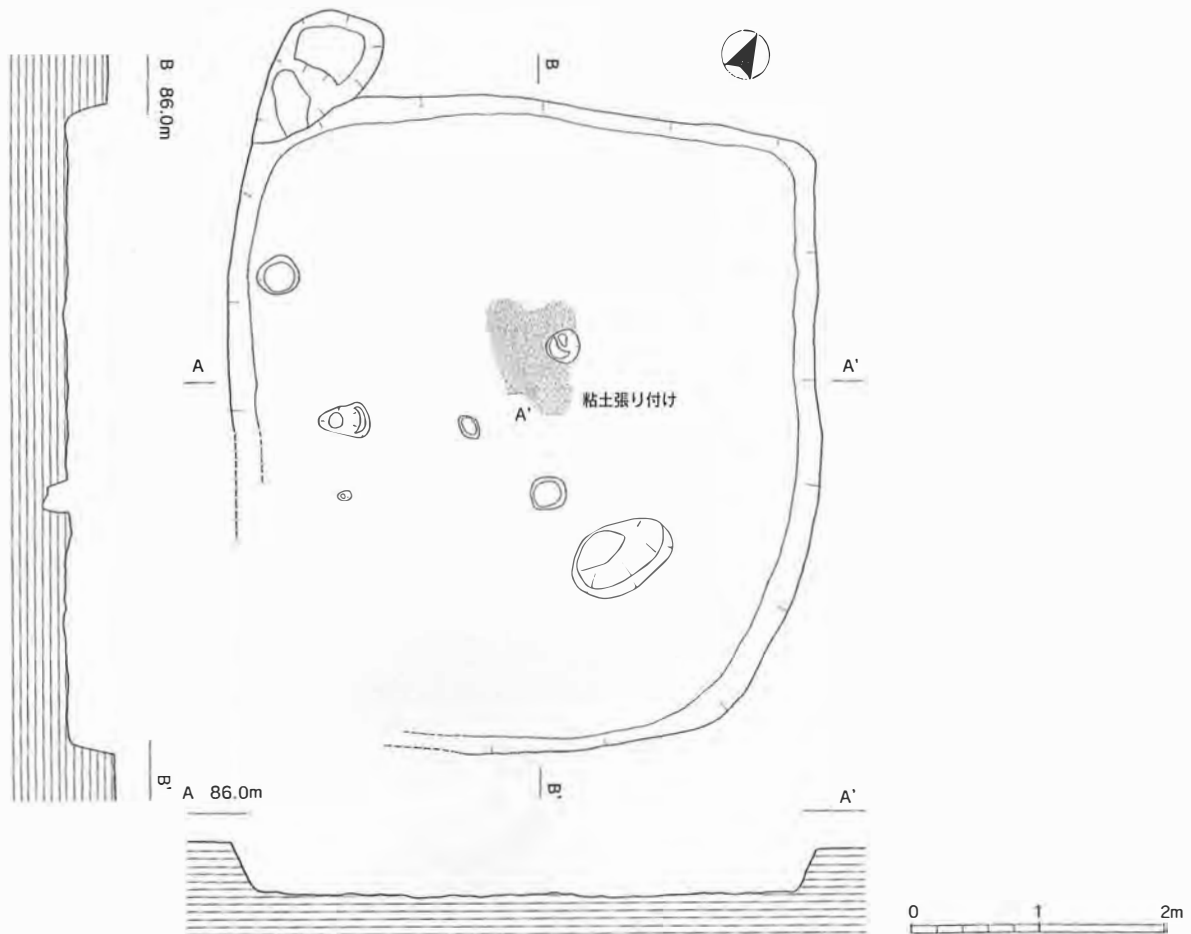
が調査区外に広がるため、規模は不明であるが、長方形・正方形のいずれかとしても長軸5.0mの規模をもつ。検出面からの深さは38cm残る。硬化面・炉・柱穴等は一切検出されなかった。

出土遺物は、甕形土器・壺形土器・高坏（器台）・石包丁・砥石がある。甕形土器の口縁部及び底部からは、黒髪期のやや古い様相を見てとれる。すなわち、口縁部に断面三角形の張り付け口縁からやや緩やかなしゃくれ状態のものがあり、底部は、やや浅い上げ底ということである。高坏（器台）としているものは、特に風化が著しく、時期の所属など疑問が残る。

石包丁は半分を欠損しているが、優美で大形のものである。使用時のものと考えられる



図版27 9号住居跡出土石器



第31図 8号住居跡実測図 (1/60)

微細な剥離痕が残存する。砥石は欠損著しい。砥面は全体に及んでおり、よく使用していた様子が伺える。

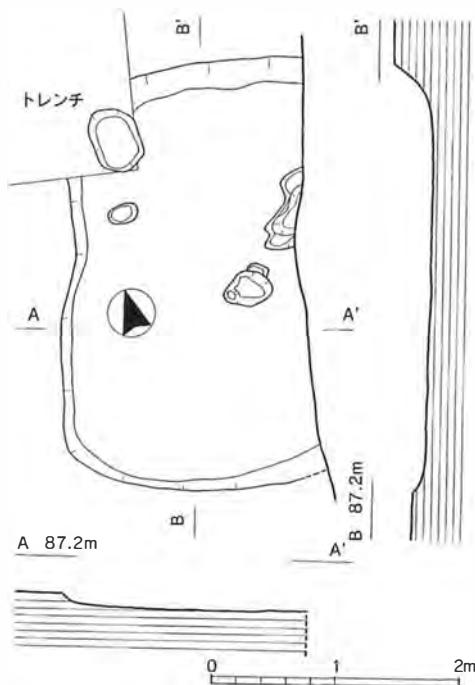
8号住居跡

南東隅が確認できていないが、平面形態はほぼ正方形である。東西軸2.6m、南北軸2.4mである。検出面からの深さは17cm程度である。中央部には粘土を張り付け硬化した部分が検出できた。柱穴は7つ検出されているが、住居跡に伴うものかどうかも含めて、主柱となるものは不明である。焼土は確認できなかった。

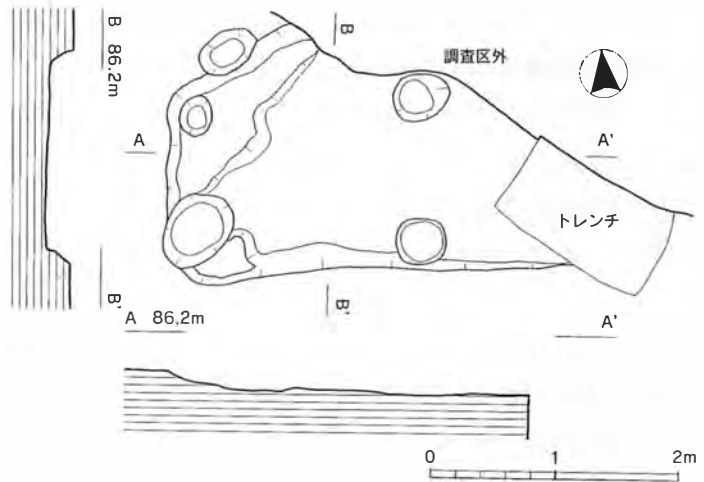
出土遺物は、甕形土器、壺形土器、及び石包丁、石皿が出土した。甕形土器の口縁端部及び底部から、弥生時代黒髪期でやや古い時期ではないかと考えられる。すなわち、断面三角形の張り付け突帯と、浅いくぼみの底部が特徴的である。石包丁は、欠損著しく、細片となっている。

石皿は、ほぼ半分程度欠損しているが、一面にのみ擦り込んだ部分を残す。使用頻度は低いようだ。

時期の帰属は難しいが、出土状況から、当住居跡に伴う可能性が高い。



第33図 10号住居跡実測図 (1/60)



第32図 9号住居跡実測図 (1/60)

9号住居跡

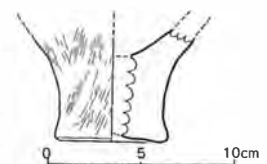
北半部は調査区外に広がり、平面形態は判然としないが、方形に近いものと推測される。平面形態は不詳。長い軸をとれば2.6m程度ある。検出面からの深さは18cm残存する。柱穴も複数あるが不明。他の住居跡と比べて、住居跡断定の判断材料が少ないが、ここでは住居跡として認識している。出土遺物としては、甕形土器・壺形土器・鉄器がある。甕形土器の口縁端部が、断面三角形の張り付けのものとしやくれのものがあり、年代決定にあたっては、より新しいしやくれものを基準にすれば、弥生時代黒髪期の新しい段階になるものと考えられる。鉄器の器種は不明である。

10号住居跡

半分以上が東側の調査区外に広がるが、平面形態は方形と推測される。南北軸は3.4m、東西軸は1.8m以上である。検出面からの深さは、最大30cmあり、残りが良い。硬化面及び炉も検出されていない。柱穴は3つ確認されたが、家屋を主に構成するものかどうか不明である。出土遺物としては、甕形土器の



図版28 10号住居跡出土土器



第34図 10号住居跡出土土器 (1/4)

底部一点がある。甕形土器の底部と考えられる。やや脚台化しつつあるものの、底面は若干の上げ底でほぼ平坦である。

11号住居跡

平面形態はやや東西に長い長方形である。東西軸4.6m、南北軸4.0mある。検出面からの深さは15cm程度である。焼土が中央よりも南西の隅に近いところに存在し、炉と考えられる。ただ、焼土がどの程度残存しているのかは不明。柱穴は検出できたものの主柱穴となるものは確認できていない。出土遺物としては、1は、甕形土器の口縁部で、口縁部外面に断面が、三角形状から台形状の突帯を張り付けたもので、口縁上面はほぼ平坦である。また、内側の張り出しはもたない。

2は、甕形土器の口縁部で、くの字型口縁となるものである。

3は、底部片で壺形土器のものと考えられる。平底となっている。底部端と直線的に連なる胴部をもつ。底辺はやや丸みをもつ。

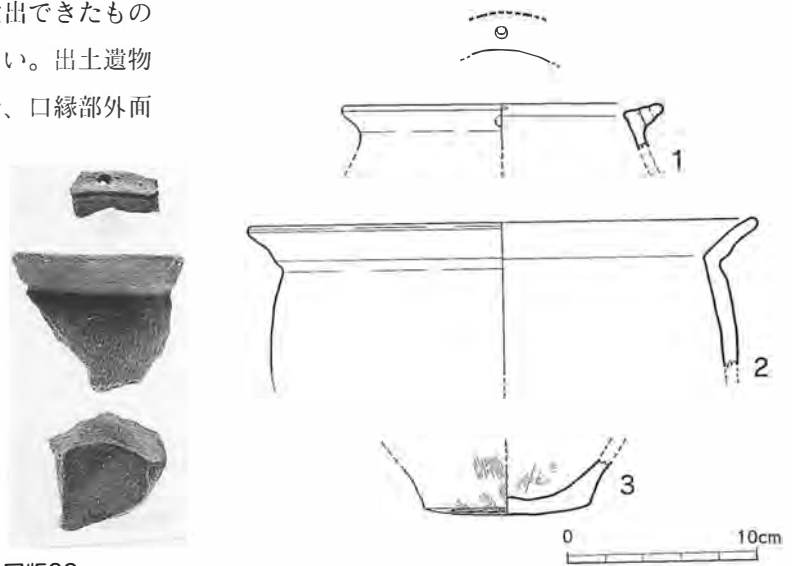
他に底部片、及び鉄器が出土した。底部は裾部が広がり上げ底である。脚台化までにはなっていない。なお、わずかに底部内側上面に砂粒の付着をみる。これらのことから、弥生時代黒髪期式の中頃と考えられる。また、口縁部に焼成後の穿孔を見るものがあり、蓋とセットで使用された可能性がある。鉄器は1点あるが、器種不明である。

12号・13号・15号・16号住居跡

切り合いがあり、その先後関係は、古い方から、12・16→15→13号である。12号住居跡は平面形態は方形を呈するものであるが、13・15号住居跡に切られている。南北軸2.8m、

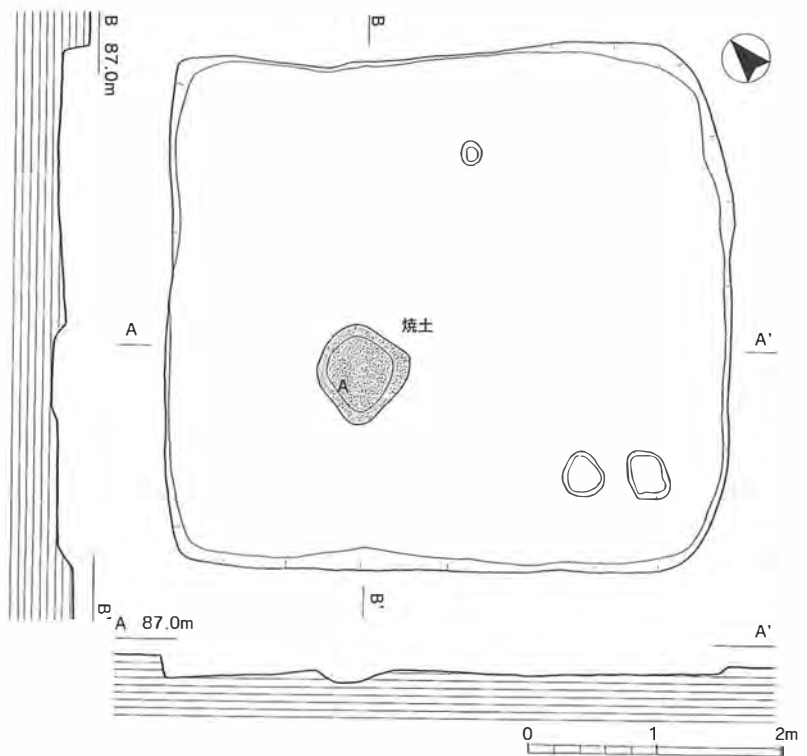
東西軸1.5m以上である。

検出面からの深さは10cm程度残存する。13号住居跡は、12・15号住居跡を切るもので、平面形態は長方形である。短軸2.8m、長軸3.1mで、検出面からの深さは、8cm残る。15号住居跡は、13号住居跡に大部分を切られ、逆に12号住居跡を切っている。残存部分から正方形であると推定でき、東西軸・南北軸とも3.5mである。検出面からの深さは10cm程度であ



図版29
11号住居跡出土土器

第35図 11号住居跡出土土器 (1/4)



第36図 11号住居跡実測図 (1/60)

る。16号住居跡は、大部分が調査区外になる。平面形態の特定はできない。南北軸は2.9mで、東西軸は60cm残る。検出面からの深さは最大16cmある。

これら4住居跡については、硬化面及び焼土は確認されていないが、柱穴は複数確認された。ただ、家屋を支えることのできる主な柱の組み合わせを判別することはできなかった。柱穴その他のものの区別も難しい。

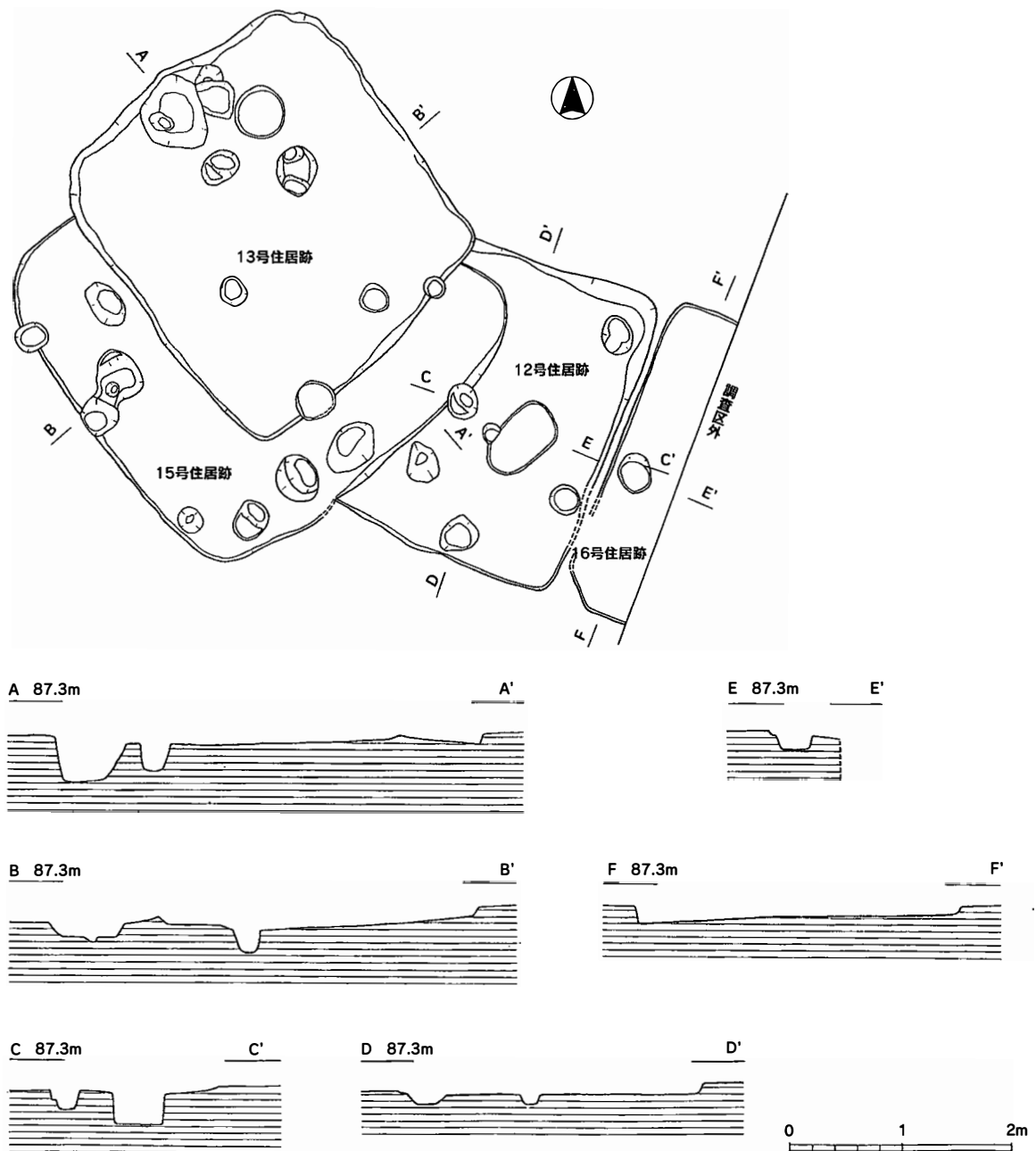
13号住居跡からは、甕形土器・高坏が出土した。

1は、甕形土器の口縁部で、口縁部外面に分厚い断面形が、三角形の突帯を張り付けている。内側に

張り出しをもつ。2は、高坏の坏部である。鋤状口縁をもち、内側にやや張り出す。上面はややくぼむ。内外の全面に赤色顔料が見られる。3は、上げ底をもつ底部で、甕形土器のものであろう。底面が少しくぼむ。底部端はあまり張り出さない。

甕形土器の口縁端部は断面三角形のものと厚みがあるしゃくれ気味のものがあり、底部は小型でやや上げ底のもので、弥生時代の黒髪期のやや古い時期の所産のものと考えられよう。

高坏は、坏部が残存しており大形である。また、全面に赤色顔料が残る。甕で蓋のつくものか。小片



第37図 12・13・15・16号住居跡実測図 (1/60)

ではあるが、甕形土器の口縁端部に焼成後の穿孔をもつものがあり、蓋が付きセットで用いられたものとも捉えられるが、逆に反り自体が蓋の一部かもしれない。

15号住居跡出土の遺物として、甕形土器の口縁部片2点と高坏脚部1点がある。弥生時代黒髪期のものであろうが、詳細は不明である。12号・16号住居跡からの出土遺物はない。

14号・17号・19号住居跡

切り合いがあり、その先後関係は、古い方から14・17→19と考えられる。

14号住居跡は西側が調査区外に広がる。17号住居跡との切り合いもあるため、詳細不明だが、方形のものと推測される。現存規模は南北軸2.7m 東西軸2.3mである。検出面からの深さは10cm残る。17号住居跡も西側が調査区外に広がり、14号・17号住居跡との切り合いがある。14号住居跡との前後関係は不明であるが、19号住居跡より前につくられたものである。平面形態は不明であるが、東西軸で2.8m程度はありそうだ。なお、硬化面が中央付近に残存する。19号住居跡は17号住居跡との切り合いがあり、17号住居跡を切っている。調査区外に広がるため、詳細は不明であるが、方形を呈するものであろう。1辺は最低でも3.8mほどありそうで大形である。検出面からの深さは最大でも5cm程度である。硬化面は北東隅で検出できた。

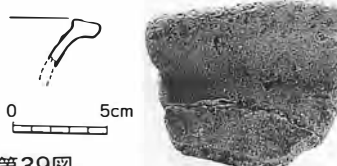
これら3つの住居跡については、焼土・貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は14号住居跡内に多く見ら



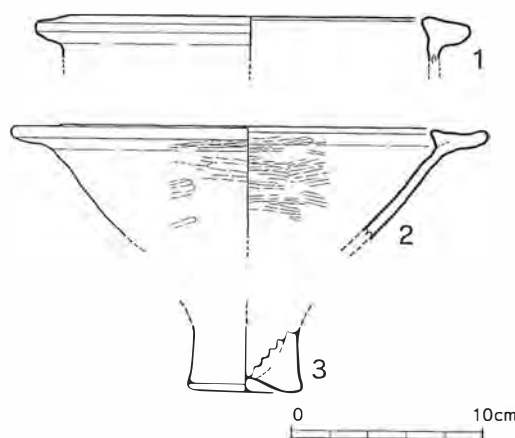
図版30 12・13・15・16号住居跡完掘状況



図版31 13号住居跡出土土器



第39図 15号住居跡出土土器(1/4) 図版32 15号住居跡出土土器



第38図 13号住居跡出土土器(1/4)

れる。主な柱穴ははっきりしないが、14号住居跡に関しては、西側にもっとのびることを考えると、四隅に4本の柱をもつものの可能性がある。

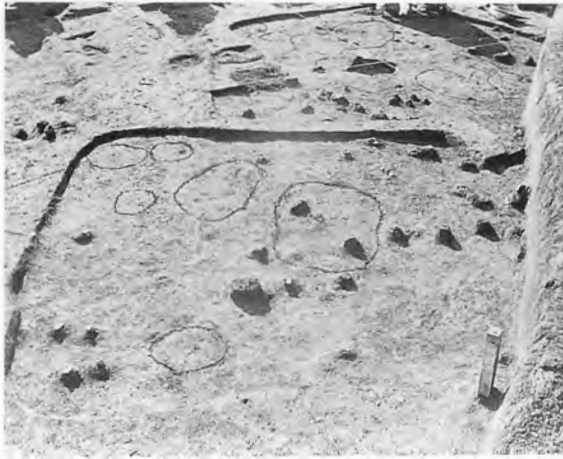
14号住居跡出土の遺物として、1は、壺形土器の口縁部である。口縁部外側の突帯がU字型で、上面にくぼみをもつ。内側はやや強く張り出す部分をもつ。2は不明。甕形土器の口縁部片2点がある。やや厚みもち、しゃくれ状態までにはなっていない。これらのことから、弥生時代黒髪期の中頃ではなかろうか。

17号住居跡からは、砥石が1点出土した。住居跡の炉内出土のもので、火を受けたためか黒く焼けている。

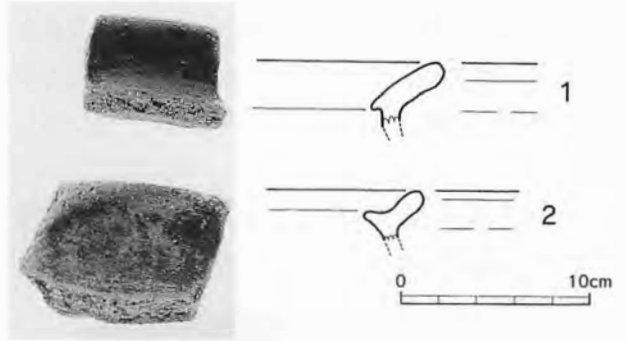
19号住居跡からは、甕形土器の底部が1点出土した。欠損しているため、詳細不明だが、小型でやや上げ底気味である。脚台化はしていない。これらのことから、弥生時代黒髪式のものであろう。

18号住居跡

西側が調査区外に広がるもので、半分程度検出できた。詳細は不明であるが、残存部の状況から方形



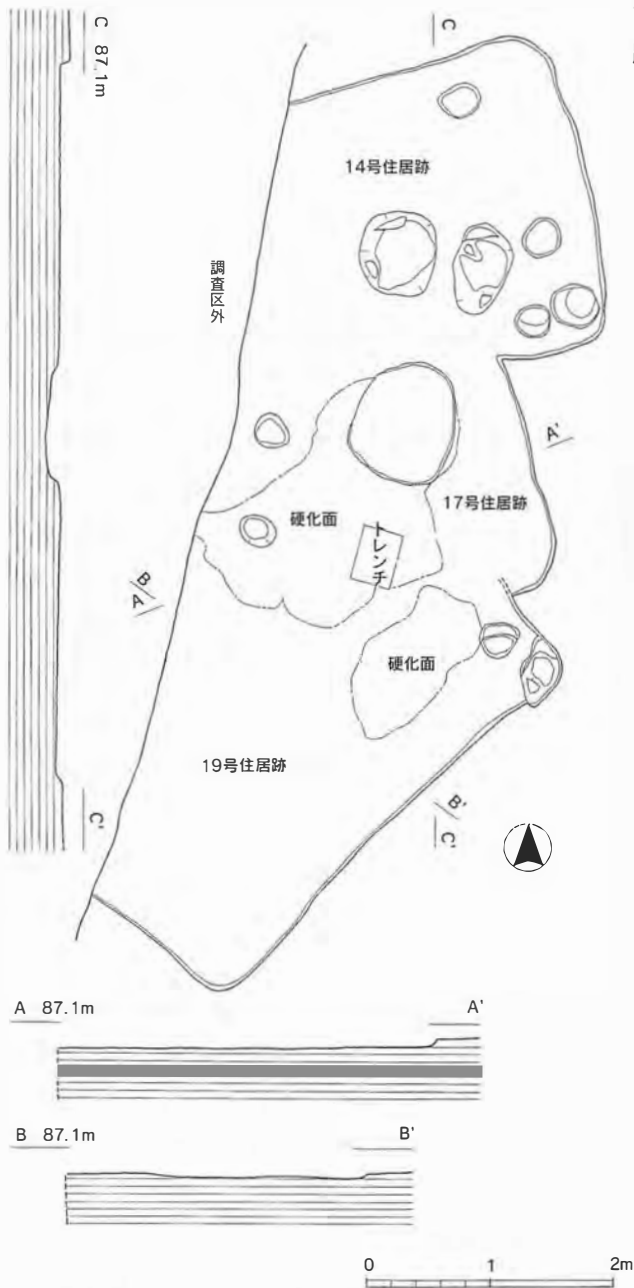
図版33 14号住居跡遺物出土状況（東から）



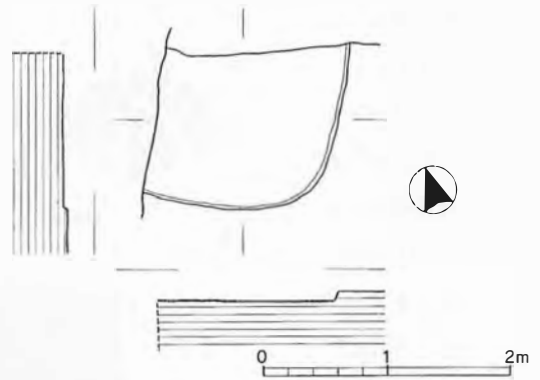
図版34
14号住居跡出土土器

第41図
14号住居跡出土土器（1/4）

のものであると考えられる。残存計で、南北軸1.2m、東西軸1.4mを計る。検出面からの深さは3cm程度残る。炉・硬化面・柱穴は検出できなかった。住居跡として認定するには資料が少なく、問題を含んでいるが、ここでは掲載しておく。また、出土遺物もない。



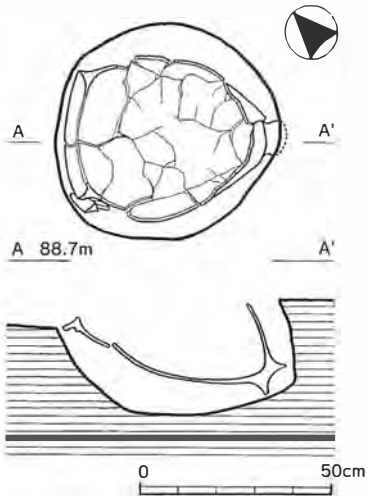
第40図 14・17・19号住居跡実測図（1/60）



第42図 18号住居跡実測図（1/60）

2 甕棺墓

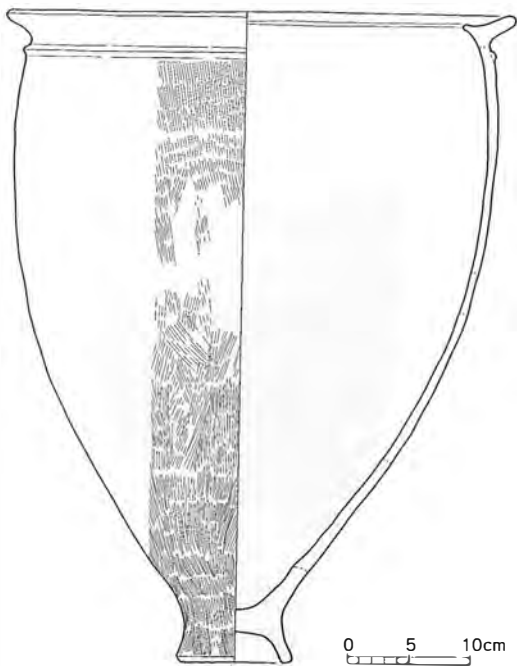
—1号甕棺墓—



第43図 1号甕棺墓実測図 (1/20)



図版35 1号甕棺墓検出状況

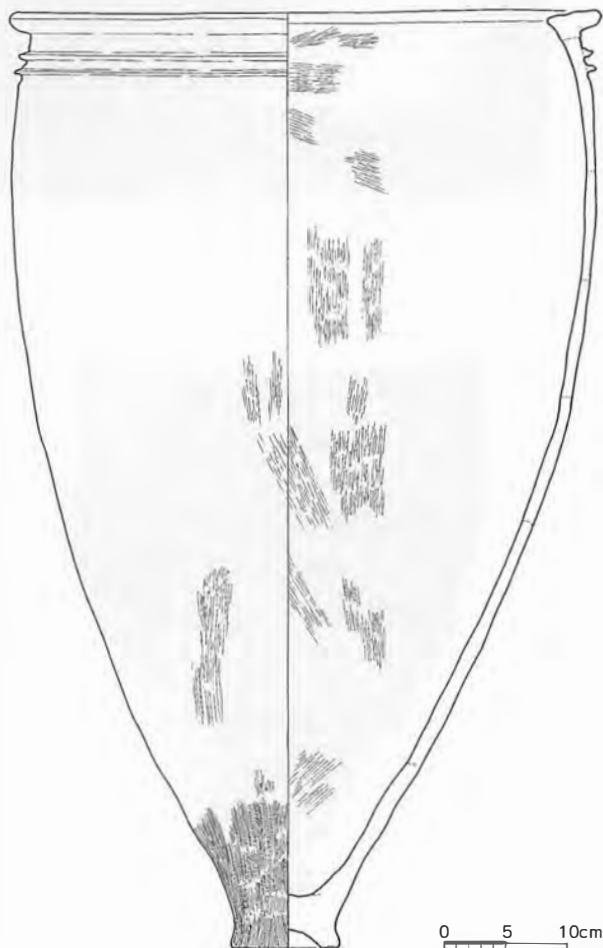


第44図 1号甕棺実測図 (1/6)

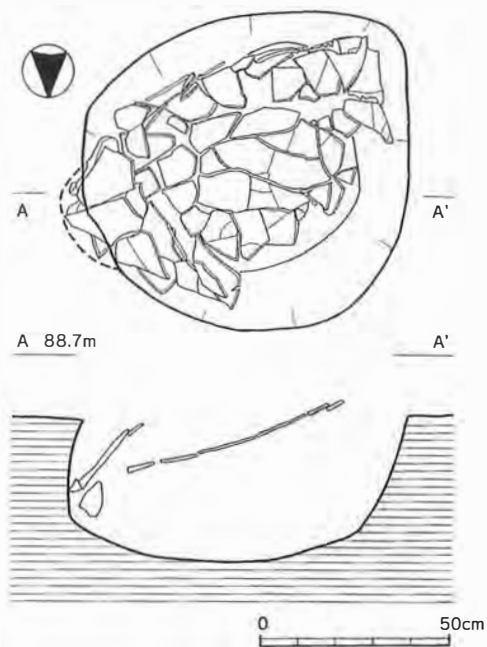


図版36 1号甕棺

—2号甕棺墓—



第46図 2号甕棺実測図 (1/6)

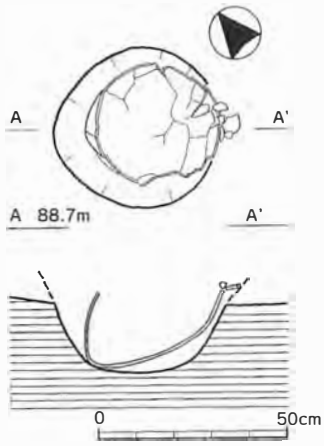


第45図 2号甕棺実測図 (1/20)



図版37 2号甕棺

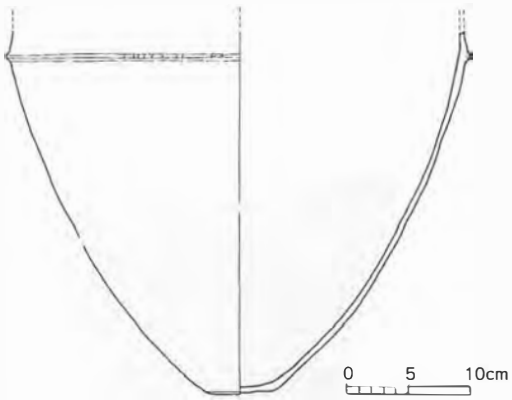
—3号甕棺墓—



第47図 3号甕棺墓実測図 (1/20)



図版38 3号甕棺墓検出状況

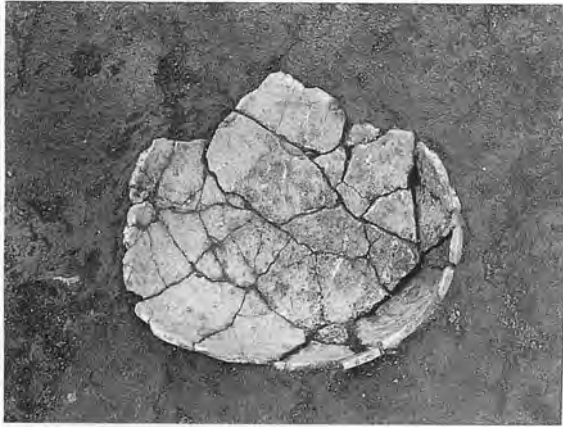


第48図 3号甕棺実測図 (1/6)

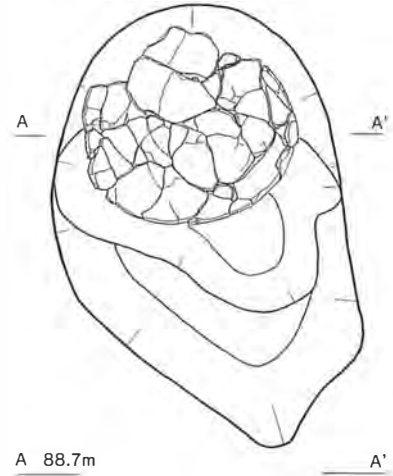


図版39 3号甕棺

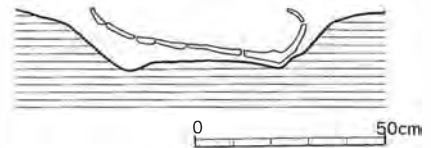
—5号墓棺墓—



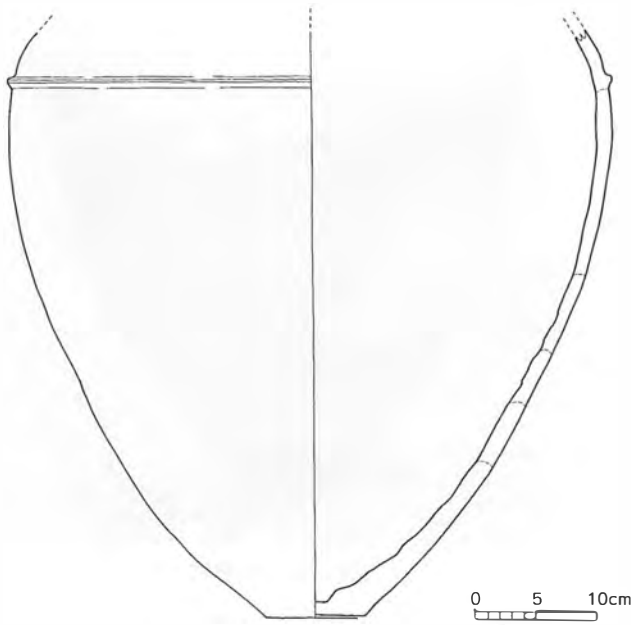
図版40 5号墓棺墓検出状況



A 88.7m



第49図 5号墓棺墓実測図 (1/20)

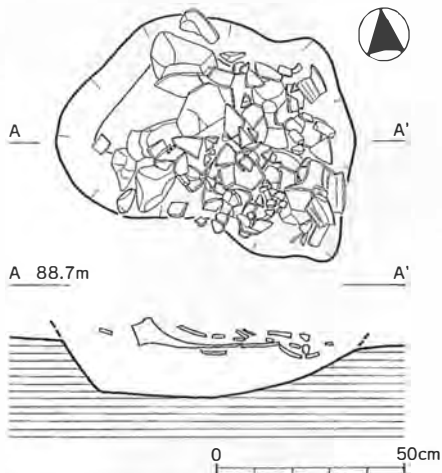


第50図 5号墓棺墓実測図 (1/6)



図版41 5号墓棺

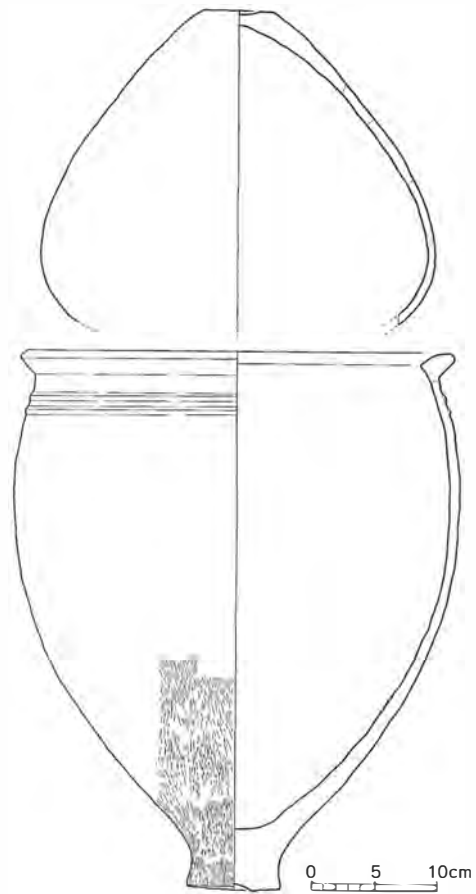
—6号甕棺墓—



第51図 6号甕棺墓実測図 (1/20)

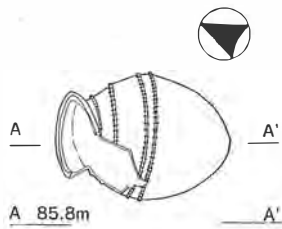


図版42 6号甕棺

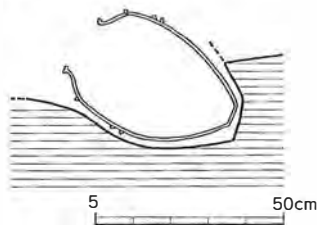


第52図 6号甕棺実測図 (1/6)

—7号甕棺墓—



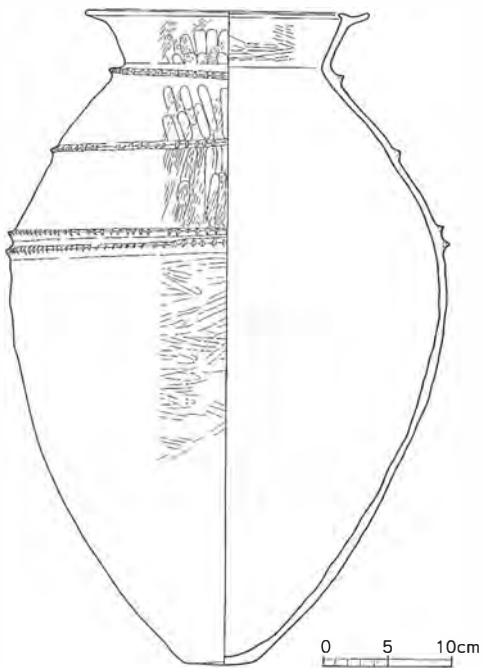
第53図 7号甕棺墓実測図 (1/20)



図版43
7号甕棺墓出土状況



図版44
7号甕棺墓出土状況

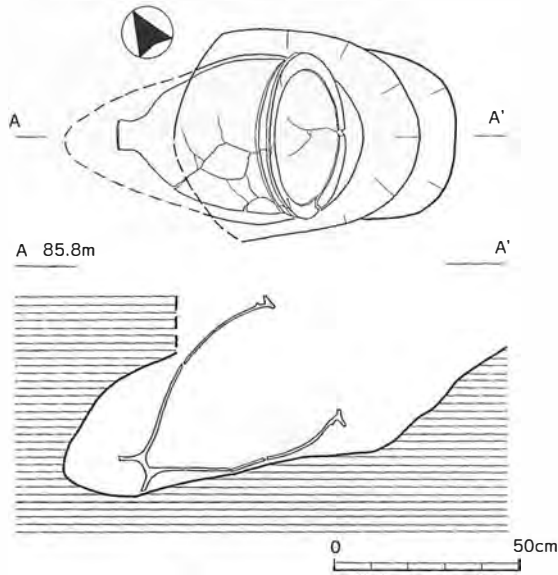


第54図 7号甕棺墓実測図 (1/6)



図版45 7号甕棺

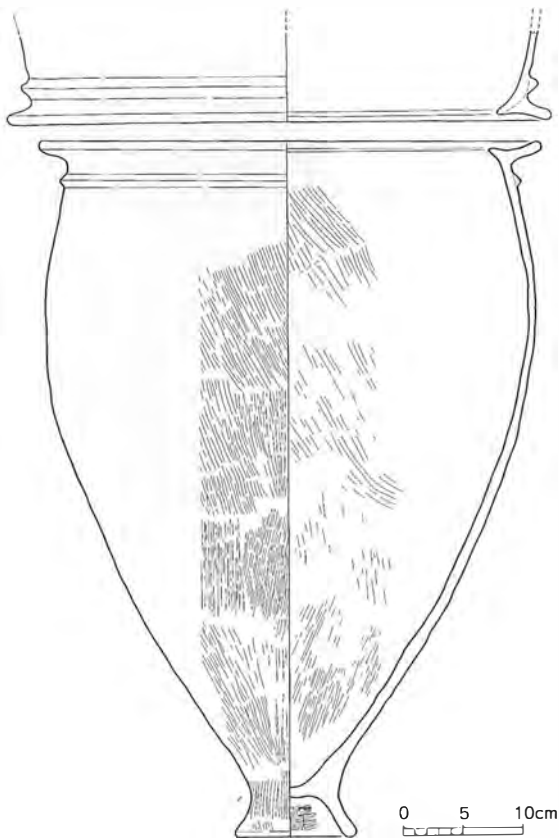
—8号甕棺墓—



第55図 8号甕棺墓実測図 (1/20)



図版46 8号甕棺墓出土状況

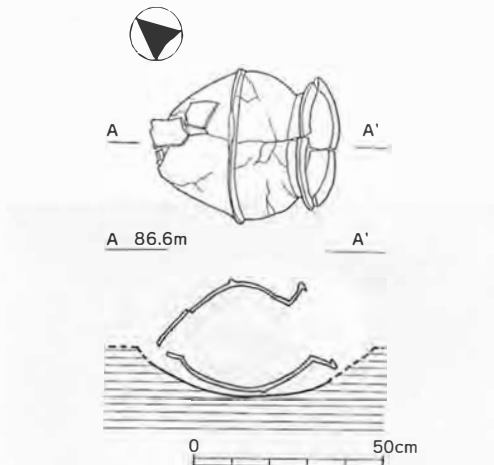


第56図 8号甕棺実測図 (1/6)



図版47 8号甕棺

—9号甕棺墓—



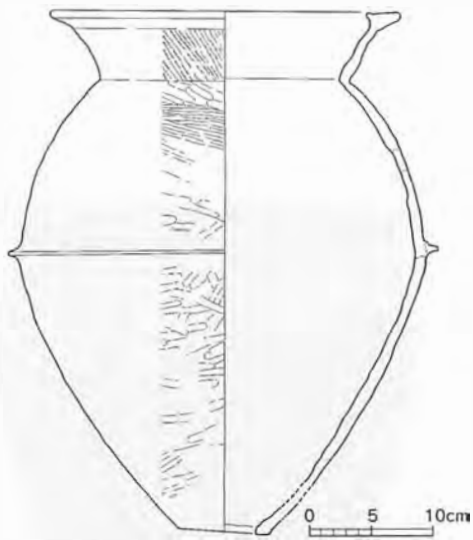
第57図 9号甕棺墓実測図 (1/20)



図版48 9号甕棺墓検出状況



図版49 9号甕棺

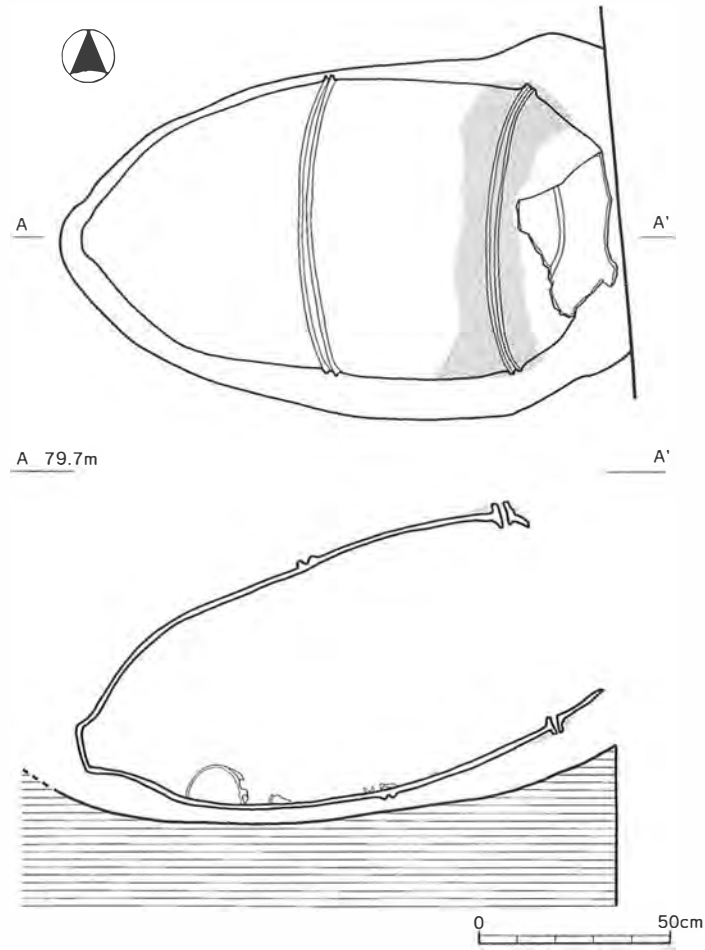


第58図 9号甕棺実測図



図版50 9号甕棺

—10号甕棺墓—



第59図 10号甕棺墓実測図 (1/20)



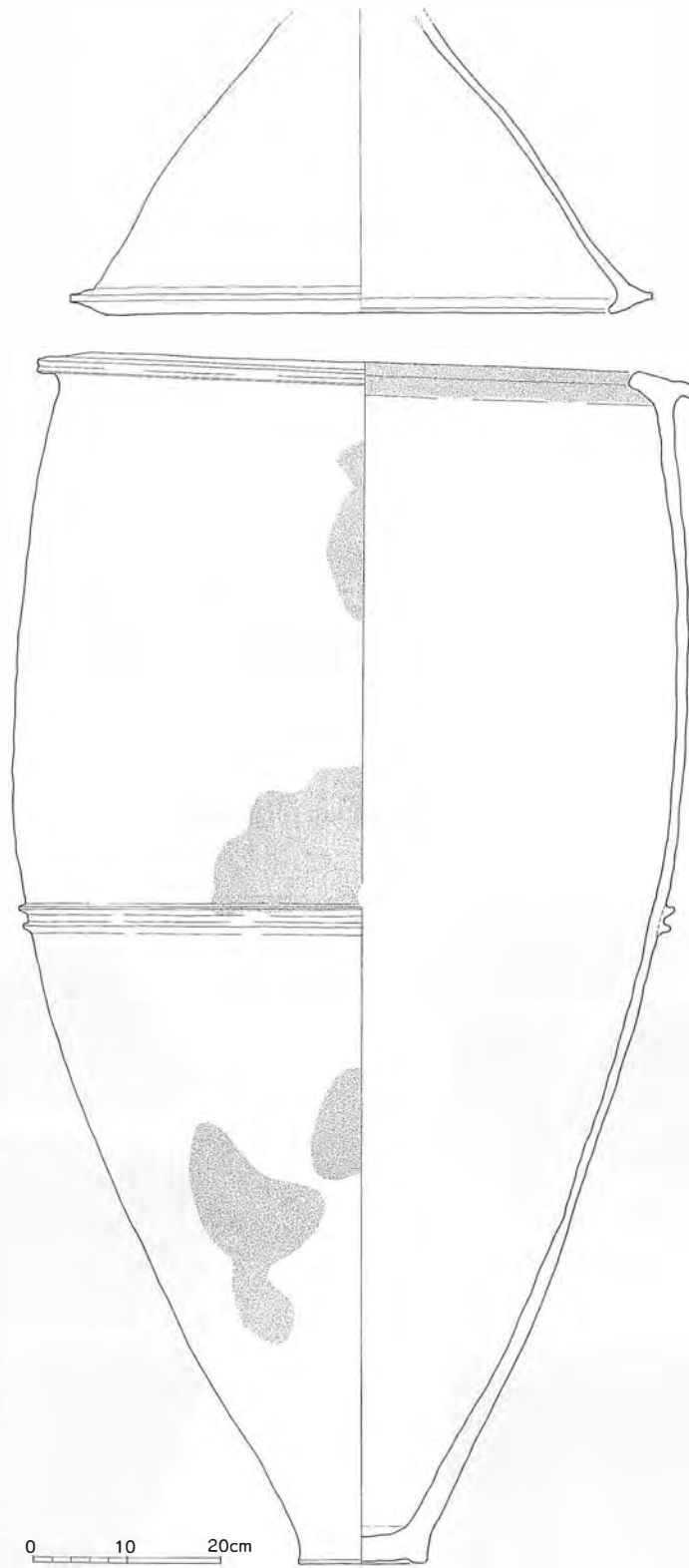
図版51 10号甕棺墓検出状況



図版52 10号甕棺人骨出土状況

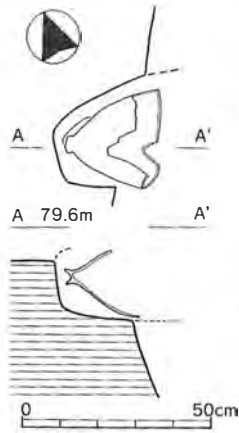


図版53 10号甕棺



第60図 10号甕棺実測図 (1/8)

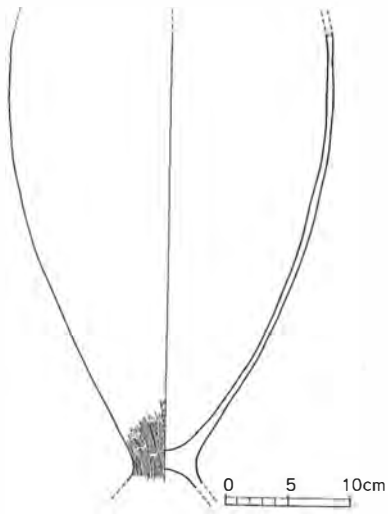
—11号甕棺墓—



第61図 11号甕棺墓実測図 (1/20)



図版54 10号(左)・11号(右)甕棺墓検出状況

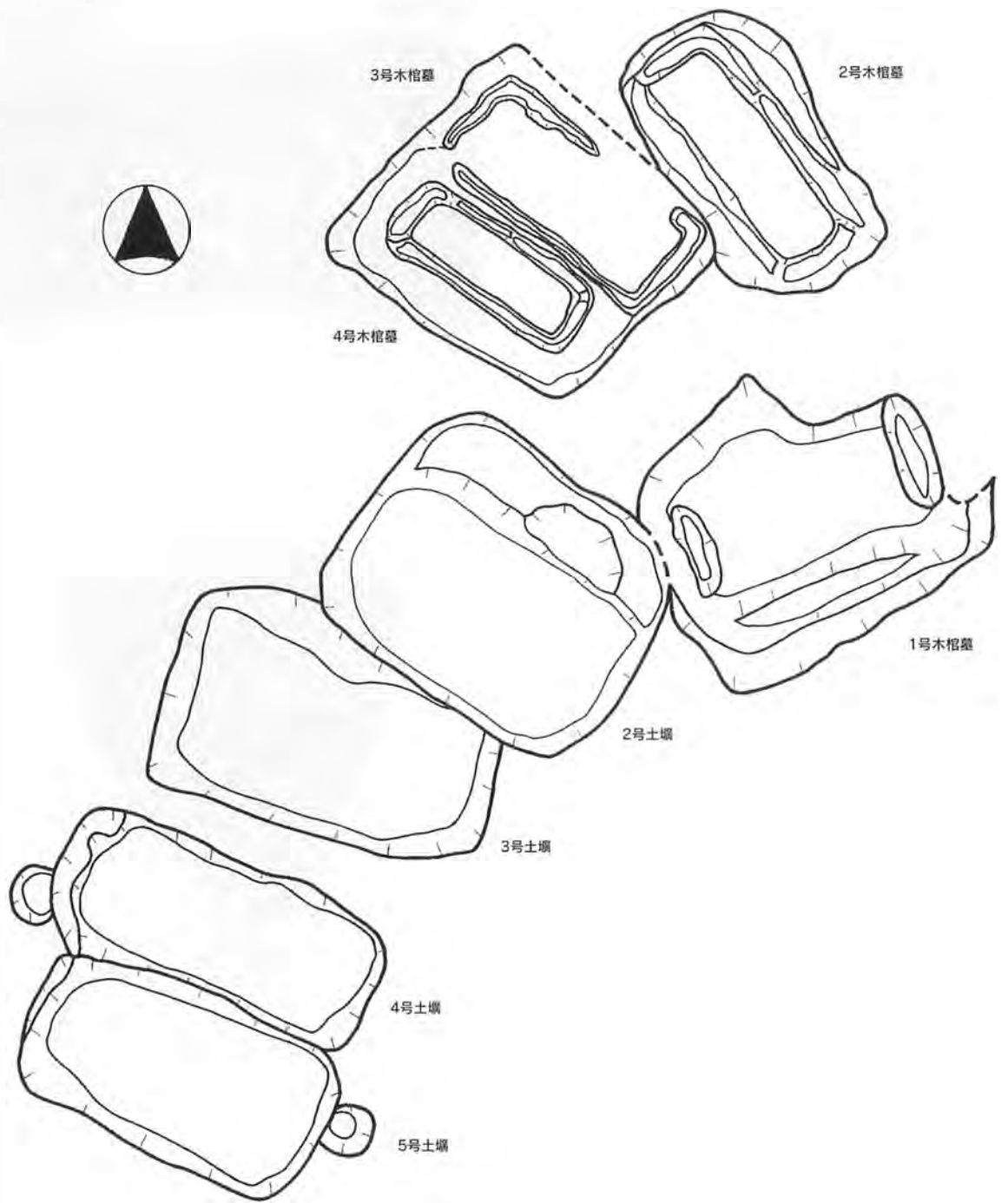


第62図 11号甕棺実測図 (1/6)



図版55 11号甕棺

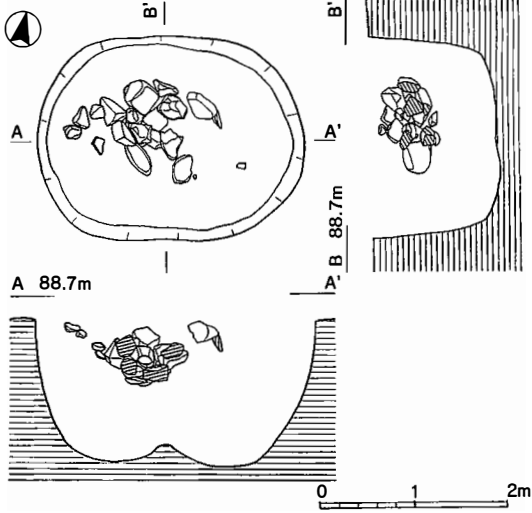
3 土壇



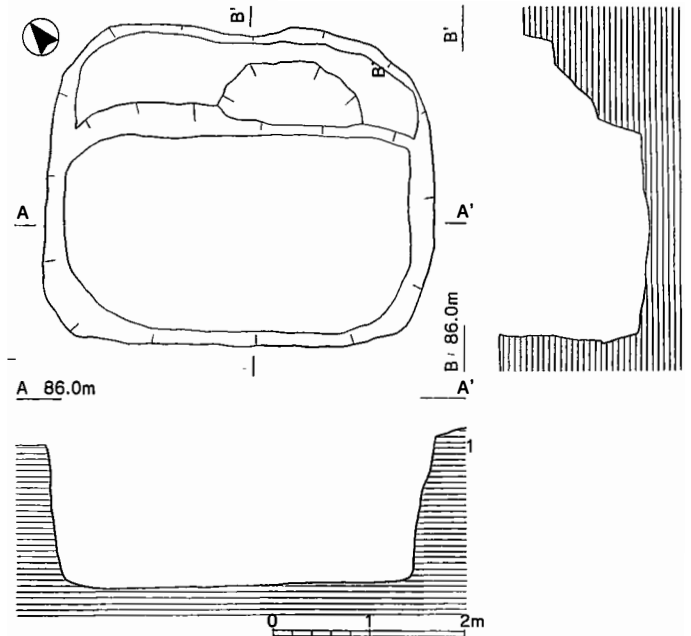
第63図 土壇・木棺墓配置図



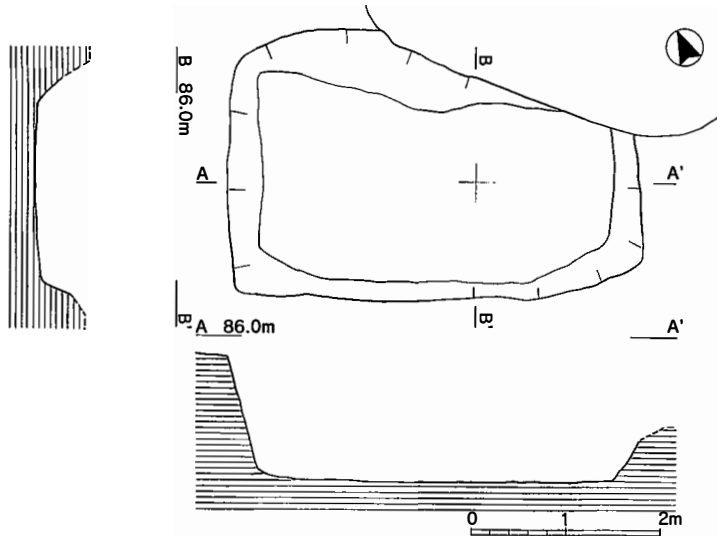
図版56 土壇・木棺墓検出状況



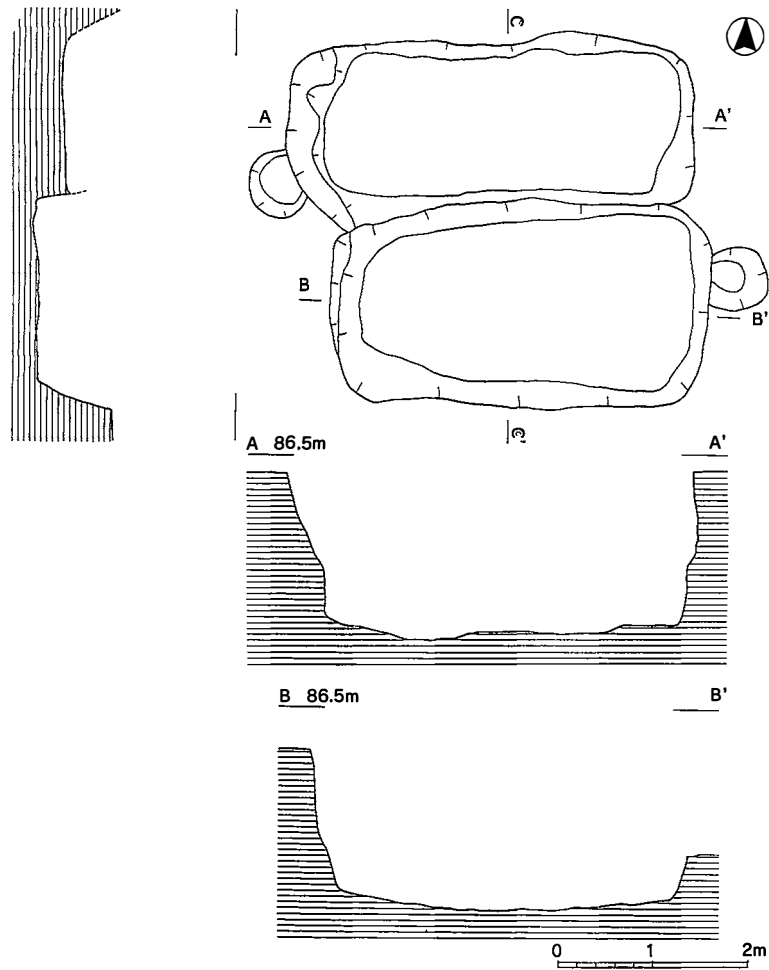
第64図 1号土壇実測図



第65図 2号土壇実測図

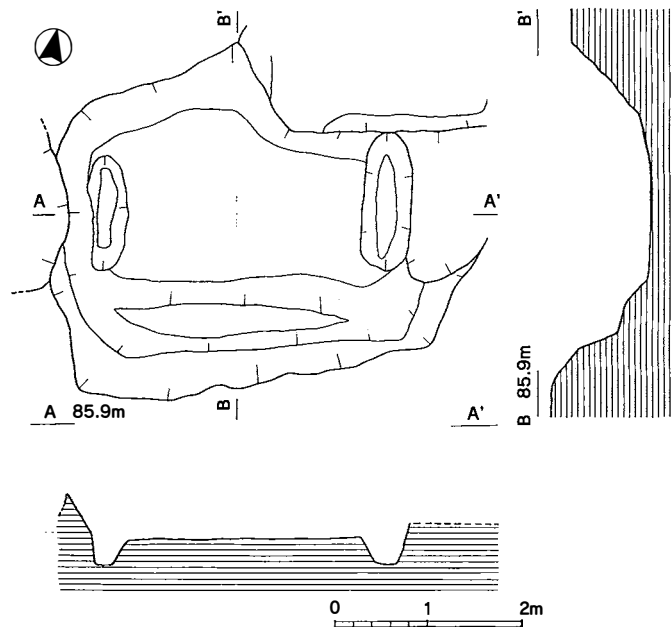


第66図 3号土壇実測図

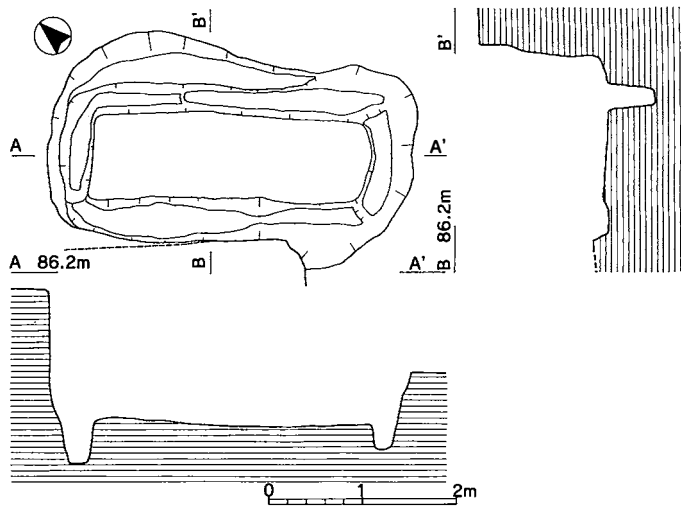


第67図4・5号土壙実測図

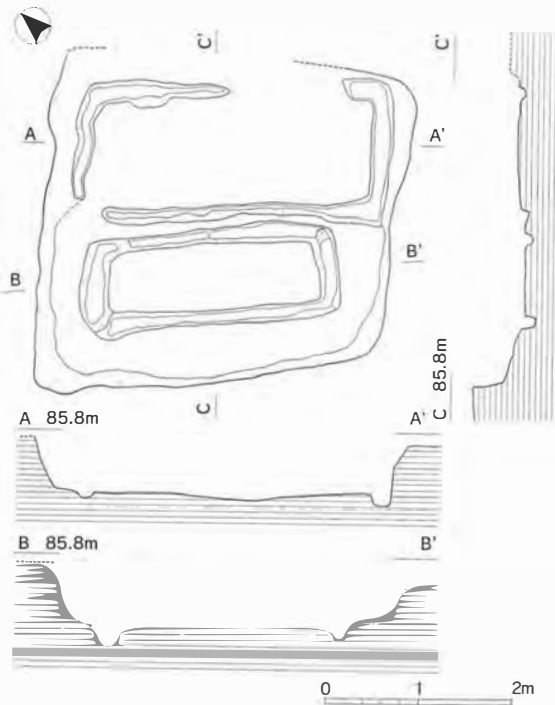
4 木棺墓



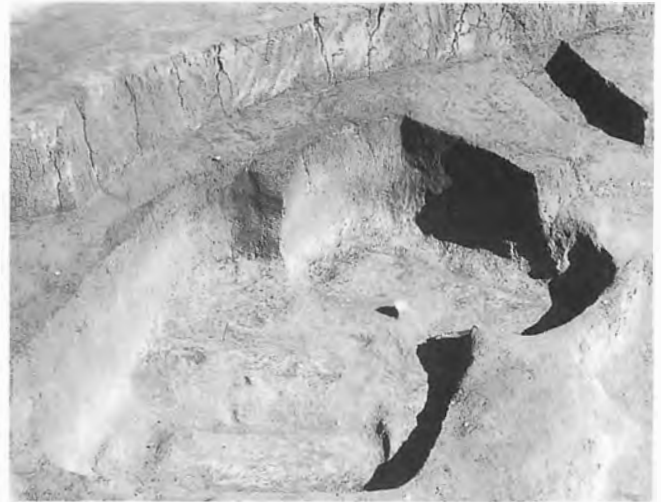
第68図 1号木棺墓実測図



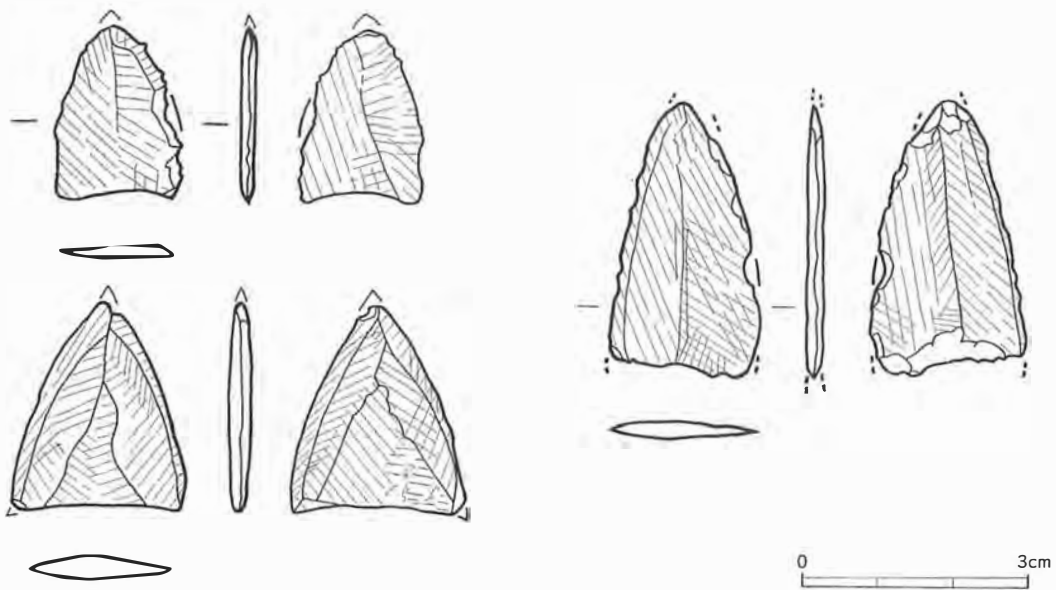
第69図 2号木棺墓実測図



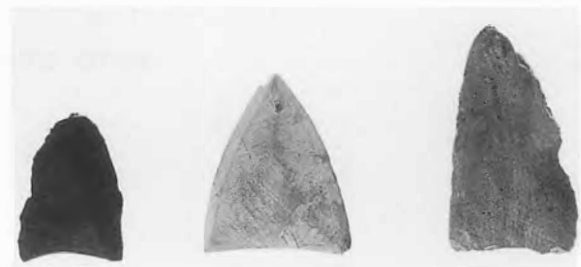
第70図 3・4号木棺墓実測図



図版57 1・2・3・4号木棺墓検出状況



第71図 4号木棺墓出土石器



図版58 4号木棺墓出土石器



図版59 3・4・5号土壇検出状況



図版60 1号木棺墓検出状況



図版61 3・4号木棺墓検出状況

5 炉

3-1区で1基検出された。楕円形で長軸60cm、短軸50cmを計る。中心部がやや深くなり、覆土は3層で構成される。最深部は、焼土ブロックで構成され、その上部に炭・焼土を若干含む褐色土が覆う。

検出面からの深さは、5cmである。当遺跡のあり方から、弥生時代の住居跡内に存在する炉と考えるのが一番良いであろう。ただし、住居跡を確認することはできなかった。



図版62 1号焼土出土土器



図版63 2号焼土出土土器

6 焼土

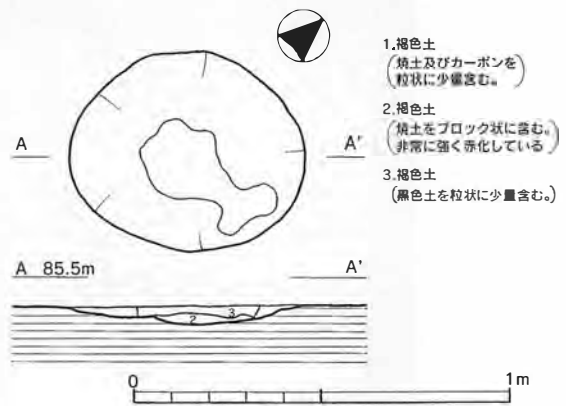
焼土は、7区中央で2基検出された。いずれもその性格は不明。焼土を含む覆土である。1号焼土は、1.8m×1.4mで楕円形を呈する。深さ23cm程度ある。掘り込みはしっかりしており、底面は平らである。

出土遺物としては、1点の甕形土器と考えられる口縁片が出土した。口縁外側の突帯がU字型で上面にくぼみもち。内側に張り出しをもつ。

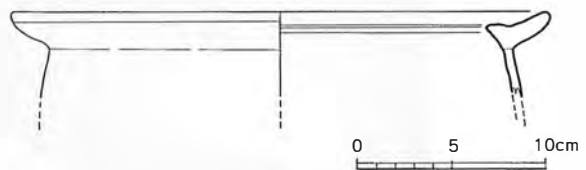
口縁端部の作りがしゃくれた状態にあり、弥生時代黒髪式の後半のものであろう。2号焼土は、1号焼土に隣接して検出された直径110cmのほぼ円形を呈する。深さ30cm程度ある。底面はほぼ平らである。肩は南側は垂直に落ちる。出土遺物としては、1点の甕形土器口縁片が出土した。

甕形土器の口縁部と考えられる。口縁外側の突帯がU字型でやや内傾が強く、口縁上面はくぼみ内側に張り出す。

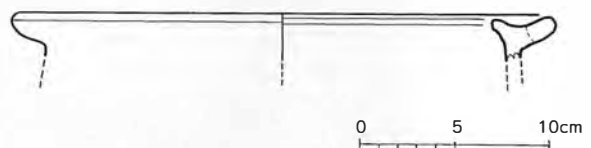
口縁端部の作りがしゃくれた状態になりつつあるもので、弥生時代黒髪式の中頃にその時期が求められる。いずれも弥生土器が出土しているが、時期の帰属はよく分からない。



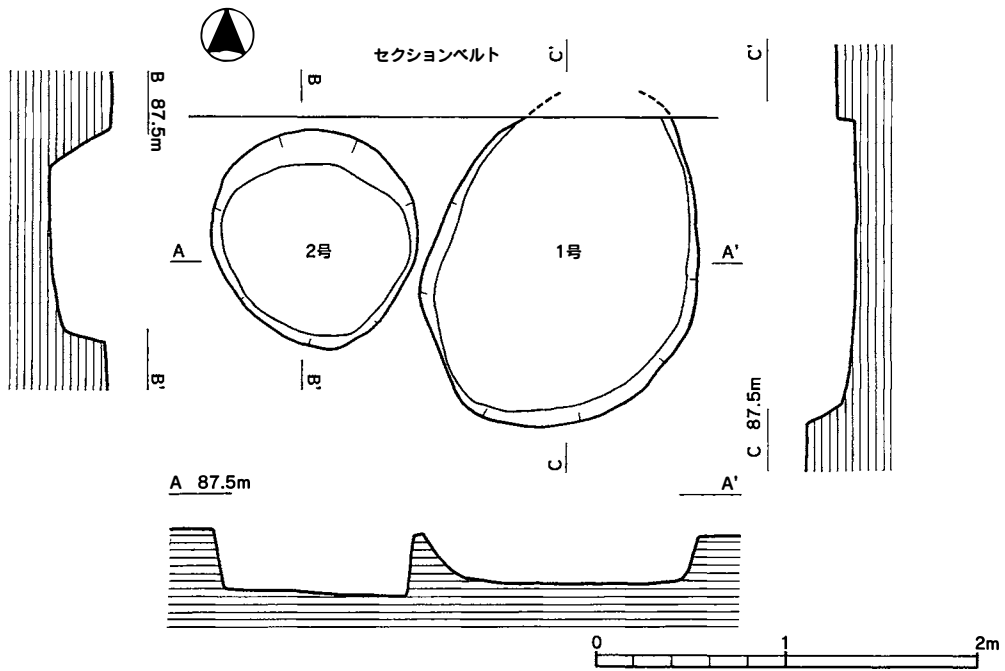
第72図 1号炉跡実測図 (1/20)



第74図 1号焼土出土土器 (1/4)



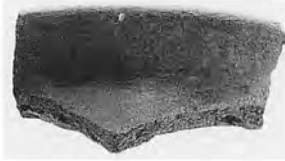
第75図 2号焼土出土土器 (1/4)



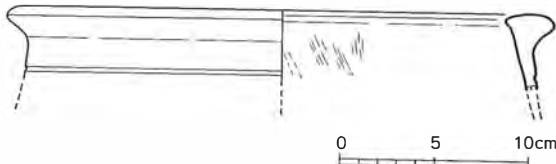
第73図 1・2号焼土実測図 (1/40)

7 土坑

土坑は全部で11基確認した。1区で半分の5基を確認し、2区を除き各調査区で確認した。ちなみに2区では、甕棺墓・木棺墓・土壙墓が集中して確認されていたところで



図版64 1号土坑出土土器



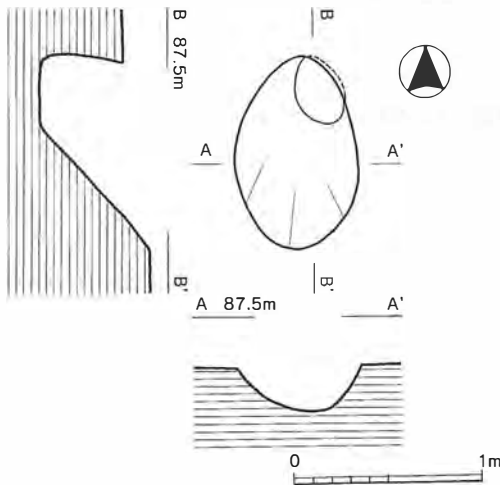
第77図 1号土坑出土土器 (1/4)

あり、逆にこれら土坑としているもので、土壙となる可能性が少なくない。

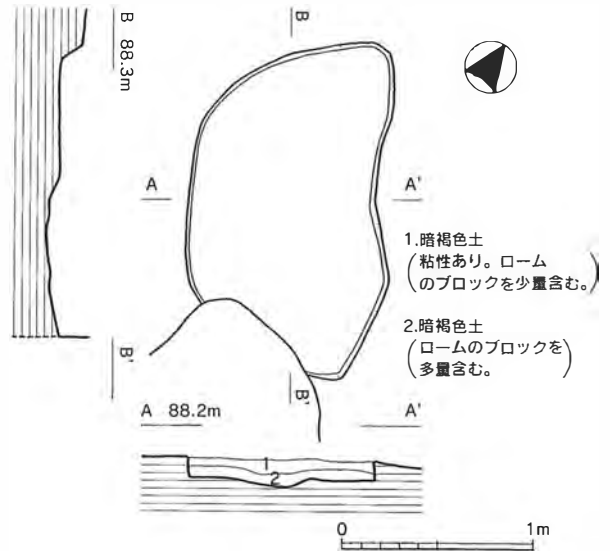
1号土坑

1号土坑は、100cm×65cmの楕円形で北側へ傾斜するものである。深さは、最深部でも40cm程度で底面は平らである。

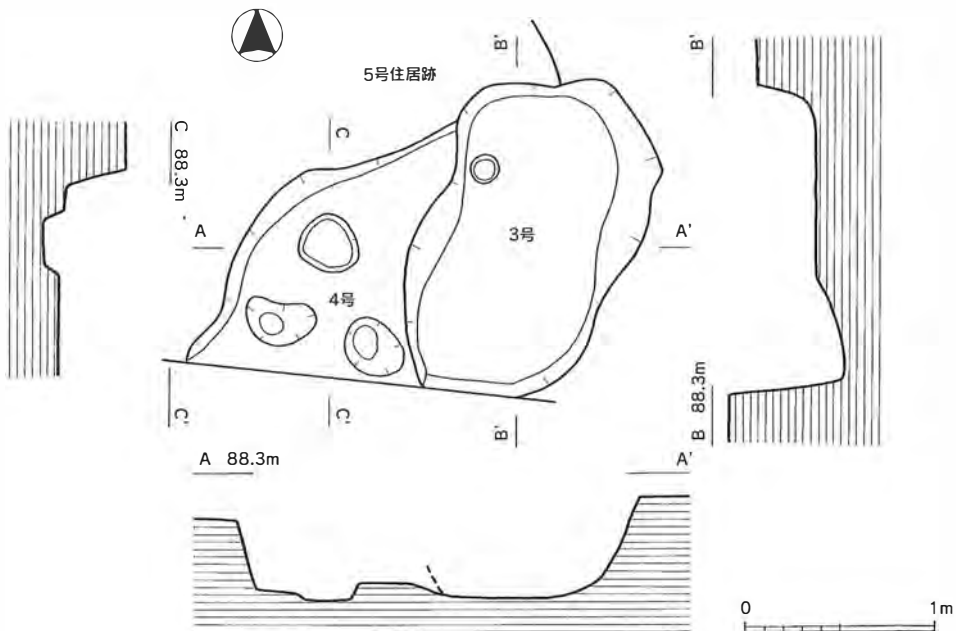
出土遺物としては、甕形土器の口縁部が1点ある。口縁部外側に断面が分厚い三角形から台形状の突起を張り付けたものであり内側に張り出しはない。口縁端部の形態が断面三角形であり、この時期は、弥生時代黒髪式のはじめ頃と考えられる。



第76図 1号土坑実測図 (1/40)



第78図 2号土坑実測図 (1/40)



第79図 3・4号土坑実測図 (1/40)

2号土坑

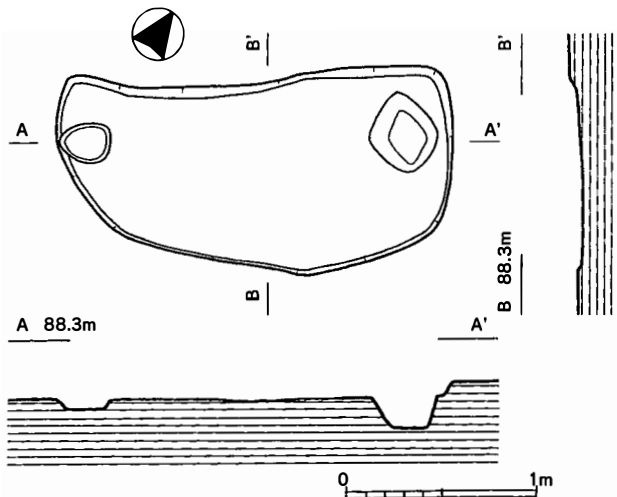
楕円形で、長軸160cm程度、短軸100cmを計る。南西隅は攪乱により切られる。覆土は2層に分けられ。深さは15cm程度あり、中央・南側が若干深くなる。出土遺物はない。

3号・4号土坑

ともに調査区外に広がるものである。3号土坑は、5号住居跡に切られ、4号土坑を切るもので、長軸160cm、短軸120cmの隅丸長方形を呈する。深さは50cm程度残り、底面は平らである。出土遺物なし。

4号土坑は、5号住居跡及び3号土坑によって切られており、調査区外に広がるものである。

平面形態は不定形を呈するものと推測される。規模は、長軸・短軸とも90cmを超える。深さは、40cm程度あり、中央部がわずかに深くなる。出土遺物はない。



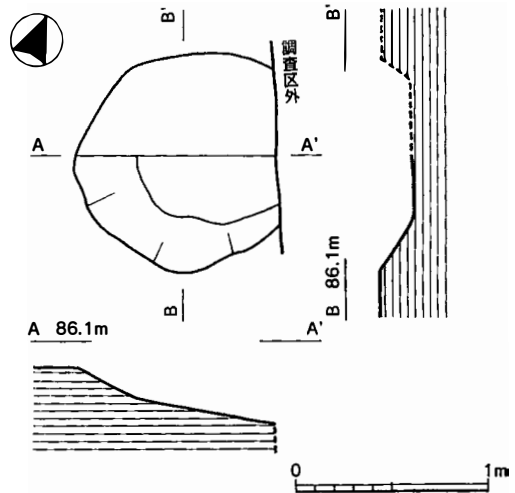
第80図 5号土坑実測図 (1/40)

5号土坑

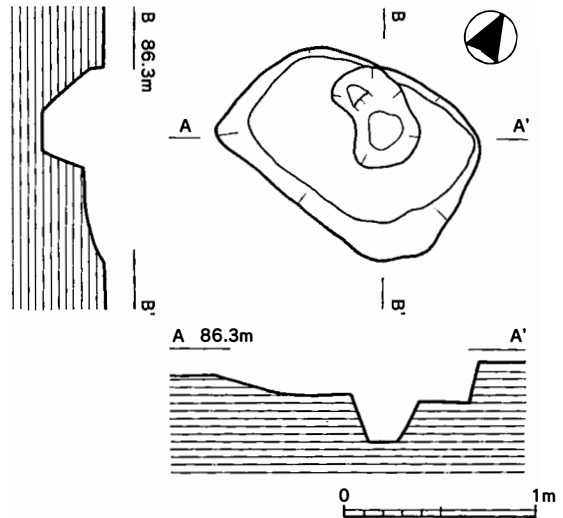
長い不定形で、長軸210cm、短軸100cmを計る。東西両端には、浅い掘り込みが存在する。東側が若干深く15cm、西側が5cm程度である。中央の底面は平らである。出土遺物なし。

6号土坑

半割しかしてないが、円形を呈するものと推測される。直径110cm程度のものと考えられる。東に緩やかに傾斜する。出土遺物はない。



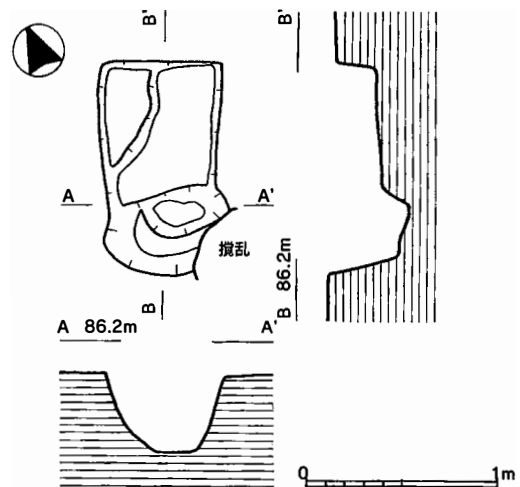
第81図 6号土坑実測図 (1/40)



第82図 7号土坑実測図 (1/40)

7号土坑

隅丸の長方形で、長軸120cm、短軸90cmを計る。北側中央に一段低い部分が存在する。この深さは25



第83図 8号土坑実測図 (1/40)

cm程度あり、底面は平らである。出土遺物はない。

8号土坑

長方形を呈するが南側は攪乱により切られ不定形である。長軸110cm、短軸60cmを計る。深い掘り込みが存在し、南側では40cm程度の深さをもつ。出土遺物はない。

9号土坑

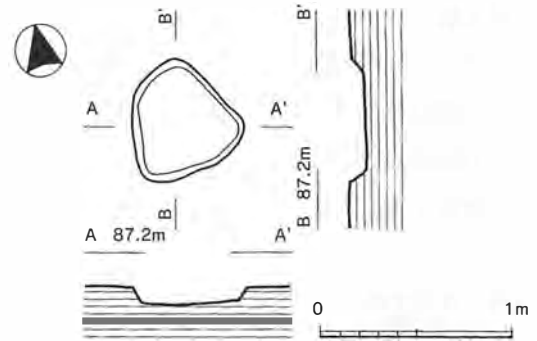
楕円形で、長軸100cm、短軸70cmを計る。落ち込みの肩は緩く落ち、底面は平らである。出土遺物はない。

10号土坑

隅丸長方形で、長軸120cm、短軸70cmを計る。底面は平らで、深さ20cm程度である。出土遺物はない。

11号土坑

不定形であるが、直径60cm程度のほぼ円状である。底面は平らで、深さ8cm程度で浅いものである。出



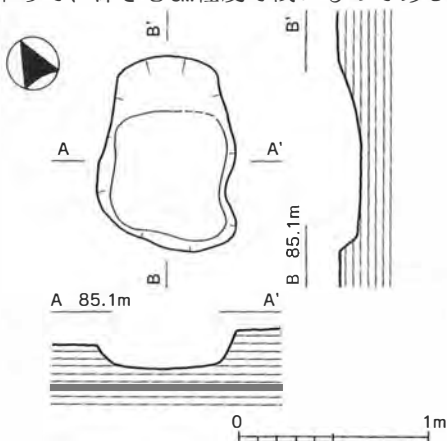
第86図 11号土坑実測図 (1/40)

土遺物はない。

8 配石

配石は2区と7区でそれぞれ確認した。

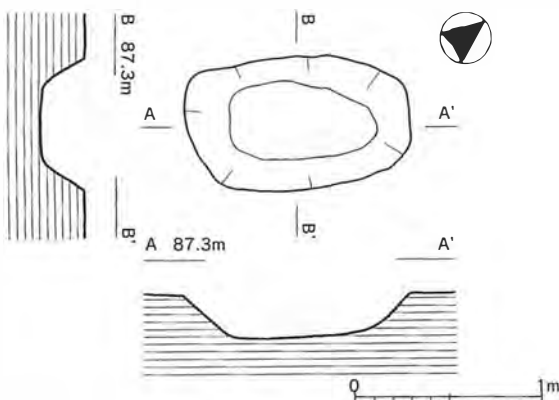
1号配石は2区で検出したもので、広範囲に及ぶ。視覚的には、8つのまとまりとして認識できそうである。北側は2号溝、西側を1号溝で仕切られるように存在する。ただ、1号溝に関しては、本来、古代のものなので、南西方向へ広がる可能性も捨てきれない。平らな石を配置したように置かれている。出土遺物として、鉄器2点が出土している。1点は、細長い形状のもので、詳細不明。他の1点は、大形の鉄鍬である。



第84図 9号土坑実測図 (1/40)



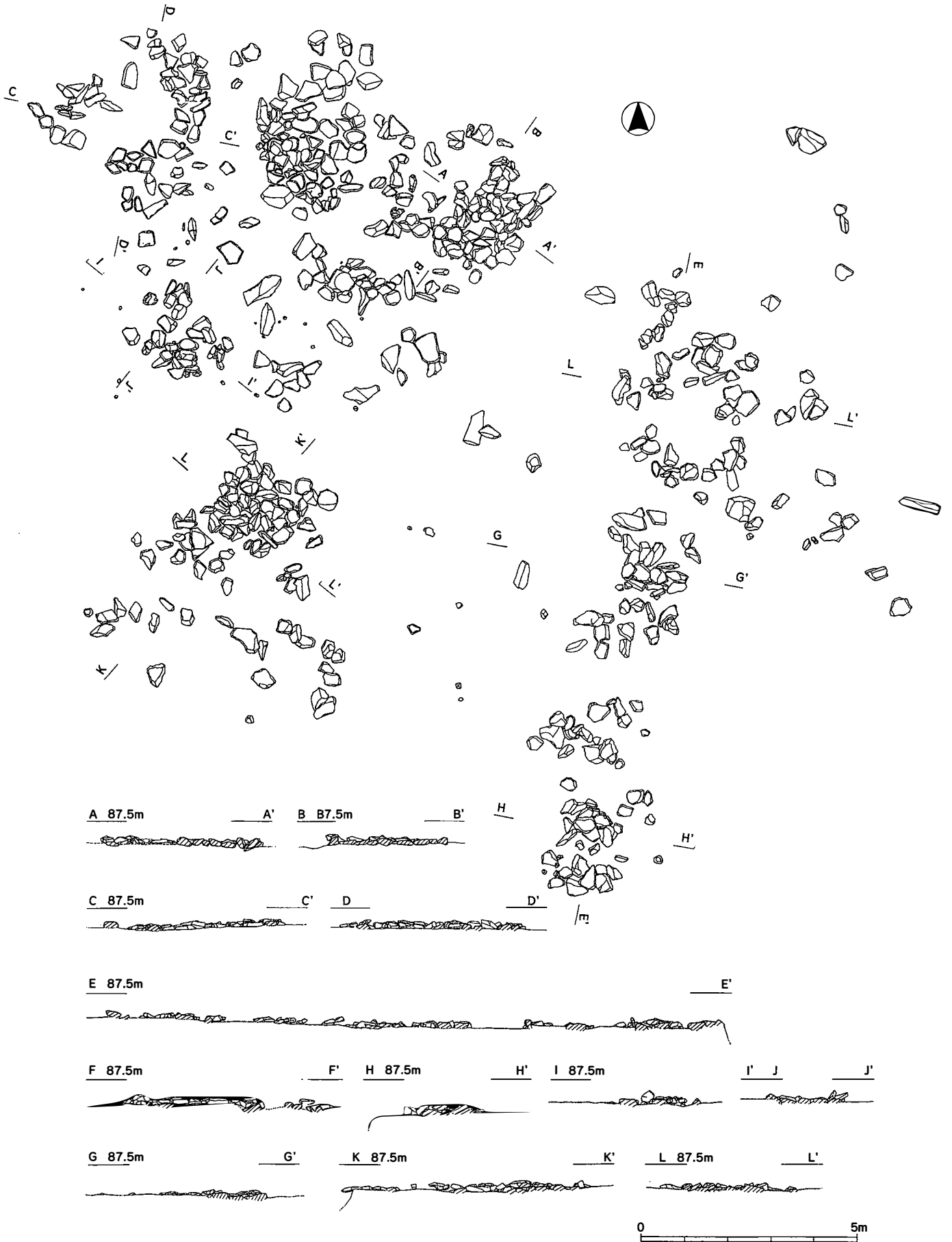
図版65 1号配石近景



第85図 10号土坑実測図 (1/40)

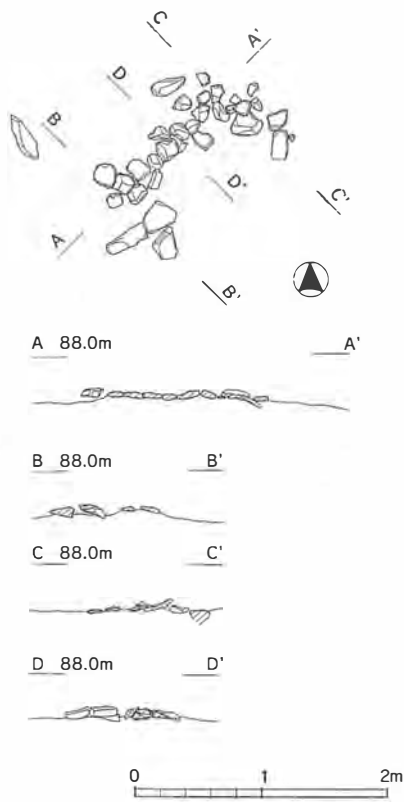


図版66 1号配石遠景



第87図 1号配石実測図 (1/120)

2号配石は、7区で検出されているが、1つのまとまりとして存在している。1号配石と2号配石の検出された位置完形から、やはり同一のものとして認識でき、1号配石に関しては、南東へのびることが考えられる。



第88図 2号配石実測図 (1/80)



図版67 2号配石遠景

第5節 古代以降の遺構とその遺物

1 溝

溝は全部で6条検出された。内訳は、2区で1号～4号の4条、7区で5・6号の2条である。1号溝は、調査区南端部及び西端部に沿うようにはしる。南端部では東西方向に約40mほどあり、西端部で約15mほど南北方向にはしる。すなわち、調査区南西隅で直角に向きを変える。両端は調査区内で終息する。幅は2.5mほどある。断面は、図面作成箇所では15層に分層されているが、基本的には、Ⅲ層黒色土が覆土となっている。弥生土器なども多く含んでいたが、下層より出土した須恵器片より、少なくとも8世紀から9世紀以降のものと考えられる。石器の製品では、磨製石斧と砥石がある。いずれも破片で、砥石は一面のみ使用しているもので粗い擦痕が残り、粗砥用と考えられる。縄文時代から弥生時代にかけてのものであろう。

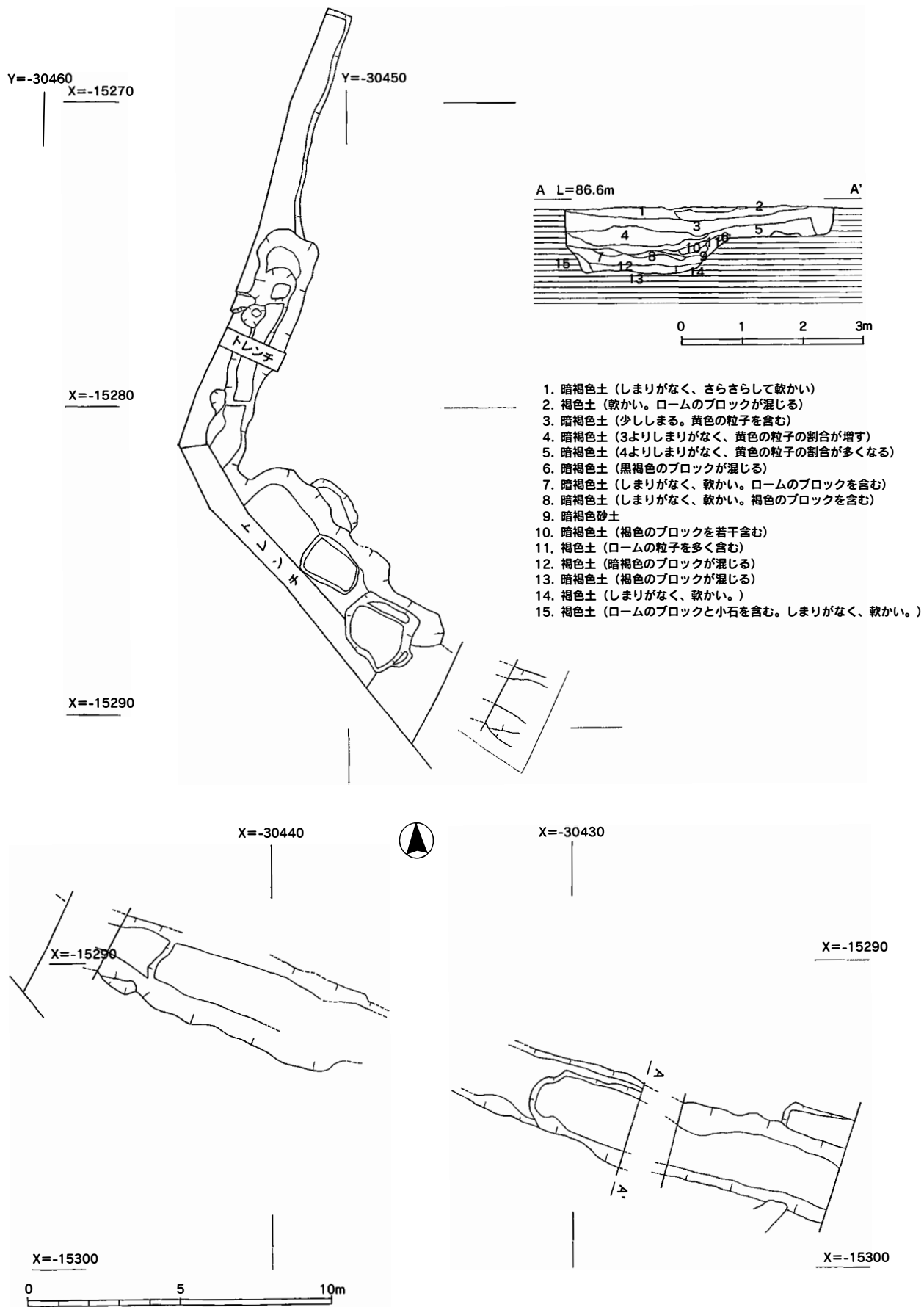
2号溝は、調査区北側で東西方向に確認できた。長さ10m、幅0.7mのものである。

3号溝は、調査区北側で南北方向に確認できた。長さ12m、幅1mのものである。南端部は1号溝に切られている。

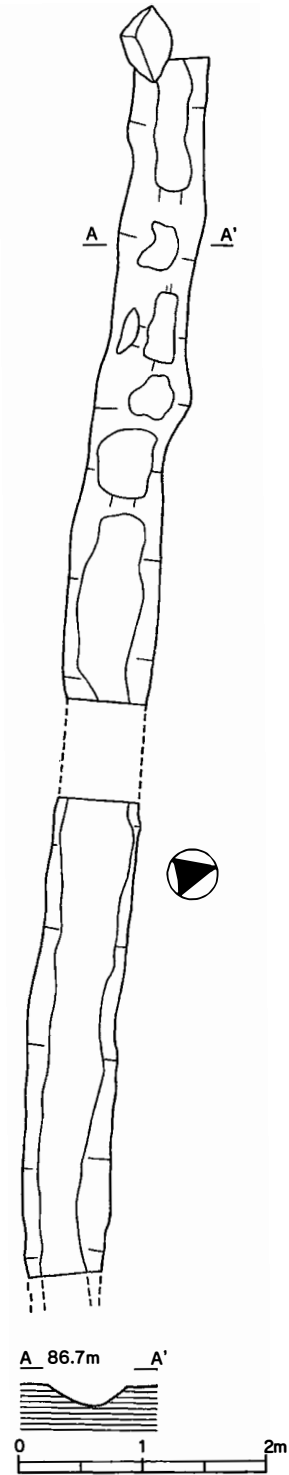
4号溝は、長さ16m以上、幅1mのものである。1号溝の南側を巡るもので、途中確認できていないところがあるが、東西方向に走り、3号溝とつながっていく可能性がある。東へ行くほど細くなる。

5号溝は、北端部で東西に確認された長さ8.5m以上、幅3mのものである。出土遺物としては、甕形土器の口縁部がある。口縁部外側の突帯が細長くなり、また、内傾が強くなるため、くの字型に近い形となる。内側に強い張り出しをもつ。甕形土器の口縁形態はややしやくれ状態にあり、弥生時代黒髪期のもではなかろうか。

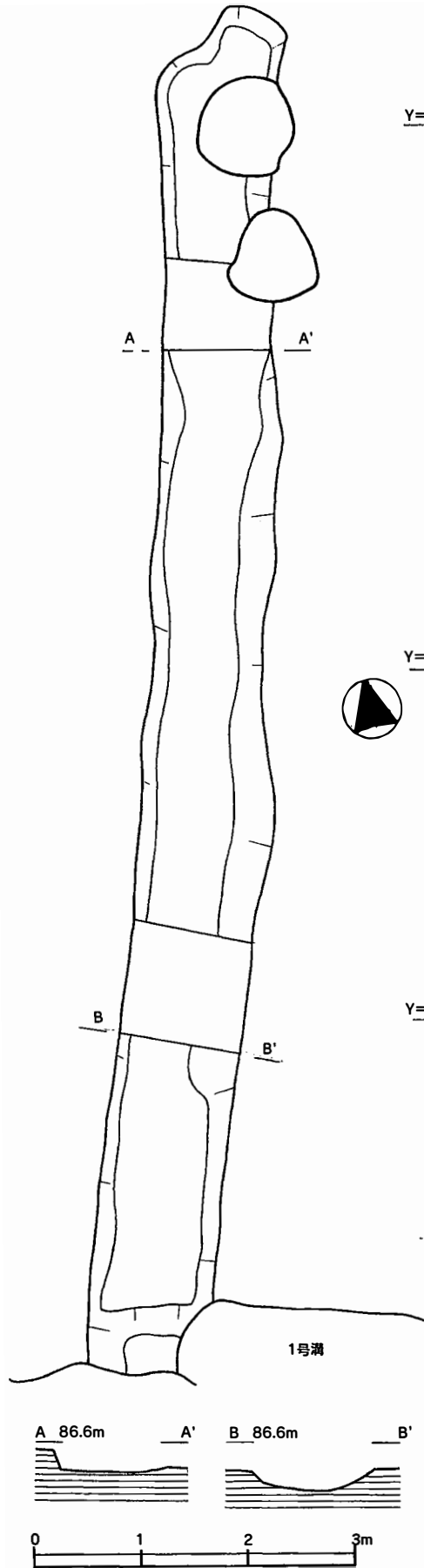
6号溝は、中央に南北にはしる狭小なもので、長さ4m、幅0.4mのものである。出土遺物はない。



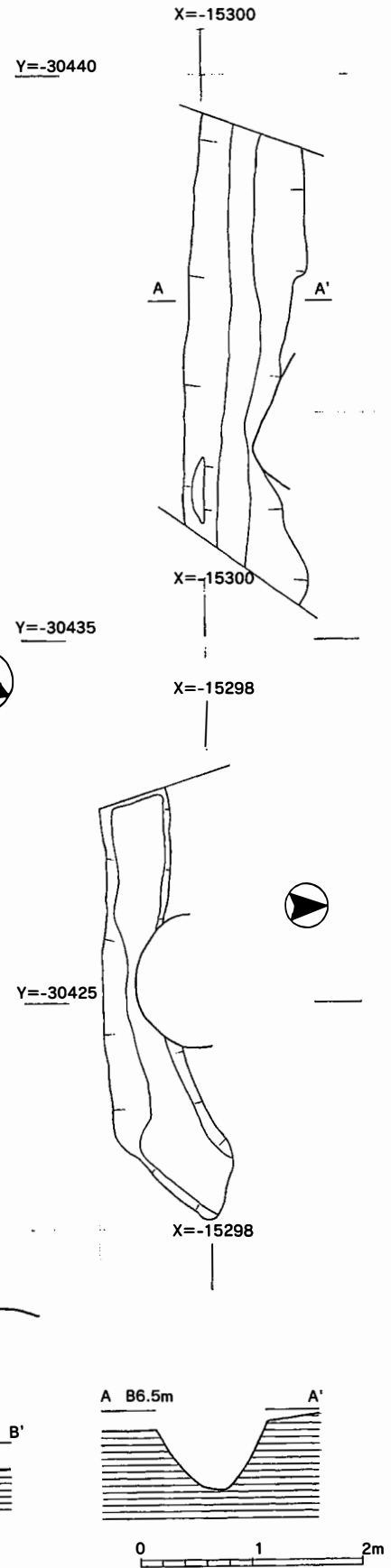
第89図 1号溝実測図 (平面1/180、断面1/90)



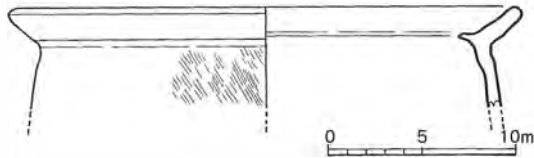
第90図 2号溝実測図 (1/60)



第91図 3号溝実測図 (1/60)



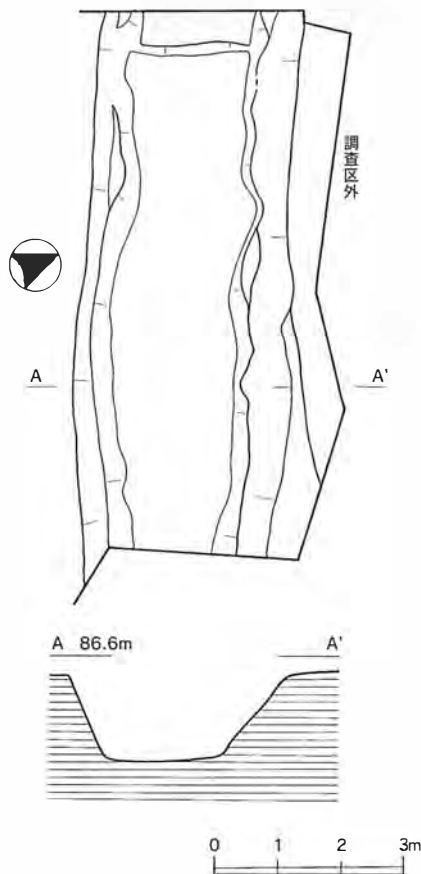
第92図 4号溝実測図 (1/60)



第94図 5号溝出土土器 (1/4)



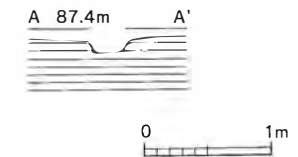
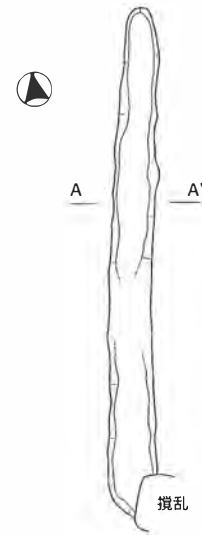
図版68 5号溝完掘状況 (東から)



第93図 5号溝実測図 (1/120)



図版69 5号溝出土土器



第95図 6号溝実測図 (1/60)

第6節 弥生時代以降の包含層出土遺物

1 土器

弥生土器は、甕形土器・壺形土器・高坏・鉢形土器がある。

これらの中で、特に注目しておきたいのは、赤色顔料を塗ったものが多く存在することが1つである。高坏は別としても壺形土器には赤色顔料で

線を入れたものがある。ただ、なにを描いたものかは特定できていない。また、線刻があるものも見られるということである。また、把手と考えられるものなど、多種多様である。底部の一つには、のちに故意に打ち欠いたと考えられるものが存在している。

古代以降の土器として、瓦器椀の口縁部・火舎・すり鉢・小型のトチン等がある。

2 石器

石器の器種として、磨製石斧・砥石・磨製石鏃・石皿・磨石・石剣がある。

磨製石鏃は11点出土した。出土層位は、Ⅲ・Ⅳ層である。

完形品としたものでも後に欠損しているものがそのほとんどで、基部・先端部の欠損が顕著である。

形態は、長狭のものと横幅が広がるものに分けられそうである。

石材は、安山岩系4点、粘板岩系3点、緑泥片岩系1点、赤色頁岩系1点、不明2点である。

出土地区は、Ⅶ区南部から3-1区北部にかけて集中している。

砥石は18点出土した。現存形態で分類すると、厚みをもつもの11点、裂片状のもの7点である。厚みのある砥石は、原則的に6面体で構成される角状礫を用いたものである。さらに棒状の砥石が2点ある。棒状の砥石の場合、6面全面を使用した痕跡があり、小型で使用痕も相当数見られることから、直接手でもっての使用法が考えられる。他の角状礫は、原則6面を使用したものと考えられるが、欠損等で2～4枚に見られる。角状礫使用のこれら大型砥石は、直接手で持ち使用した可能性及び据え置いたままの使用法が考えられる。

石材は頁岩系と砂岩系とに分けられる。棒状の砥石は頁岩系である。

出土層位は、Ⅲ層及びⅣ層からである。出土地区は、I-8グリッド及びL-11グリッドから5点ずつ出土しており最多である。全体的な出土位置を概観すると3-1区に集中して出土した。

石包丁は、12点出土した。完形品は1点で、他は欠損著しい。また刃部を作りだそうとした痕跡を見るものの、両端欠損で事前の粗加工痕を残したままで、放棄されたものがある。

石材は、色調・石室などにかなりのバラエティーがあり特定できないが、片岩系の石材を使用している。

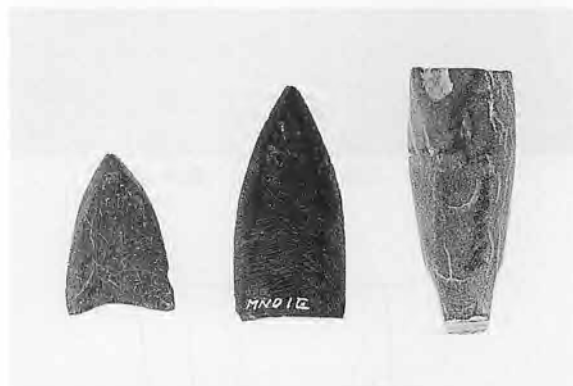
出土層位はⅢ・Ⅳ層が多く、Ⅴ層出土のものが1点ある。

出土地区は、1・3・3-1・7区より出土した。特に、3・3-1に集中して出土している。

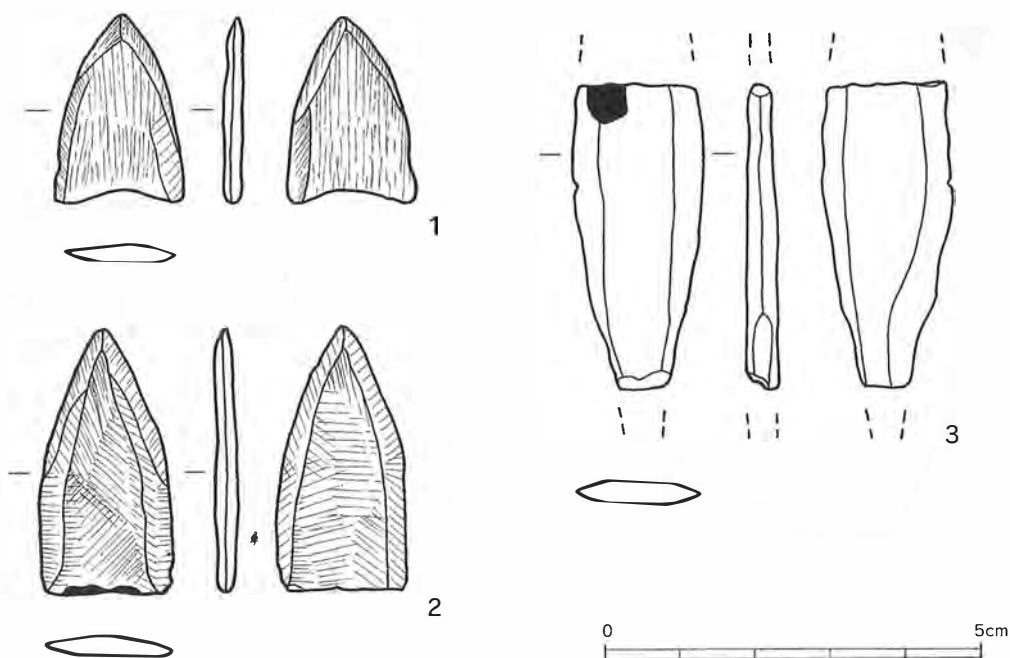
磨製石斧は9点ある。いずれも欠損著しい。Ⅲ・Ⅳ層出土のものが大半である。太型蛤刃石斧と考えられるものが2点ある。残りはやや扁平で、中型から小型のものである。

ただⅥ層出土としてあるのものが1点ある。欠損により細かな破片となっているが、局部磨製石斧の一部とも考えられる。石材は頁岩系?で占められている。一部縄文時代に帰属するものがあるかもしれないが、ここでは判別できない。

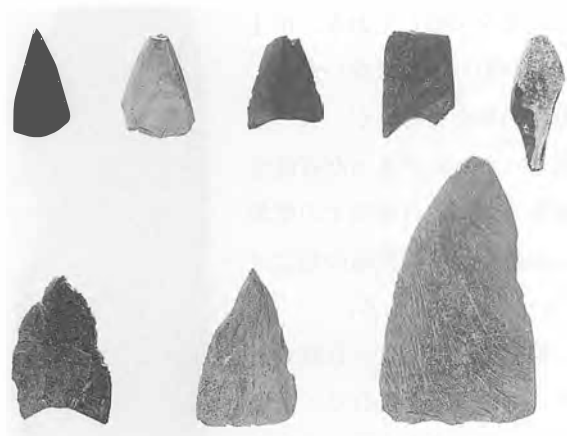
すなわち弥生時代の所産のものに分けられそうだ。



図版70 磨製石鏃1



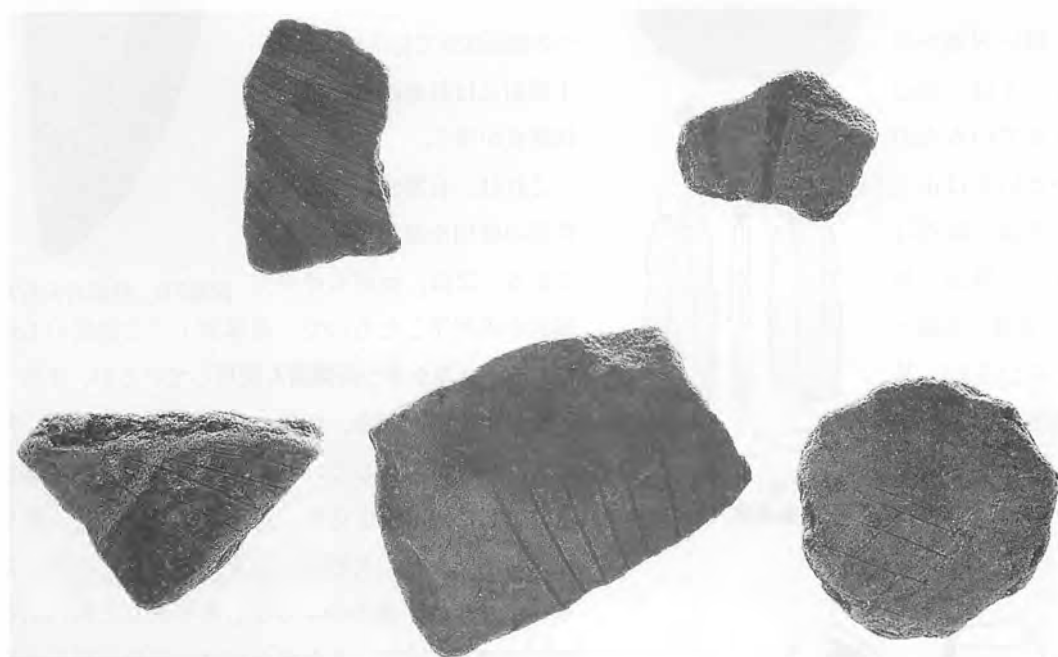
第96図 磨製石鏃実測図 (1/1)



図版71 磨製石鏃2



図版72 丹塗り壺



図版73
赤色土器
線刻土器



図版74
底部

3 その他

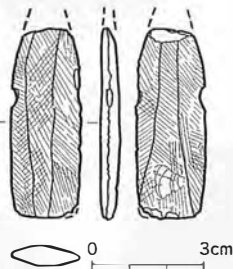
鉄器が18点出土している。器種が分かるものとして、鉄斧・鉄鍬があるが古墳時代以降のものが含まれている可能性もある。

勾玉は1点ある。縄文時代に帰属する可能性も十分あるが、断定しきれない。すなわち、弥生時代のものとして捉えておきたい。

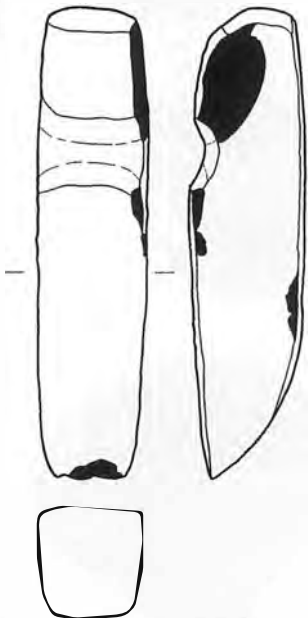
うち、3点を図示した(第96図)。いずれも側縁に稜を作り出し、鋭い刃部が形成されている。1は、底辺をやや湾曲させているもので、どちらかといえば正三角形に近い。2は、底辺は直線的であり、二等辺三角形形状を呈する。3は、先端・基部を欠損しているが、基部側は、両側辺を凹ませて茎を作り出しているかのようである。なお、4号木棺



図版75 石剣



第97図 石剣実測図(1/2)



第98図 柱状片刃石斧実測図

墓出土の3点の磨製石鍬は、先端部を欠損しており、出土状態が明らかではないため、推測の域を出ないが、人体に刺さったものであった可能性があるが、包含層出土の磨製石鍬はいわゆる供献の類ではないかと考えられる。

第100図は砥石・石皿である。1は、天草砥石で、皿層からの出土である。古くとも古代以降のものであろう。半分程度を欠損しているが、4つの側面は全て使用しており、1側面には斜めからの強い線状擦痕が残る。

これは、石器というよりは鉄器の使用を連想させるもの

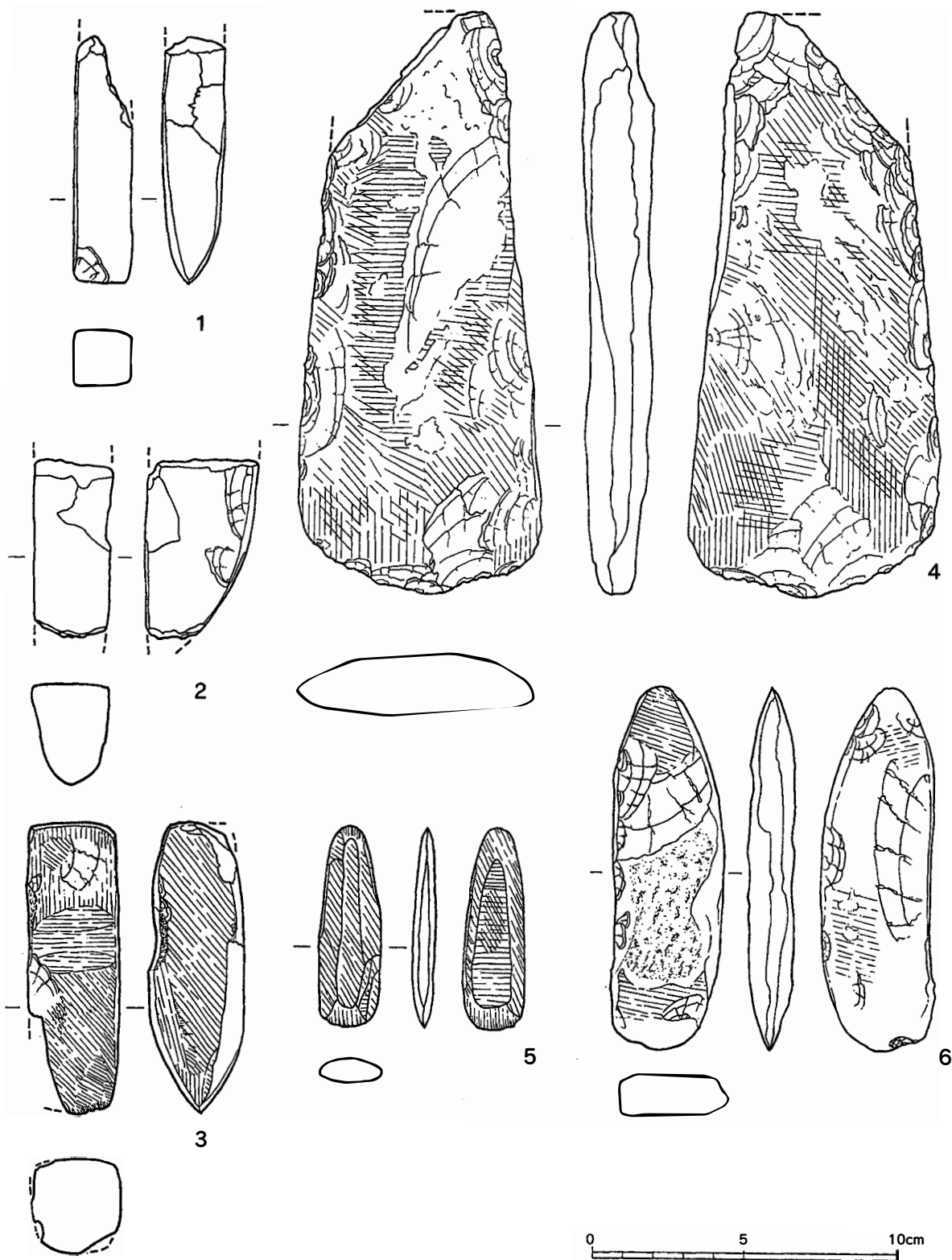
である。2は、磨製石斧の欠損品を再利用したもので、基部側1/2程度のものである。丸みをもつ両側面も使用しているが、正面・裏面は中央部が凹み、頻繁に使用していたことが伺える。3は、欠損しているが、大形の角柱状で側面及び正面に使用痕を見る。正面はかなり大きく緩やかに凹んでおり、大形のものを対象としたものであろうか。4は、薄めの平らな石の中央部に楕円形状の浅い凹みが残る。また裏面には、細線が見られ使用痕と考えられる。



図版76 柱状片刃石斧

第99図は、柱状片刃石斧である。1は、粘板岩製で厚みをもつ。中央上位の片面にやや凹んだ装着部を作り出している。一側面とこの部分は、特に光沢が残り装着時のものの可能性がある。刃部から2ヶ所基部方向（縦方向）に剥落がある。2は、小型の

もので基部側が一部欠損している。3は、刃部及び基部側を欠損しており詳細不明である。残存形状から、柱状片刃石斧と考えられる。4・5・6は、磨製石斧である。



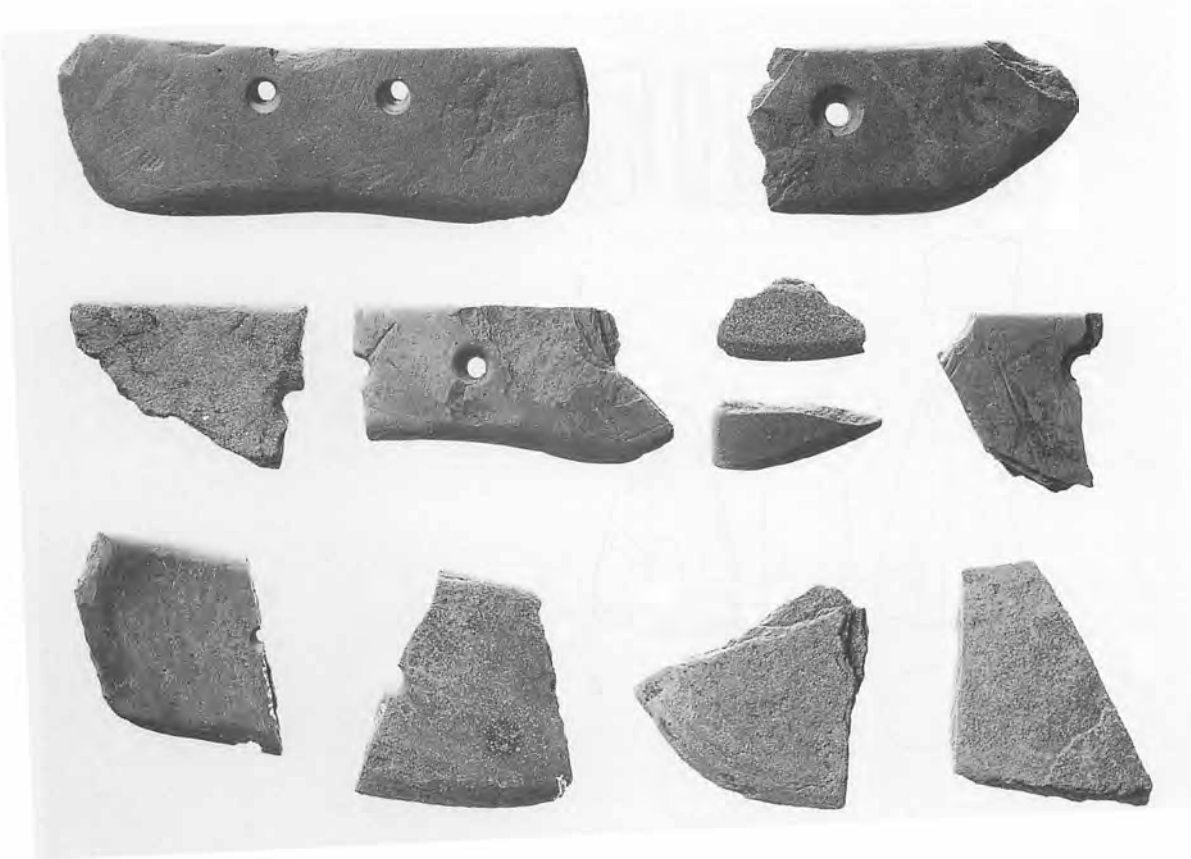
第99図 石斧類実測図 (1/2)



図版77 石斧類1



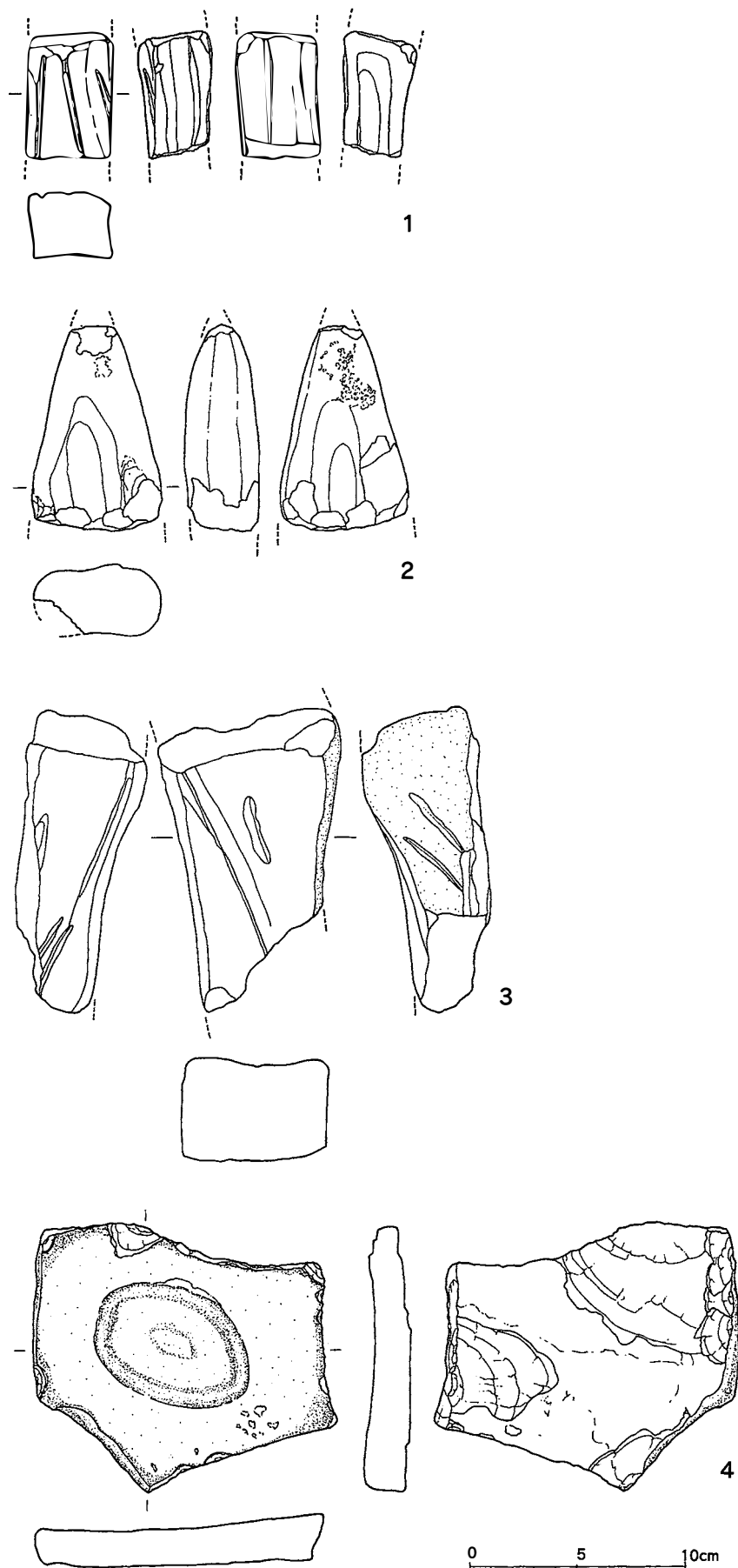
図版78 石斧類2



図版79 石庖丁



図版80 砥石



第100図 砥石・石皿実測図 (1/3)



図版81 砥石・石皿



図版82 調査風景



図版83 調査区風景



図版84 1区調査区風景

第IV章 山海道遺跡の調査成果

第1節 基本層序

当地の基本層序は、第101図に示したとおり、第I層から第IX層として捉えられる。

I層 現在の耕作を受けている土層である。

II層 以前の耕作土で、一部客土も含む。

III層 古代以降の遺物を含む層。さらに3つに細分することもできる。

IV層 縄文時代後・晩期の遺物を含む層。

上面で第一次の遺構検出面とした。

V層 縄文時代早期及び後晩期の遺物を含む層。やや硬質となり、色調もIV層より濃くなる。

VI層 遺物包含層。縄文早期の遺物を含む。

VII層～IX層 無遺物層。

このうち、III層下部からIV層にかけては、主に御領式以降の縄文時代遺物を含むものと考えられる。

なお、この土層図は、5区北東部に設定したOトレンチの土層断面図を基本としている。地区・地点によって、若干層序が異なるところがあるが、これをもって、基本層序とすることには問題はない。

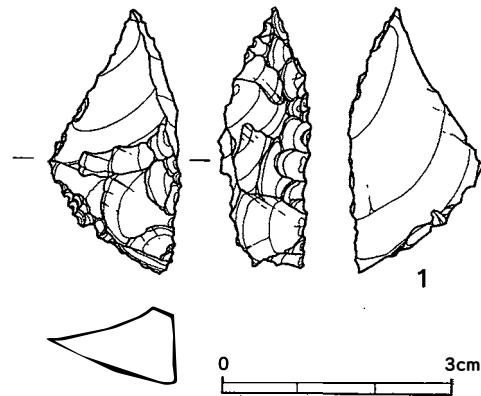
I	耕作土
II	旧耕作土・客土
III	黒褐色土
IV	暗褐色土
V	暗褐色土
VI	黒色土
VII	黒色粘質土 (ニガ土)
VIII	褐色粘質土 (ローム ブロック含む)
IX	黄橙色土 (ローム)

第101図 山海道遺跡基本土層模式図

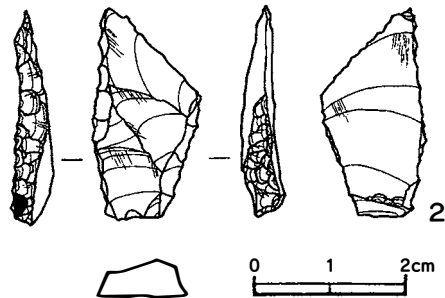
第2節 旧石器時代の遺物

ナイフ形石器3点が出土した。

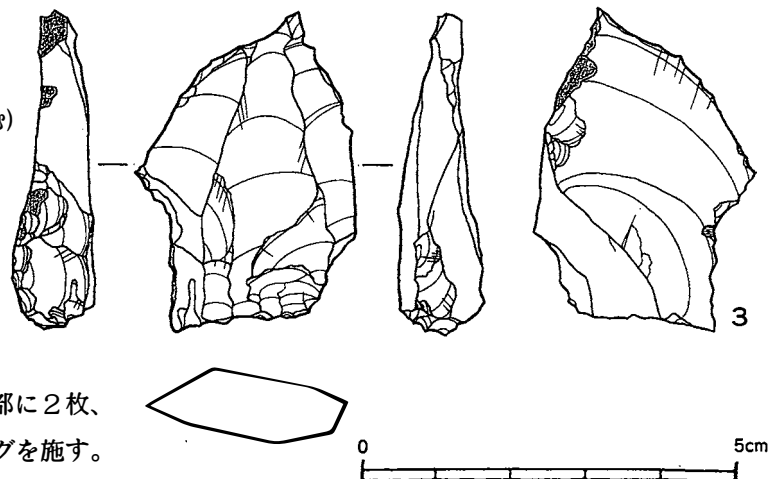
1は、縦長剥片を素材とする。左側縁下部に2枚、右側縁下部に1枚の大きなブランディングを施す。のちの剥落が顕著である。黒曜石製。最大長2.4cm、最大幅1.6cm、最大厚0.6cm。



第102図 包含層出土のナイフ形石器 (1/1)



第103図 5区表採のナイフ形石器 (1/1)



第104図 山海道遺跡出土のナイフ形石器 (1/1)



図版85 尖頭器



図版86 包含層出土のナイフ形石器



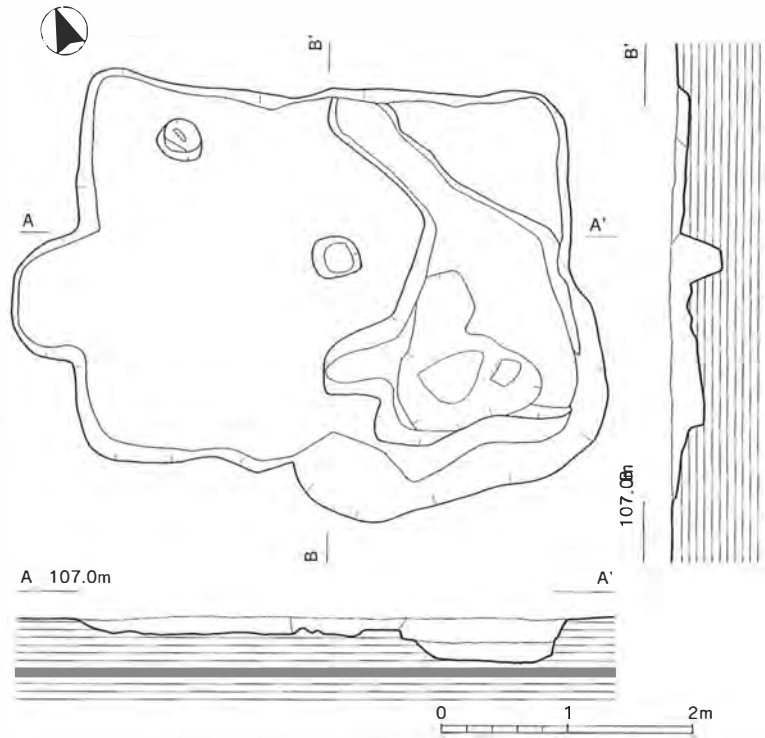
図版87 5区表採のナイフ形石器



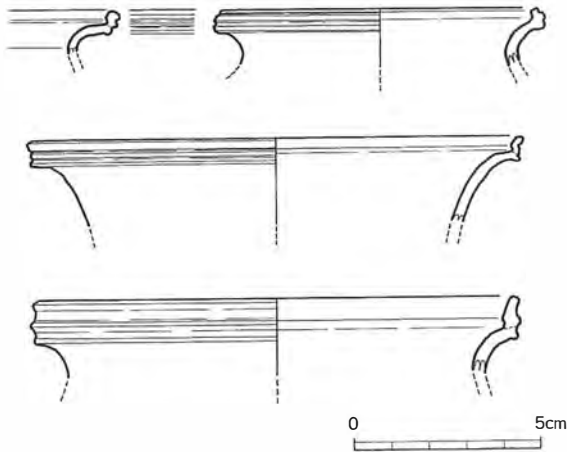
図版88 山海道遺跡出土のナイフ形石器

第3節 縄文時代の遺構とその遺物

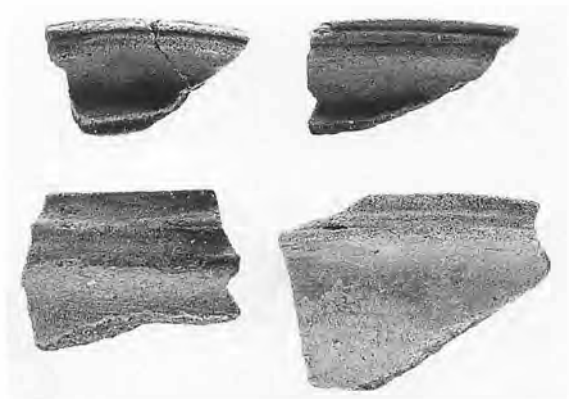
検出した遺構は、住居跡5・埋甕21・土壇1・焼土坑3・土坑11・溝6・石組炉1・集石35で、内訳は以下の通りである。



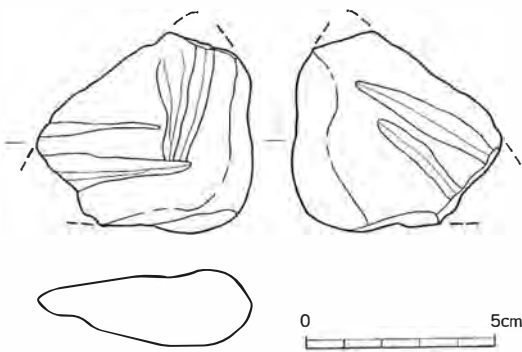
第105図 1号住居跡実測図 (1/60)



第106図 1号住居跡出土土器 (1/2)



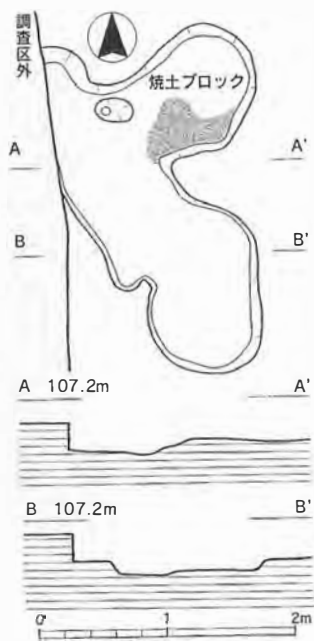
図版89 1号住居跡出土土器



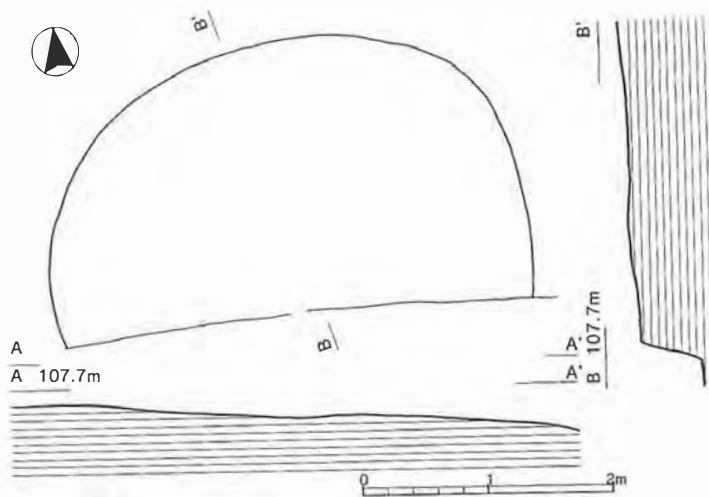
第107図 1号住居跡出土石器 (1/2)



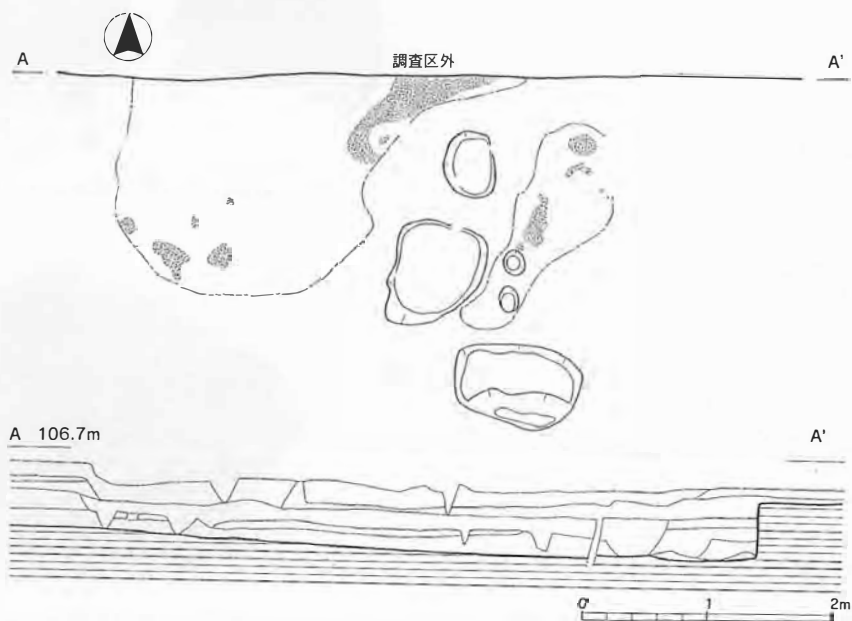
図版90 1号住居跡出土石器



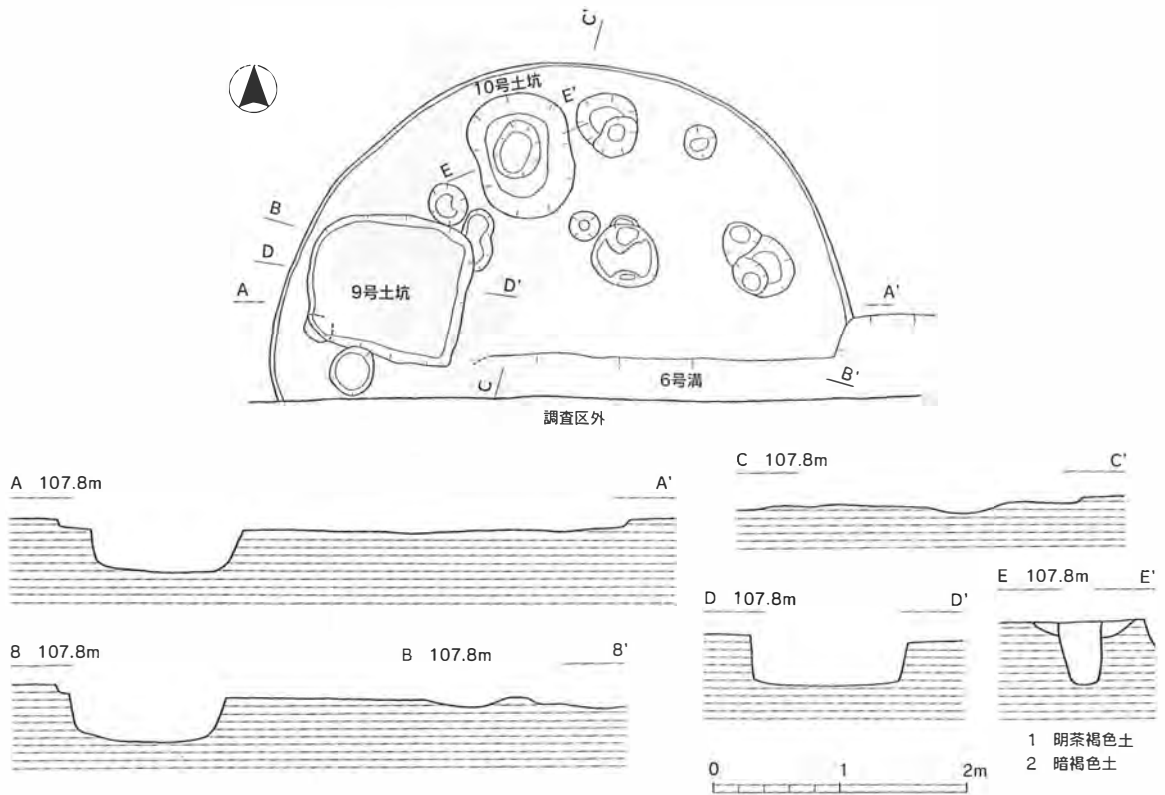
第108図 2号住居跡実測図 (1/60)



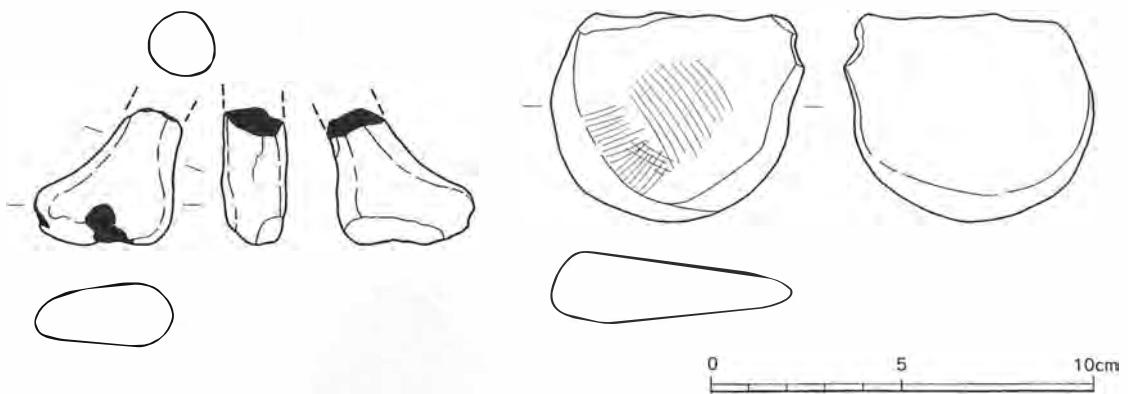
第110図 4号住居跡実測図 (1/60)



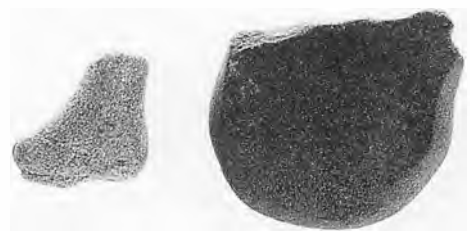
第109図 3号住居跡実測図 (1/60)



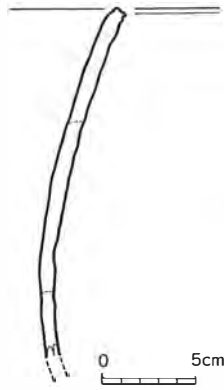
第111図 5号住居跡及び9・10号土坑実測図 (1/60)



第112図 5号住居跡出土石器 (1/1)



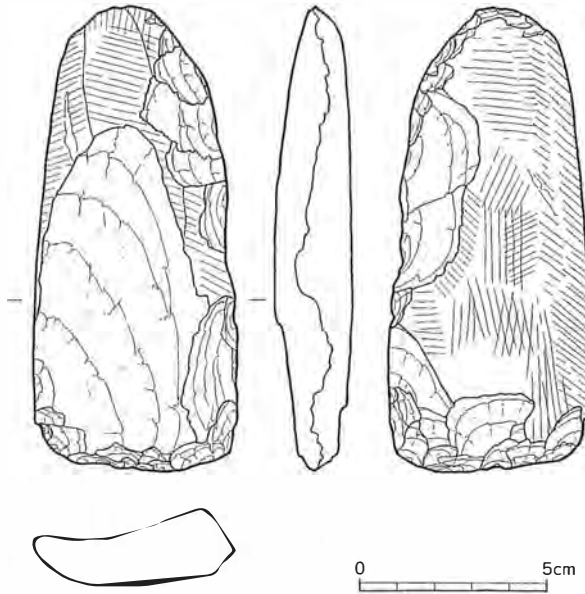
図版91 5号住居跡出土石器



第113図
5号住居跡出土土器 (1/4)



図版92 5号住居跡出土土器



第114図 5号住居跡出土石器 (1/2)



図版93 5号住居跡出土石器

2 埋甕

埋甕は、21基出土した。5区北東に4基、2.3.4区南東部を中心に13基、すなわち、2区9基、3区4基、4区3基で全般的に2区を中心として集中して検出できた。あと6区に1基である。9・14・18号埋甕を除き、堀方を確認できた。2区に存在する4号と7号とは、切り合いがある。

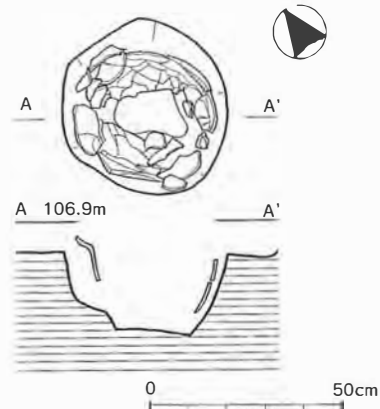
掘り込みは、基本的に据え置いた鉢形土器のカーブと同一で、ひとまわり程度大きいものが多い。

1号埋甕

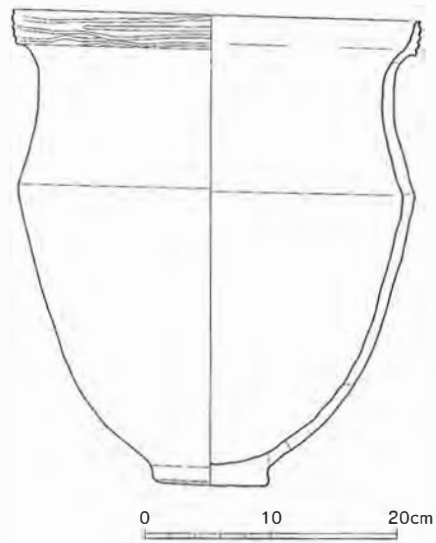
直径45cmの円形の掘り込みをもち、緩やかに内へ傾斜していくものである。底面は段を持つが平らである。確認面からの深さは20cmである。天城式の深鉢形土器ので単棺で胴部より口縁部の1/4を欠損するが、底部・口縁部は残存する深鉢である。口縁は、分厚水平であるが、上部に向かって、直角に立ち、のち外反しながら、真っ直ぐに延びる。胴部から内傾しながら、頸部で一旦外反し、口縁部はほぼまっすぐに立ち上がる。胴部が最大径となる。口縁部に4条の沈線をもつ。外面は、胴部下半で、ケズリのちナデ、他はナデ、内面はナデがある。また、内外面ともススが一部付着しており、外面胴部下半には、熱によると考えられる赤化が見られる。



図版94 1号埋甕



第115図 1号埋甕検出図(1/20)



第116図 1号埋甕実測図(1/6)

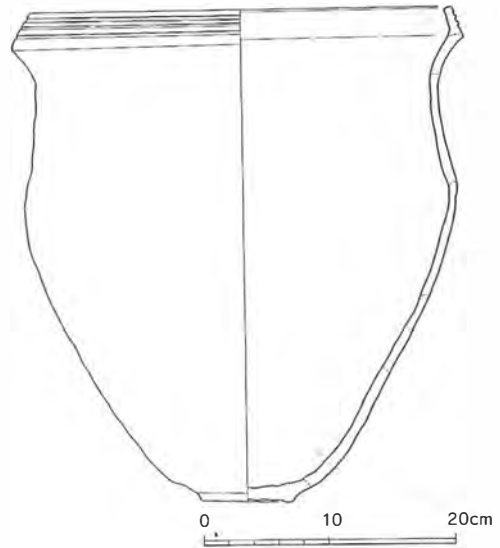
2号埋甕

直径45cmの円形の掘り込みをもつ。中心に向かって、緩やかに傾斜するが、南側は垂直に落ちる。南側底面は段が平らとなる。確認面からの深さは22cmである。

深鉢形土器の単棺で、口縁から底部まで残存する。底部はやや上げ底で、外反しながらまっすぐに延びる。胴部上半で内傾し、上位へ行くに従い、やや外反しながらも口縁部に至る。口縁部は内傾気味に真っ直ぐのび、端部はやや膨らみをもちながらも、真っ直ぐである。口縁部に3条の沈線が存在する。外面中位から上半、内面下部にススが付着する。



図版95 2号埋壺



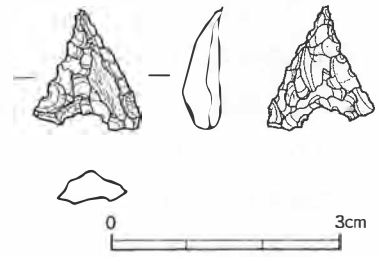
第118図 2号埋壺実測図 (1/6)



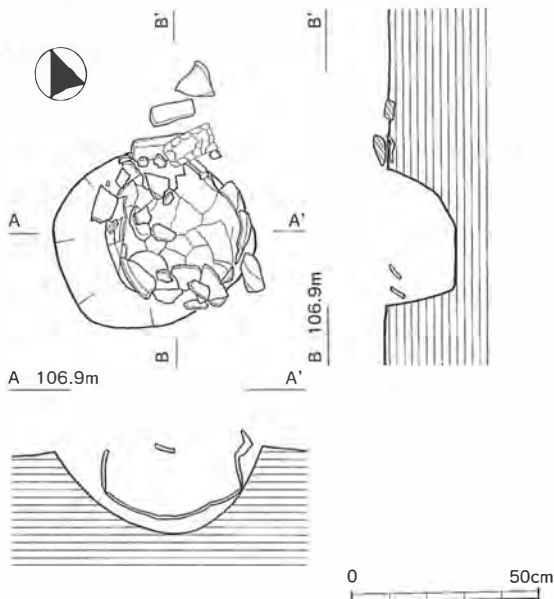
図版96 2号埋壺検出状況



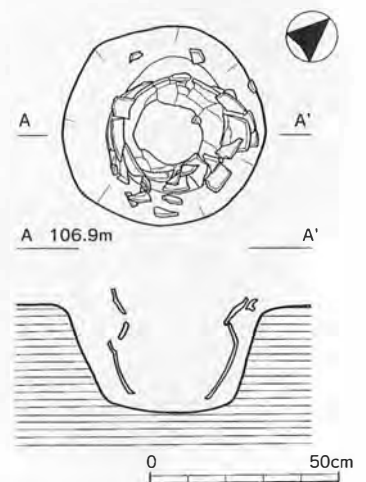
図版97
2号埋壺出土石器



第119図 2号埋壺出土石器 (1/1)



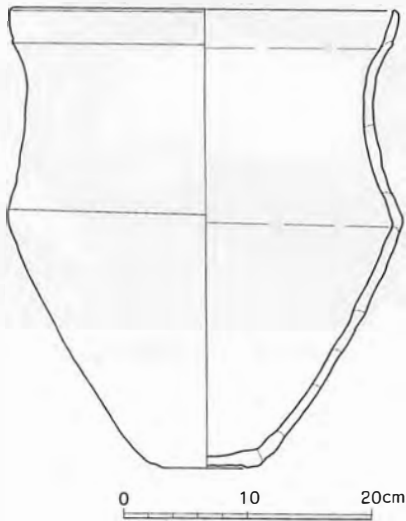
第117図 2号埋壺検出図 (1/20)



第120図 3号埋壺検出図 (1/20)



図版98 3号埋甕



第121図 3号埋甕実測図 (1/6)

3号埋甕

直径50cmの円形の掘り込みをもち、若干内側に傾斜をもって落ちる。底面はほぼ平らである。確認面からの深さは28cmである。

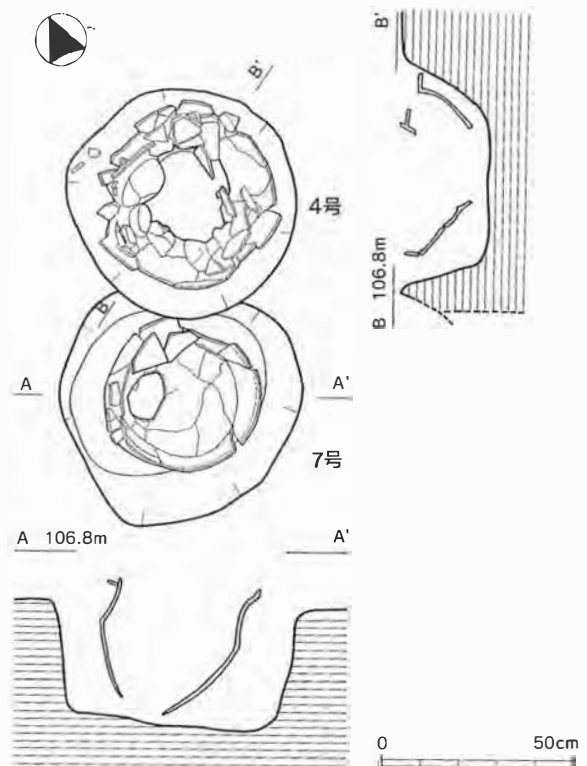
式の深鉢形土器で単棺で、口縁部及び底部片を一部欠損している。

4・7号埋甕

4号埋甕は、直径60cmの円形の掘り込みをもち、若干内側に傾斜をもって落ちる。底面はほぼ平らである。確認面からの深さは20cmで。7号埋甕を切っている。単棺。口縁部・底部を水平に故意に打ち欠く。中に波状口縁を持つ小型の鉢があった。若干欠損しているところもあるが、ほぼ完形。胴部が逆の字状に屈曲する。胴部を最大径として、内湾しながらも、真っ直ぐにのびていくものである。



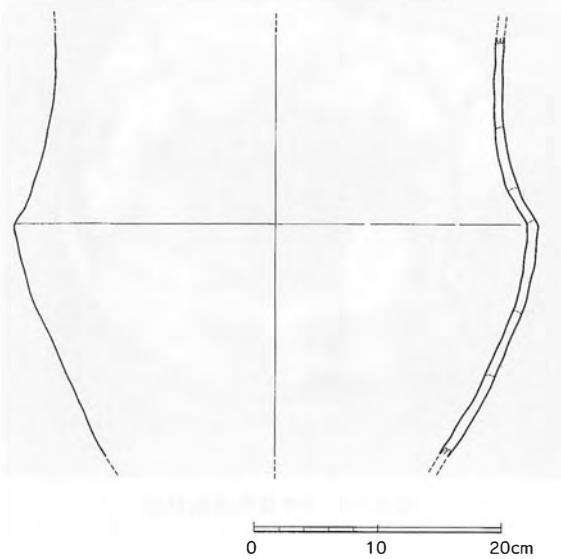
図版99 4号埋甕検出状況



第122図 4・7号埋甕検出図 (1/20)



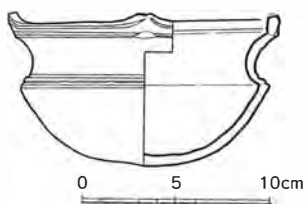
図版100 4号埋甕



第123図 4号埋甕実測図 (1/6)



図版101 4号埋甕出土土器



第124図 4号埋甕出土土器 (1/4)

器面調整は、胴部最大径より上部が内外面ともヘラミガキ、下部は、内面が、ケズリのちナデ、外面がケズリであり、下位には、熱によると考えられる赤化がある。また、両面下位には、ススの付着が見られる。

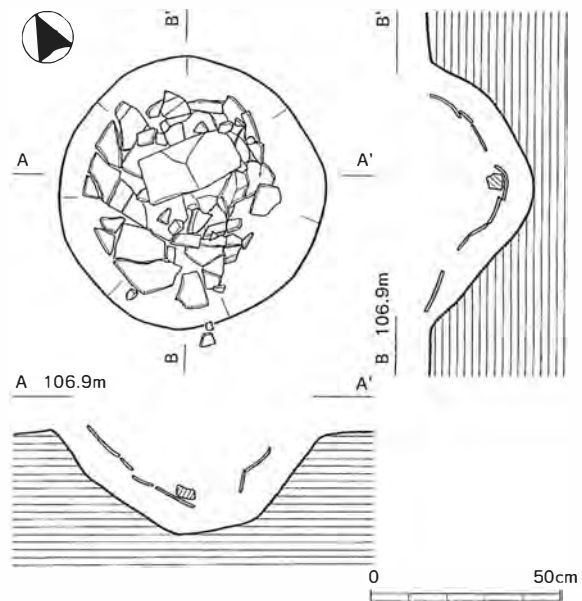
7号埋甕は、直径60cmの円形の堀方で、ほぼ垂直に落ちる。底面は平らで東側に傾斜する。確認面からの深さは、30cmである。4号埋甕に切られている。

5号埋甕

直径70cmの円形の掘り込みをもち、内側に傾斜をもって落ちる。底面は、中央が最深部となり確認面からの深さは25cmである。胴部より上位を水平に故意に打ち欠く。底部は残存する。底部は若干上げ底



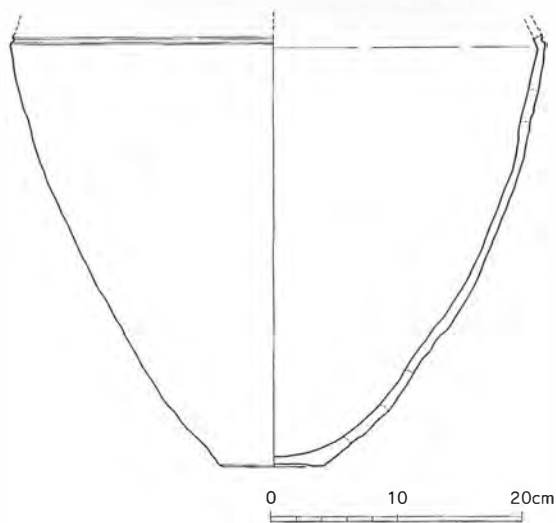
図版102 5号埋甕検出状況



第125図 5号埋甕検出図 (1/20)



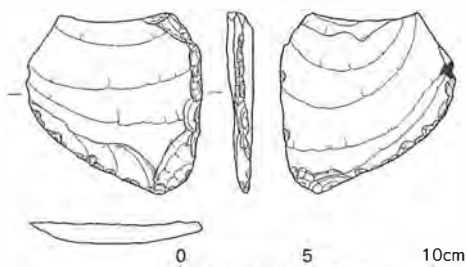
図版103 5号埋壺



第126図 5号埋壺実測図 (1/6)



図版104 5号埋壺出土石器



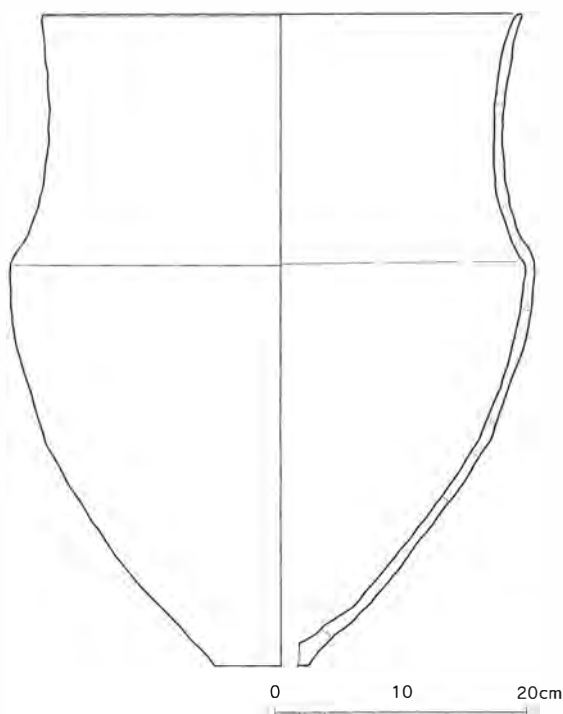
第127図 5号埋壺出土石器 (1/3)

となっているが、ほぼ水平である。外反しながら立ち上がり、胴部で最大径をもつ。さらに上位は、内湾すると考えられるものである。胴部に一条の沈線をもつ。調整は、ナデで、外面胴部には部分的にス

スが付着し、下部には熱によると考えられる赤化が見られる。また、内面下部にも全体的にススの付着がある。また、安山岩製のスクレイパーが1点出土した。不定形の剥片を素材に、その下端部に微細で、丁寧な剥離が施されている。



図版105 6号埋壺



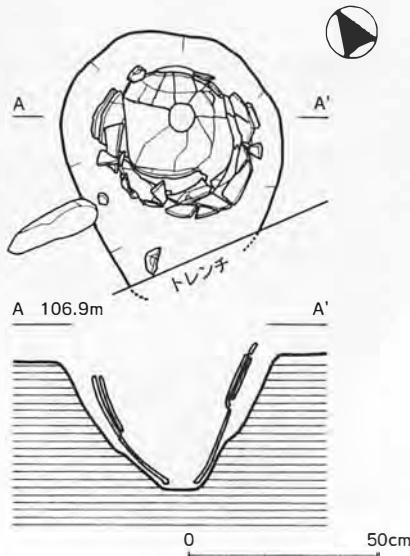
第128図 6号埋壺実測図 (1/6)



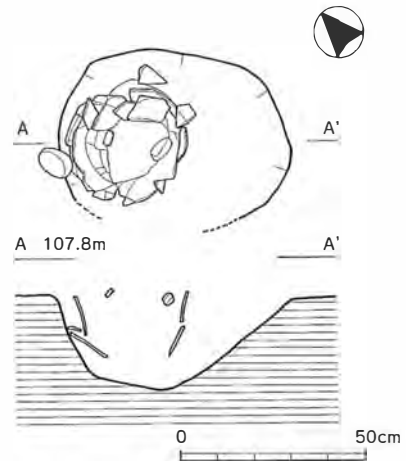
図版106 6号埋墓検出状況



図版107 8号埋墓検出状況



第129図 6号埋墓検出図 (1/20)



第130図 8号埋墓検出図 (1/20)

6号埋墓

直径60cmの円形の掘り込みをもち、内側に傾斜をもって落ちる。底面は、中央が最深部となる。確認面からの深さは、32cmである。

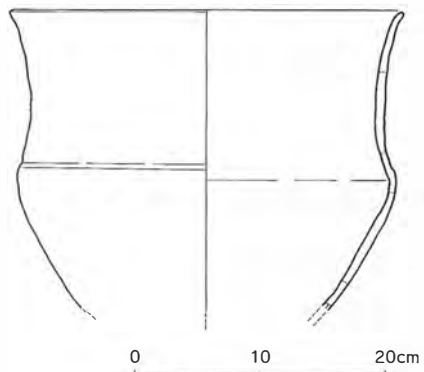
単棺で大形であり、底部のみ故意に打ち欠いている深鉢で文様帯は存在しない。内外面の調整は、摩耗が著しく不明。胴部で逆の字状となり、やや内湾しながらも真っ直ぐに立ち上がるもので、そのまま口縁部となる。水平口縁で端部はやや尖る。

8号埋墓

西端が不明だが、直径60cmの円形の掘り込みをもつもので、東側はゆるやかに落ちる。底面は、平らで、東側に傾斜する。確認面からの深さは、25cmである。



図版108 8号埋墓



第131図 8号埋墓実測図 (1/6)

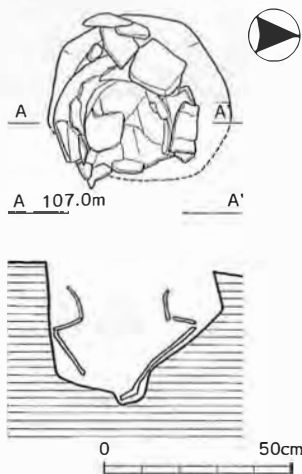
深鉢で単棺。底部は故意に打ち欠いている可能性が高い。胴部を最大径として、やや内湾しながら、真っ直ぐに延び、口縁部あたりで外反する。胴部からそのまま口縁となるものである。口縁先端は、若干丸みをもつものである。調整は、外面下位にケズリが見られ。内外面とも上位の方に、一部ススが附着する。

9号埋甕

東側がはっきりしないが、直径45cm程度で円形の掘り込みをもつ。南側はほぼ垂直に、北側は一旦張り出して、急傾斜で落ちる。

底面は、平らで北側に傾斜する。確認面からの深さは35cmである。

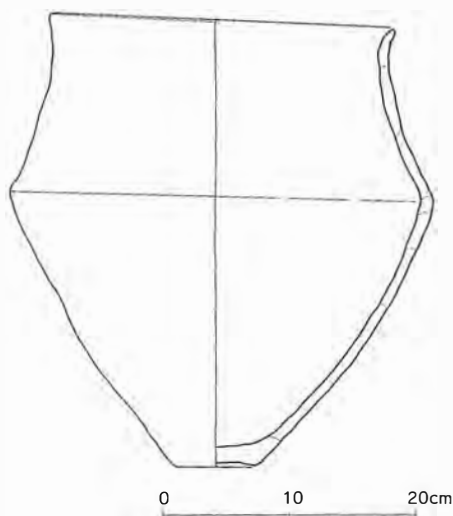
深鉢の単棺。胴部より上位の1/4程度を欠損しているが、故意の打ち欠きではない深鉢である。やや上げ底の底部から、



第132図 9号埋甕検出図 (1/20)

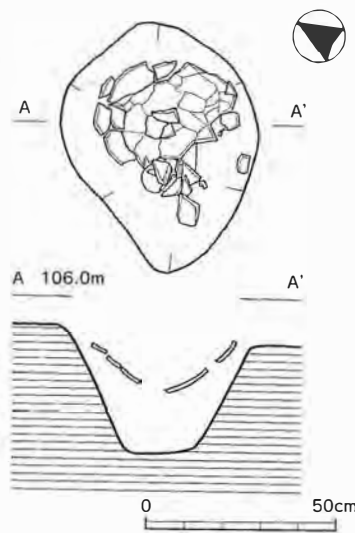


図版109 9号埋甕



第133図 9号埋甕実測図 (1/6)

外反しながら真っ直ぐに延び、急に内湾する。この屈曲部が胴部の最大径となり、先端は、頸部がそのまま口縁となるものである。口唇部は外反し、丸みを帯びる。器面調整は、条痕ののちナデ、内外面とも一部にススが附着する。また、外面下半には、熱を受けたと考えられる赤化が認められる。



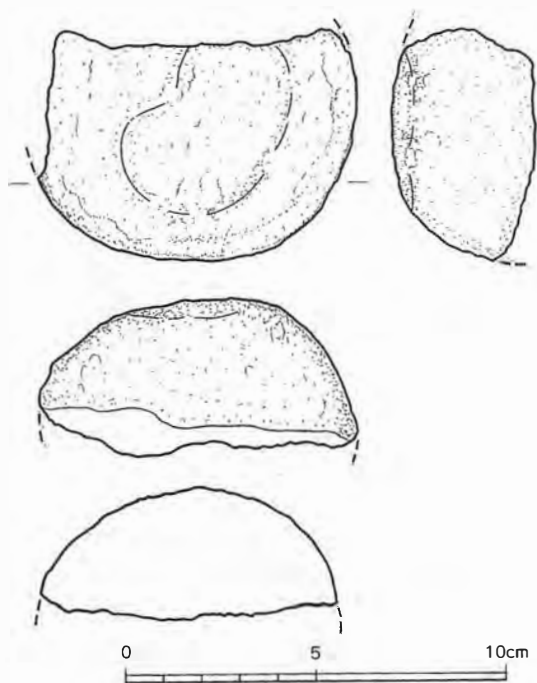
第134図 10号埋甕検出図 (1/20)

10号埋甕

やや東西に長い直径60cmの楕円形の掘り込みをもち。若干内側に傾斜をもっており。底面は平



図版110 10号埋甕出土石器

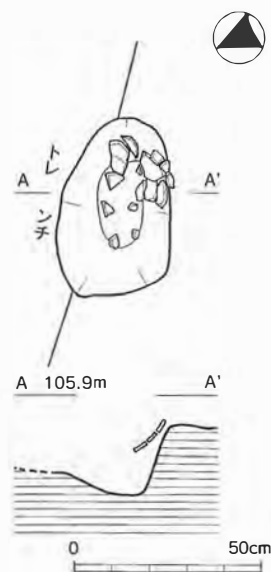


第135図 10号埋葬出土石器 (1/2)

らで、確認面からの深さは33cmである。深鉢の単棺である。半分程度の残存で、口縁及び底部の一部も欠損している。

11号埋葬

東西にやや長い円形を呈する。東西軸45cm、南北軸25cmの掘り込みをもち若干内側に傾斜をもっておちる。底面は中央部が最深部となるものである。確認面からの深さは15cmで。土器の残りは良くない。



第136図 11号埋葬検出図 (1/20)

12号埋葬

直径60cmの円形の掘り込みをもち。西側は小ピットに切られる。南側は傾斜がきつく、西側は緩やかにおちるが、東側は急である。底面は狭いが平らである。確認面からの深さは30cmである。

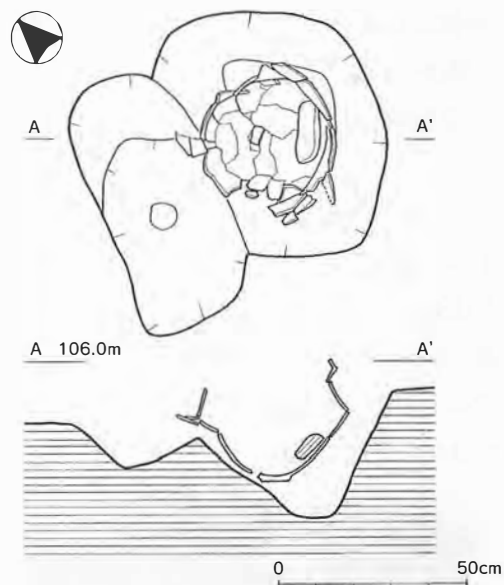
口縁部から底部まで残存する深鉢で、口縁部に3条の沈線がある。

内外面ともナデ調整で外面には全面にススが付着し

ている。また、胴部下位から底部は熱によると考えられる赤化が見られる。内面は、胴部下位から底部全面にススの付着がある。ほぼ平らの底部から外反



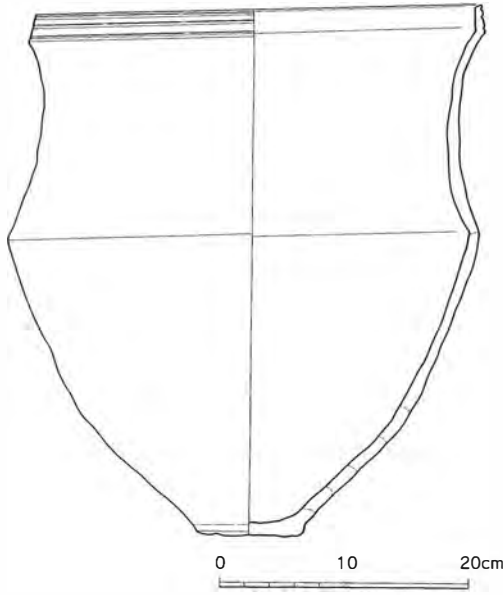
図版111 12号埋葬検出状況



第137図 12号埋葬検出図 (1/20)



図版112 12号埋葬

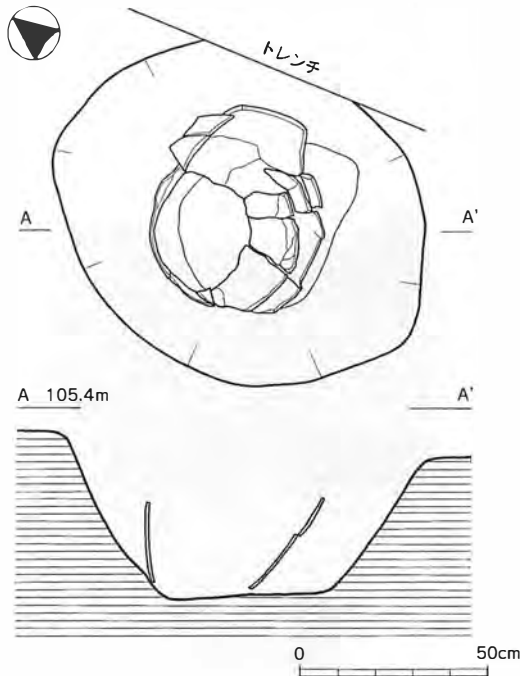


第138図 12号埋甕実測図 (1/6)

しながら胴部まで真っ直ぐにのび、最大径は胴部にある。ここから内湾しながら、真っ直ぐに立ち上がり、口縁部では逆の字状となり、ほぼ垂直に立ち上がる。また、口縁端部は、内傾しながらの水平な面をもっている。口縁端部には3条の沈線がある。

13号埋甕

直径100cmの掘り込みをもち。緩やかに内側に傾斜をもっておちる。底面は平らで。確認面からの深さは45cmである。

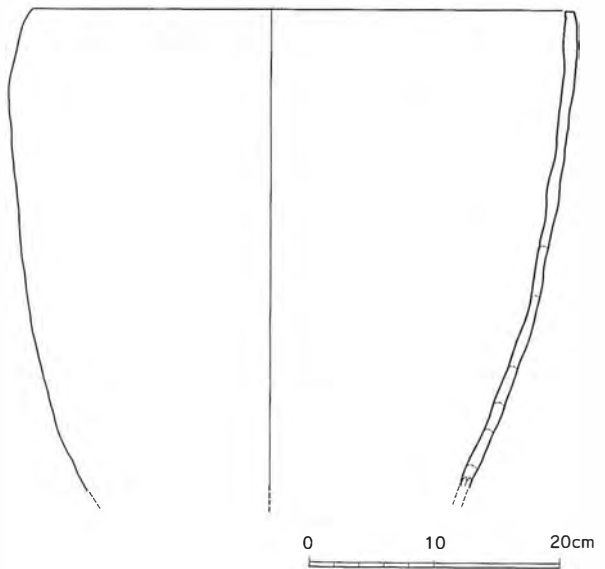


第139図 13号埋甕検出図 (1/20)

口縁部から胴部までのものであり、下部から底部は、故意に欠いている可能性がある深鉢である。



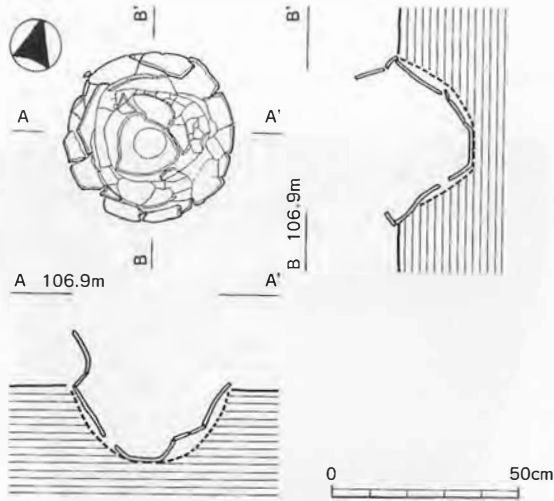
図版113 13号埋甕



第140図 13号埋甕実測図 (1/6)

やや外反しながらも、まっすぐのびる器形をもつ。胴部より直接口縁部に至る形態であり。口縁端部は水平である。

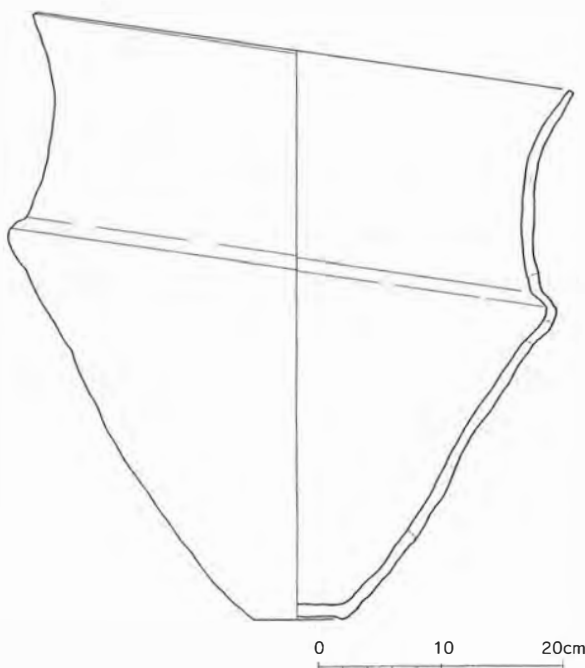
調整は、上部が内外面とも軽いヘラミガキか工具ナデ、外面中央内面下位にススが付着する。



第141図 14号埋甕検出図 (1/20)



図版114 14号埋甕

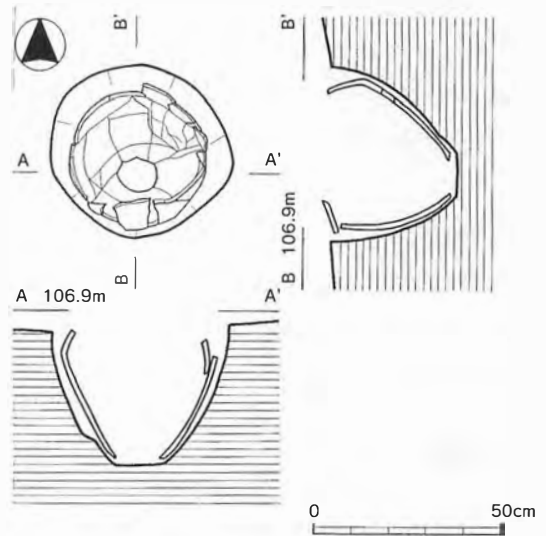


第142図 14号埋甕実測図 (1/6)

14号埋甕

欠損しているが、故意に打ち欠いたところはない。掘り込みははっきりしない。やかに内側に傾斜をもっておちるものと考えられる。底面はほぼ平らで。確認面からの深さは20cm以上である。

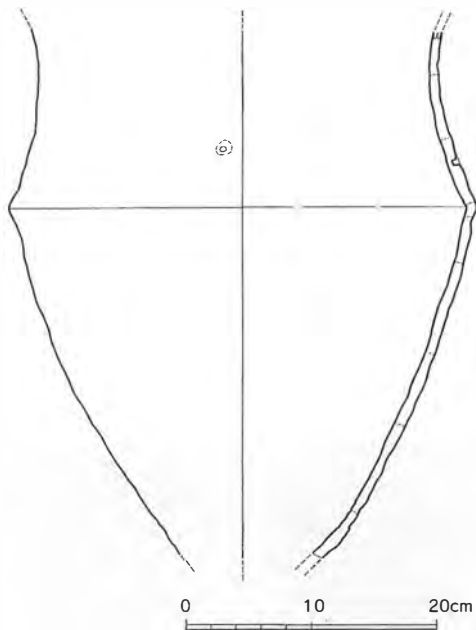
大形の単棺で底部から口縁部まで見られる深鉢である。ほぼ水平な底部から外反しながら真っ直ぐにのびる。胴部で最大径となり、急に内傾し、のちやや外反しながら真っ直ぐにのびる。水平な口縁で、口縁端部は面をもつように平である。外面上半は、ヘラミガキ、下半はケズリのちナデ、内面は、上半上半はヘラミガキ、下半はナデである。上半の外表面は、熱によるものと考えられる赤化が見られる。内面はほぼ全体にススが付着している。外面の上位から中位にもススの付着が見られる。



第143図 15号埋甕検出図 (1/20)



図版115 15号埋甕



第144図 15号埋壙実測図 (1/6)

15号埋壙

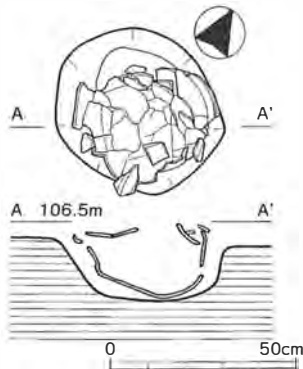
直径45cmの円形の掘り込みをもち。急傾斜をもつておちる。底面はほぼ平らな部分を持つ。確認面からの深さは35cmである。

深鉢の単棺である。胴部上半を故意に水平にうち割っており、底部は打ち欠いている。胴部は穿孔と考えられるものがあるが、途中までで貫通していない。胴部が最大径となる可能性をもつもので、逆の字状に真っ直ぐ屈曲する。胴部が最大径となる胴部の上位で、外器面からの穿孔が見られるが、貫通していない。

調整は、内面及び外面上半まで、条痕のちナデ、外面下位は、ナデである。内面下部及び外面上半から下半まではススが付着。外面下部は熱によると考えられる赤化が見られる。

16号埋壙

直径45cmの円形の掘り込みをもつ。東側は急傾斜をもつておちるが、西側は緩やかである。底面はほぼ平らである。



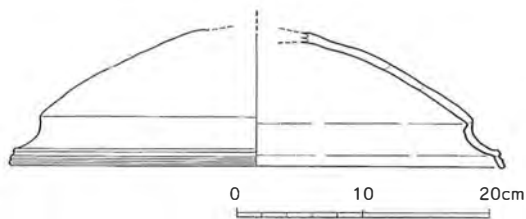
第145図 16号埋壙検出図 (1/20)



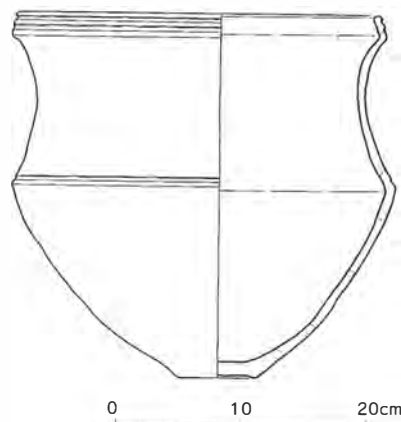
図版116 16号埋壙検出状況



図版117 16号埋壙 (下棺)



第146図 16号埋壙 (蓋) 実測図 (1/6)



第147図 16号埋壙実測図 (1/6)

確認面からの深さは15cmである。

複合棺である。下棺となる深鉢に黒色磨研土器の浅鉢が伴う。故意の打ち欠きはない。下甕は、口縁から底部まで残存する。

やや上げ底の底部から大きく開きながら、胴部で最大径となり、のち内傾しながら上部で外反しのびる。頸部から逆の字状に内傾し、真っ直ぐ伸びる。口縁端部は水平である。口縁部に2条の沈線及び胴部に1条の沈線をもつ。調整は、劣化著しいが内外面ともナデと考えられる。また、ススの付着が見られる。



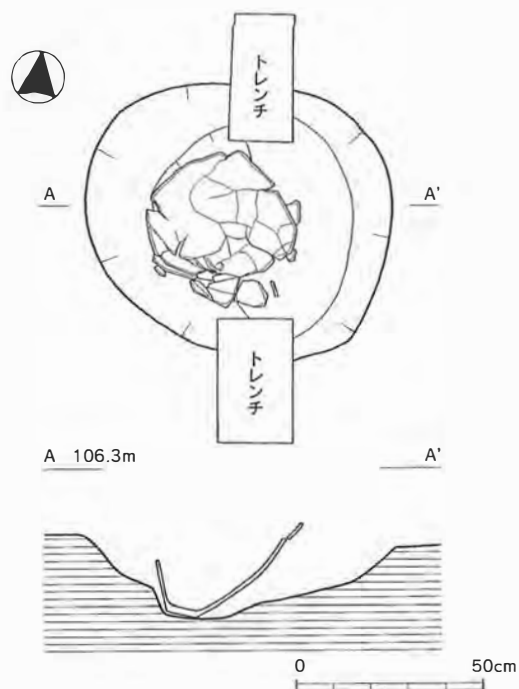
図版118 17号埋墓検出状況

外面下部には熱によると考えられる赤化が認められる。

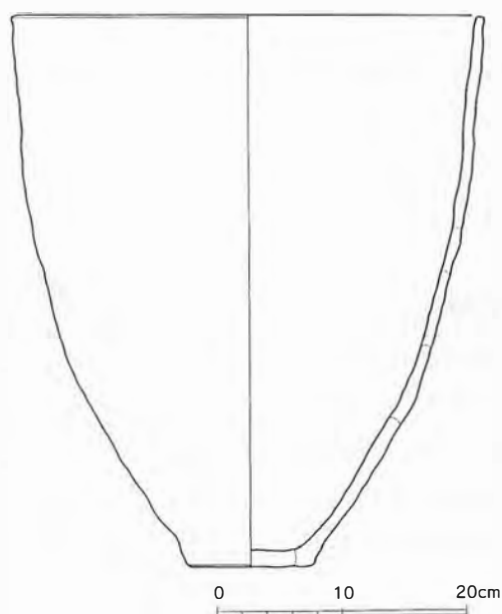
上甕は、底部のみを欠損している浅鉢である。ゆるやかに外反しながら、頸部で大きく外反した後、やや外反気味に立ち上がる。口縁部に2条の沈線をもつ。水平な口縁で底部はやや丸みをもっている。調整は、外面上半から内面全域はヘラミガキで、



図版119 17号埋墓



第148図 17号埋墓検出図 (1/20)



第149図 17号埋墓実測図 (1/6)

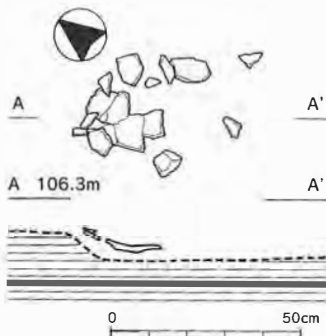
外面下部は不明。この部分には、黒斑（スス）が見られる。

17号埋壘

直径70cmの円形の掘り込みをもち。東側は急傾斜をもっておちるが、西側は緩やかである。両側とも階段状に落ちていく。底面は一部に平らなところがある。確認面からの深さは20cmである。

他の埋壘の掘り込みに比べて非常に大きく、東側は、掘りすぎている可能性があることを付け加えておきたい。

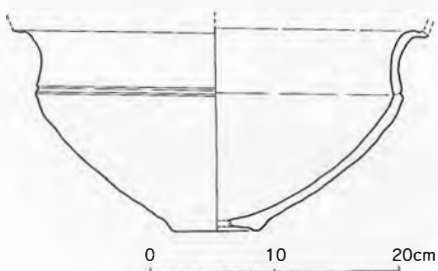
深鉢の単棺である。胴部の半分程度が欠損しているが、故意に打ち欠いてはいない。ほぼ真直ぐな底部からやや外反しながらも、真直ぐにのびる。胴部からそのまま口縁部に至



第150図 18号埋壘検出図 (1/20)



図版120 18号埋壘



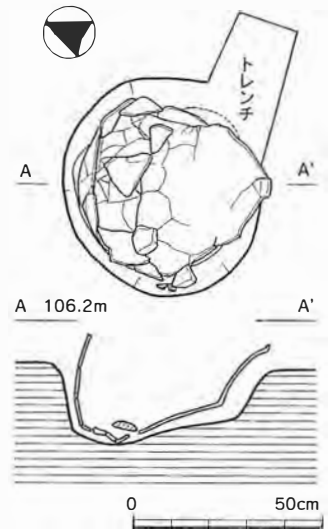
第151図 18号埋壘実測図 (1/6)

る。口唇部はほぼ直線的である。調整は、内面下部は、ナデ、他は、ヘラミガキである。また、全体的に、ススが付着しており、外面下部は、剥落が著しく。熱を受けたものと考えられる。

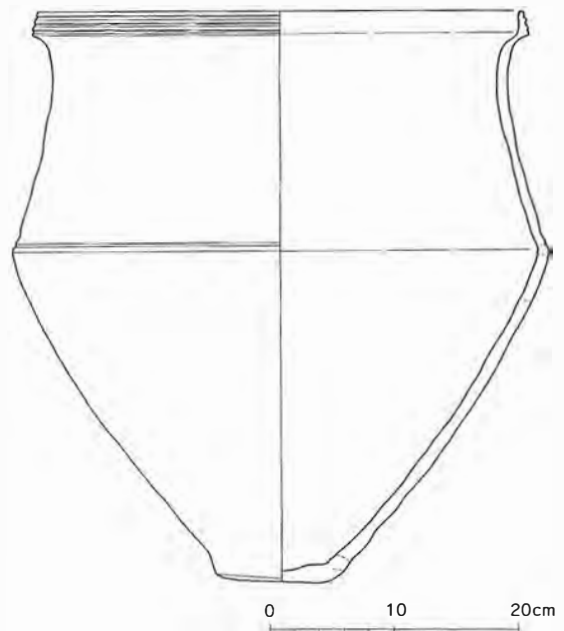
18号埋壘

掘り込みがはっきりしない。検出面からの深さは、5cm以上のものであろう。

浅鉢を利用したものと考えられるが、極端に浅くはなく口縁は欠損を除き残存する。底部も半分を欠損するが、残存するものらしい。やや上げ底の底部から、大きく外反し、ゆるやかに立ち上がる。胴部



第152図 19号埋壘検出図 (1/20)

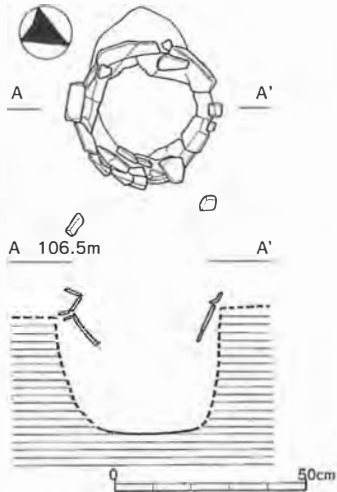


第153図 19号埋壘実測図 (1/6)

上位で最大径となり、ここから内傾しながら上位で大きく外反する。のち、真っ直ぐに立ち上がるものと考えられる。調整は、内外面とも上位はヘラミガキ、下位はナデである。胴部上半の最大径となる上位に1条の沈線が見られる。蓋の可能性はある。

19号埋壘

直径50cmの円形の掘り込みをもち。北側は急傾斜をもっておち、最深部に至るが、南側はやや緩やかである。底面はほぼ平らで、北側に傾斜する。確認



第154図 20号埋葬検出図 (1/20)

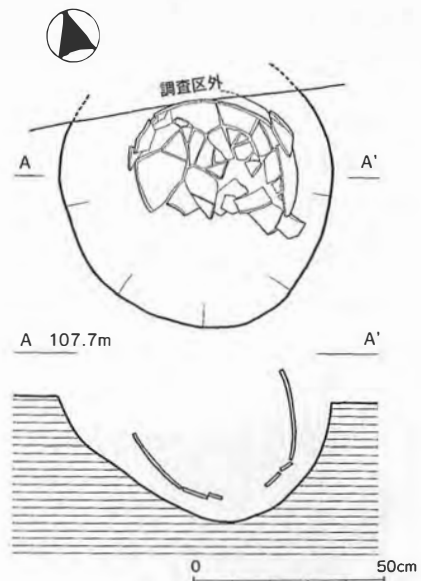
真っ直ぐに立ち、先端部はやや尖る。口縁部に3条の沈線をもつ。調整は、内外面ともナデ調整で、胴部より下位には、ススが付着する。外面下部では熱によると考えられる赤化が見られる。

20号埋葬

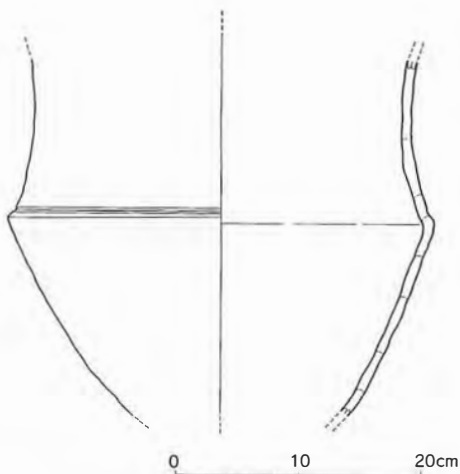
深鉢で底部及び胴部より上位を故意に水平に欠く。平面上では、直径40cmの掘り込みをもつものと確認したが、側面・底面はよく分からなかった。深鉢で、逆の字状に折れ曲がる胴部をもち、ここが最大径となっている。胴部最大径のやや上位に3条



図版121 20号埋葬



第156図 21号埋葬検出図 (1/20)



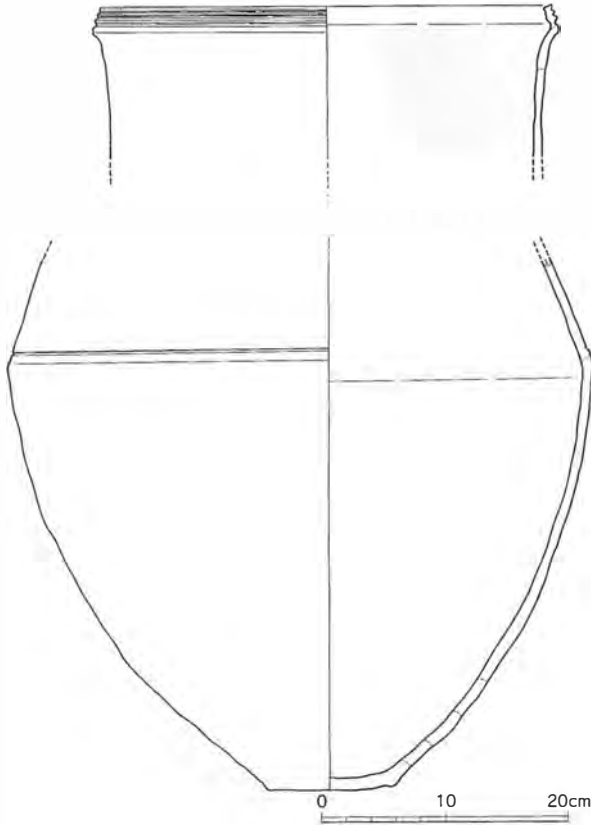
第155図 20号埋葬実測図 (1/6)

面からの深さは20cmである。

底部から口縁部まで見られる。深鉢でほぼ真っ直ぐな底部から、外反しながら真っ直ぐにのび、胴部で内湾しながらほぼ真っ直ぐにのびる。口縁端部は



図版122 21号埋葬



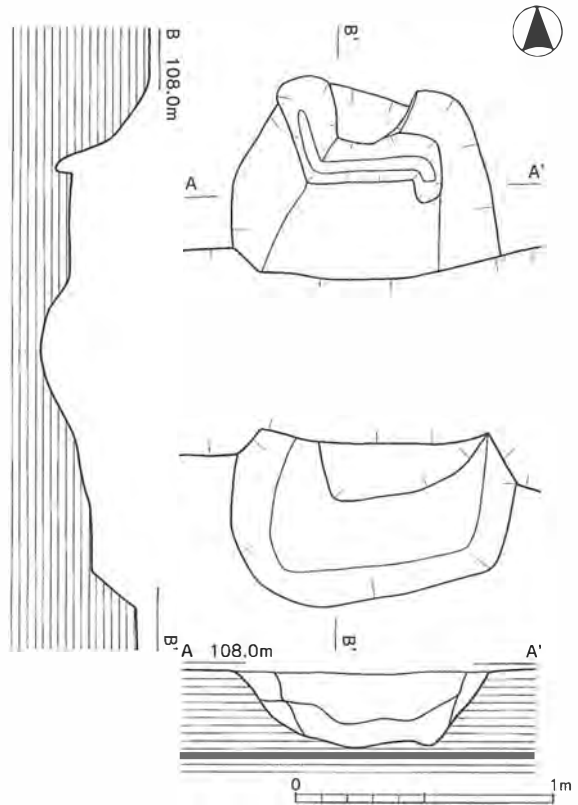
第157図 21号埋壙実測図 (1/6)

ほどの沈線が見られる。外面は、上位がヘラミガキ、
下位が、ケズリのちナデとなっている。

21号埋壙

北側は、一部不明であるが、直径70cm程度の円形の掘り込みをもつ。西側はゆるやかな傾斜をもち、東側は急傾斜をもつ。底面は丸みを持つ。確認面からの深さは、30cmである。

深鉢利用の単棺であり。口縁部を水平に打ち欠き底部は残存する。頸部を一部欠損するが、その他は残存。深鉢で文様帯は、口縁部に3条の沈線を巡らす。内面上面から下半部及び外面口縁部の調整は、ヘラミガキであり、他は摩耗のため、不明。胴部でくの字状となり、最大径をもつ。やや内湾しながら真っ直ぐに立ち上がり、口縁部は内径する。口縁は水平であるが、端部は面をもつ。外面胴部及び内面胴部より下位にかけて黒斑が見られ。これはススの可能性がある。



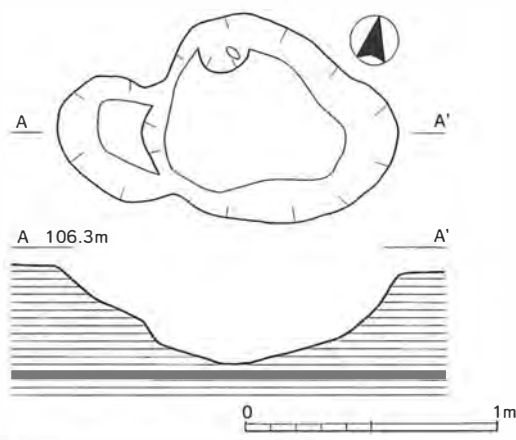
第158図 1号土壙実測図 (1/30)

4 焼土坑

5区より3基検出した。

1号焼土坑

東西に長い不定形で、東西軸1.4m、南北軸0.8m、断面はすり鉢状で緩やかにおちる。検出面からの深



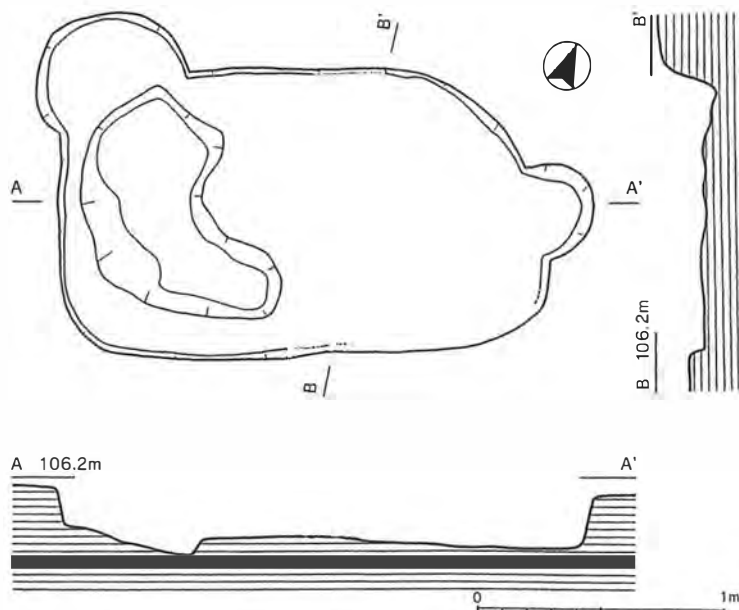
第159図 1号焼土坑実測図 (1/30)

さは40cm程度ある。

2号焼土坑

大形で不定形である。北西端及び東端は若干出っ張る。

東西軸2.1m、南北軸1.2mで東西に長い。掘り込みはしっかりしており、北側に傾斜しながら落ちる。その最深部で15cm程度である。底面は平均10cm程度で、少々凹凸をもつ。また、西側は一段低い落ち込みをもつ。なお、南東隅は、下端が不明瞭である。出土遺物として、縄文時代後期・晩期の鉢の口縁部



第160図 2号焼土坑実測図 (1/30)



図版123
2号焼土坑出土土器

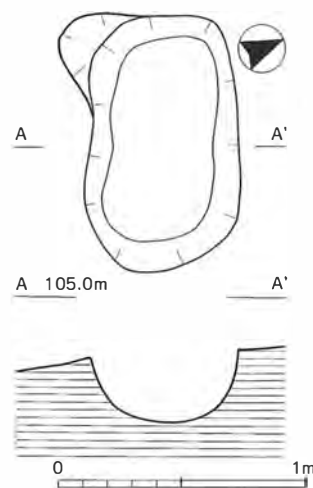


第161図
2号焼土坑出土土器 (1/4)

片が1点ある。磨消縄文。深鉢と考えられる。

3号焼土坑

やや東西に長い楕円形である。南西隅はやや出っ張る。南北1.0m、東西軸0.6mである。底面は緩やかにおち、丸みをもつ。25cm程度残存する。



第162図
3号焼土坑実測図 (1/30)

覆土は焼土混じりの黒褐色土で、炭化物も出土した。VI層で初めて確認できたもので、縄文時代早期の所産の可能性はあるが、よく分からなかった。

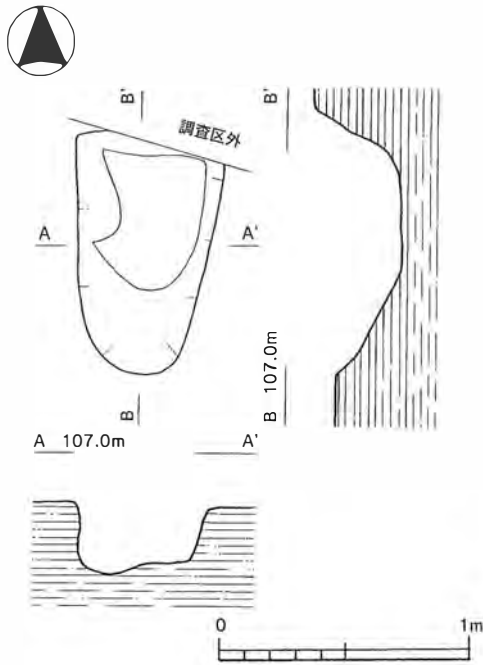
5 土坑

土坑は11基確認した。1区を除き全ての調査区から検出した。2区2基、3区1基、4区3基、5区3基、6区2基である。

1号土坑

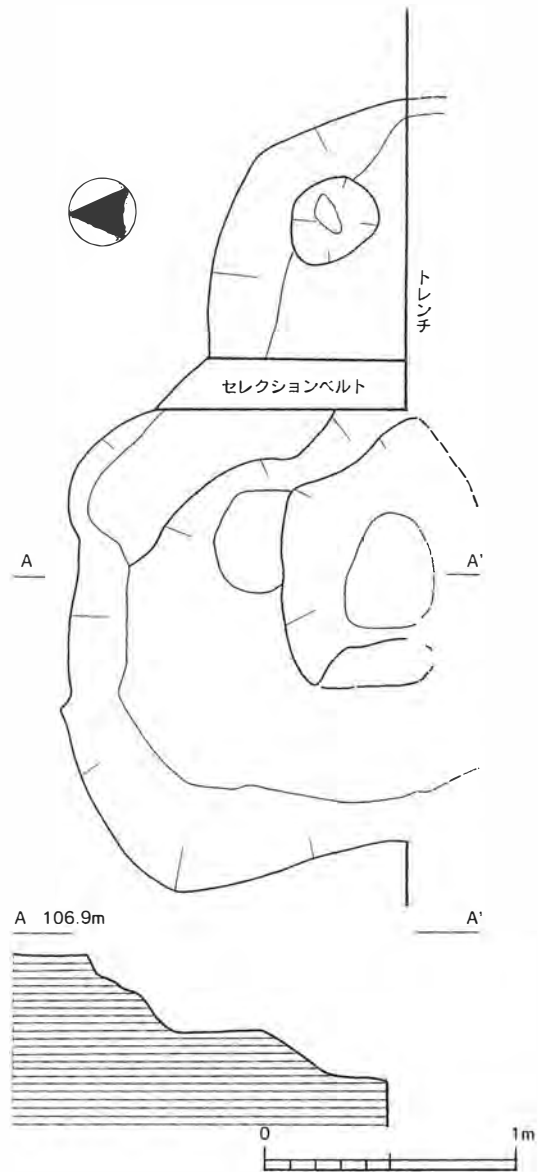
北側が一部はっきりしないが、南北に長いものである。長軸0.9m、短軸0.5mの規模を持つ。東西の肩はほぼ垂直に落ち、底面は多少の凹凸があるものの、ほぼ平らで北側へ傾斜する。最深部の深さは30cmほどある。出土遺物として縄文時代後期の土器碎片を含んでいたが、覆土はⅢ層黒色土であり、所属時期は、古代以降のものであろう。

2号土坑



第163図 1号土坑実測図 (1/30)

Ⅸ層で検出した大形で不定形のもので、南北軸3m、東西軸1.5m以上の規模を持つ。中心へ向かい段々と落ち込む。検出面からの深さは、50cm以上あり。東側に小ピットが1つある。覆土は、暗褐色土の単層であった。南部はトレンチにより切られており不明。2号土坑からは、縄文時代後期から晩期にかけての深鉢の口縁部片などが1点出土している。



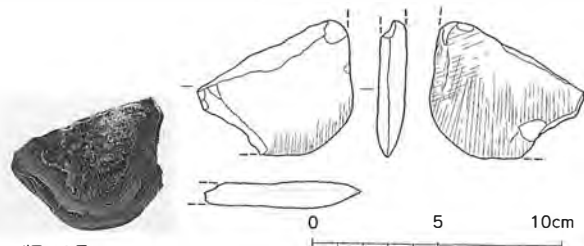
第164図 2号土坑実測図 (1/30)

ある。東西1.9m、南北1mの規模のもので、底面は多少凹凸があるもののほぼ平らになる。最深部の深さは10cmほどである。覆土は2層にわかれる。出土遺物には縄文時代土器碎片があるが時期は不明。形態から土壙として認識できる可能性をもつ。



第165図 2号土坑出土土器 (1/4)

図版124 2号土坑出土土器



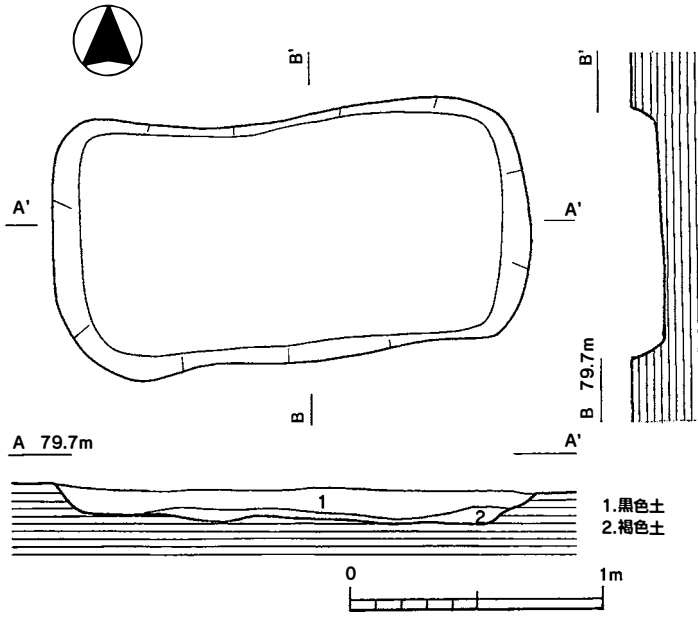
図版125 2号土坑出土土器 第166図 2号土坑出土土器(1/3)

4号土坑

1.2mの円形を呈するものである。北半部は掘削されていない。底面は平らで、最深部は20cmで。出土遺物はない。

5号土坑

V層で検出できた。0.6mの規模を持つ楕円形で



第167図 3号土坑実測図 (1/30)

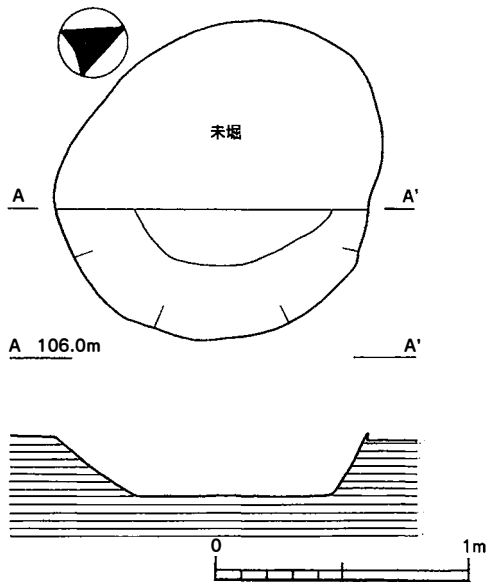
深さ8cmである。底面は平らである。出土遺物には、縄文時代後期の土器碎片があり、帰属時期も縄文時代後期と考えられよう。覆土はIV層が主体である。

6号土坑

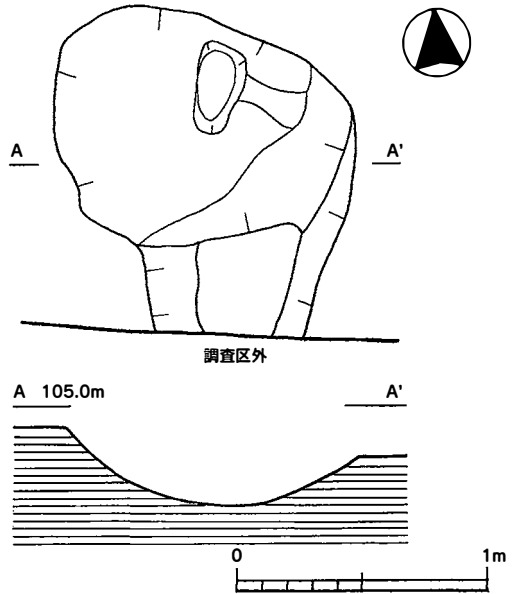
VI層で検出できた。VII層途中まで掘り込んでおり覆土はVI層である。南側が調査区外にのびるが不定形で長軸・短軸とも1.2mある。断面形は皿状で、最深部は30cmある。炭が出土している。

7号・8号土坑

7号土坑は、東西に長い不定形で長軸2.2m、短軸1.3mである。8号土坑を切っており、2つの小ピットをもつ。断面形はかなりの凹凸がある。最深部は30cmで出土遺物はない。

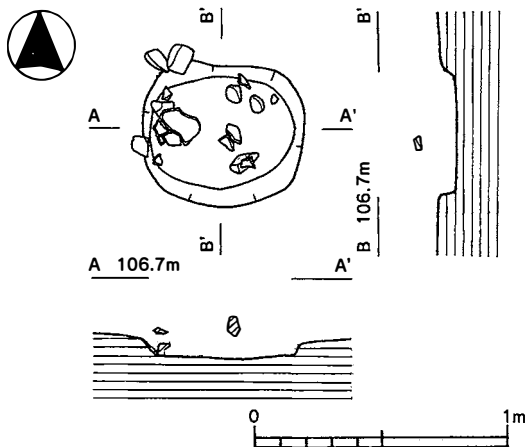


第168図 4号土坑実測 (1/30)



第170図 6号土坑実測図 (1/30)

8号土坑は、北西部を7号土坑に切られる。不定形であるが、長軸2.5m×短軸2.2mの規模をもつ。断面形は、南側へゆるやかに傾斜するが、底面は平らである。出土遺物はない。



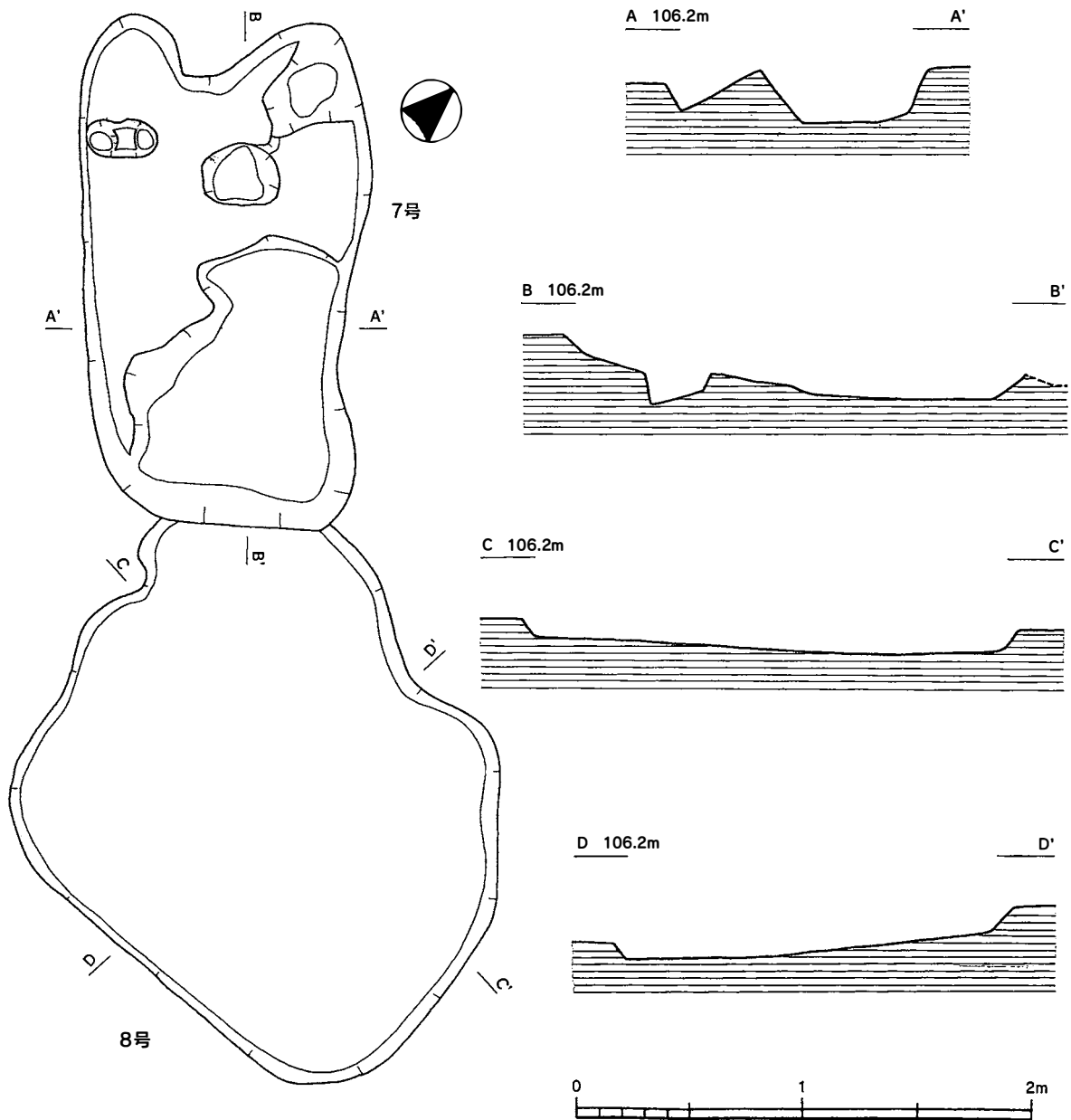
第169図 5号土坑実測図 (1/30)

9・10号土坑 (第111図)

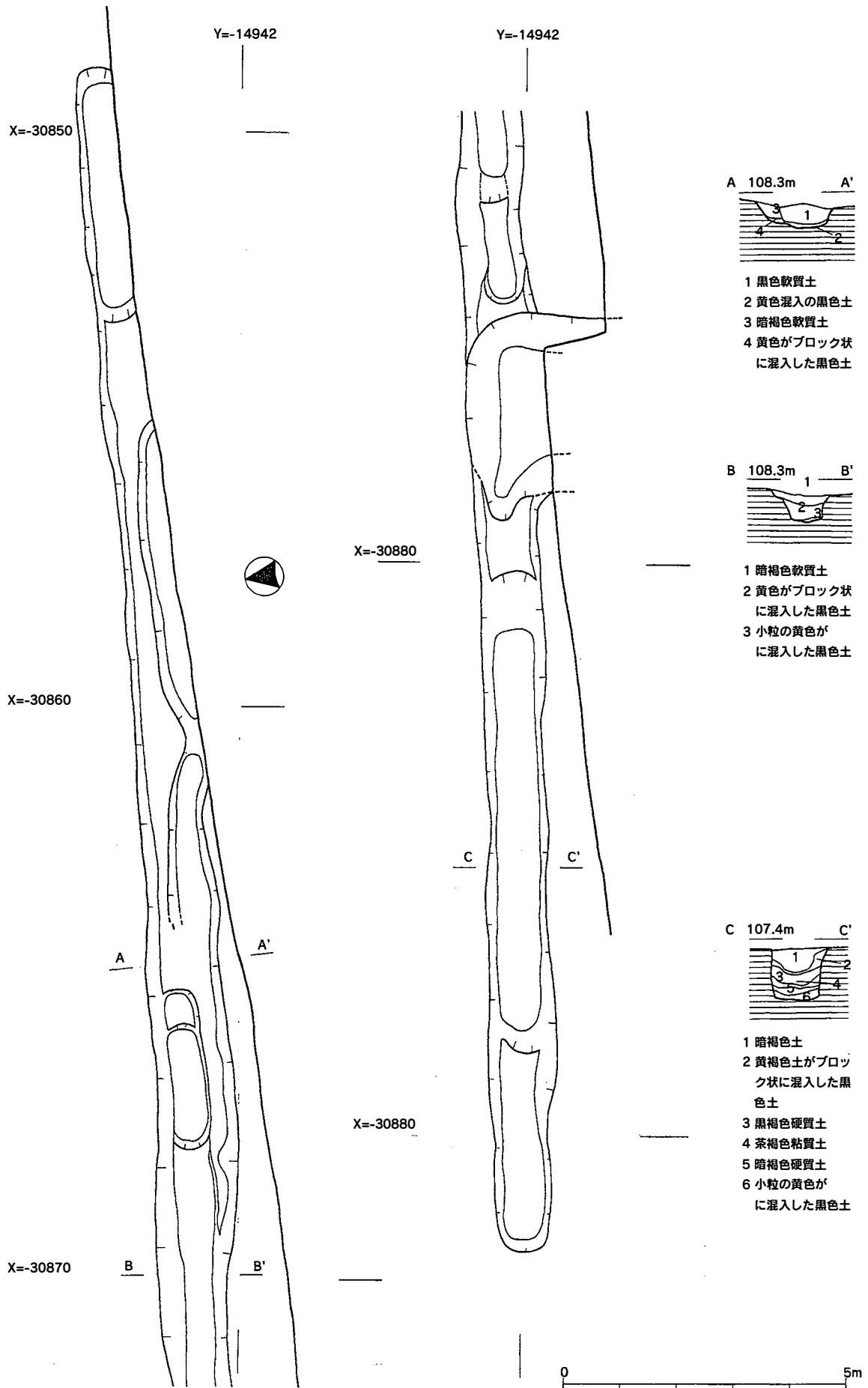
9号土坑は、位置的には5号住居跡と重なり合っており検出できた。調査時の所見から、5号住居跡より

も後の所産である。平面形態は、ややいびつながらほぼ方形を呈している。1.2m×1.1mで深さ30cm程度あり底面は平らである。覆土は灰褐色土でニガのブロックを含む単層である。シイの実が多く出土している。

10号土坑は、位置的には5号住居跡と重なり合っ
て検出できた。調査時の所見から、5号住居跡とほ
ぼ同時期である。平面形態は、やや南北に長い楕円
形を呈している。南北軸1m×0.8mで深さ10cm程
度あり、中央部は5号住居跡の柱穴と重なっており、
底面形態は不明である。覆土は明茶褐色土の単層で
ある。シイの実が多く出土している。



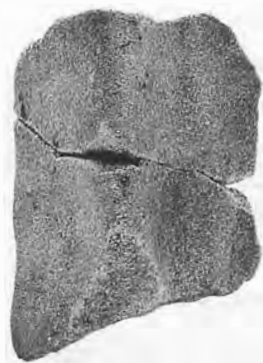
第171図 7・8号土坑実測図 (1/30)



第172図 6号溝実測図 (1/100)

6 溝

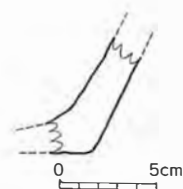
溝は1条検出された。6区に1条である。6号溝と名づけた当溝は、6区調査区南側に沿って検出され一部南側が調査区外に広がる。長さ43m、幅1～1.5mで、深さは20cmから90cmの幅をもつ。西へ向かうほど深くなる傾向になる。覆土は、西側で6層に分けられる。土層堆積状況は、レンズ状である。出土遺物としては、安山岩製のスクレイパーがある。横長剥片素材で、打面部の厚さを薄く減らしている。下端の縁辺は、丁寧ではないが二次加工が施されている。また、炭が出土している。さらに、チャート製の片脚部欠損の石鏃が出土している。土器では、浅鉢の口縁部片が2点ある。縄文時代後期から晩期である。うち、1点は、波状口縁となるものである。



図版126 6号溝出土土器



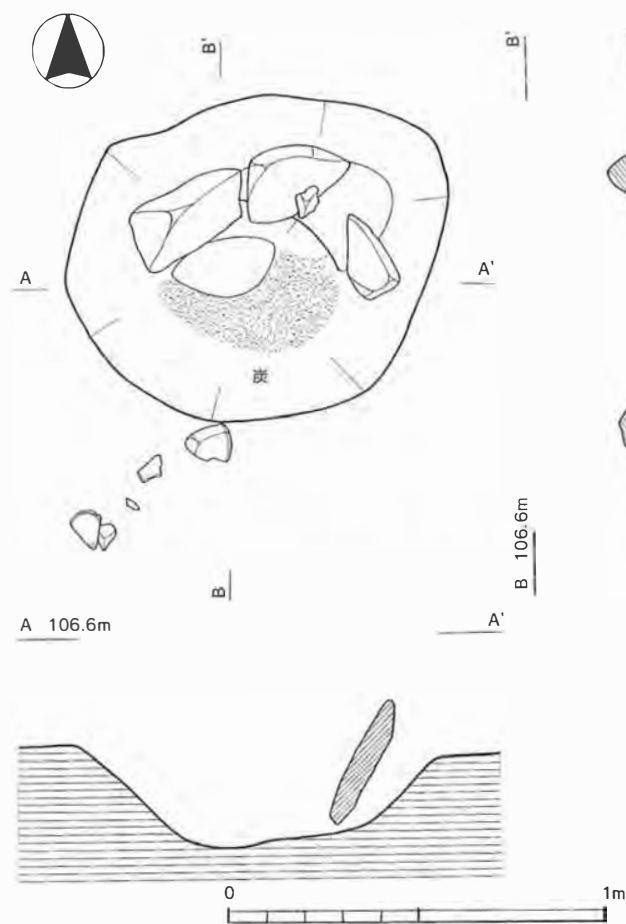
図版127 1号石組炉出土土器



第174図
1号石組炉出土土器
(1/4)

7 石組炉

石組炉は、2区より1基検出できた。大型の角礫



第173図 1号石組炉実測図 (1/20)

が3個体残存していたが、南半部の空白地帯にも本来は存在していたのであろう。掘り込みの規模は、80cm程度の円形で、緩やかに落ち込み中央が一番深くなる。20cm程度残存している。なお、中央部に炭の集中が見られた。覆土は、黒褐色土の単層である。出土遺物としては、ポロポロの縄文土器の底部が出土した。火を受けた痕跡と考えられ。時期は早期か。底部がかなり厚い。

8 集石

集石は、35基確認できた。掘り込みが確認できたものと、確認できないものがある。検出した地区は、2区8基、4区16基、5区8基、6区3基であり、4区に集中している。特に4区北西隅に集中して見つかった。なお、検出層は、1・2・3・9号はIV層、その他はV層上面から中面である。

1号集石

掘り込みを持たない。礫の重なりも顕著でない。散布状態は2.5m四方に収まるが、中央部1m四方に集中する。円礫が多く、ほぼ全体に熱を受けたと考えられる赤化している礫が多い。出土遺物として、縄文時代後期から晩期の鉢形土器の口縁部片がある。細線羽状文を残す。そのほか石器として、十字形石器や磨石も出土している。



第176図
1号集石出土土器 (1/4)



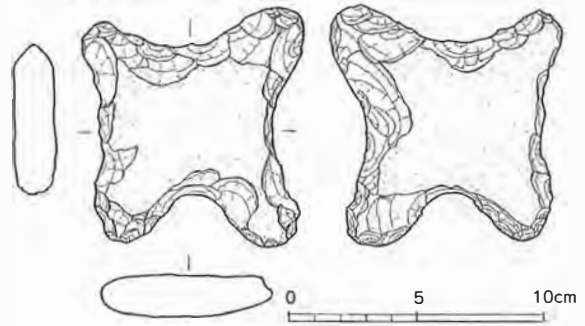
図版128 1号集石出土土器



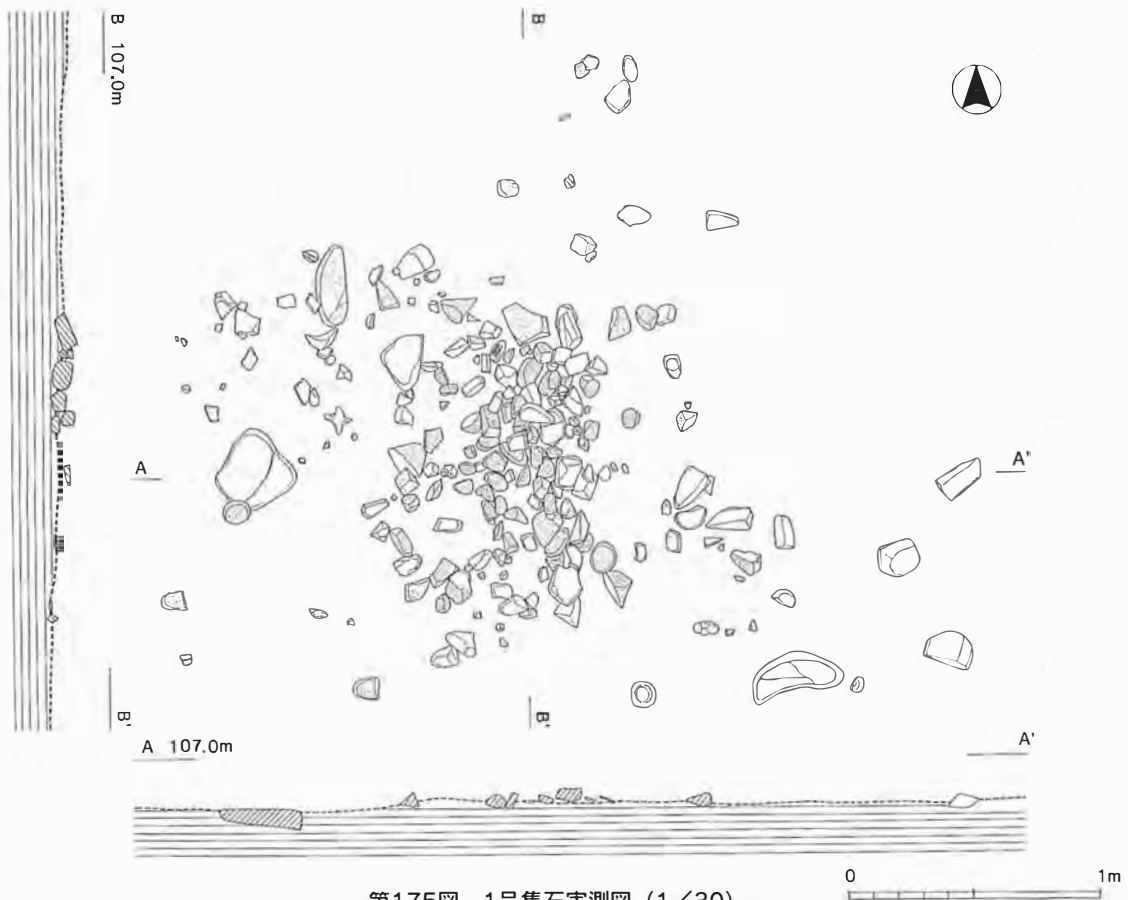
図版129 1号集石出土石器

2号集石

掘り込みを持つ。掘り込みの規模は、1.1m×1.2mの楕円形で、掘り込みは緩やかに落ち中央部が一番深く15cm程度ある。礫の散布状態は東西に長く、3m四方に収まる。礫は東側と西側2カ所に集中が見られるが、西側は散在している状況である。重なった状況ではあるが、底部までは存在しない。覆土はIV層に似ており、焼土とカーボンが若干見られた。出土遺物はないが、覆土から縄文時代後期から晩期



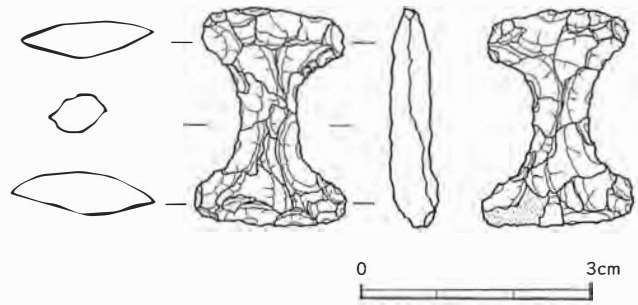
第177図 1号集石出土石器 (1/3)



第175図 1号集石実測図 (1/30)



図版130 1号集石出土石器

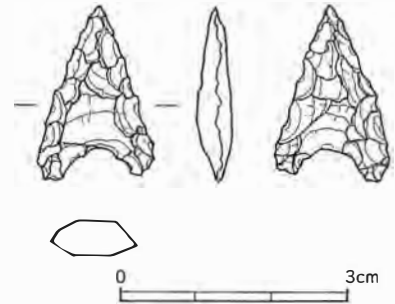


第178図 1号集石出土石器 (1/1)

にかけての所産である可能性が高い。

3号集石

掘り込みを持つ。その形態は東側と南側の一部は攪乱により明瞭ではないが、東西0.9m×南北1mの不定形で、東側に一部出っ張りがある。10cm程度の深さを持ち底面はほぼ平らである。



図版131
2号集石出土石器

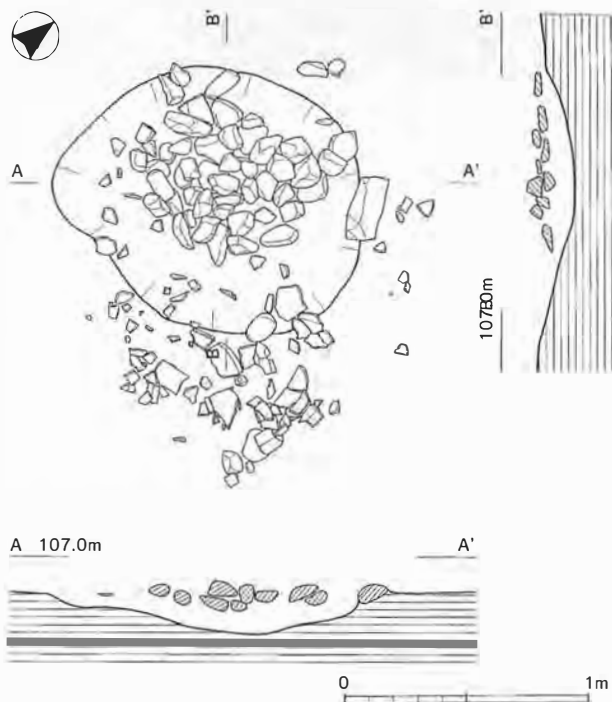
第180図 2号集石出土石器 (1/1)

4号集石

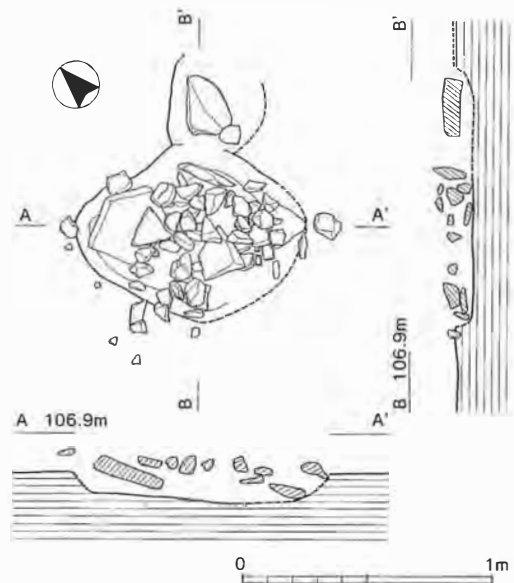
0.9m程度の楕円形の掘り込みを持つ。掘り込み内に礫が集中しており5cmの深さを持つ。礫は多く重なった状態であった。出土遺物はない。

5号集石

掘り込みを持つものであるが、中央のトレンチによって一部不明である。よって、南側の掘り込みはよく分からない。北側は東西0.9m、南北0.7mの掘り込みが確認されているが、深さ5cmとわずかである。礫は基本的に掘り込みの中に入るものであろうが、北側によく集中している。南側中央部では礫が立った状態で、出土しており、それを囲むかのように礫が存在している。



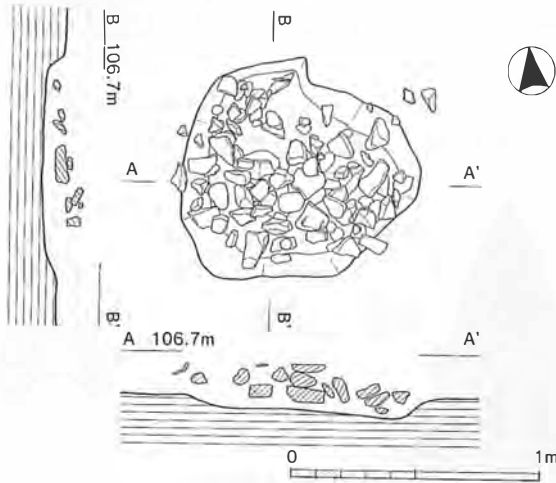
第179図 2号集石実測図 (1/30)



第181図 3号集石実測図 (1/30)

6号集石

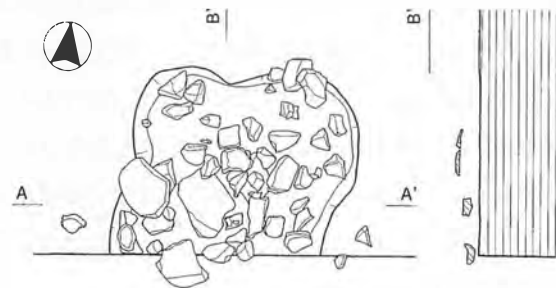
掘り込みを持たない。東西方向1 m、南北方向0.7 mの範囲に収まる。西側に大形礫が見られ、東側は集中している。出土遺物はない。



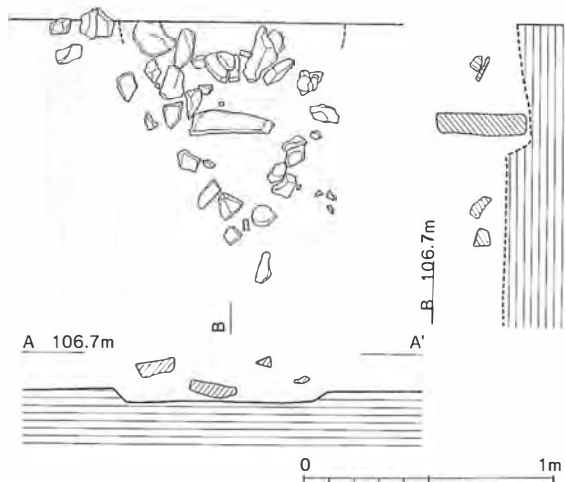
第182図 4号集石実測図 (1/30)

7号集石

掘り込みを持たない。礫は南北に長くまとまっており重なりをもつ。全体的に火を受けている。集中範囲は1 m×0.3m四方程度である。出土遺物はない。



トレンチ



第183図 5号集石実測図 (1/30)

8号集石

0.5m程度の不定形な掘り込みを持つ。深さは7cm程度で西側がやや深くなる。礫はほぼ掘り込み内に収まるが希薄である。出土遺物として円筒形条痕文土器の口縁部から胴部のもがある。縄文時代早期。

9号集石

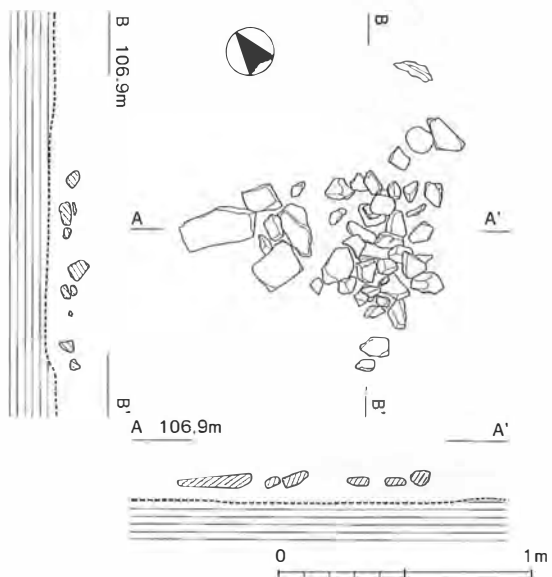
掘り込みを持たない。礫の集中範囲は1 m四方に収まる。中央に大形のものが見られ礫の上面が水平となる。意図的か。出土遺物はない。

10号集石

掘り込みを持たないものである。礫の集中範囲は南北に長い楕円形を呈し、南北軸1.5m、東西軸1.1 m程である。また、最大18cm以上の重なりをもっている。出土遺物はない。



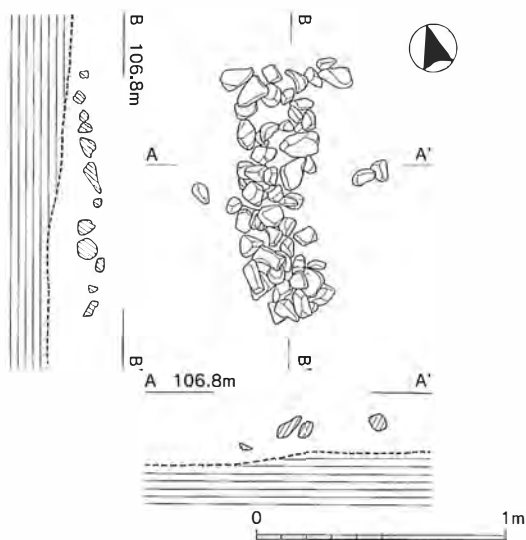
図版132 6号集石検出状況



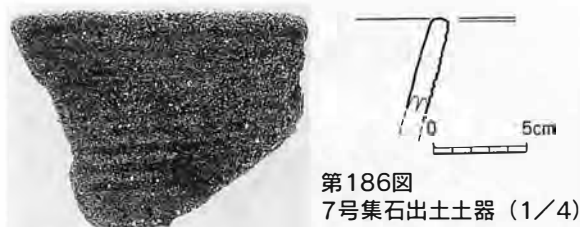
第184図 6号集石実測図 (1/30)

11号集石

掘り込みを持つ。1.2m四方の楕円形で10cm程度の深さをもち浅い皿状を呈する。礫はその中に集中し、ぎっしり詰まった状態であった。出土遺物はない。



第185図 7号集石実測図 (1/30)

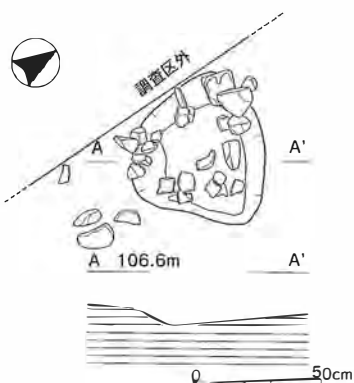


第186図 7号集石出土土器 (1/4)

図版133 7号集石出土土器

12号集石

掘り込みを持たない。礫の集中範囲は1.1m四方に収まり、円形に集積する。10cm程度の重なりがある。出土遺物はない。



第187図 8号集石実測図 (1/30)



図版134 8号集石出土土器

第188図 8号集石出土土器 (1/4)

13号集石

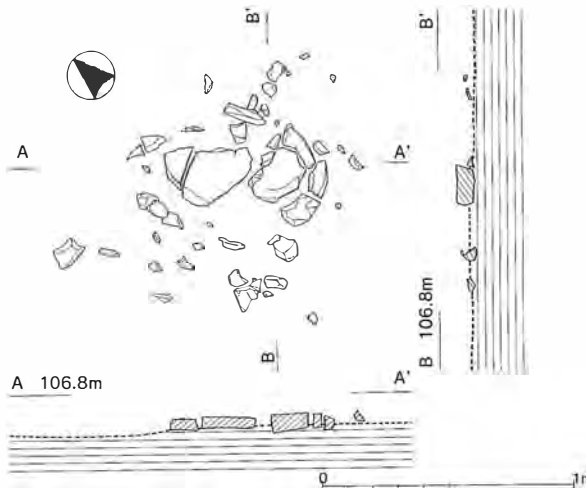
掘り込みを持たない。礫は重なりがあるものの、南北に長く0.9m、東西0.5mの範囲に散在する。出土遺物はない。

14号集石

掘り込みを持たない。礫は重なりはあるものの、円形に近い形での0.7m四方に散在する状況にある。



図版135 9号集石検出状況



第189図 9号集石実測図 (1/30)

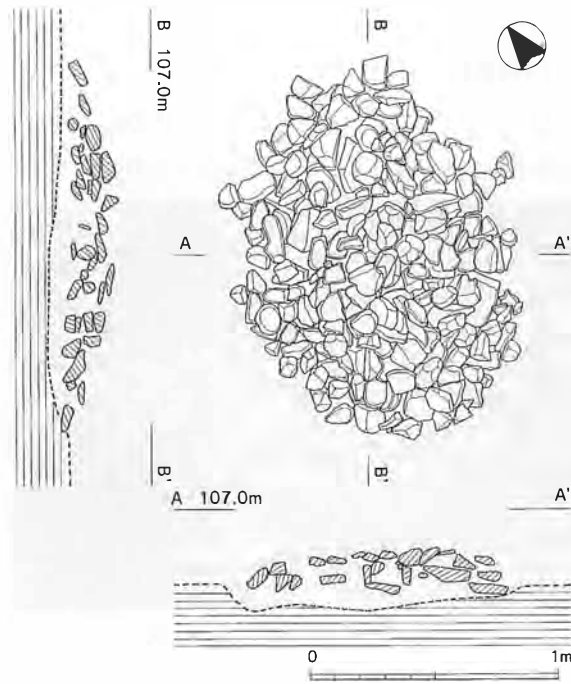
出土遺物はない。

15号集石

掘り込みを持たない。礫は東西に長い1 m四方に



図版136 10号集石検出状況

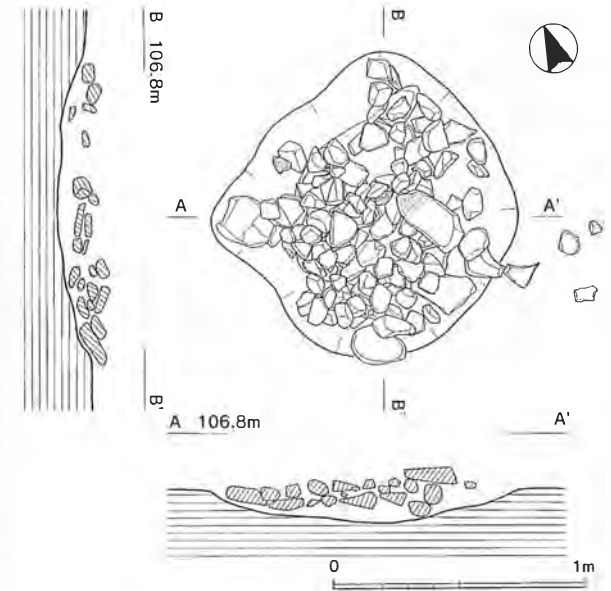


第190図 10号集石実測図 (1/30)

散在するが、中央に大形礫が存在している。出土遺物はない。

16号集石

掘り込みを持たない。礫は南北にやや細長く存在する。南北軸1.5m、東西軸0.5mの範囲で東側にやや重なりが見られる。出土遺物はない。



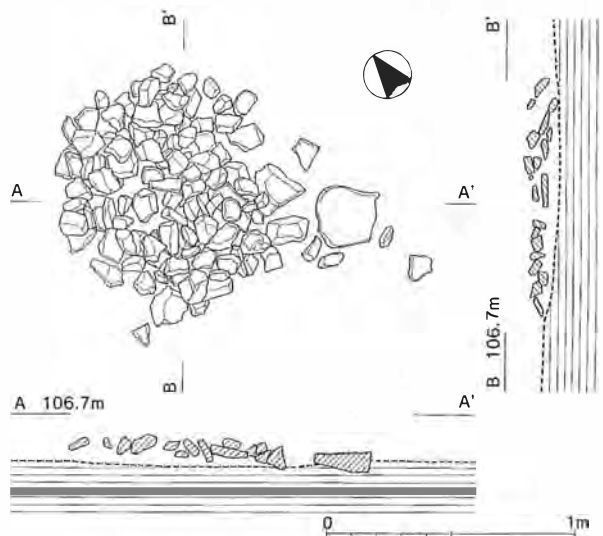
第191図 11号集石実測図 (1/30)

17号集石

掘り込みを持たない。礫は東西にやや長く0.9m、南北に0.7mの範囲に収まり、重なりが見られる。出



図版137 12号集石検出状況



第192図 12号集石実測図 (1/30)

土遺物はない。

18号集石

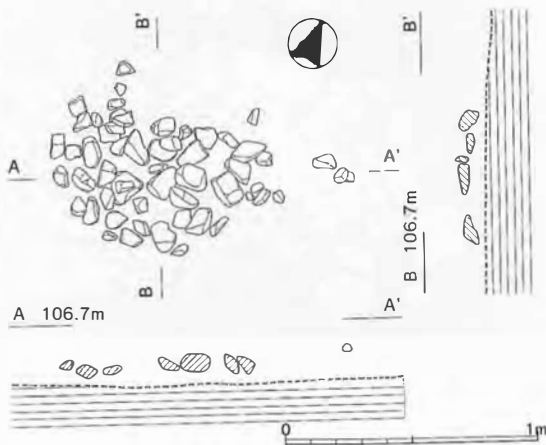
掘り込みを持たない。0.8m四方の範囲に収まり、



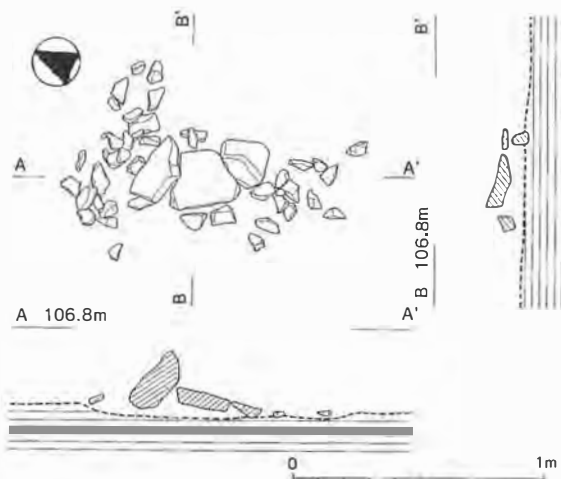
図版138
13号集石検出状況

第193図 13号集石実測図 (1/30)

中央に大形礫を据える。南側に偏り重なりがある。出土遺物はない。



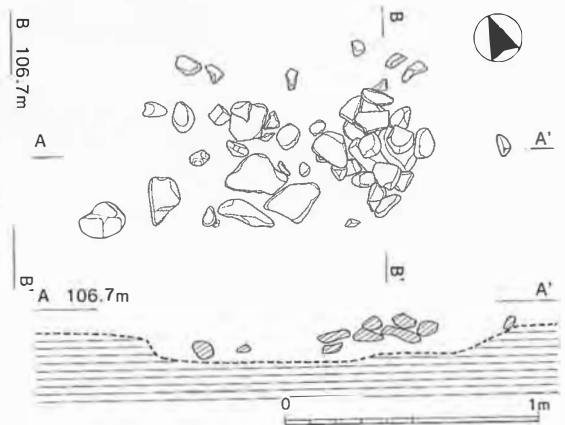
第194図 14号集石実測図 (1/30)



第195図 15号集石実測図 (1/30)



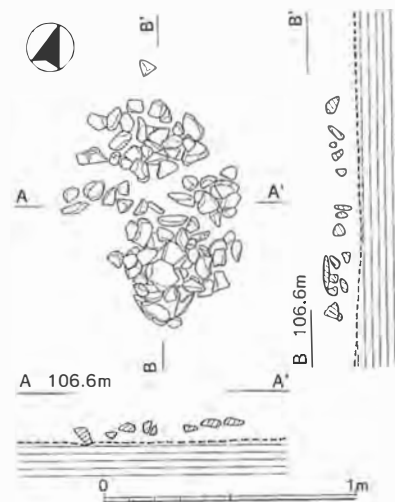
図版139 16号集石検出状況



第196図 16号集石実測図 (1/30)



図版140 17号集石検出状況



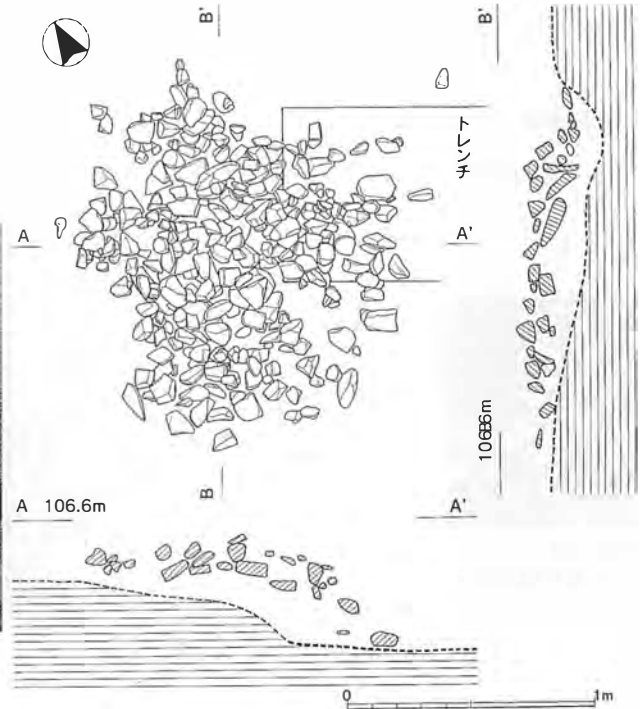
第197図 17号集石実測図 (1/30)

19号集石

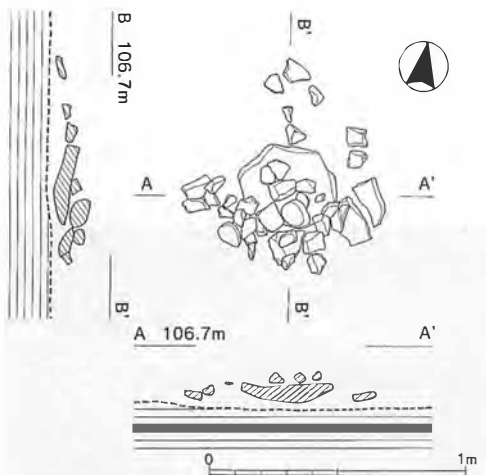
掘り込みを持たない。1.5m四方の楕円形に礫が集まり、重なりをもつ。トレンチの下部でも出土しており、上部と下部との礫の厚みは最大40cmに



図版141 18号集石検出状況



第199図 19号集石実測図 (1/30)



第198図 18号集石実測図 (1/30)



図版142 20号集石検出状況

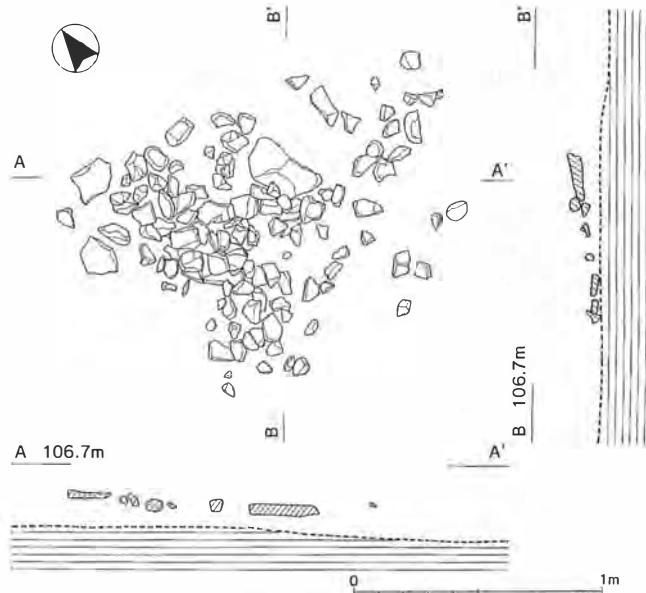
及びそうである。出土遺物はない。

20号集石

掘り込みを持たない。1.5m四方に散在しており、礫の重なりもない。やや南側に集中しているようだ。出土遺物はない。

21号集石

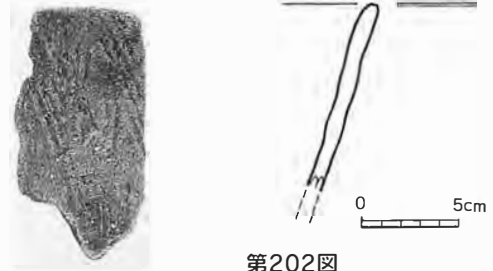
1.2m程度の楕円形の掘り込みを持つ。深さは10cmで底面はほぼ平らであるが、南側は若干下がる。礫は掘り込みの中に集中し、火を受けたと考えられるものが若干含まれている。また、重なりも若干ある。出土遺物はない。



第200図 20号集石実測図 (1/30)

22号集石

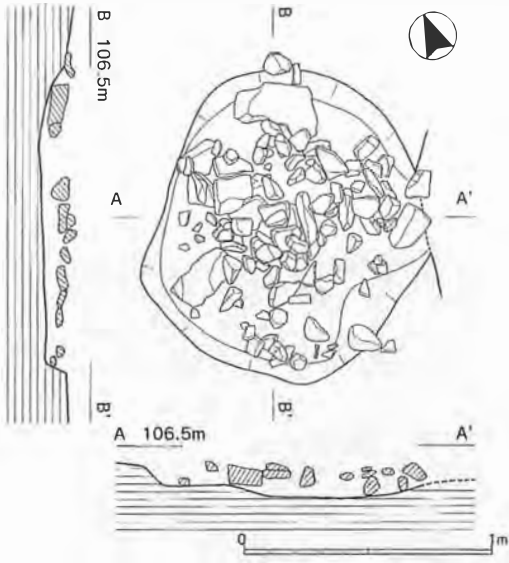
南北にやや長い、不定形の掘り込みを持つ。その規模は南北2.7m×東西1.9mの範囲である。深さは7cmで礫は西側により多く集中している。小形型の礫が多く集中度が強い。火を受けて焼けていると考



第202図

図版143 21号集石出土土器 21号集石出土土器 (1/4)

えられる礫が北側に集中して分布している。



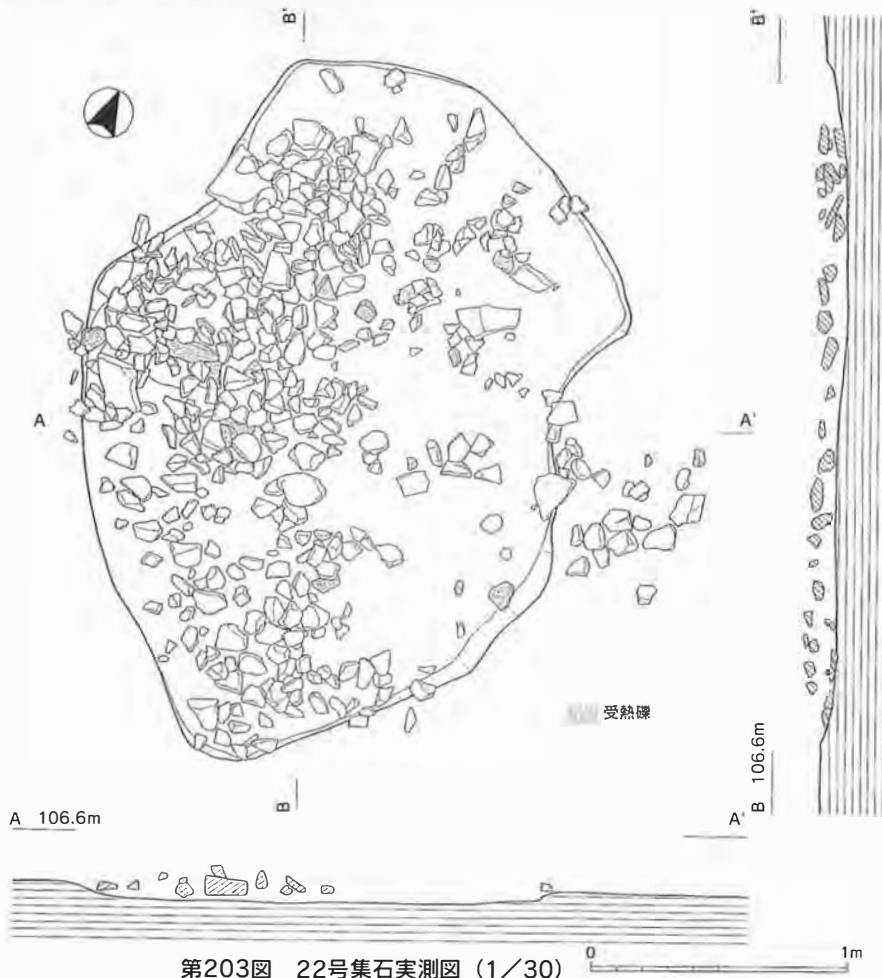
第201図 21号集石実測図 (1/20)



図版144 22号集石検出状況

23号集石

掘り込みを持たない。礫は、1.4×0.8m以上の範囲に広がっており若干の重なりをもつ。ただし、調

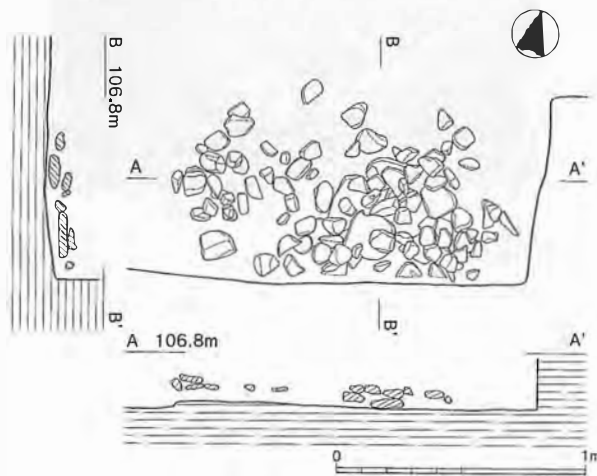


第203図 22号集石実測図 (1/30)

査区外に広がるため詳細は不明である。出土遺物として、焼成前の穿孔があり、把手あるいは口縁部の飾りと考えられるものがある。風化の具合などから縄文時代のものであろうが、この集石に伴うものかどうか不明である。

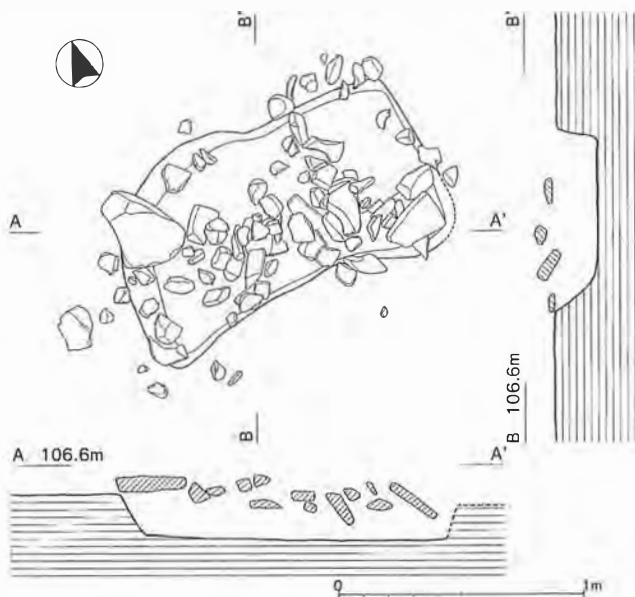
24号集石

方形状を呈する不定形の掘り込みをもつ。長軸1.4m、短軸0.7mで深さは18cm程度である。掘り込みはしっかりしており、底面は平らである。礫はほぼ掘り込み内に収まるが、散在して若干の重なりが見



第204図 23号集石実測図 (1/30)

られる程度である。底面まで達するものは見られない。出土遺物はない。



第205図 24号集石実測図 (1/30)

25号集石

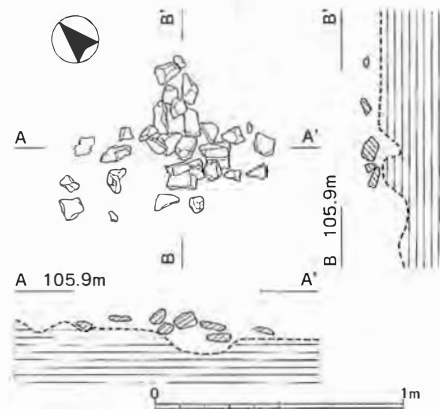
掘り込みを持たない。0.8m四方に散在しているが若干東側に集中が見られる。出土遺物はない。

26号集石

掘り込みを持たない。東側は調査区外にかかるので正確には不明であるが、礫の範囲は1.5m×0.4mの南北に長い形状で散在している。全体的に赤化しているものが多く、火を受けている可能性を示している。出土遺物はない。



図版145 25号集石検出状況



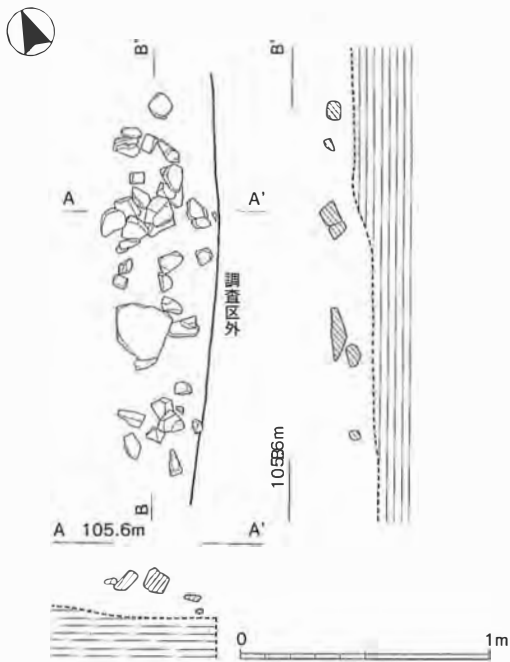
第206図 25号集石実測図 (1/30)

27号集石

掘り込みを持たない。礫はわずかで散在しており、0.6m四方に収まる。出土遺物はない。



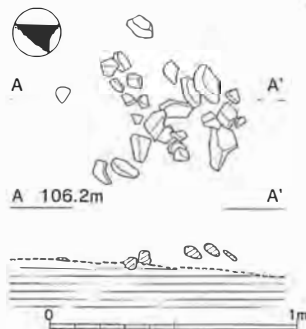
図版146 26号集石検出状況



第207図 26号集石実測図 (1/30)

28号集石

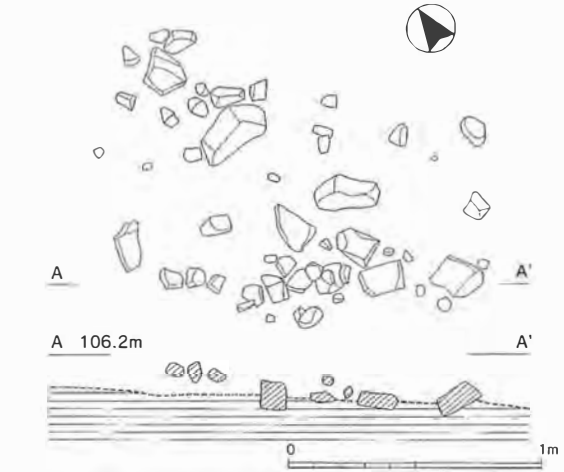
掘り込みを持たない。礫は東西方向に長く、1.5m、南北方向に1mの範囲に散在している。出土遺物はない。



第208図 27号集石実測図 (1/30)

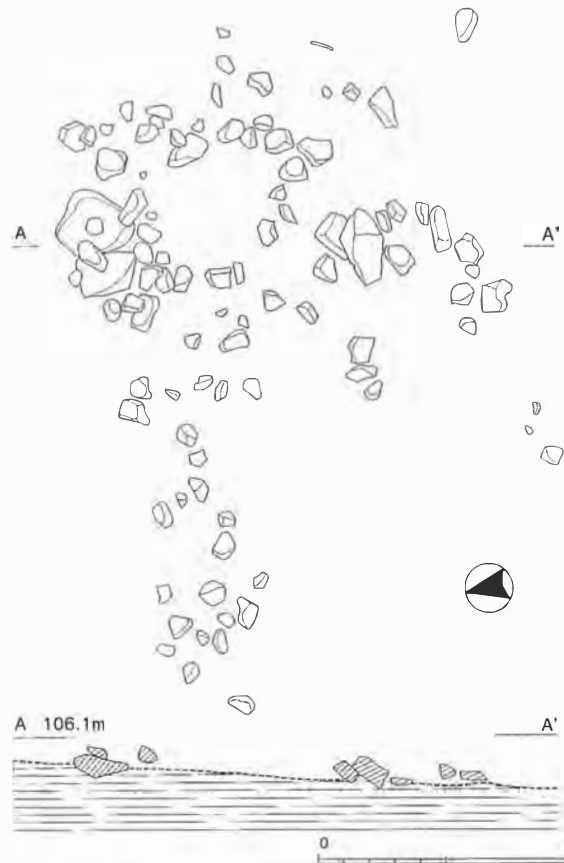
29号集石

掘り込みを持たない。東西方向に長く、2.5m、南北方向に1.7mの範囲に礫は5×3m四方に散在するが、東側に集中する傾向にある。出土遺物はない。



第209図 28号集石実測図 (1/30)

掘り込みを持たない。礫は2mの範囲に散在するが、北東側に集中する傾向にある。また、礫の重なりがある。出土遺物はない。

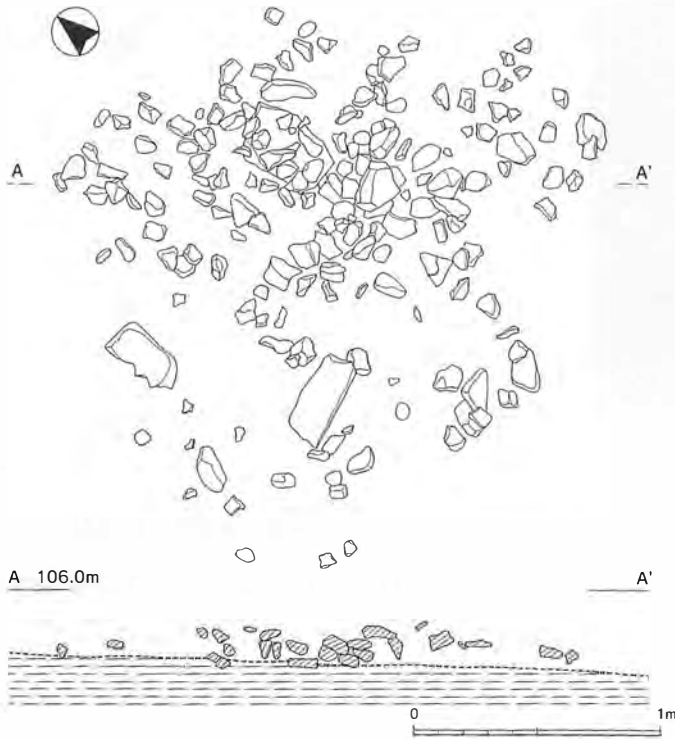


第210図 29号集石実測図 (1/30)

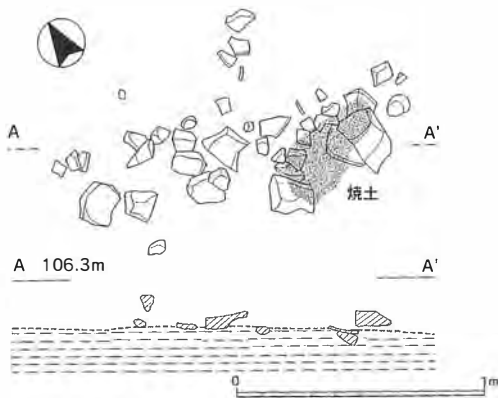
31号集石

掘り込みを持たない。礫は東西に長く、1.4m、南北0.4mの範囲に散在する。厚さは不明であるが、南東隅には焼土が見られた。出土遺物として半分程度残存している浅鉢が出土した。縄文時代晩期の所産か。

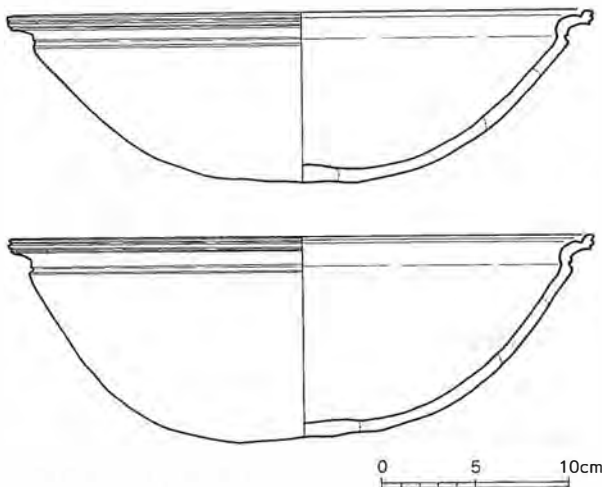
30号集石



第211図 30号集石実測図 (1/30)



第212図 31号集石実測図 (1/30)



第213図 31号集石出土土器 (1/4)



図版147 31号集石出土土器

なお、調査時の所見として、31号集石「周辺の土器（1個体と思われる）も全体的に火を受けている」とある。

32号集石

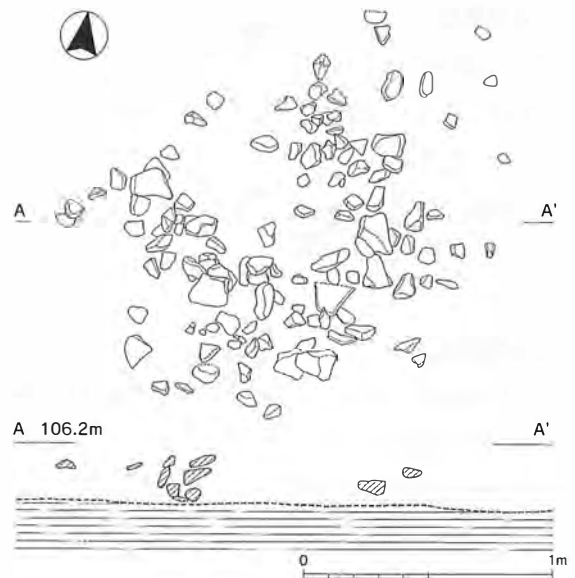
掘り込みを持たない。礫は1.5m四方の範囲に散在しているが、中央が希薄で南側の方に若干集中している。全てではないが、20cmの厚さをもって、重なる部分も見られる。出土遺物はない。

33号集石

掘り込みを持つ。不定形であるが、1.1m四方に収まる。深さは10cm程度ある。礫はほぼ掘り込み内に収まり北東部に集中する傾向にある。出土遺物として粗い条痕の胴部片が1点ある。

34号集石

掘り込みを持つが6号溝に一部切られている。その規模は1m四方のほぼ円形になると考えられる。



第214図 32号集石実測図 (1/30)

深さは10cm程度ある。掘り込みの北側に礫は集中するが、その外側にも散在する。炭化物が出土している。

35号集石

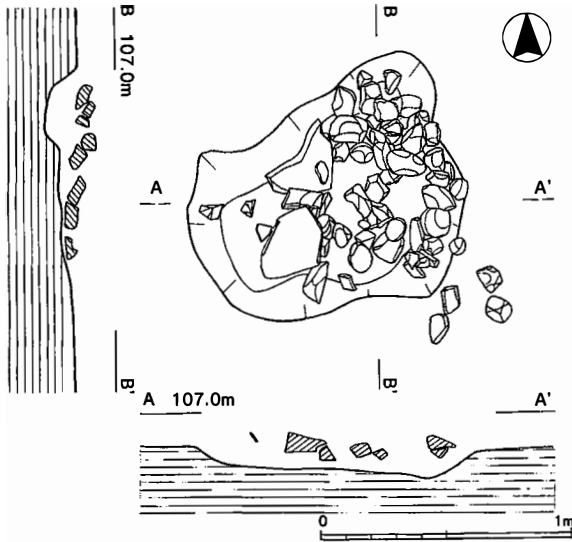
掘り込みを持つ。0.9m×0.7mの楕円形で、やや東西に長いものと、その南側に最低0.5m程度はあろうかと考えられる2つの掘り込みが存在する。礫

は2つの掘り込み内に集中する傾向にあるが、外側にも散在している。北側の掘り込みは、8cm程度の深さをもつ。出土遺物としては、北側に掘り込みをもつ層に混じって、円筒形条痕文土器が割合よく残っている。口縁部から底部まであり、底部については、厚みのある平底である。時期の帰属については、北側のものに限定されるとしても、縄文時代早期のものと考えられる。

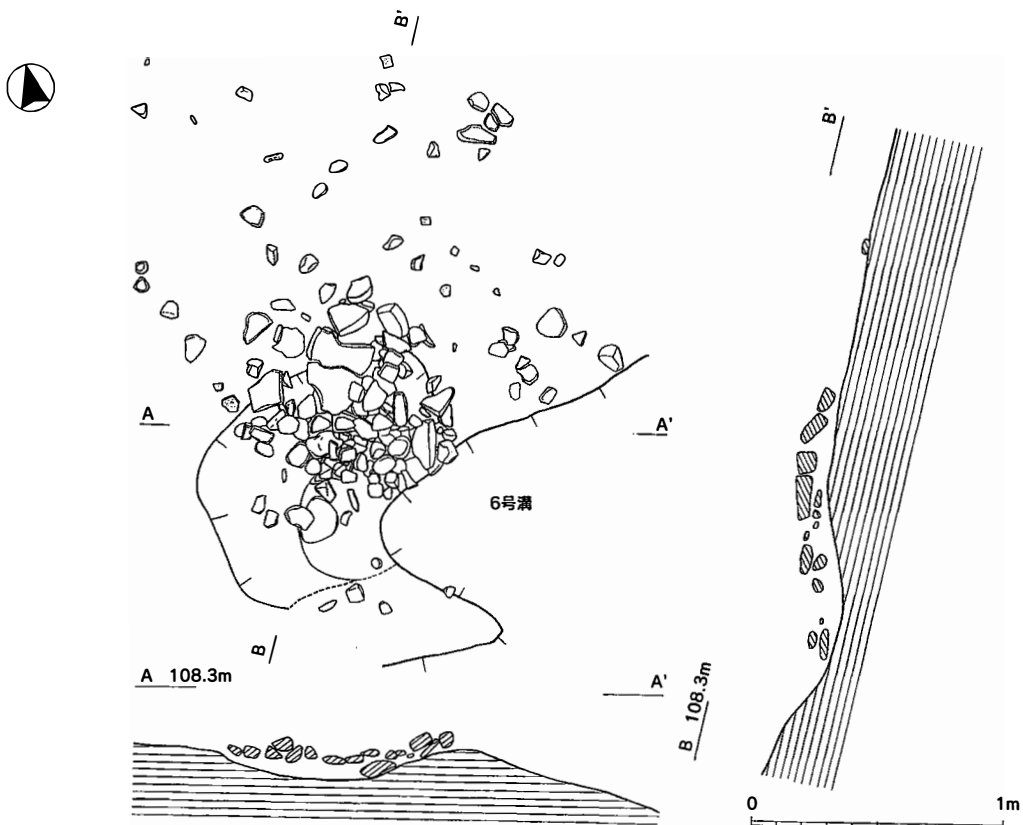
36号集石

V層上面で検出できた。長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形を呈し中には焼礫がある。

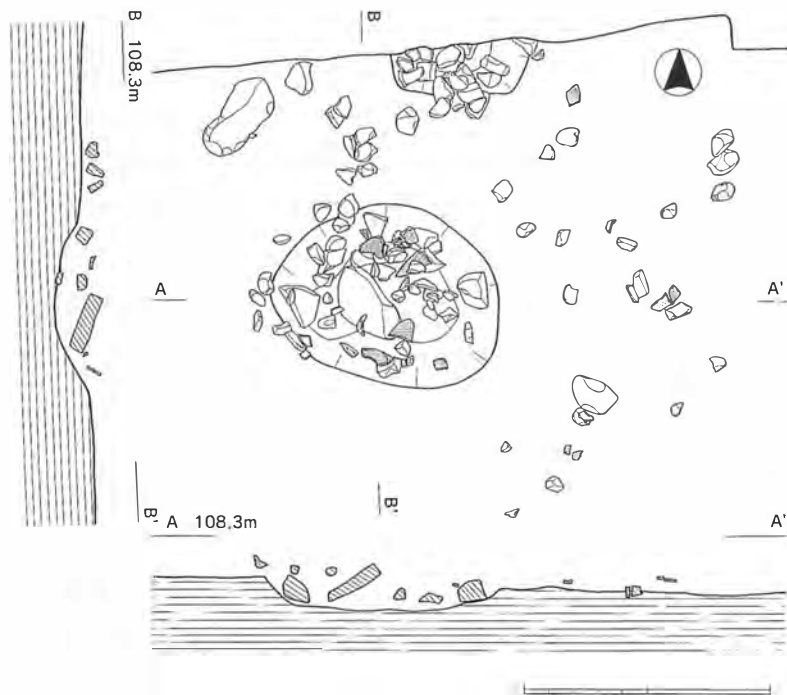
出土遺物としては、円筒形条痕文土器の口縁部が1点出土している。縄文時代早期の所産。覆土はIV層とV層が混じった状態であった。



第215図 33号集石実測図 (1/30)



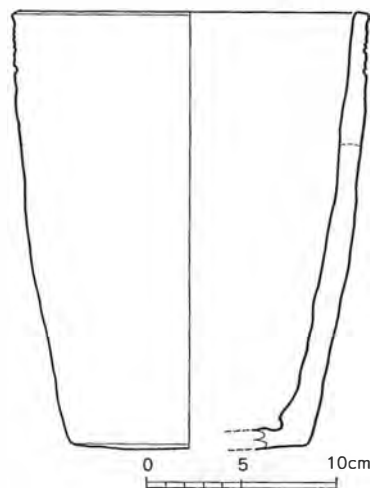
第216図 34号集石実測図 (1/30)



第217図 35号集石実測図 (1/30)



図版148 35号集石出土土器



第218図 35号集石実測図 (1/4)

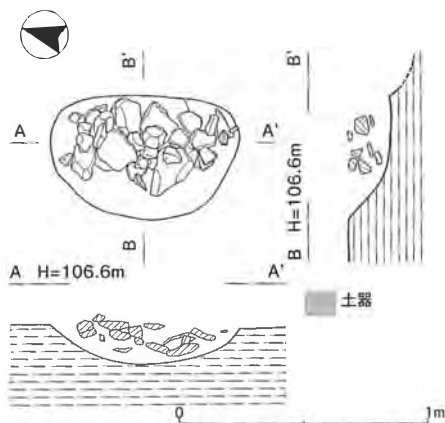
第4節 古代以降の遺構とその遺物

1 溝

溝は5条検出された。1区1条、3区1条、4区2条、6区1条である。

1号溝

調査区北端に東西方向に検出された。長さ27m以上、幅1mから3.5mで西へ行くほど細くなる。深さは最深部で50cm程度あり、北側へ傾斜する。北部



第219図 36号集石出土土器 (1/30)

は調査区外へ広がるため、詳細不明。出土遺物の時期は幅広く、磁器もあり、かなり新しいもので、近世以降であろう。

2号溝

3区北東隅でみつかった。東西方向にのび、東側

は不明瞭である。長さ7m以上、幅0.6~0.8mで深さはわずか7cm程度である。覆土はⅢ層の黒色土で覆土から古代以降のものであろう。出土遺物はない。

3号溝

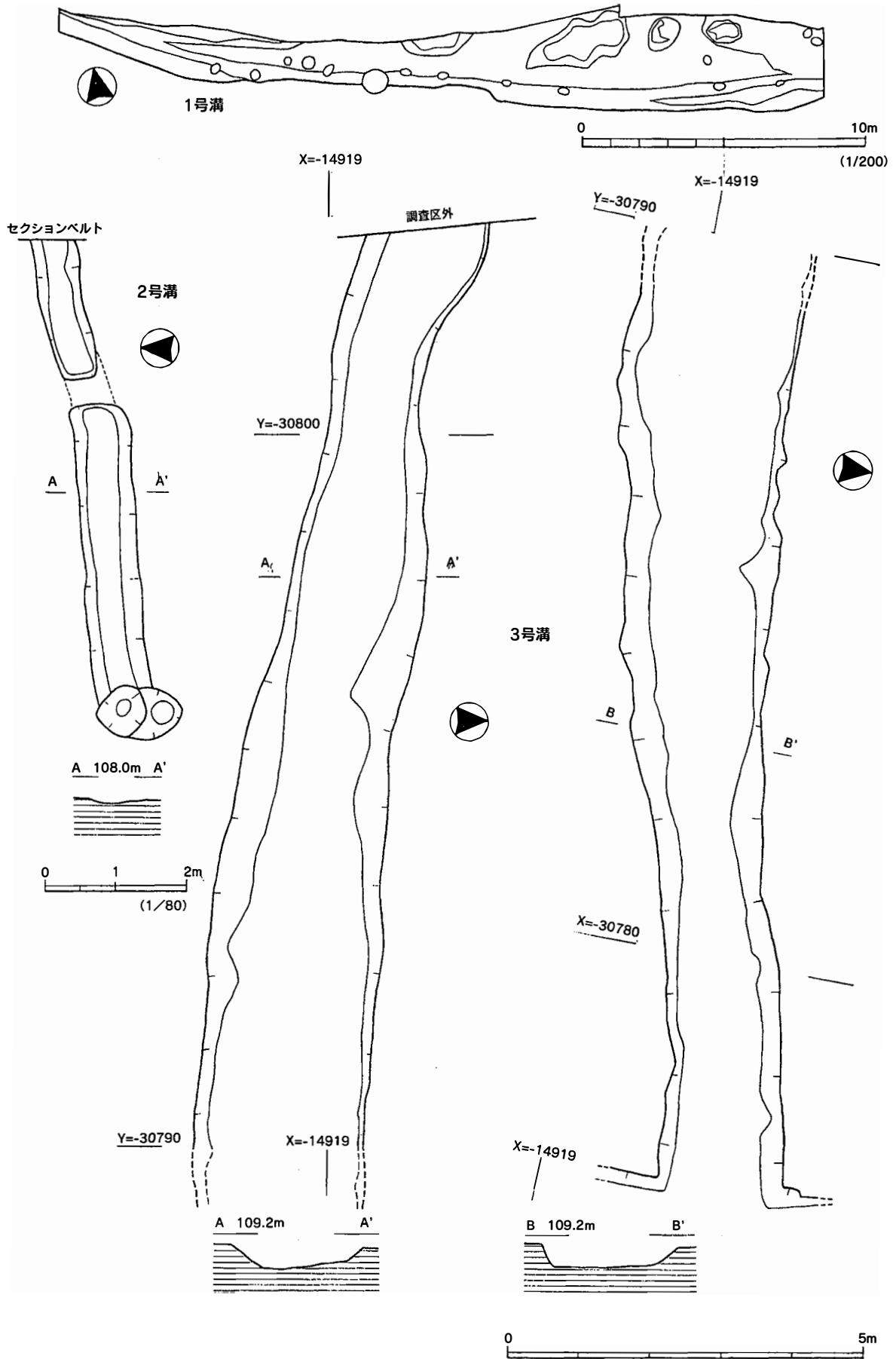
4区北端で見つかった。東西方向に走り、長軸26m、短軸2m、深さ0.3cmをはかる。西端は調査区外に広がる。なお、2号溝と軸を同一とするため、同じ溝の可能性も考えられる。出土遺物はない。

4号溝

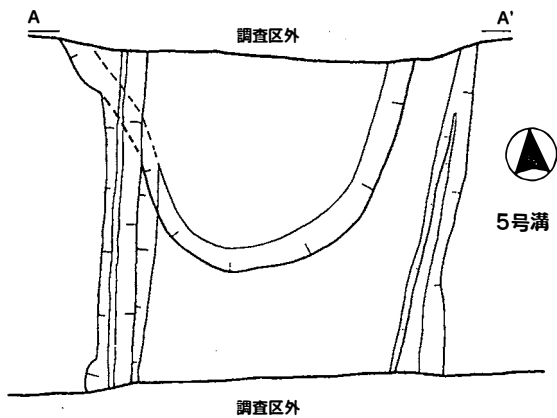
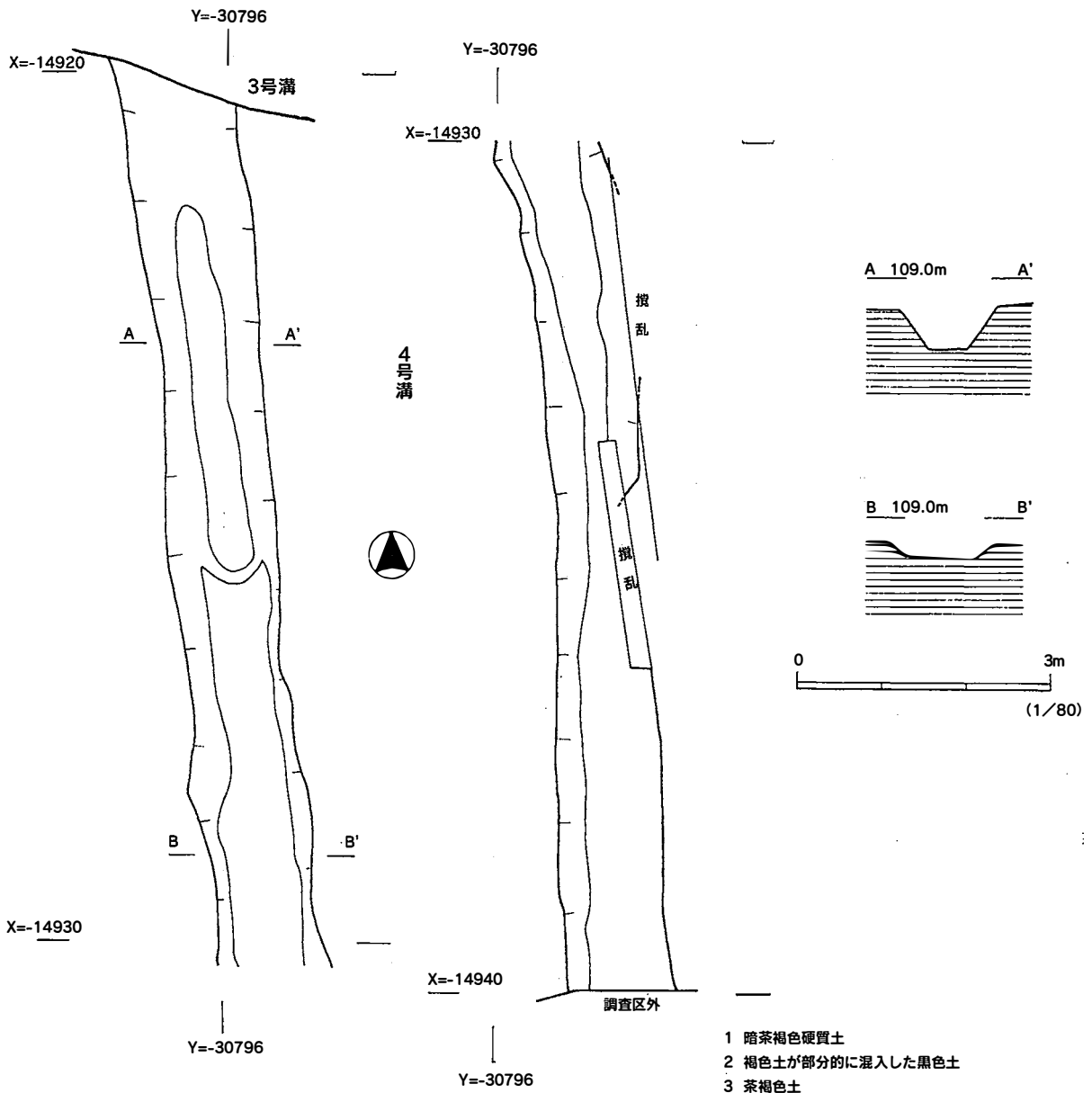
4区西端で見つかったもので、ほぼまっすぐに南北に走る。長さ21m以上、幅1.5m程度である。深さは、20cm~40cmであり、北側が深くなっているようだ。北端は3号溝に切られており、南端は調査区外に広がっている。覆土はⅢ層の黒色土である。出土遺物はない。覆土から古代以降のものであろう。

5号溝

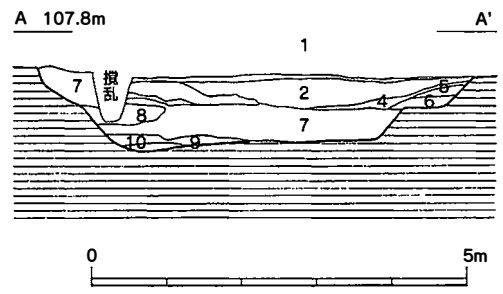
6区東部で検出されたもので、南北にはしる。長さ4m以上、幅5mを計る。覆土は10に分けられ、約70cm程度の深さをもつ。土層堆積状況はほぼ水平



第220図1・2・3号溝実測図 (1/80)



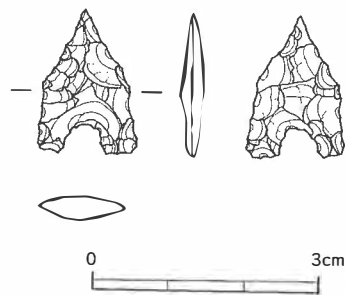
- 1 暗茶褐色硬質土
- 2 褐色土が部分的に混入した黒色土
- 3 茶褐色土
- 4 茶褐色砂質土
- 5 小粒の褐色土が混入した黒色土
- 6 黒褐色砂質土
- 7 暗茶褐色砂質土
- 8 黒色土層
- 9 黒色土が少量混入した褐色土
- 10 黄色土が少量混入した黒色土



第221図4・5号溝実測図 (1/100)



図版149
3号溝出土石器



第222図 3号溝出土石器 (1/1)

である。出土遺物としては炭が出土している。また、陶器高台付き底部片が見つかった。また、すり鉢の胴部があり目の間隔が広い。外面は茶褐色を呈する。これらの時期が一番新しい時期と考えられて、時期決定の物差しとなるであろう。

2 周溝を持つ遺構

5区東端部で見つかった。検出層はIV層上面である。南北軸2.5m、東西軸1.8m以上のもので、東側は調査区外に広がる。推定平面形態は、隅丸方形で20cm幅で、深さ15~20cm程度の周溝が巡る。

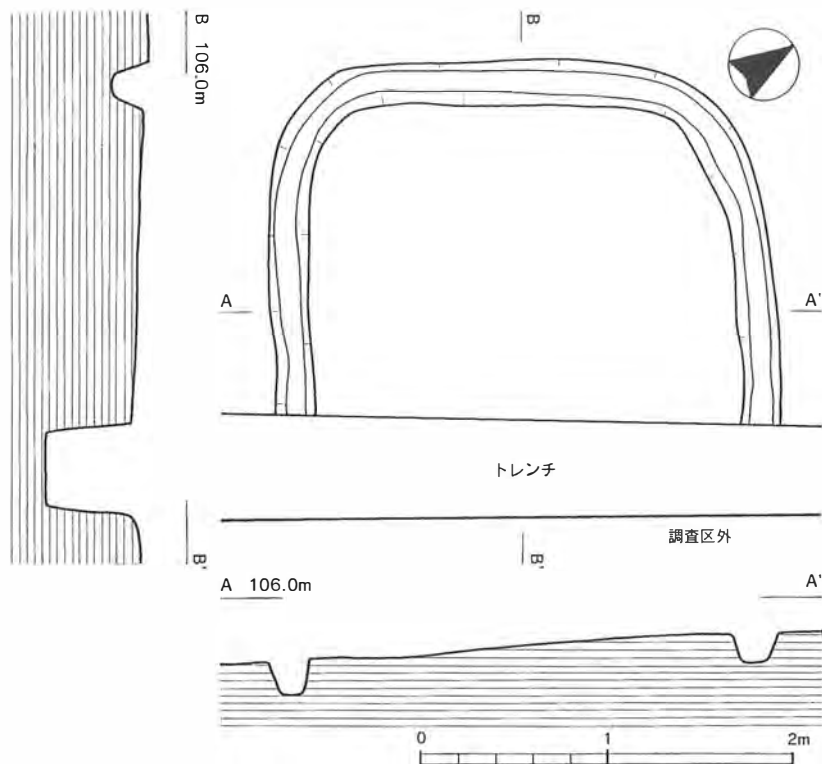
周溝部より6点の土器片が出土した。周溝の覆土はⅢ層と考えられる黒色土で古くとも古代以降の所産であろう。性格等は不明。

3 道路

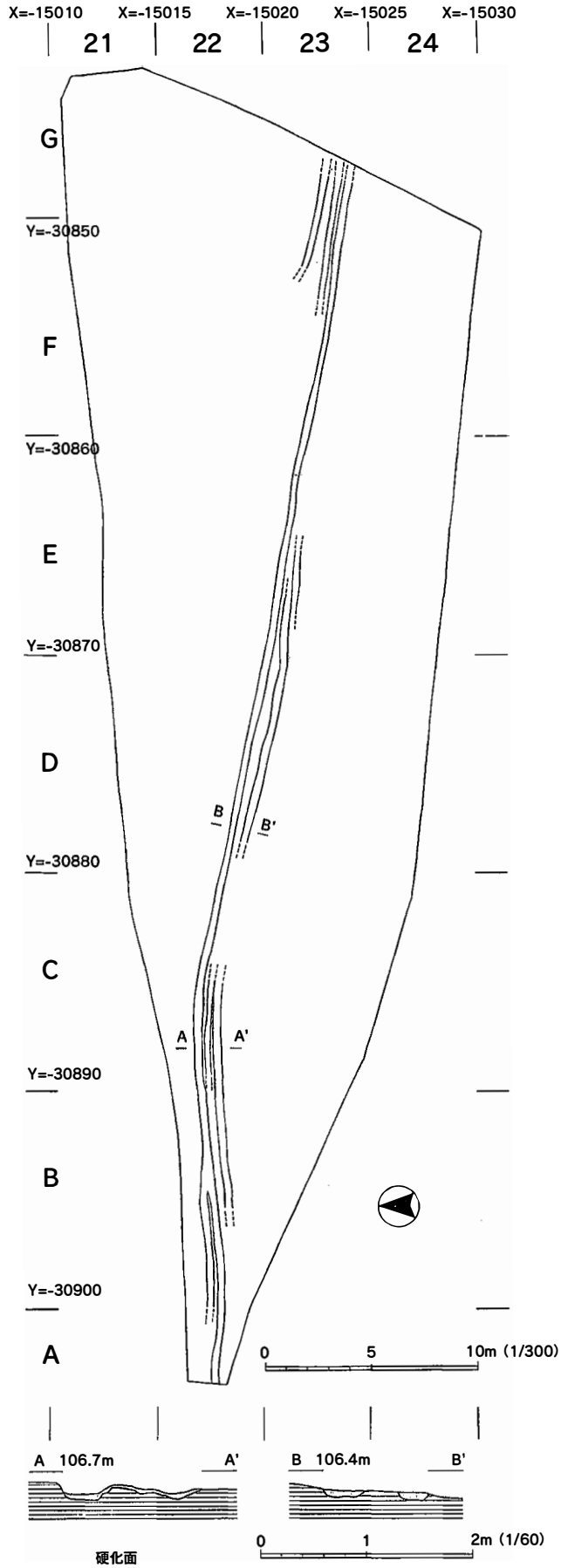
5区では、東西にはしる道路を検出した。検出層はⅢ層下部で、硬化面の連なりを持って認識した。3カ所ほど断ち割った部分では、硬化面の厚さが、15cm程度であった。硬化面の幅をもってこの道路幅と考えたいが、少なくとも、2mはありそうだ。第224図に示した通り、東側では、複数に分かれている。ここでは、同一のものとの認識を持っている。



図版150 周溝をもつ遺構



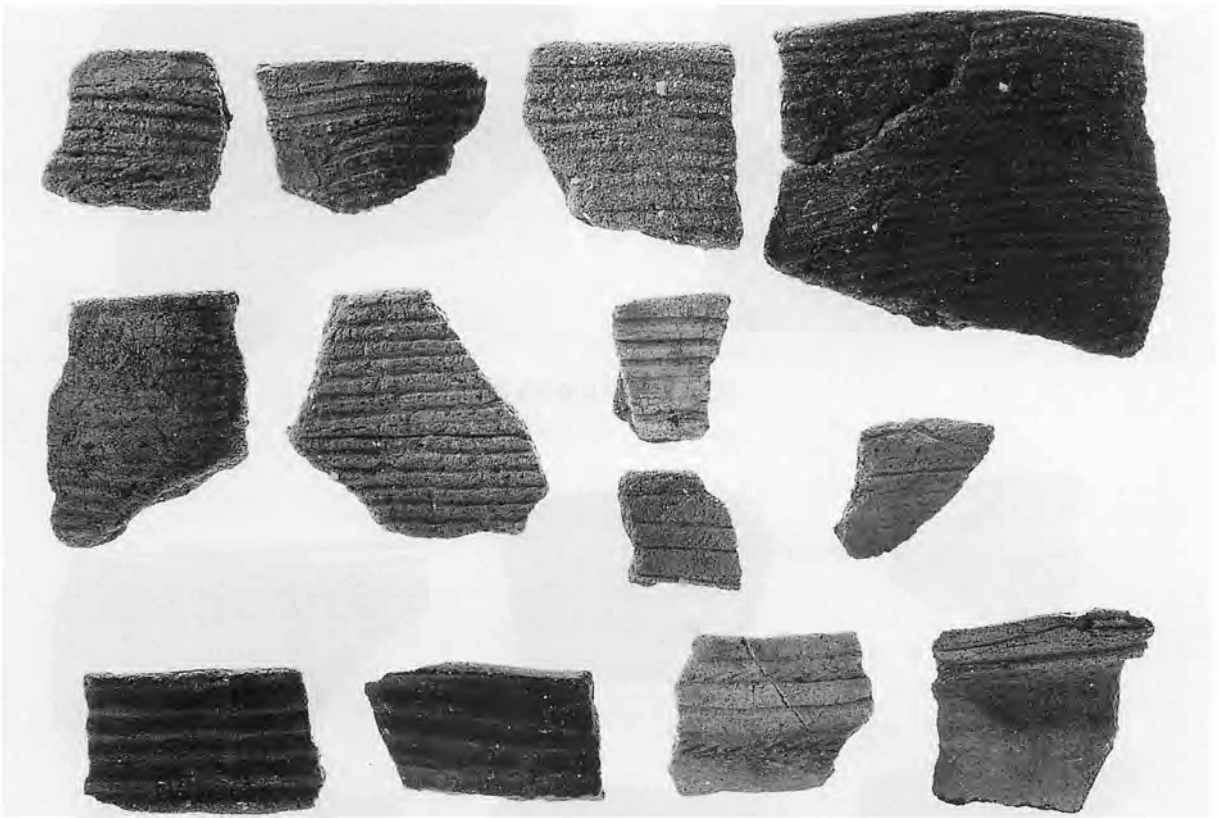
第223図 周溝を持つ遺構実測図 (1/40)



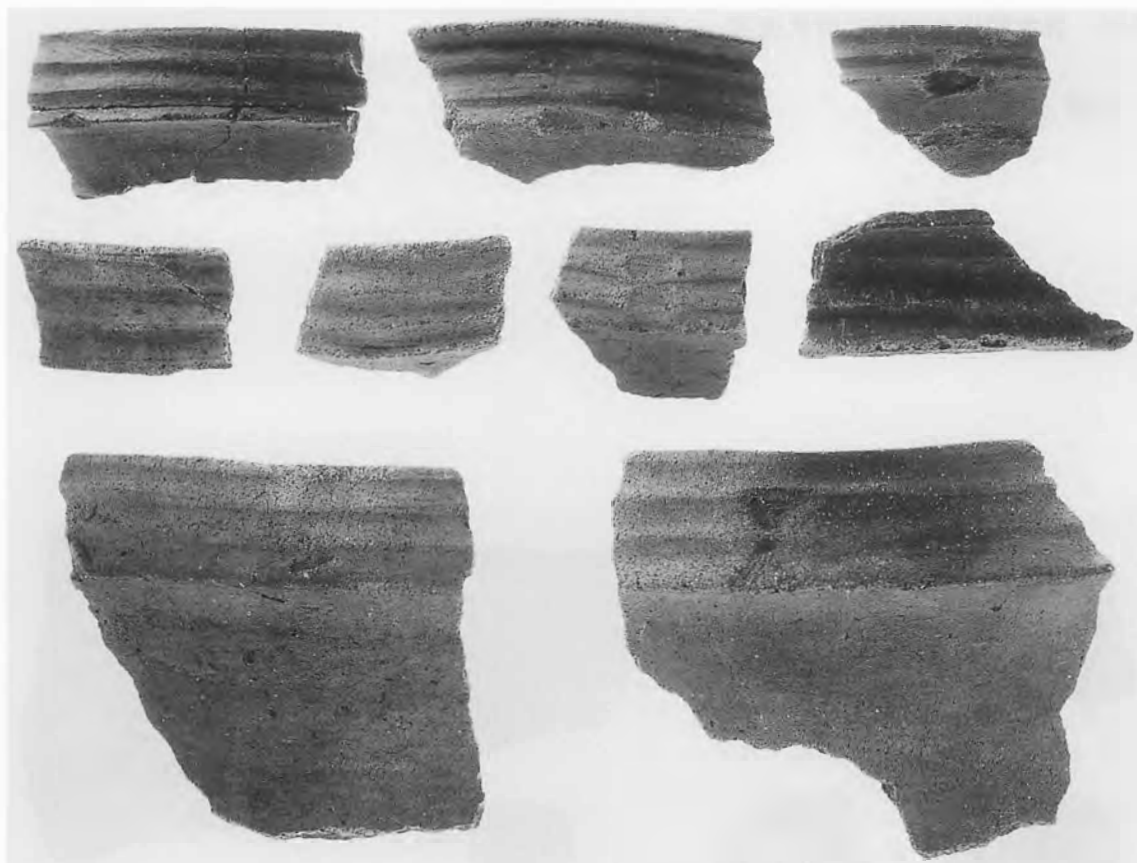
第224図 1号道路実測図 (1/60)

第5節 包含層出土の縄文時代遺物

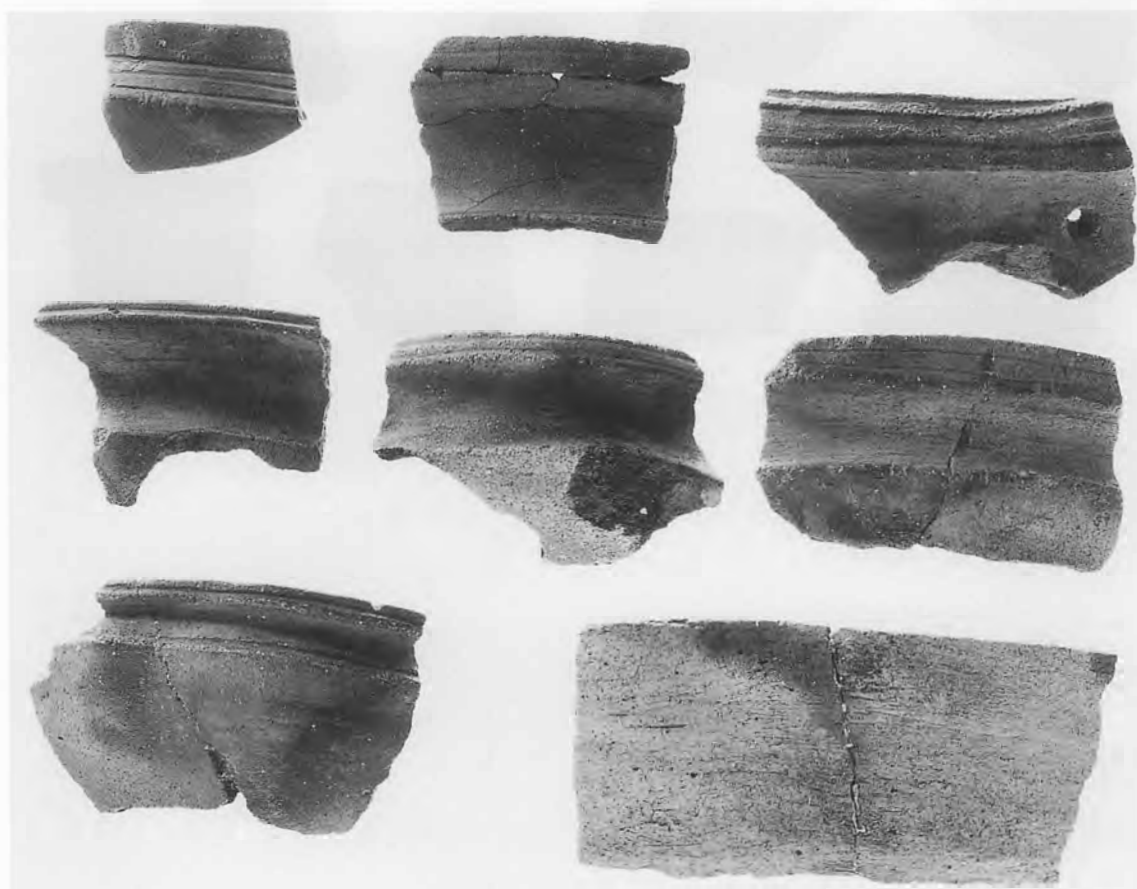
1 土器



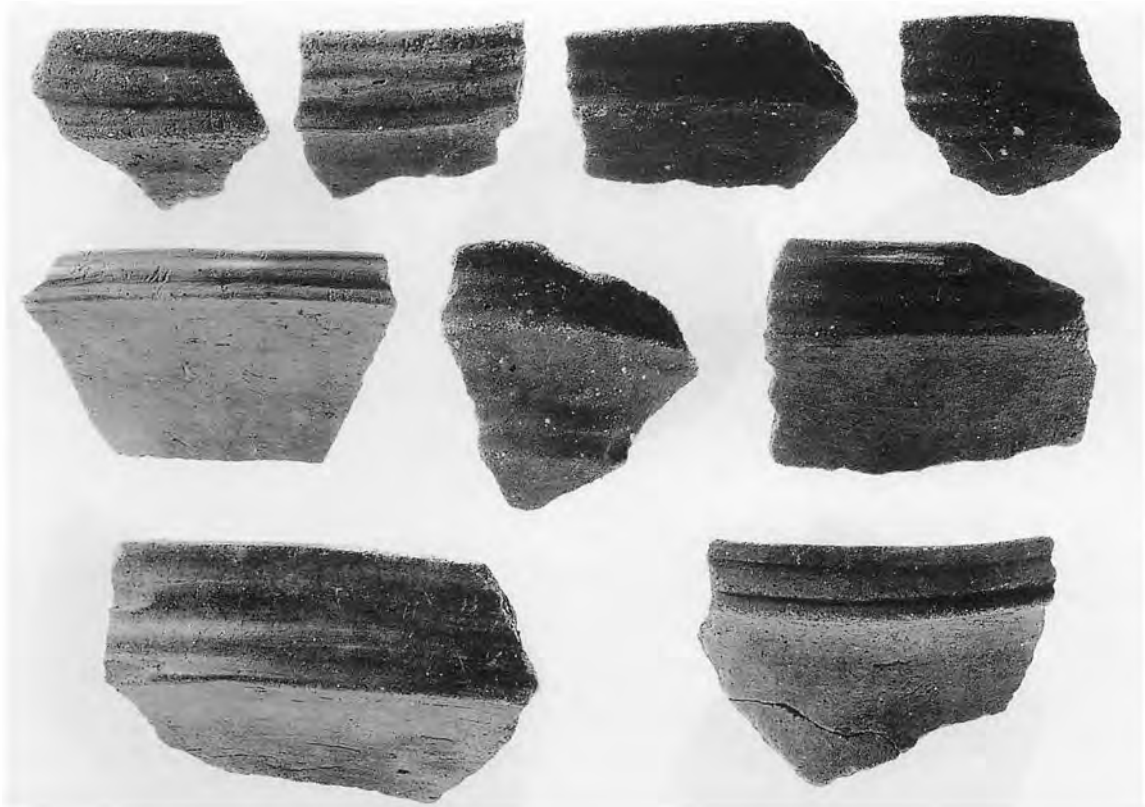
図版151 条痕文土器



図版152 鳥井原式土器



図版153 天城・古閑式土器



図版154 御領式土器



図版155 紡錘車・注口土器



図版156 底部1

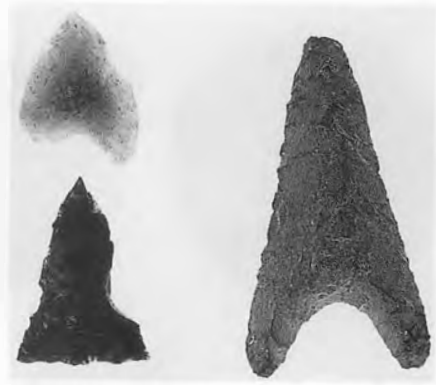


図版157 底部2

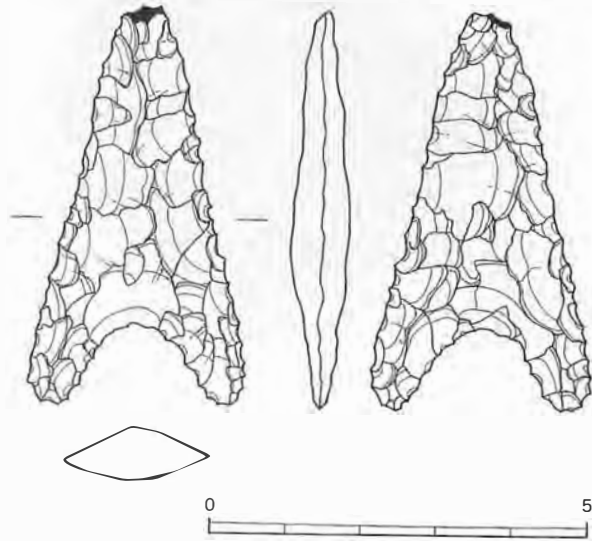
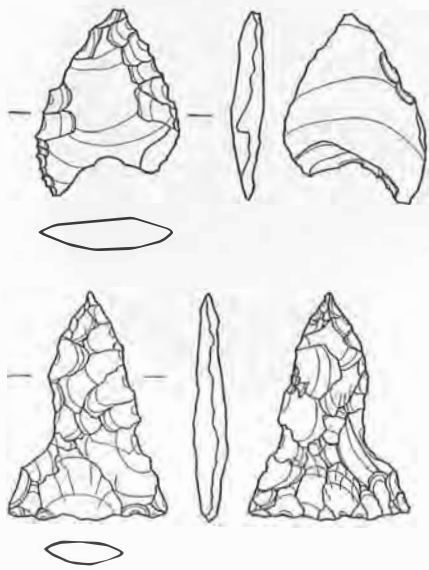


図版158 底部3

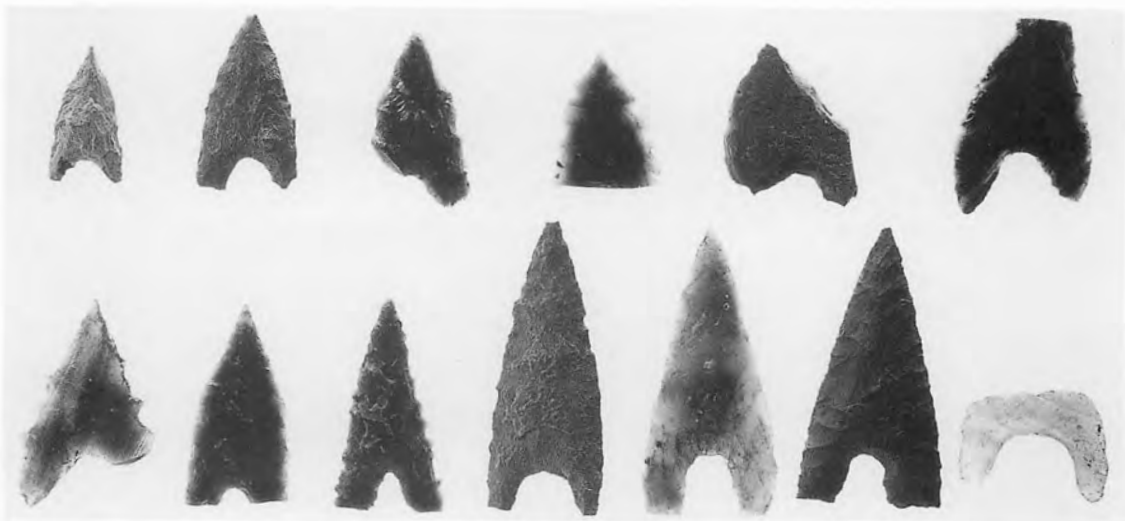
2 石器



図版159 石鏃1



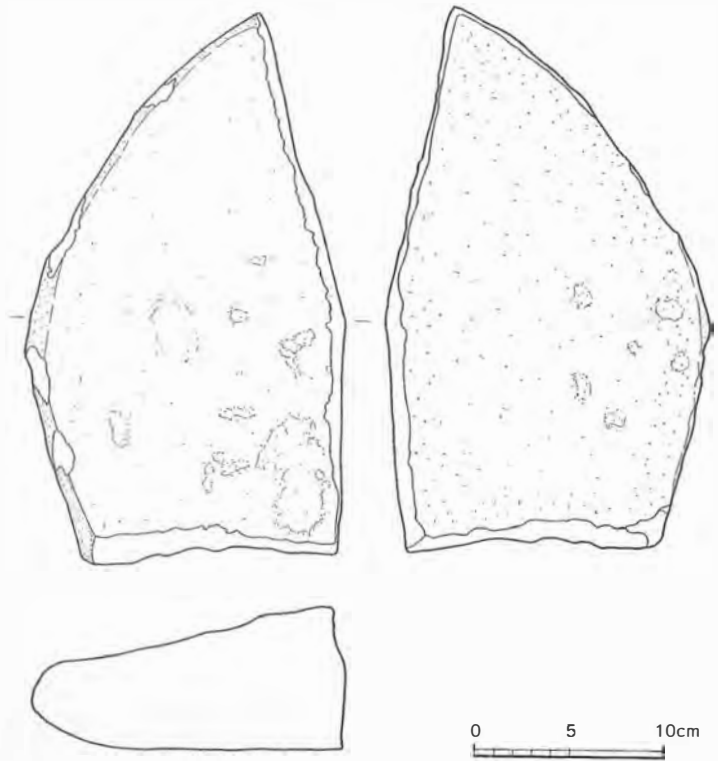
第225図 石鏃実測図 (1/1)



図版160 石鏃2



図版161 石皿1



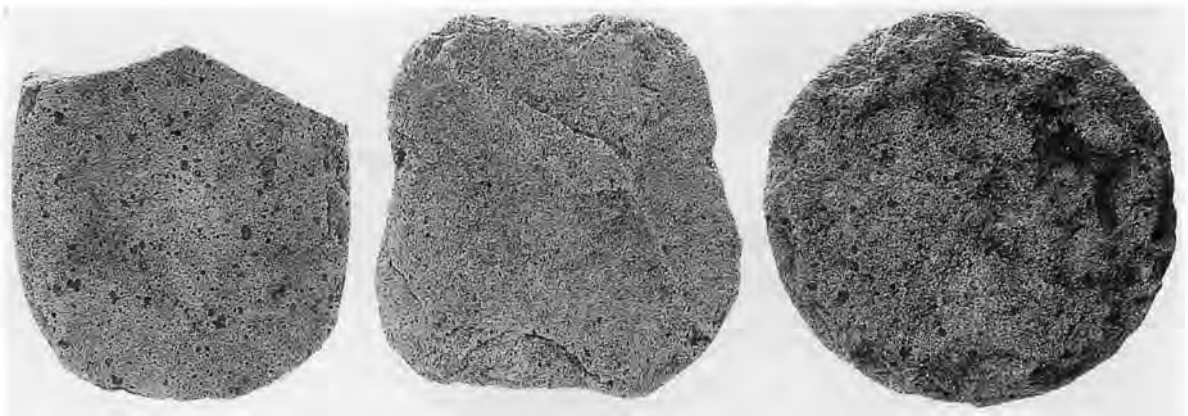
第226図 石皿実測図 (1/4)



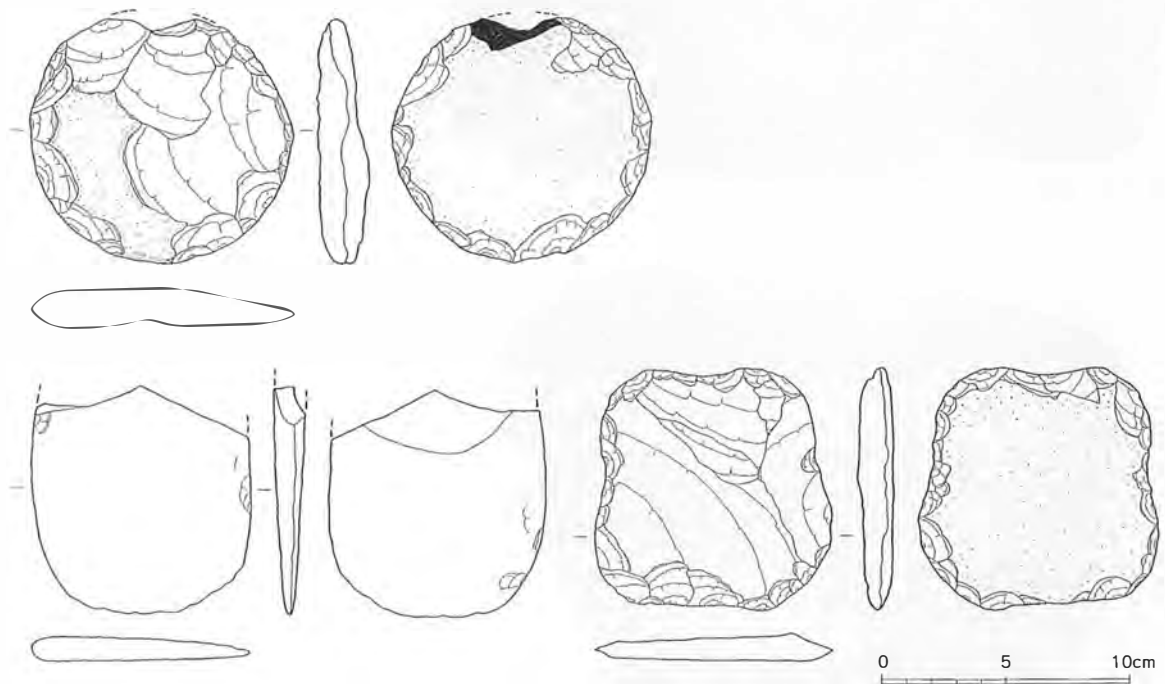
図版162 石皿2



図版163 石皿3



図版164 石斧類



第227図 石斧類実測図 (1/3)



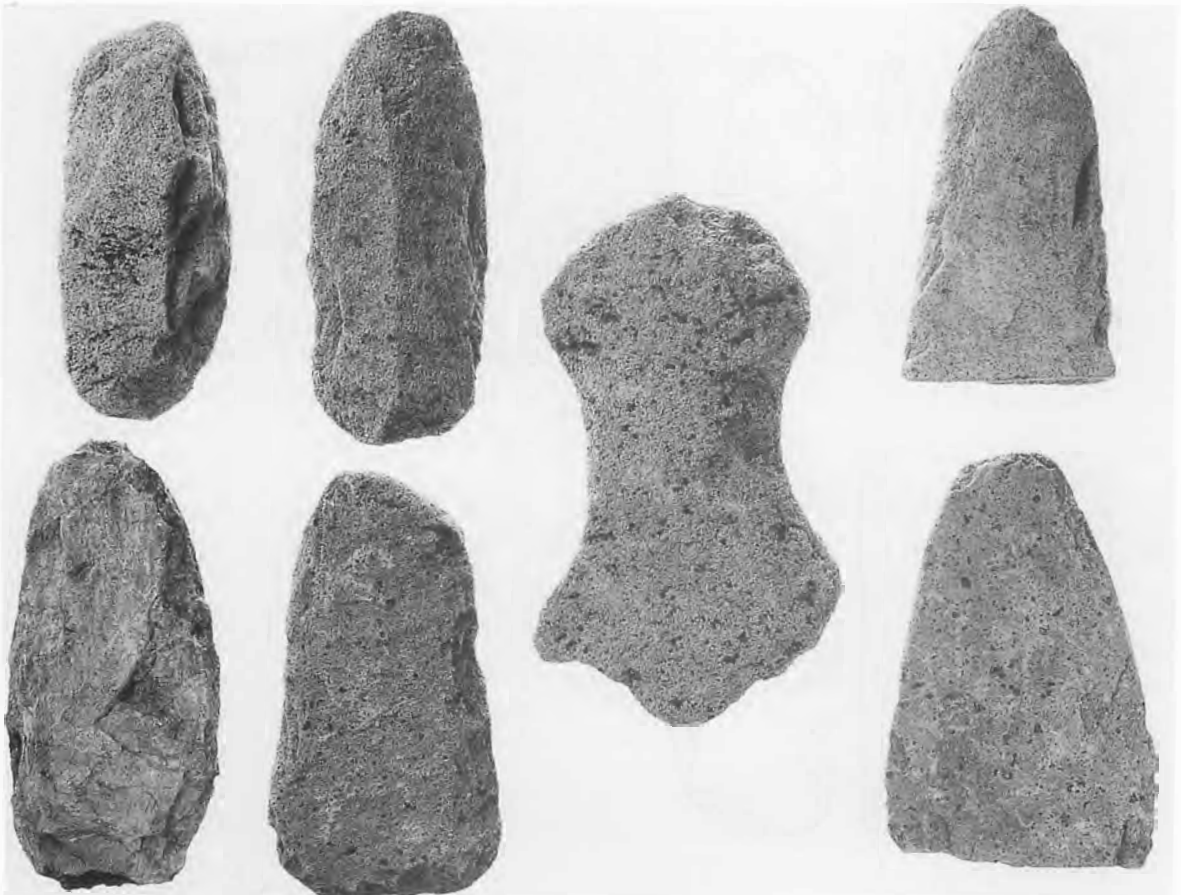
図版165 扁平打製石斧



第228図 扁平打製石斧実測図 (1/3)



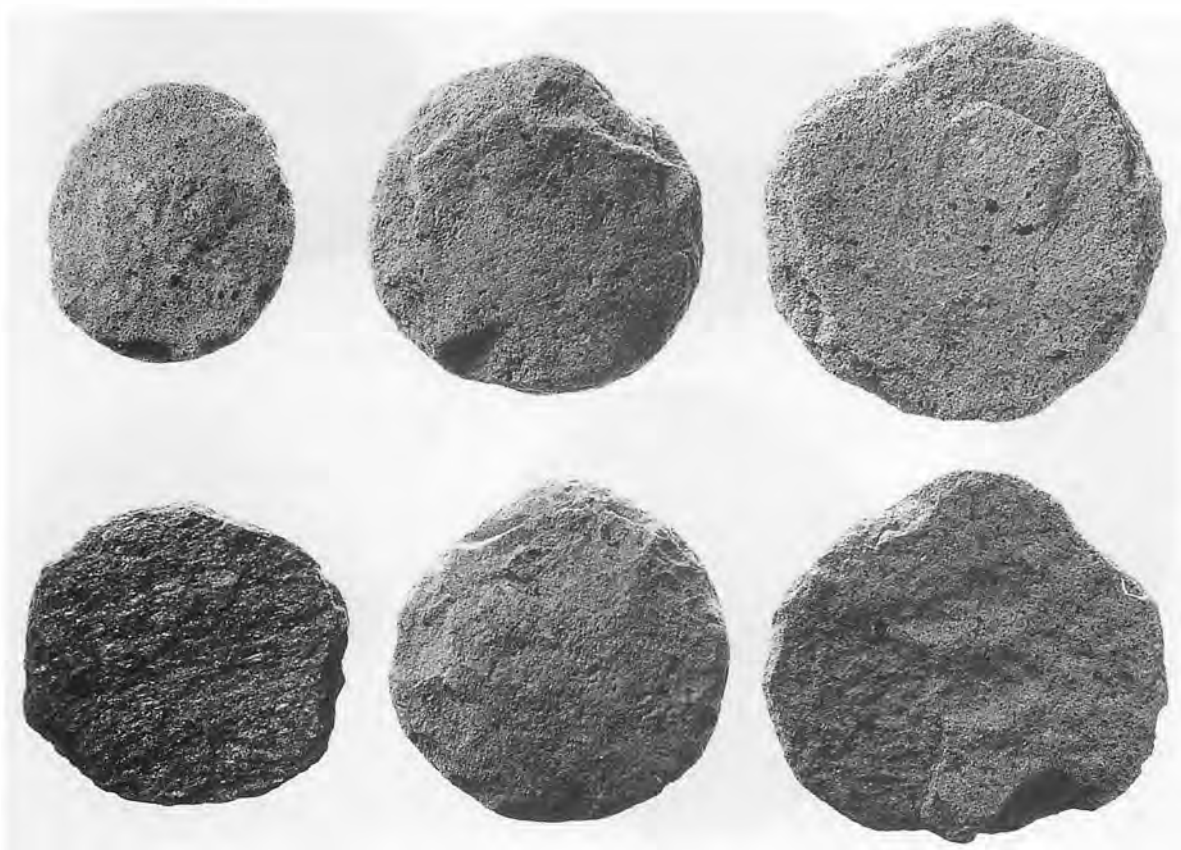
図版166 打製石斧 1



図版167 打製石斧 2



図版168 打製石斧 3



図版169 円盤状石器



図版170 十字形石器



図版171 磨石・敲石



図版172 スクレイパー



図版173 石錘



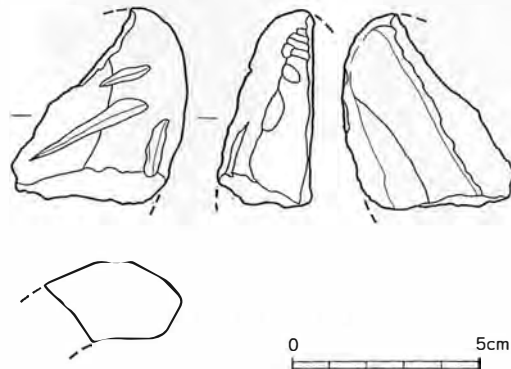
図版174 原石



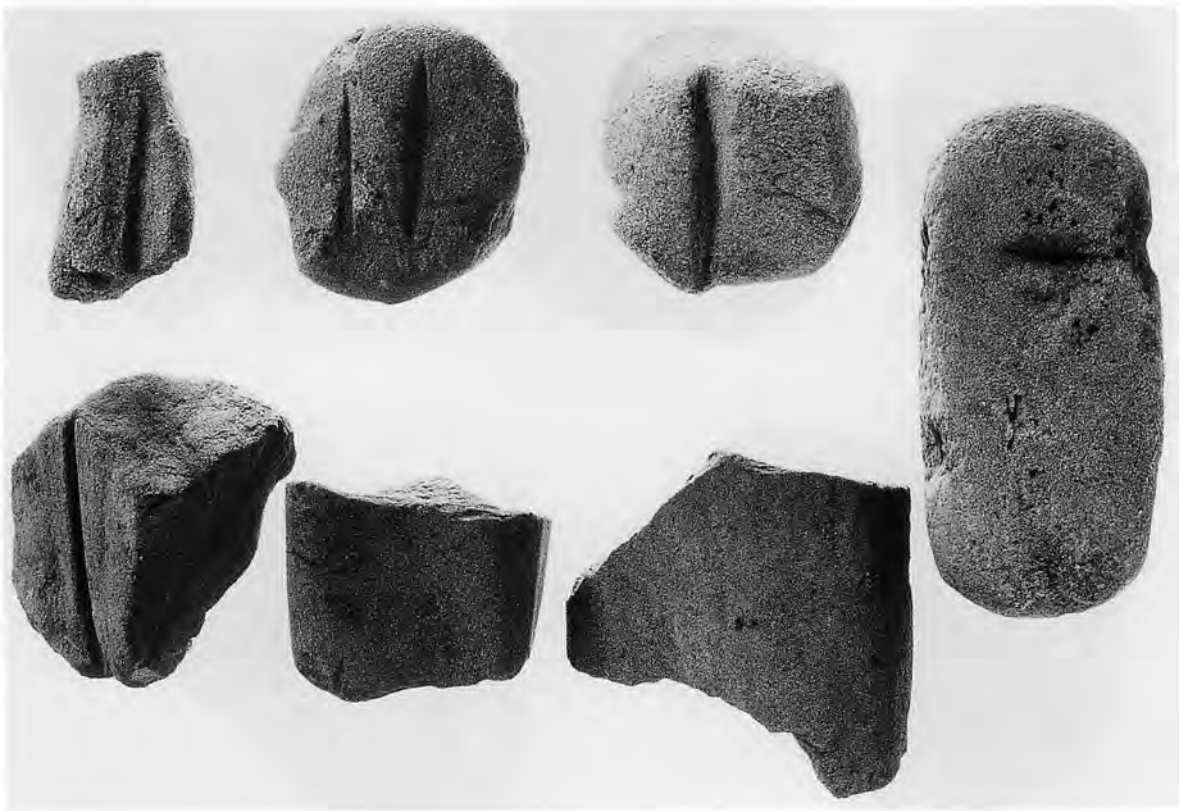
図版175 磨石



図版176 砥石1



第229図 砥石実測図 (1/2)



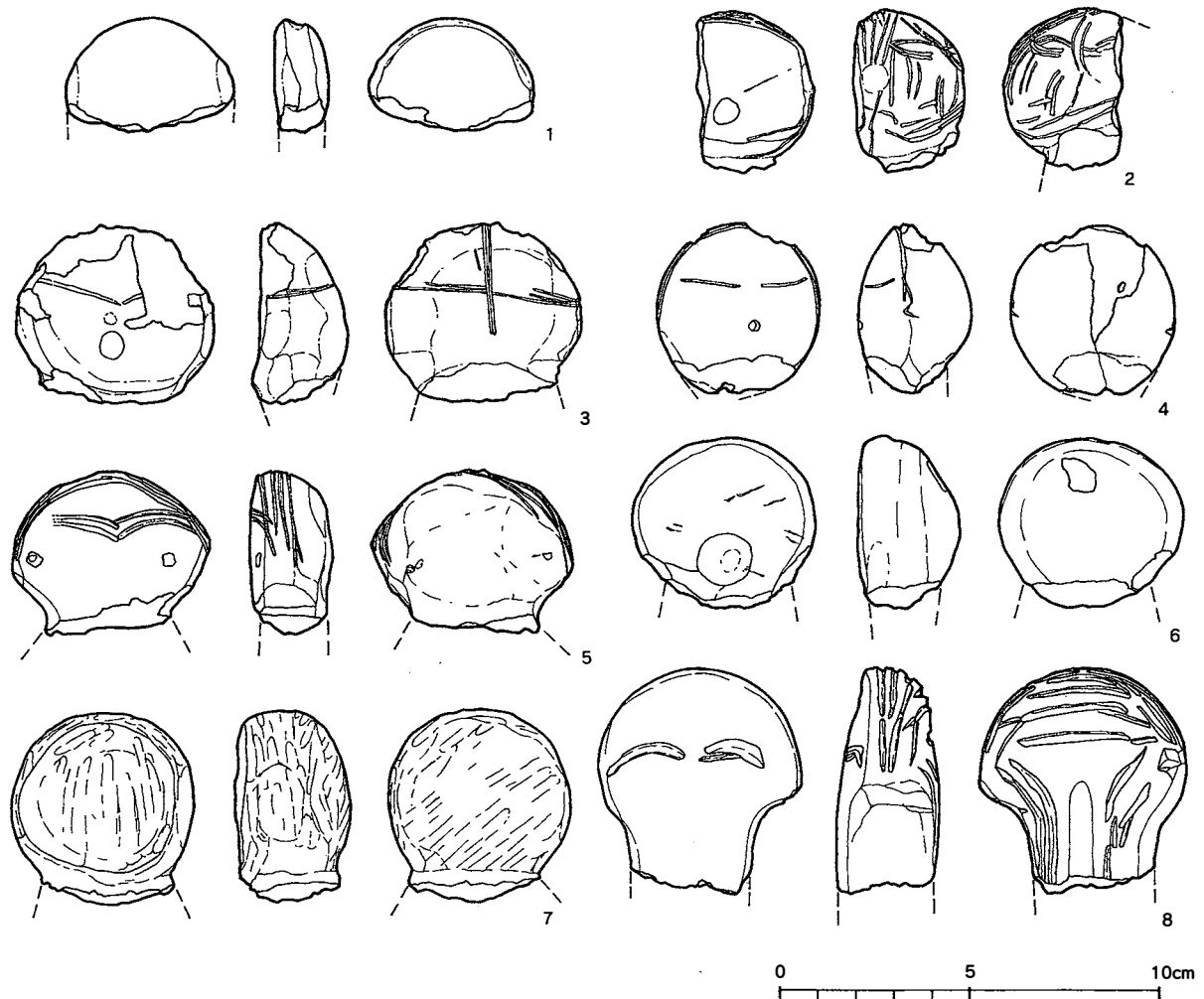
図版177 砥石2

3 土製品（土偶）

土偶は全部で32点出土した。うち、1点は住居跡からの出土であるが、他は包含層出土のものである。出土地区は、2・3・4・5区及び不明で、その数は、2区20点（1号住居跡のものを含む）、3区1点、4区8点、5区1点、不明2点である。圧倒的にN10グリッドに集中しており12点ある。隣接するグリッド（M9・M10、N8・N9）から6点とある程度まとまって出土している。一方、N4グリッドを中心として、1つの集中部が存在している。5×10mのグリッドの中で、集中して出土する状況が一つの特徴といえる。次に出土層位を見てみると不明を除き、全てIV層及びV層出土のものである。ただ、V層出土のものは3点でIV層に集中するようである。

土偶は、人の形を粘土で作成した土製品である。これまでの出土例からも完形で出土するものはほと

んどない。すなわち、一部が欠けており、しかも故意に欠いたものが大半である。故意に破壊しやすいように作成したとの指摘もある。そこで、32点出土の土偶を欠損部がどこかという観点から見ていきたいが、まずどこの部分がないのかということを見ていくために、残存部位の種類をあげておきたい。ここでは、土偶の構成を次のものとおきたい。頭部・体部・左手・右手・左足・右足の6つと考えておきたい。ただし、手と足については、左右の区別が難しいものあり、手と足の左右の区別はないものとして、列挙しておく。そうすると、頭部8・体部9・手3・足12となる。1つの完形した土偶をどれだけ破壊するかは、不明であるが、出土してきたものが、これら4つに分類できることになると、概ねこの4パターン（左右の手足があるため、細かく言えば6つ）に破壊されるのであろう。



第230図 土製品（土偶）実測図〈その1〉（1/2）

再度この観点から見ていくと頭部・体部からは8～9体、手からは1～3体、足からは6～12体が存在していたことになる。

32点のうち、同一個体と考えられるものは、No.19の足とNo.28の体部、No.29とNo.32の体部及びNo.18の足とNo.25の体部のもので、本遺跡で出土した土偶は手が極端に少ないという特徴をもっている。

ところが、この計算は、あくまで同一のものとの仮定であって、残念ながら資料に接合するものはない。なお、体部だけとはいっても、足がつくものもあり、つかないものとの2パターンに分けられる。

次に各土偶を見ていきたい（各属性は第2表）。

1～8が頭部、9～20が足、21～23が手、24～32が体部である。なお、接合するものについての提示は、写真のみである。

1 頭部である。薄い半月形のもので、表面が平らである。裏面は若干膨らんでいる。頭頂部は面取りしてある。目・口等の表現はない。

2 頭部の左半分のものである。表面は平らで、細線による目、凹点による口が表現されている。また、右側下端に細線が見られる。裏面は球形で、周縁に6～7条の細線が平行して施され、下部には平行に2本の線が巡る。中央には幾何学紋様の細線がほどこされている。下面中央から施されたと考えられる穿孔の残存が見られ、芯の痕跡かとも考えられる。

3 頭部である。表面は、ややへっこむが平らで、上部が剥落著しい。細線による目及び凹点による口が表現される。目はつり上がる。なお、口の左上に凹点状のものがあるが、剥落のためよく分からない。裏面は中央がやや膨らみ、球形状である。また、十字に細線が施されている。下面中央部に細い穿孔が見られるが、剥落のためよく分からない。

4 頭部である。円形でやや平べったい正面には、ややつり上がった目が細線で施されており、口が工具によって、深さ6mm程度刺突されている。なお、裏面までは貫通していない。上半部円周には1条の細線が施される。裏面は中央部が膨らみ球形状となる。また、下面中央部に長さ2.8cmの穿孔があ

り、製作（接合）時の芯の痕跡である可能性がある。

5 頭部である。ほほに相当する部分が内湾し、頭頂部がやや出っ張る半月形を呈する。表面は開き気味の両目が穿孔で表現され、裏面まで貫通している。また、凹点による口が、上部に2本の細線で、まゆと考えられるものが表現されている。裏面上部の周には、4本程度の細線で、髪の毛を表現したとも考えられるものがある。

6 頭部である。円形で平べったい正面には、工具による口及び細線によるややつり上がった左目が細線で施されている。右は不明瞭である。裏面は中央部が膨らみ球形状となる。下面中央部には垂直に長さ7mmの穿孔があり、芯の痕跡と考えられる。

7 頭部である。表面はややくぼんでおり、平らである。裏面は球形である。目・口等の表現はない。

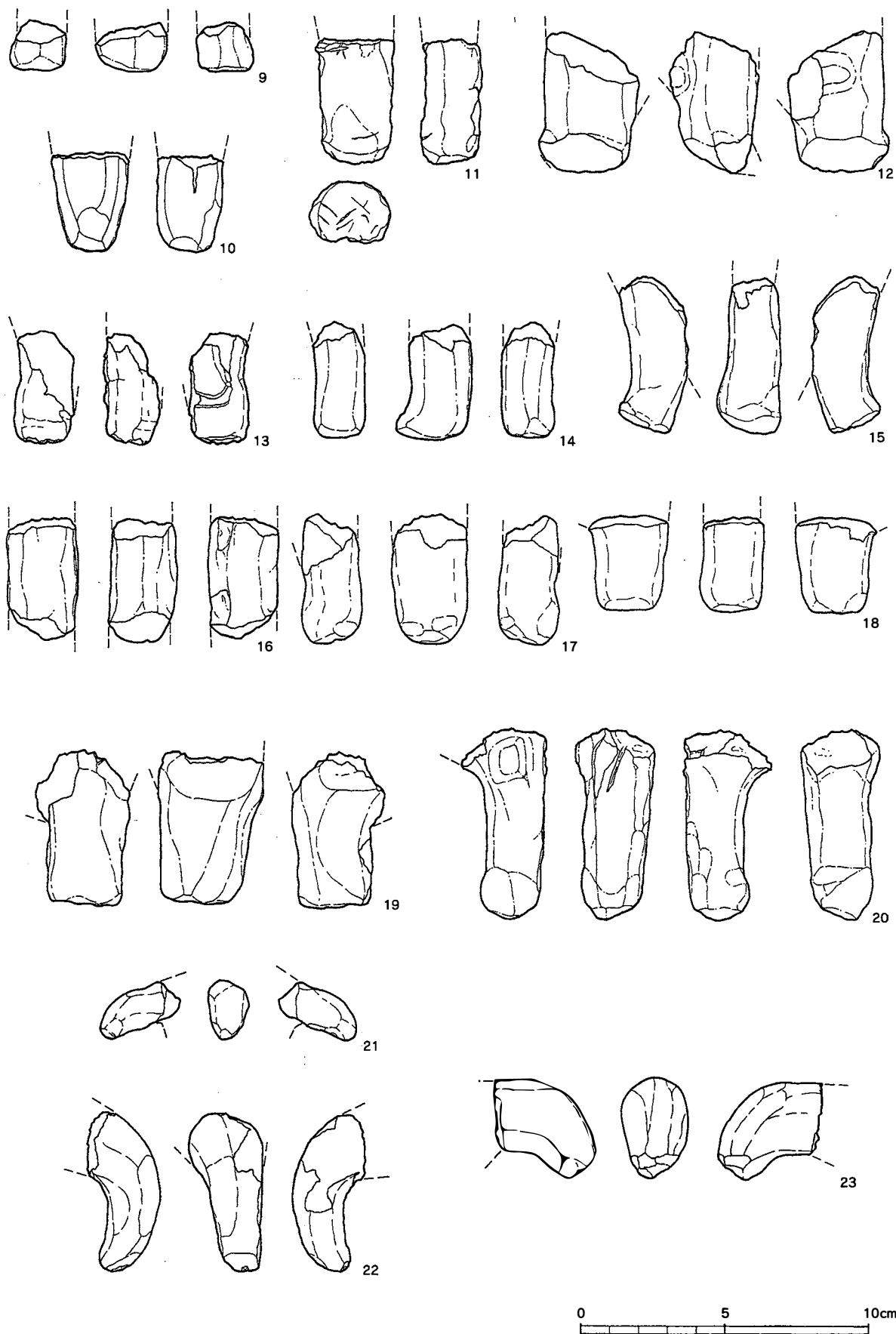
8 円形の頭部からやや内湾し、まっすぐのびる首（体部）をもつ半月形の頭部である。表裏面ともほぼ平らで、頭頂部から下へ向かうにつれ、厚みを増す。表面にははっきりとした目が描かれている。頭頂部及び裏面には、細線による文様が描かれ、頭頂部の上半は頭形に沿って平行に、裏面両側辺にも形状に従って、タテ方向の細線が見られる。表裏及び左側辺に赤色顔料が残存する。

9 足で、足首より下位のものである。左右の別・表裏はよく分からない。楕円形を呈するもので足裏はほぼ平らである。

10 足である。左足の可能性が高い。分厚い円形のもので、足裏は丸みもち平らである。内側を除き、丁寧なヘラミガキが施され赤色顔料の残存が見られる。

11 足で、左足の可能性がある。やや横長の円形状のものでまっすぐに延びるが、足首あたりでやや膨らみ足首を表現しているようだ。表面は赤色顔料の残存が見られる。裏面は剥落している。足裏は円形で、中央部がやや高くなっている。また、細線が3～5本程度見られる。

12 大形の足で、右足の可能性が高い。内側は剥落著しいが、正面はヘラミガキで丁寧で他はナ



第231図 土製品（土偶）実測図〈その2〉（1/2）

デである。足の裏は、かかとからつま先の方向へ急激に下がっているが、凹凸はない。裏面には、一つの隆起があり、赤色顔料が残存する。足首は一部欠損しているが、その先につま先が表現されていた可能性がある。やや横に長い形状である。

13 足で、右足と考えられる。正面は膨らみ、外側辺は下部で膨らむ。足裏は円形状で中央がややくぼむ。裏面は、逆「L」字状の小規模な突帯を張り付けている。何を意味するのかは不明であるが、他の土偶に見られる背中を意識しているフラスコ状の突帯にも似ている。

14 左足である。丸みをもちながらも四角形で構成される。表面はやや盛り上がり、逆に裏面はくぼむ。つま先が明瞭に表現されている。足の裏はほぼ平らである。

15 横に長い棒状の足で、右足と考えられる。外反する。足裏は楕円形で平らである。外面は丁寧にナデているが、内側下部は、やや粗いナデである。この形態から復元できる足の形は、足を外に向けて広げ、安定感のあるものである。

16 足である。左右不明。円形状を呈する。下部は欠損している。正面がやや膨らむ。逆に裏面は若干くぼむ。

17 足である。左右は不明。厚みのあるやや横に長い楕円形で、足裏はやや凹凸がある。正面はヘラミガキ裏面はナデである。

18 足である。右足の可能性が高い。丸みのある4つの面で構成されていると考え、内側及び裏面が粗い調整で、いわゆる見せる（見られる）部分の表面と外側は丁寧にナデて折り、対照的である。足の裏の形状は、円形で平らである。

19 28との同一個体で、左足の部分である。やや大きな棒状の素材を体部に張り付けたものである。粘土の継ぎ目の観察から、その素材も1～2回の全周張り付けによっているものと考えられる。内外面がやや内湾し、足の裏面がやや上げ底となっている。また、腰部も大きく、内湾し、すぐ足につながるのて腰部を明確には作り出していないようだ。足の裏・内側は摩耗している。

20 左足である。長く、四角形を呈する。下半

には不明瞭ながら不確定な線（段）をもつ。上部は大きく張り出す腰部へとつながる。足の裏は円形状を呈し、やや凹凸がある。腰部の裏側には1つの瘤が見られるが、何を意味するのかは、不明である。断面観察により、棒状の小さな粘土に一回り大きく肉付けして作製している。

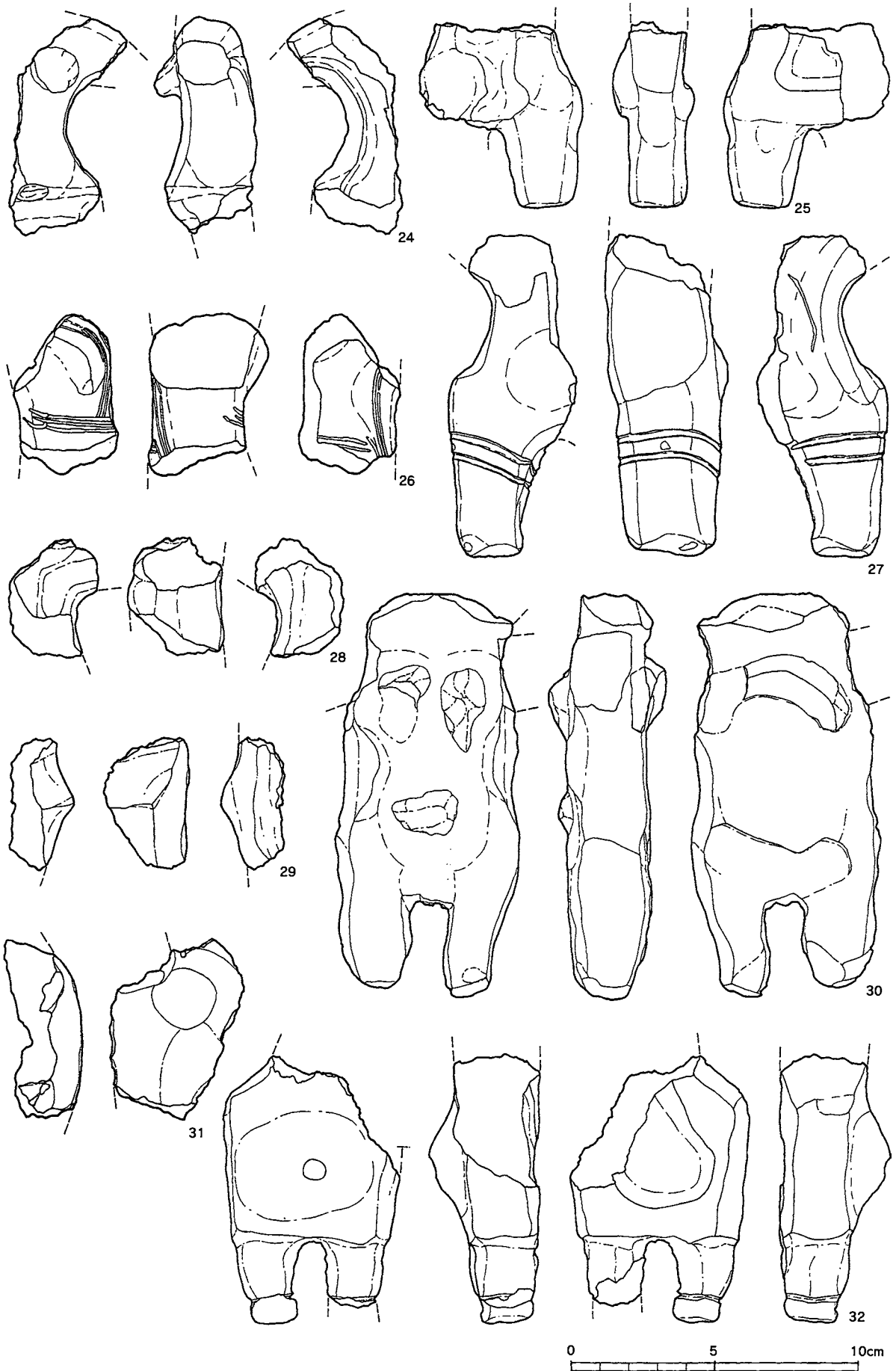
21 手である。右手の可能性はあるが、よく分からない。短く小型である。正面は膨らむ。裏面は剥落し凹凸があり、若干くぼんでいる。

22 手で、左手と考えられる。正面は中央部が一番高く、裏面はほぼ平らである。全体形は長く、あまり広がらずに内湾しながら降りる。

23 手で、左手と考えられる。厚みのある大形のもので、表面は若干膨らむ。裏面は平らである。

24 体部である。肩から腰まで残存するが、左半だけのものである。左手は折りとられている。胸部は細めの円錐状で下がり気味である。のちに付け足したようにも見えるが、作り出しの可能性はある。また、割れ口の観察から、芯となる小型の板状の素材に肉付けをしている。その割れが直線なことから、小型の板状素材（棒状ともいえる）を縦に並べて張り付けたような作り方が推測される。また、下端の欠損部は足をここで張り付けていたことによるものと推測される。脇を大きく内湾させ、腰を強く作り出す。正面中央に凹点がある。何を意味するのかは不明であるが、このあたりがやや膨らむ。裏面の外側辺は、より深く削ることによって、背中のくぼみを表現したのではないかと推測される。非常に写実的で、三万田式土器の隆盛した時期の特徴をもっている。

25 体部で、腹部から左足の部分である。18と接合する。腹部はやや盛り上がる円形状の形態をもち、右側は円形状に沿った凹線状のへこみがある。腰部は上部の脇を内湾させることにより、強く作り出している。足は棒状で足裏は平らである。裏面はフラスコ状の内側をへこませている。製作方法は、脚部と胴部をくっつけて背中のフラスコ状の内側を別に張り付けているものと考えられる。全体的に腹部が左側によっており、腹部の右周辺へのこみは、左側の膨らみを強調するものではなく、



第232図 土製品（土偶）実測図〈その3〉（1/2）

腹部中央にへこみがあるものとも考えられる。そうすれば右側の膨らみも理解できよう。ただし、腹部が左右二つに分かれることになり、やや疑問が残る。

26 体部である。棒状の素材を一回り大きくするように、粘土を張り付け体部を作り出している。胸部は左上から右下へ帯状に下がるものを張り付けている。腹部に脇よりやや下がり気味の平行な細線3本と胸部内（左）からこの細線まで、胸部に沿って2本の細線が描かれている。また、垂直な割れから、二つの板（棒）状素材を並べて張り合わせたように体部をつくっているものと推測される。上部中央に棒状の凹線状のものがあり、頭部とを繋ぐ役目の痕跡かもしれない。全体的に赤色顔料が残存する。

27 体部の右側で、脇から足までである。厚みをもち、大形のものである。板状の素材に1～2回、張り付けをして、整形しているようだ。膨らみを意図した腹部はのちの張り付けで、脇は大きく内湾させて、張り出した腰を表現している。そのまま内側にややまっすぐに延びる足となるが、張り付けかどうか不明である。足の上部にはっきりとした2本の線を施す。ほぼ一周するが、左から下へ傾斜している。右胸部は剥落であろう。裏面はやや引っ込めて、背中を作り出す。なお、足内側は内湾させて、かかとで戻る。足裏は若干くぼむようだ。腹部あたりは赤色顔料が残存しているように見える。丁寧な作りである。

28 体部で、胸部及び脇・背中の部分である。19の足と接合する。左胸部は、右上から左下に帯状に下がるもので、のちの張り付けである。脇は大きく内湾させ、大きく張り出す腰部へとつながるものであろう。裏面は、外側辺をより深く削っており、背中のくぼみを表現している。断面観察から、1つの素材の周辺に肉付けして体部をつくっているようだ。

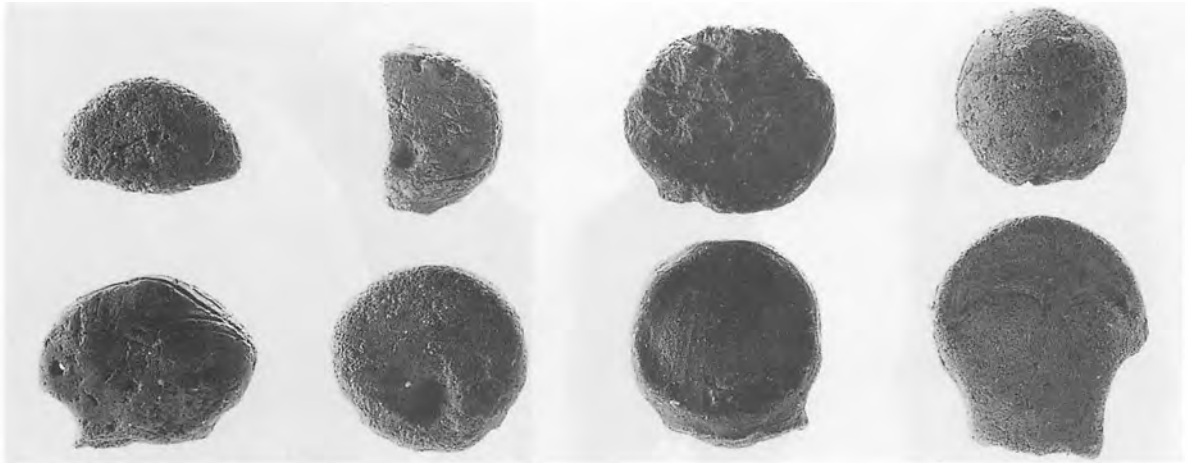
29 体部で左側肩から腰の部分である。32と接合する。背中がややくぼんでいる。

30 体部・足で構成される。頭部・手がない。当遺跡出土最大の土偶である。板状の粘土に両手・

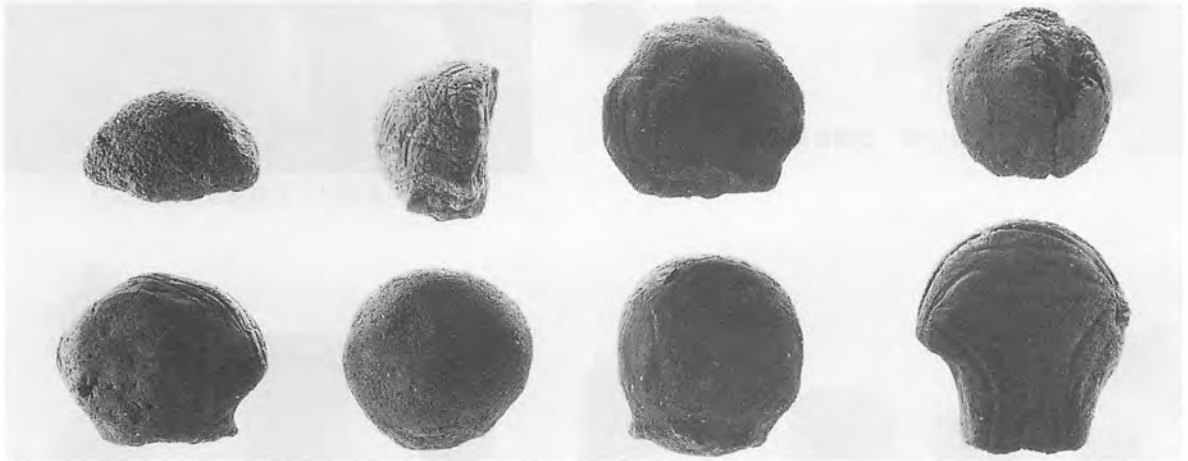
両足・胸部・腹部をつけたものである。明瞭ではないが、1つの板状素材である可能性が高い。足は体部と同じくらいの幅の素材を張り合わせた後、工具を用いて、中央部を四角に切り取って作っている。背中には、「こ」の字状に三角形の突帯を張り付け、中央部をへこませているようにして背中を表現しているものと考えられる。また、胸部直下の側辺は、内側に湾曲させて、併せて足の部分も湾曲させることにより、腰を強く意識しているようである。なお、正面・上面左端には、若干の赤色顔料が残存している。また、全体的には作りが粗い。

31 体部と考えられる。腹部から足にかけてのものと推測される。脇はするどく内湾し、腰を強調しているかのようなようである。その上部は脇に相当するものと考えられ、やや膨らんでいるが、その上部は急に傾斜する。このように考えると、かなり短足になりそうである。

32 体部で、腹部から足までのもので、29と接合する。板状の体部に腹部・両足を張り付けたものと考えられる。ただし、体部の素材は明瞭でなく、1～2回周辺に張り付けを行っているものであろう。腹部は大きく円錐状に張り出し、頂部は工具により凹点し、「ヘソ」を作り出している。足は短く、棒状のものを張り付けている。くるぶしあたりで一つの段をもつが、これも別の張り付けのように捉えられる。右足の裏面はほぼ平らである。左足は欠損しているが、接合部から同様であろう。胴部と足の境には、一つの段が作り出されているように捉えられる。すなわちスカートをはいていると考えることも可能である。腰部のくびれはなく、ほぼ真っ直ぐにのびる。裏面の中央部はフラスコ状に大きくへこませ、背中を作っている。写実的で丁寧な作りである。



図版178土偶頭部表面（上）・裏面（下）



図版179 土偶体部表面



図版180 土偶体部裏面



図版181 土偶体部出土状況 1



図版182 土偶腕及び足



図版183 土偶頭部出土状況 (左1・右2)



図版184 土偶体部出土状況 2

第2表 北海道遺跡土製品(土偶)一覧表 図版掲載順

番号	地区	グリッド	層位	部位	色調		残存長	最大幅	最大厚	調整・備考
1	2	N 10	IV	頭部	橙色	(7.5YR7/6)	3	4.4	1.4	ナデ
2	2	N 10	IV	頭部	橙色	(7.5YR6/6)	4.2	(3.1)	2.9	ナデ
3	4	不明	不明	頭部	褐灰色	(10YR4/1)	4.7	5.2	(2.5)	ミガキ
4	2	M 10	IV	頭部	にぶい黄橙色	(10YR6/4)	4.4	4.3	3	ナデ
5	2	N 8	IV	頭部	黄灰色	(2.5Y4/1)	7.3	5.3	2.2	ナデ
6	2	M 10	IV	頭部	にぶい黄橙色	(10YR6/4)	4.5	4.9	2.7	ナデ
7	2	N 10	IV	頭部	褐灰色	(10YR4/1)	5.1	4.8	3.1	ヘラミガキ・赤色顔料
8	2	N 9	不明	頭部	にぶい黄橙色	(10YR7/4)	6	5.5	2.7	ナデ・ヘラミガキ・赤色顔料
9	2	N 9	IV	足	にぶい黄橙色	(10YR7/4)	1.7	(2)	2.5	ナデ
10	5	不明	不明	足	にぶい褐色	(7.5YR4/5)	3.4	2.7	2.3	ヘラミガキ・赤色顔料
11	2	N 10	IV	足	にぶい黄橙色	(10YR6/4)	4.4	2.8	2.1	ナデ
12	4	N 4	IV	右足	黒褐色	(7.5YR3/1)	4.9	(4.5)	(3.1)	ナデ・ヘラミガキ
13	2	N 10	IV	右足	にぶい黄橙色	(10YR5/3)	3.8	(2.1)	2	ナデ
14	4	N 5	IV	左足	にぶい黄橙色	(10YR7/3)	4	1.8	2.7	ナデ
15	2	M 12	IV	右足	にぶい黄橙色	(10YR6/3)	5.4	2.4	2.2	ナデ
16	2	N 10	IV	足	にぶい黄橙色	(10YR7/4)	4.2	(2.5)	(2.4)	ナデ
17	2	N 9	不明	足	にぶい黄橙色	(10YR5/3)	4.5	2.1	2.7	ナデ・ヘラミガキ
18	4	N 2	IV	足	灰黄褐色	(10YR5/2)	3.3	(2.8)	(2.2)	ナデ
19	不明	不明	IV	左足	黒褐色	(10YR3/1)	5.3	(3.3)	(3.6)	ナデ・ヘラミガキ
20	4	L 5	IV	左足	にぶい黄橙色	(10YR7/3)	6.6	(3)	(2.7)	ナデ
21	3	P 4	IV	手	橙色	(7.5YR7/6)	1.8	(2.8)	1.4	ナデ
22	2	N 10	不明	左足	黄灰色	(2.5Y4/1)	5.6	(2.6)	(2.6)	ナデ
23	2	N 10	IV	左足	黒褐色	(10YR3/1)	3.4	3.6	2.3	ヘラミガキ
24	2	N 10	IV	体部	黒褐色	(2.5Y3/1)	7.5	(4.1)	3.6	ヘラミガキ
25	4	N 2	IV	体部	にぶい黄橙色	(10YR6/3)	6.4	(5.8)	(2.9)	ナデ
26	2	1号住	覆土	体部	灰黄褐色	(10YR4/2)	5.6	3.7	4.3	ナデ・赤色顔料
27	2	N 10	IV	体部	にぶい黄橙色	(10YR4/1)	11.1	4.5	4.3	ヘラミガキ・赤色顔料
28	不明	不明	IV	体部	黒褐色	(10YR3/1)	4	(3.1)	(3.4)	ナデ・ヘラミガキ
29	4	N 4	IV	体部	灰黄褐色	(10YR4/2)	4.6	(2.2)	(3)	ナデ・ヘラミガキ
30	2	M 9	IV	体部	黄灰色	(2.5Y4/1)	14	6.5	4.2	ナデ、背中に突帯
31	2	N 10	IV	体部	灰黄褐色	(10YR2/4)	6.3	(4.7)	(2.7)	ヘラミガキ
32	4	N 4	IV	体部	黒色	(5Y2/1)	9.3	(6.3)	3.9	ヘラミガキ

土偶番号11と27、12と15、14と26は同一個体。
色調は、大部分を占めるところで表示。

() は残存値。単位は釐。

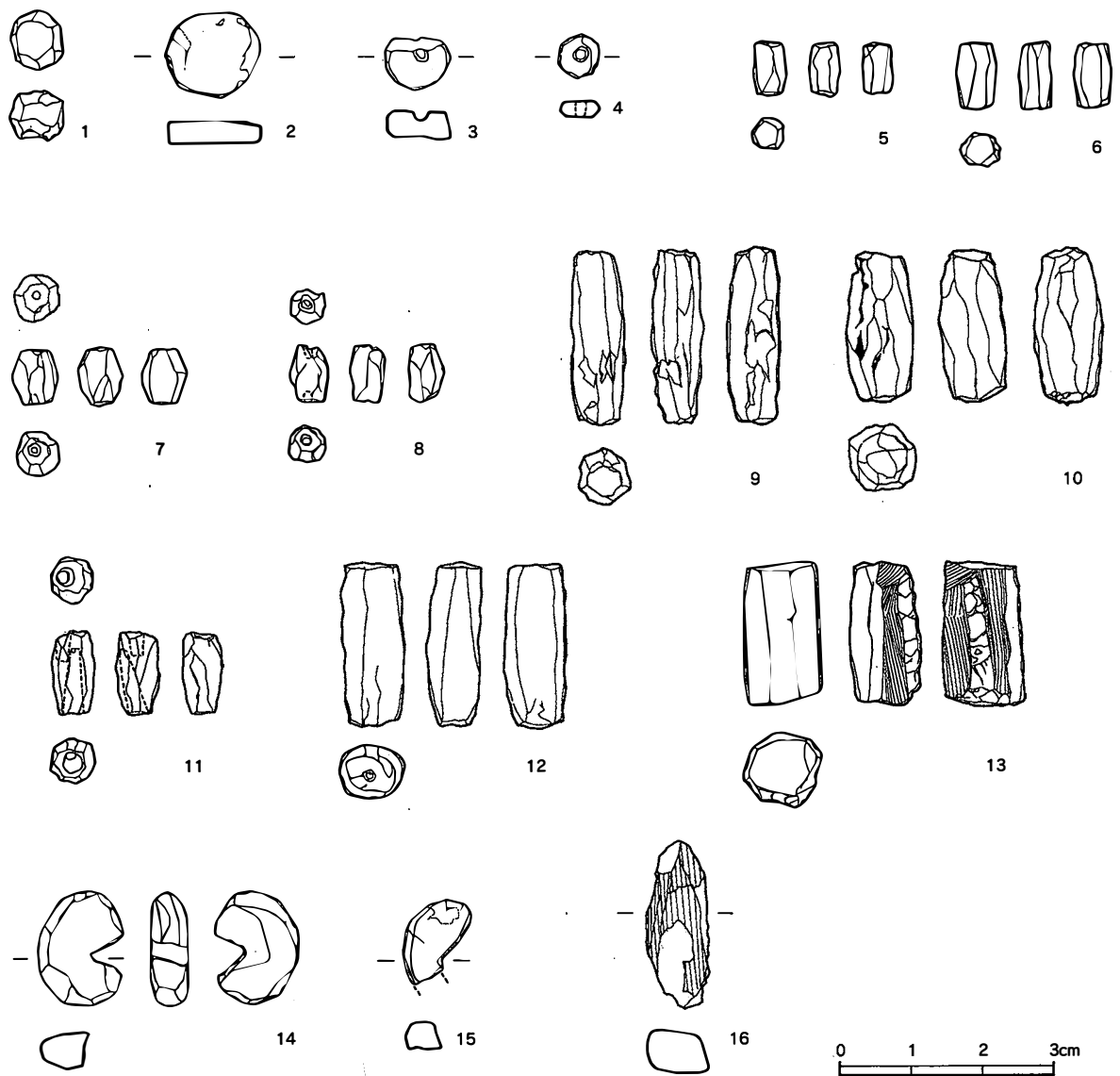
4 装飾品(玉)類

掲載遺物の属性は、第3表のとおりである。

1~4は、小玉である。4を除けば未製品である。4は非常に薄く、小型である。また、3は上部を欠損しているが、中央に2mmの穿孔途中で、2mmの深さで止まっている。欠損は、穿孔に起因する可能性が高い。5~13は勾玉である。完成品はなく、全て加工途中のものである。長さから、5~8・11の小型のものと、9・10・12・13の大形のものとに分けられる。また、形状を整えているだけのもの(5・6・9・10)と穿孔途中のものに分けられる(7・8・11・12)。さらに穿孔途中のものは、両端から実施されているものと、一旦

のものに分かれ、小型のもの(7・8・11)は両端から行われている。

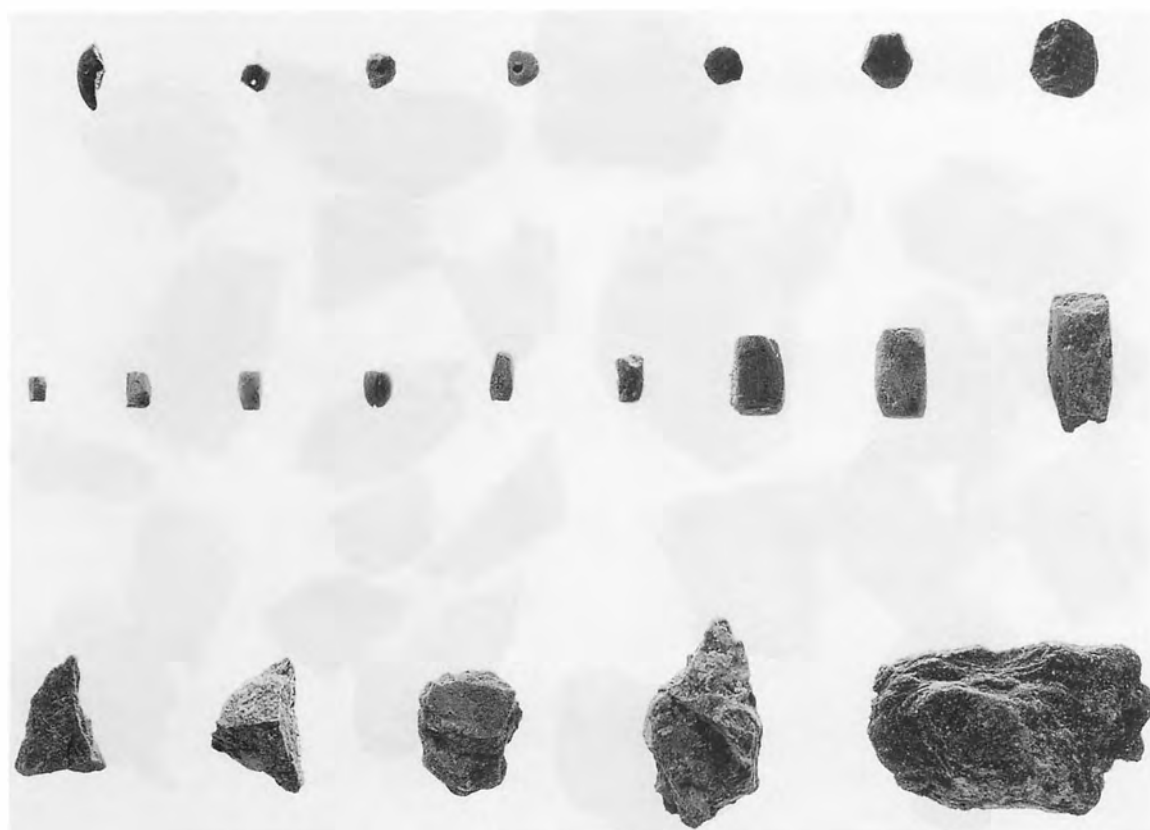
うち、11は、ほぼ貫通状態と見られるが、下端からの穿孔が上端の穿孔よりも長く、しかも左へズレたため、上部を突き破っている。13は、やや特殊で、素材と捉えられる。棒状に整えたものを4分の1程度に分割しているものと考えられ、これから形状が整えられる段階に当たるものである。14~15は勾玉の未成品である。15は下部が欠損しているが、両者とも穿孔はない。16は素材であり、石材が異なる。5区では、唯一のものである。



第233図 5区出土の装飾品(1/1)



図版185 5区出土の装飾品



図版186 勾玉・小玉・管玉・素材



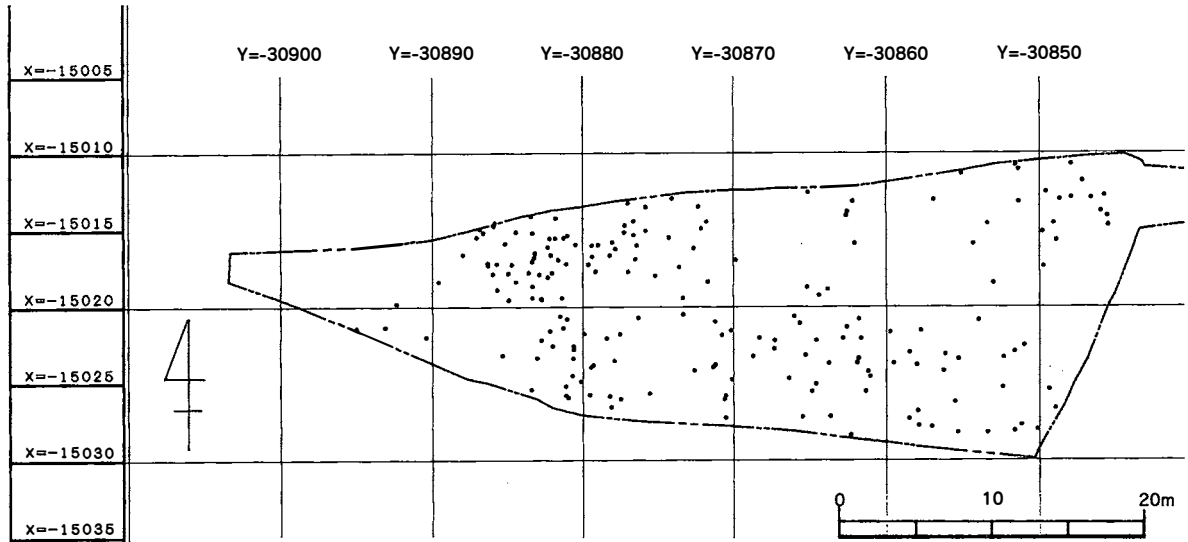
図版187 勾玉出土状況



図版188 擦切技法



図版189 装飾品素材一括



第234図 5区出土の装飾品分布図

種類	番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)
小玉	1	0.8	—	0.6
	2	1.1	—	0.3
	3	0.7	—	0.4
	4	0.6	—	0.2
管玉	5	0.7	0.4	0.4
	6	0.9	0.5	0.4
	7	0.8	0.5	0.6
	8	0.8	0.5	0.5
	9	2.4	0.8	0.8
	10	2.1	0.9	0.9
	11	1.1	0.6	0.6
	12	2.2	0.9	0.7
	13	2.0	1.1	1.0
勾玉	14	1.6	1.2	0.5
	15	1.2	0.9	0.4
その他	16	2.3	0.9	0.6

第3表 装飾品属性表

第V章 総括

万楽寺出口遺跡においては、縄文時代早期の遺物包含層は、ここでは、確認できていないが、隣接する山海道遺跡などではVI層が遺物包含層であることが、判明しており、標高が高く位置する場所からの流れ込みの可能性が高い。極近くに存在する可能性も高く、今後の調査で確認する必要がある。

調査の結果、検出遺構等では、甕棺墓・配石遺構などが特徴的といえるが、分析等も含め詳細については今後より明らかになるものと思われる。

山海道遺跡では、縄文時代の埋甕の多さと出土遺物としての土偶の多さが特徴的であった。特にこれらは2・3・4区という調査区を中心に見つかった。ちなみに当区の旧地形は、3・4区中央付近を一番高くして、東西南北方向に傾斜することが分かった。

玉類については、総数約200点出土した。このうち、5区より9割以上の185点が出土している。ここでは、全ての出土位置がおえられているこれらの玉類について、考察しておきたい。

出土層位は、ⅢからⅥ層までの各層からである。ただし、Ⅳ層以外の層からの出土点数は、若干で、Ⅳ層が本来の出土層位であると捉えられる。出土分布は、概観するかぎり、Ⅳ層が残存しない地域で、周溝を持つ遺構周辺を除き、全体的に分布している。すなわち、遺構により消失しているというより、遺構の存在する他地域で、玉の生産が行われていたと考えておきたい。

玉類としているものは、製品・未製品・素材・碎片・原石という5つに大別できよう。製品には、勾玉・管玉・小玉?がある。大半は製品製作時あるいは、素材加工時の屑である。

石材は、緑色の軟質のものが大半であるが、1点だけ、ヒスイではないかと思われるものがある。出土層位が、縄文時代後晩期の遺物包含層であることから、当期に所属するものである。

なお、作業工程として穿孔のみを残すものがあり、未成品としては、19点あり、全体の1割を占めている。当地での制作実施の証拠となるであろう。

調査のきっかけとなった農村活性化住環境整備事業は、住環境等の整備を主に行うものであったが、一方では、広範囲にわたる埋蔵文化財の発掘調査を伴うこととなった。文化財保護部局としては、万楽寺出口遺跡・山海道遺跡の調査について、調査面積をいかに減らすことができるのか。長年守り伝えられてきた地域の文化財をどう守っていくかということを考え、事業課とは幾たびの協議をもった。

その過程で、県の農政部では文化財保護部局との調整を図っていただき、結果的に、大半の地域が半永久的に保存されることが決まった。また、万楽寺出口遺跡では、調査中に発見された遺構もそのままの状態に保存できたことは特筆すべきことである。

最小限での発掘調査になったとはいえ、調査期間は2年近くかかった。この間地元の方を中心に、さまざまな方々が調査作業員として暑い中、寒い中、調査に従事いただいた。

山海道遺跡では、文化課の主催により、中学生が発掘調査の体験を行った。

土器や石器を見つけた生徒達はさらにもう一点と、またまだ見つけていない生徒は時間が来ても移植ゴテを離さないという光景を見て、もっともっと多くの子供たちに体験をさせてあげたいと感じた。

このような企画についても、県農政部・調査作業員の方々が一生懸命支えてくださった。改めて御礼を申し上げたい。

第Ⅵ章 熊本市万楽寺出口遺跡出土の弥生時代人骨

松下孝幸

【キーワード】：熊本県、弥生人骨、甕棺、男性、 北部九州タイプ

はじめに

熊本市万楽寺町に所在する万楽寺出口遺跡の発掘調査が農村活性化住環境整備事業に伴って、1994から95年にかけておこなわれ、1基の甕棺(10号甕棺)から1体の人骨が検出された。この発掘調査では甕棺は11基出土したが、人骨が残っていたのは1基のみであった。

熊本県でも福岡県や佐賀県と同じように弥生時代には甕棺が製作されているので、甕棺も出土するが、甕棺の在り方が福岡県や佐賀県とは違い、甕棺が多数集中しておらず、少数の甕棺が発見される程度であった。そのために、人骨がある数まとまって出土することがなかったので、熊本地域での弥生人の特徴が明確になっていないのが現状である。筆者が報告した例も、熊本市葉山遺跡(松下、1991)と熊本市庵の前遺跡(松下、1997)の2遺跡しかない。

本遺跡の場合も人骨は1体しか得られず、保存状態も必ずしも良好なものではなかったが、性別や年

齢の推定は可能であったし、脳頭蓋と四肢骨にはきわめて明瞭な特徴が認められ、今後の熊本県内での弥生人研究にとって貴重な情報を提供してくれる人骨である。人骨の特徴や検討結果などを報告しておきたい。

資料

今回万楽寺出口遺跡から出土した人骨は1体(10号甕棺)のみで、埋葬遺構は甕棺である。人骨は考古学的所見から、弥生時代中期中葉(須玖式)に属する人骨である。また、本人骨は後述しているように老年の男性骨である。老年などの年齢区分は表1に示しているの、参照されたい。

残存していた部分は図2に示しているとおり、頭蓋と下肢骨のみである。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

表1 年齢区分 (Table 1. Division of age)

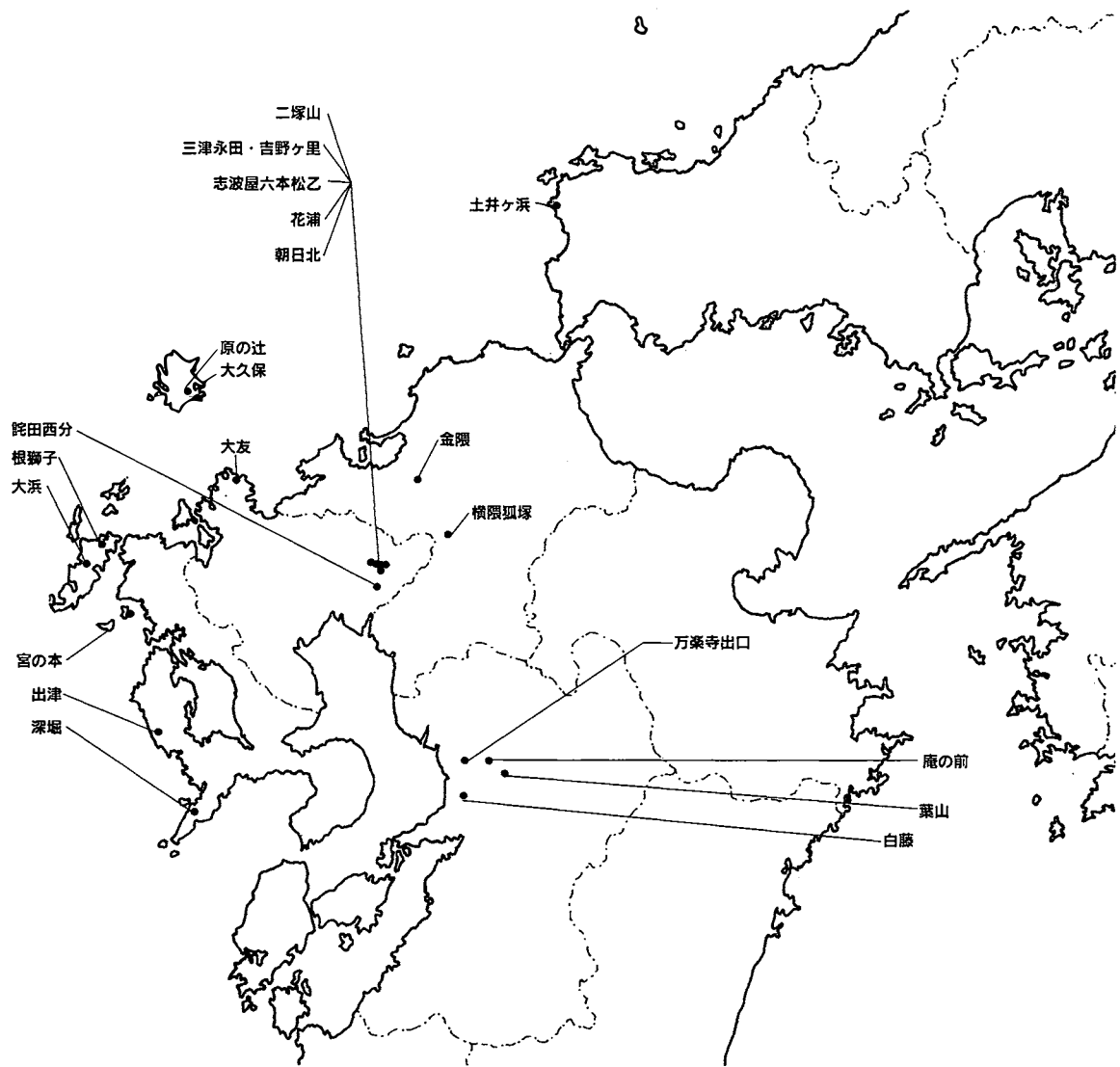
年齢区分		年 齢
未成人	乳 児	1歳未満
	幼 児	1歳～ 5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	成 人	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
壮 年	壮 年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
	熟 年	21歳～39歳 (40歳未満)
	成 人	40歳～59歳 (60歳未満)
成 人	老 年	60歳以上

所 見

人骨の残存部は図2に示すとおりで、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

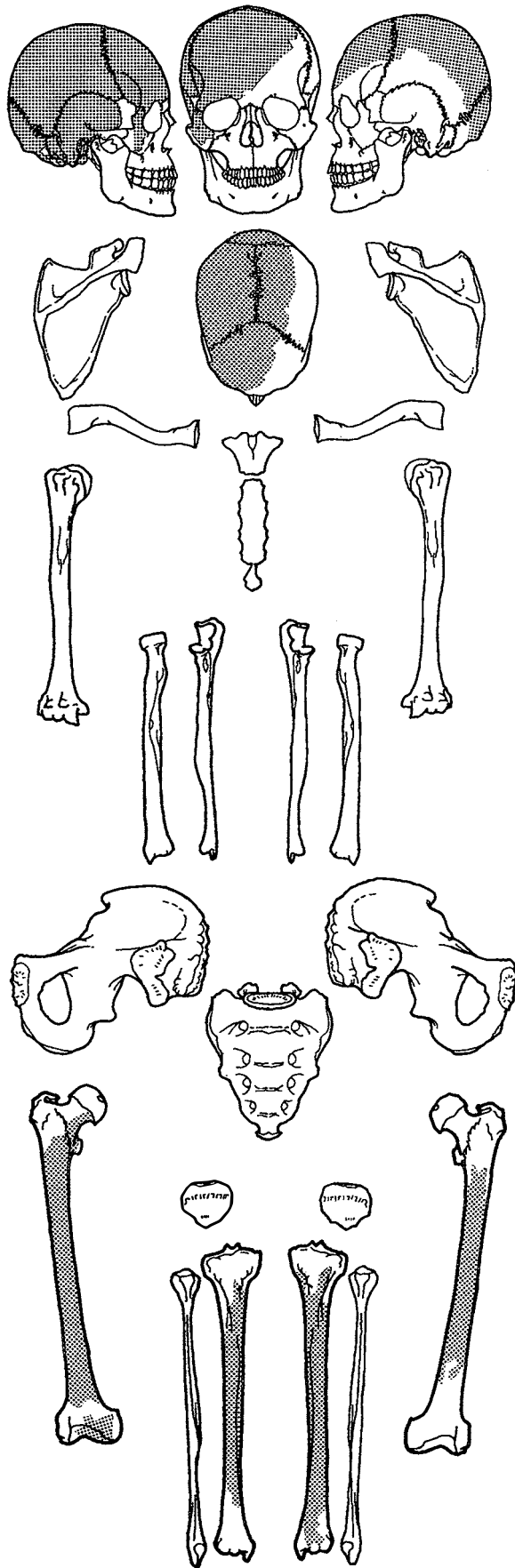
* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig.1.Location of the Manrakujideguchi site, Kumamoto City,Kumamoto Prefecture)



万楽寺出口（男性・老年）図2. 人骨の残存部、アミかけ部分 (Fig.1.Regions of Preservation of the skeleton. Shaded areas are Preserved.)

左1/3を欠損している。外後頭隆起の発達
は良好で、乳様突起も大きい。右側の外耳道
の観察ができたが、骨腫は存在しない。三主
縫合は、内外両板ともほとんど閉鎖癒合して
いる。

脳頭蓋の計測は、頭蓋最大長ができた
だけで、その値は187mmである。最大幅は計測
できないが、観察したところでは、頭蓋の幅
はやや広そうで、頭型は短頭に傾いた中頭型
と思われる。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋はほとんど残っていない。眉上弓
は著しく突出しており、前頭鱗は後方へ傾斜
している。顔面の計測はできないが、右側の
頬骨が残っており、この部分から推測すれば、
眼窩の高径は高そうである。その他の特徴は
まったくわからない。

2. 四肢骨

大腿骨と脛骨が残存していた。

①大腿骨

左右の骨体が残っていたが、残りは右側
の方がよい。長さは不明であるが、残存部分
から推測すればあまり長くはなかったかもし
れない。粗線の発達は著しく良好で、骨体両
側面は後方へ発達しており、柱状性がみられ
る。

計測値は、骨体中央矢状径が34mm(右)、
34mm(左)、横径は28mm(右)、29mm(左)
で、骨体中央断面示数は121.43(右)、117.24(左)
となり、粗線や骨体両側面の後方への発達
はきわめて良好である。骨体中央周は97mm(右)、
98mm(左)で、骨体は著しく太い。また、上
骨体断面示数は103.23(右)となり、骨体上部
には扁平性はまったく認められない。

②脛骨

両側の骨体が残存していたが、左側の方
が残りやすい。長さは不明であるが、骨体は
大きく、骨間縁とヒラメ筋線はよく発達して
いる。とくにヒラメ筋線は著しく突出し、稜
を形成しており、北部九州の甕棺から出土する

弥生人と共通した特徴を示している。骨体の断面形は両側ともヘリチカのII型を呈している。

計測値は、中央最大径が39mm(右)、37mm(左)中央横径は24mm(右)、22mm(左)で、中央断面示数は61.54(右)、59.46(左)となり、骨体は著しく扁平である。骨体周は98mm(右)、93mm(左)、最小周は86mm(左)で、骨体はかなり太い。

3. 性別・年齢

性別は、眉上弓が強く隆起し、前頭鱗が後屈しており、下肢骨が著しく大きいことから、男性と推定した。年齢は、三主縫合が内外両板ともほとんど閉鎖癒合していることから、老年と思われる。

考 察

大腿骨と脛骨の計測ができたので、大腿骨と脛骨について周辺地域の弥生人骨との比較をおこなっておきたい。

1. 大腿骨

表2は、大腿骨の主要計測値の比較表である。まず、骨体の太さを骨体中央周の計測値でみてみると、その値は97mmもあり、かなり太い。計測値は同じ熊本県内の庵の前、葉山よりも大きい。土井ヶ浜、中

ノ浜、吉母浜などの響灘沿岸の弥生人、大友、根獅子、宮の本の西北九州の弥生人よりも大きく、また、佐賀平野や福岡平野の甕棺出土の弥生人(以下「甕棺弥生人」)の平均値よりも大きい。

大腿骨の太さはかなり明確に地域差が存在し、佐賀平野や福岡平野の甕棺弥生人がもっとも太いことがわかっている。彼らの骨体中央周の平均値はいずれも90mmを超えるのである。表2では、本例の骨体中央周の値がもっとも大きく、最大値を示しており、本例の大腿骨が北部九州の甕棺弥生人と同じものであることを示している。次に、骨体の形態を骨体中央断面示数でみてみると、本例の示数値は121.43というかなり大きな値で、表2では最大値を示し、柱状性がかかなり強いことがわかる。この示数値は西北九州弥生人の方が北部九州・山口の弥生人よりもやや大きい。一方、上骨体断面示数は103.23という大きな値を示し、この示数値も表2では最大値となり、骨体上部には扁平性はまったく認められない。この上骨体断面示数は西北九州弥生人と響灘沿岸の弥生人よりも北部九州の甕棺弥生人の方が大きい。また、この示数値は同じ熊本県の庵の前もかなり大きい。

すなわち、本大腿骨は北部九州の甕棺弥生人の大腿骨とかなり類似性が高い大腿骨で、形態的には同じ熊本県の庵の前に近似する大腿骨といつてよい。

表2 大腿骨計測値 (男性、右、mm)
(Table 2. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	万葉寺出口		庵の前		葉山		三津		二塚山		朝日北		志波屋六本松乙	
	弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人	
	熊本県		熊本県		熊本県		佐賀県		佐賀県		佐賀県		佐賀県	
			(松下・他)		(松下)		(財津)		(松下)		(松下・他)		(松下・他)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6. 骨体中央矢状径	1	34	1	30	1	26	13	29.86	25	30.40	12	29.33	12	27.75
7. 骨体中央横径	1	28	1	26	1	29	13	27.62	26	28.12	14	27.50	12	25.95
8. 骨体中央周	1	97	1	88	1	85	13	91.00	25	91.84	12	90.00	12	85.08
9. 骨体上横径	1	31	1	30	1	30	14	32.11	22	32.23	11	31.73	9	29.67
10. 骨体上矢状径	1	32	1	27	1	25	14	28.50	21	26.62	11	26.27	9	24.44
6/7 骨体中央断面示数	1	121.43	1	115.38	1	89.66	13	105.91	25	108.71	12	105.56	12	107.08
10/9 上骨体断面示数	1	103.23	1	90.00	1	83.33	14	88.81	21	82.50	11	83.21	9	82.38

表2 大腿骨計測値（続き） (Table 2. Continued)

	横隈狐塚		金 隈		土井ヶ浜		中の浜		吉母浜		大 友		根獅子		宮の本	
	弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人	
	福岡県		福岡県		山口県		山口県		山口県		佐賀県		長崎県		長崎県	
	(松下・他)		(中橋・他)		(財津)		(九州大学)		(中橋・他)		(松下)		(松下)		(松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6. 骨体中央矢状径	23	29.96	31	30.1	56	28.6	14	28.9	3	28.3	41	28.85	6	29.17	9	28.11
7. 骨体中央横径	23	27.52	31	27.1	56	26.1	15	27.3	3	28.3	41	26.07	6	25.83	9	26.00
8. 骨体中央周	23	90.44	31	90.3	56	86.6	14	88.6	3	89.7	41	87.22	5	88.00	9	85.22
9. 骨体上横径	24	31.75	26	32.5	53	31.8	15	31.5	3	34.0	42	30.62	6	31.00	8	30.63
10. 骨体上矢状径	24	26.29	26	26.2	53	25.6	15	25.7	3	26.0	42	24.83	6	24.67	8	24.50
6/7 骨体中央断面示数	23	109.22	33	110.3	55	109.8	14	106.0	3	101.0	41	111.72	6	112.99	9	108.18
10/9 上骨体断面示数	24	82.96	28	80.6	51	81.0	15	81.7	3	77.4	42	81.34	6	79.65	8	80.10

2. 脛骨

大腿骨と同じように、まず、骨体の太さを骨体周と最小周でみてみることにする。両周径とも表3では最大値を示しており、脛骨体がいかに太いかがわかる。骨体周も大腿骨の骨体中央周と同じように、西北九州の弥生人よりも甕棺弥生人の方が大きく、

骨体は太い。この値が庵の前も大きいことは注目される。一方、中央断面示数はかなり小さく、表3では最小値となり、本脛骨体は扁平である。

すなわち、本脛骨は骨体が著しく太く、扁平な脛骨である。

表3 脛骨計測値（男性、右、mm） (Table 3. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

	万衆寺出口		庵の前		葉 山		三 津		二塚山		朝日北		志波屋六本松乙	
	弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人	
	熊本県		熊本県		熊本県		佐賀県		佐賀県		佐賀県		佐賀県	
			(松下)		(松下)		(牛島)		(松下)		(松下・他)		(松下・他)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
8. 中央最大径	1	39	1	31	1	30	12	32.04	20	30.95	12	30.83	11	29.64
9. 中央横径	1	24	1	25	1	20	12	22.96	20	22.45	12	21.92	11	21.36
10. 骨 体 周	1	98	1	88	1	80	12	89.92	20	84.20	12	83.08	11	80.91
10b. 最 小 周	1	86(左)	1	79	1	72	12	80.75	11	76.55	11	76.73	8	72.13
9/8 中央断面示数	1	61.54	1	80.65	1	66.67	12	71.62	20	72.71	12	71.12	11	72.22

表3 脛骨計測値（続き） (Table 3. Continued)

	横隈狐塚		金 隈		土井ヶ浜		中の浜		吉母浜		大 友		根獅子		宮の本	
	弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人		弥生人	
	福岡県		福岡県		山口県		山口県		山口県		佐賀県		長崎県		長崎県	
	(松下・他)		(中橋・他)		(財津)		(九州大学)		(中橋・他)		(松下)		(松下)		(松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
8. 中央最大径	25	31.44	18	31.8	48	29.5	6	32.0(左)	4	29.8(左)	35	31.26	6	31.83	8	29.38
9. 中央横径	25	22.36	18	23.0	48	20.8	6	22.5(左)	4	22.3(左)	38	21.29	6	21.50	8	20.88
10. 骨 体 周	25	85.04	18	86.6	47	80.7	6	86.5(左)	4	82.0(左)	34	82.85	5	84.20	8	80.63
10b. 最 小 周	27	76.41	24	77.5	43	75.2	11	76.6(左)	4	75.5(左)	34	75.35	6	77.67	6	75.00
9/8 中央断面示数	25	71.37	18	72.4	47	70.5	6	70.4(左)	4	74.9(左)	34	68.03	6	67.83	8	71.16

表4 脳頭蓋計測値 (mm) (Calvaria)

	万楽寺出口	
	10号甕棺人骨	
	男性	
	右	左
1. 頭蓋最大長	187	
8. 頭蓋最大幅	-	
17. ハヅホ・ブレクマ高	-	

表5 大腿骨計測値 (mm) (Femur)

	万楽寺出口	
	10号甕棺人骨	
	男性	
	右	左
6. 骨体中央矢状径	34	34
7. 骨体中央横径	28	29
8. 骨体中央周	97	98
9. 骨体上横径	31	-
10. 骨体上矢状径	32	-
6/7 骨体中央断面示数	121.43	117.24
10/9 上骨体断面示数	103.23	-

表6 脛骨計測値 (mm) (Tibia)

	万楽寺出口	
	10号甕棺人骨	
	男性	
	右	左
8. 中央最大径	39	37
8a. 栄養孔位最大径	-	-
9. 中央横径	24	22
9a. 栄養孔位横径	-	-
10. 骨体周	98	93
10a. 栄養孔位周	-	-
10b. 最小周	-	86
9/8 中央断面示数	61.54	59.46
9a/8a 栄養孔位断面示数	-	-

表7 四肢骨比(中央周の比) (Ratio of extremities)

	万楽寺出口	
	10号甕棺人骨	
	男性	
	右	左
脛骨 / 大腿骨	101.03	94.90

表8 形態小変異(Non-metric crania variants)

	万楽寺出口	
	10号甕棺人骨	
	男性	
	右	左
1. Medial palatine canal	/	/
2. Pterygospinous foramen	/	/
3. Hypoglossal canal bridging	-	/
4. Clinoid bridging	/	/
5. Condylar canal absent	/	/
6. Foramen of Huschke(> 1mm)	-	/
7. Jugular foramen bridging	/	/
8. Precondylar tubercle	/	/
9. Supra-orbital foramen		
10. Accessory infraorbital foramen		
11. Zygo-facial foramen absent	-	/
12. Aural exostosis	/	/
13. Metopism	/	/
14. Os incae	-	/
15. Ossicle at the lambda		-
16. Parietal notch bone		-
17. Transverse zygomatic suture(> 5mm)		-
18. Asterionic ossicle	-	/
19. Occipitomastoid ossicle	/	/
20. Epipterice ossicle	-	/
21. Frontotemporal articulation	-	/
22. Biasterionic suture(> 10mm)	/	/
23. Mylohyoid bridging	-	/
24. Accessory mental foramen	-	/
25. Mandibular torus	/	/
26. 滑車上孔	/	/

[present : +, absent : -, unobservale : /]

要約

熊本市万楽寺町にある万楽寺出口遺跡の発掘調査が1994から95年にかけておこなわれ、1基の甕棺(10号甕棺)から1体の人骨が検出された。人類学的観察と計測をおこない、人骨形質の検討をおこなった。その結果は次のとおりである。

1. 出土した人骨は1体のみで、老年男性骨である。
2. 人骨の所属時代は、弥生時代中期中葉である。
3. 頭型は中頭型と思われ、眉上弓の隆起は著しく強く、いかにも男性的な頭蓋である。
4. 四肢骨は大腿骨と脛骨が残存していた。大腿骨も脛骨も骨体はかなり太い。また、大腿骨には強い柱状性が、脛骨には強い扁平性が認められた。
5. 頭蓋の形態や四肢骨には北部九州の甕棺弥生人の特徴が濃厚である。熊本県には甕棺も存在し、人骨も出土することがあるが、数が少ないこともあって、熊本平野部の弥生人の特徴が明確ではなかった。最近、熊本平野南部に位置する白藤遺跡などから大量の大型甕棺が出土しており、そのなかには人骨の特徴がわかるものもあったが、その特徴は佐賀平野の弥生人に酷似するものであった。今回、本遺跡から出土した弥生人骨は佐賀平野などの北部九州の甕棺から出土する、いかにも甕棺弥生人骨らしい弥生人骨であった。熊本平野では、これほど甕棺弥生人的な人骨の出土例はおそらく初めてであろう。

この1例をもって、熊本平野全体を推し量るつもりはないが、少なくとも、熊本平野の大型甕棺から北部九州の甕棺弥生人と同じ形質をもつ弥生人が出土したことは事実で、今後はこのような弥生人がどの程度面的に広がっているかを明らかにしていかなければならない。

謝辞

摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の諸先生方に感謝致します。

参考文献

1. 金関丈夫、他、1960：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨について。人類学研究、7(附録)：1-36。

2. 九州大学医学部解剖学第二講座、1988：日本民族・文化の生成、2、九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成。六興出版、東京。

3. MARTIN-SALLER, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart：429-597.

4. 松下孝幸、1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山(佐賀県文化財調査報告書46)：242-255。

5. 松下孝幸、1981：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡(佐世保市埋蔵文化財調査報告書)：93-109,114-118,145-146。

6. 松下孝幸、1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1)：223-253。

7. 松下孝幸、他、1983：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告書2)：19-30。

8. 松下孝幸、他、1983：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報VI(長崎県文化財調査報告第66集)：97-134。

9. 松下孝幸、1983：佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代人骨。安永田遺跡(鳥栖市文化財調査報告書16)：92-111。

10. 松下孝幸、他、1984：長崎県小値賀町神ノ崎遺跡出土の弥生・古墳時代人骨。小値賀町文化財調査報告、第4集：95-100,178。

11. 松下孝幸、1984：鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代人骨(II)。鳥栖市文化財調査報告書、20：57-60。

12. 松下孝幸、他、1985：佐賀県鳥栖市域の弥生時代人骨。安永田遺跡-佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸型土地地点の調査- (鳥栖市文化財調査報告書第25集)：550-570。

13. 松下孝幸、1985：福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨。横隈狐塚遺跡II下巻、(小郡市文化財調査報告書第27集)：1-46。

14. 松下孝幸、他、1986：大村市富の原遺跡出土の弥生時代人骨。富の原遺跡群確認調査概報V(大村市文化財調査報告第11集)：30-45。

15. 松下孝幸、他、1988：長崎県壱岐・石田町大久保遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報XI(長崎県文化財調査報告書第91集)：77-99。

16. 松下孝幸、1991：熊本市葉山遺跡出土の弥生時代人骨。交流の考古学(肥後考古学第8号 三島格会長古稀記念)：287-312。

17. 松下孝幸、他、1991：佐賀県神埼町志波屋六本松乙遺跡出土の弥生時代人骨。志波屋六本松乙遺跡(佐賀県文化財調査報告書

第103集、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書13) :

第4章 : 1-62.

18. 松下孝幸、他、1992 : 佐賀県神埼町朝日北遺跡出土の人骨。

朝日北遺跡(九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(15)) :

418- 504.

19. 松下孝幸、1996 : 根獅子遺跡出土の弥生時代人骨。平戸市史自然・考古編 : 405-441.

20. 松下孝幸、1997 : 熊本市庵の前遺跡出土の弥生時代人骨。

庵ノ前遺跡Ⅲ(熊本県文化財調査報告第160集) : 142-172.

21. 内藤芳篤、1971 : 西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌、79 : 236-248.

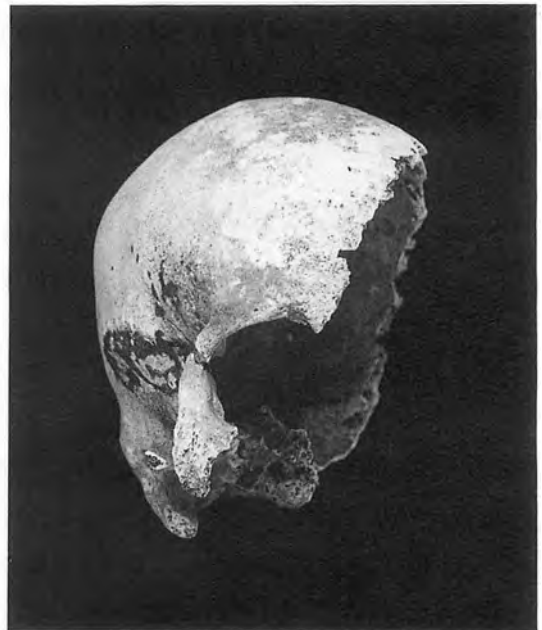
22. 中橋孝博、他、1985 : 金隈遺跡出土の弥生時代人骨。史跡金隈遺跡(福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集) : 43-145.

23. 牛島陽一、1954 : 佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究、1 : 273-303.

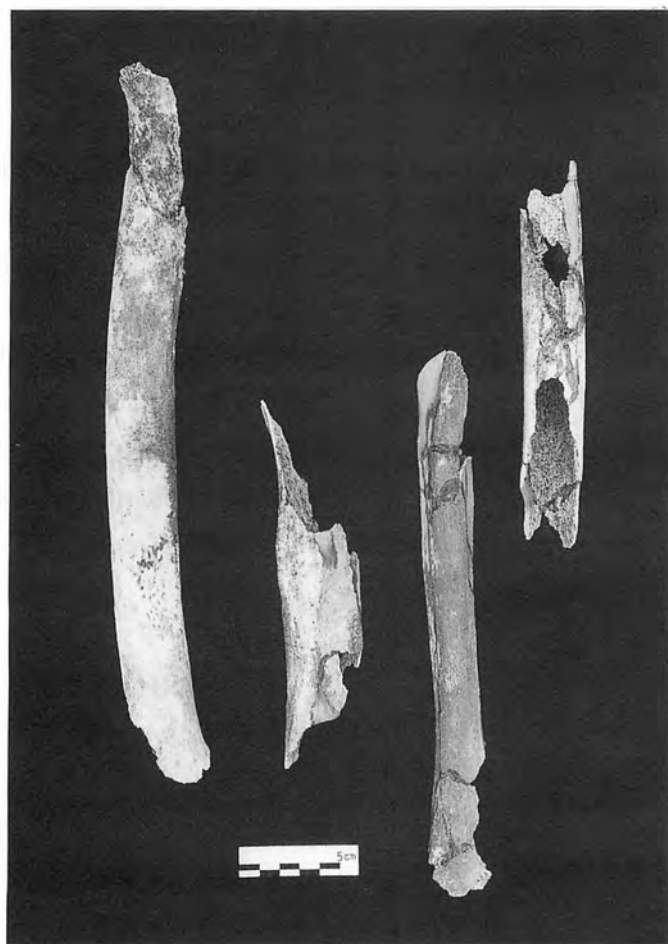
24. 財津博之、1956 : 山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究、3 : 320-349.



頭蓋側面 (Lateral view of the skull)



頭蓋前面 (Frontal view of the skull)



下肢骨 (Bones of the lower limb)

万楽寺出口 (男性、老年)
(Manrakuji-deguchi, senile female)

第Ⅶ章 山海道遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 山海道遺跡の火山灰分析

1 はじめに

熊本県域には、阿蘇カルデラをはじめとして始良カルデラ、鬼界カルデラなど九州地方の火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を求めることにより、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。そこで山海道遺跡においても地質調査、テフラ検出分析、火山ガラス比分析さらに屈折率測定を合わせて行い、示標テフラの層位を明らかにして、遺跡の土層の形成年代に関する資料を求めることになった。調査の対象となった地点は、Oトレンチ北壁である。

2 土層の層序

Oトレンチ北壁では、下位より褐色粘質土（層厚5cm以上、Ⅸ層）、黒色粘質土（層厚38cm、Ⅷ層）、黒褐色土（層厚13cm、Ⅵ層）、黒色土（層厚22cm）、黒褐色土（層厚15cm、以上Ⅴ層）、暗褐色土（層厚

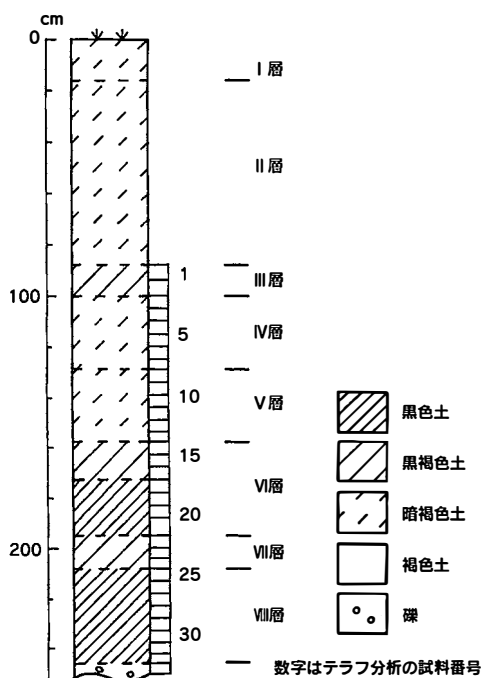


図1 Oトレンチ北壁の土層柱状図

29cm、Ⅴ層）、暗褐色土（層厚29cm、Ⅳ層）、黒褐色土（層厚12cm、Ⅲ層）、暗褐色盛土（層厚72cm、Ⅱ層）、暗褐色表土（層厚16cm、Ⅰ層）が認められた（図1）。

これらの土層のうち、Ⅵ層からは縄文時代早期、Ⅴ層からは縄文時代早期から後期後半、Ⅳ層からも縄文時代後期後半、さらにⅢ層からは古墳時代以降の土器が検出されている。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの17試料について、テフラ検出分析を行い、テフラ粒子の特徴から示標テフラの降灰層準を求めようを試みた。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

分析結果を表1に示す。分析の結果、試料番号27に透明のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準が、また試料番号15に透明のほか淡褐色バブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準が各々あるものと考えられる。

4 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

試料番号27と試料番号15に含まれる火山ガラスの色調別、形態別比率を調べるためにこれら2試料について、火山ガラス比分析を行った。分析手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を検鏡し、火山ガラ

表1 山海道遺跡Oトレンチ北壁のテフラ検出分析結果

試料	軽石			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	形態	色調
1	-	-	-	+	bw	透明>淡褐
3	-	-	-	+	bw	透明>淡褐
5	-	-	-	+	bw	透明>淡褐
7	-	-	-	+	bw	透明>淡褐
9	-	-	-	++	bw	透明>淡褐

11	-	-	-	++	bw	透明>淡褐
13	-	-	-	+	bw	透明>淡褐
15	-	-	-	++	bw	透明>淡褐
17	-	-	-	+	bw	透明>淡褐
19	-	-	-	++	bw	透明>淡褐

21	-	-	-	++	bw	透明
23	-	-	-	+++	bw	透明
25	-	-	-	+++	bw	透明
27	-	-	-	+++	bw	透明
29	-	-	-	++	bw	透明

31	-	-	-	++	bw	透明
33	-	-	-	+	bw	透明

++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, bw: バブル型

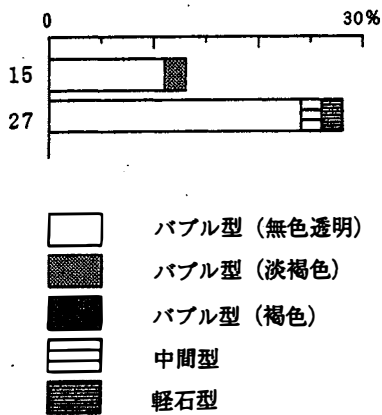


図2 山海道遺跡の火山ガラス比ダイヤグラム

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図2に、その内訳を表2に示す。

試料番号27には透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが全粒子の23.6%を占める。このほか、繊維束状に発泡した軽石型(2.4%)や分厚い中間型(2.0%)ガラスも少量含まれている。一方試料番号15では、透明のバブル型ガラス(10.8%)のほか淡褐色のバブル型ガラスが2.4%認められる。

5 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

表2 山海道遺跡の火山ガラス比分析結果

試料	bw(tr)	bw(pb)	bw(br)	md	pm	その他	合計
15	27	6	0	0	0	217	250
27	59	0	0	4	5	182	250

数字は粒子数, bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, t: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色

示標テフラとの同定精度を向上させるために、火山ガラスに富むテフラの降灰層準の存在が指摘された試料番号27および15の2試料について、位相差法による屈折率測定(新井, 1972)を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表3に示す。

表3 山海道遺跡の屈折率測定結果

試料	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)
15	1.499-1.512(1.509-1.512)	1.708-1.731(1.708-1.712)
27	1.499-1.501(1.500)	1.728-1.734

屈折率の測定は、位相差法(新井, 1972)による。

試料番号27には、火山ガラスのほか斜方輝石や角閃石が含まれている。この試料に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は1.499-1.501(中央値は1.500)、また斜方輝石の屈折率(γ)は1.728-1.734である。

一方試料番号15には重鉱物として斜方輝石、単斜輝石のほか少量の角閃石が含まれている。この試料の火山ガラスの屈折率(n)は1.499-1.512(中央値は1.509-1.512)である。斜方輝石の屈折率(γ)は1.708-1.731(中央値は1.708-1.712)である。この試料に含まれる火山ガラスや斜方輝石の屈折率は、いずれも範囲が広がっている。これは試料番号27に多く含まれているテフラ粒子が本試料にも含まれているためと考えられる。

したがって中央値として測定された数値が、本試料層準に降灰層準のあるテフラの特徴を示していると考えられる。

試料番号27付近に降灰層準のある火山ガラスで特徴づけられるテフラは、火山ガラスの色調、形態、屈折率などから、約2.2-2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976)

、1992) に同定される。また試料番号15付近に降灰層準のあると考えられるテフラは、火山ガラスの色調、形態、屈折率などの特徴から、約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(町田・新井, 1978) に由来すると考えられる。

6 まとめ

山海道遺跡Oトレンチ北壁において、土層の形成年代に関する資料を収集するために、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラス比分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、始良Tn火山灰(AT, 約2.2-2.5万年前)と鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)の降灰層準を検出することができた。

文献

新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—鬼界アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.243-263.

町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

第2節 山海道遺跡の植物珪酸体分析

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

2 試料

試料は、Oトレンチ北壁の3層~9層から採取された9点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図

に示す。

3 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物
処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94、ススキ属型(ススキ)は1.24、ネザサ節型は0.48、クマザサ属型は0.75である。

4 分析結果

分析資料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。

[イネ科]

機動細胞由来: イネ、キビ族型、ススキ属型(ススキ属、チガヤ属)、ウシクサ族型、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにク

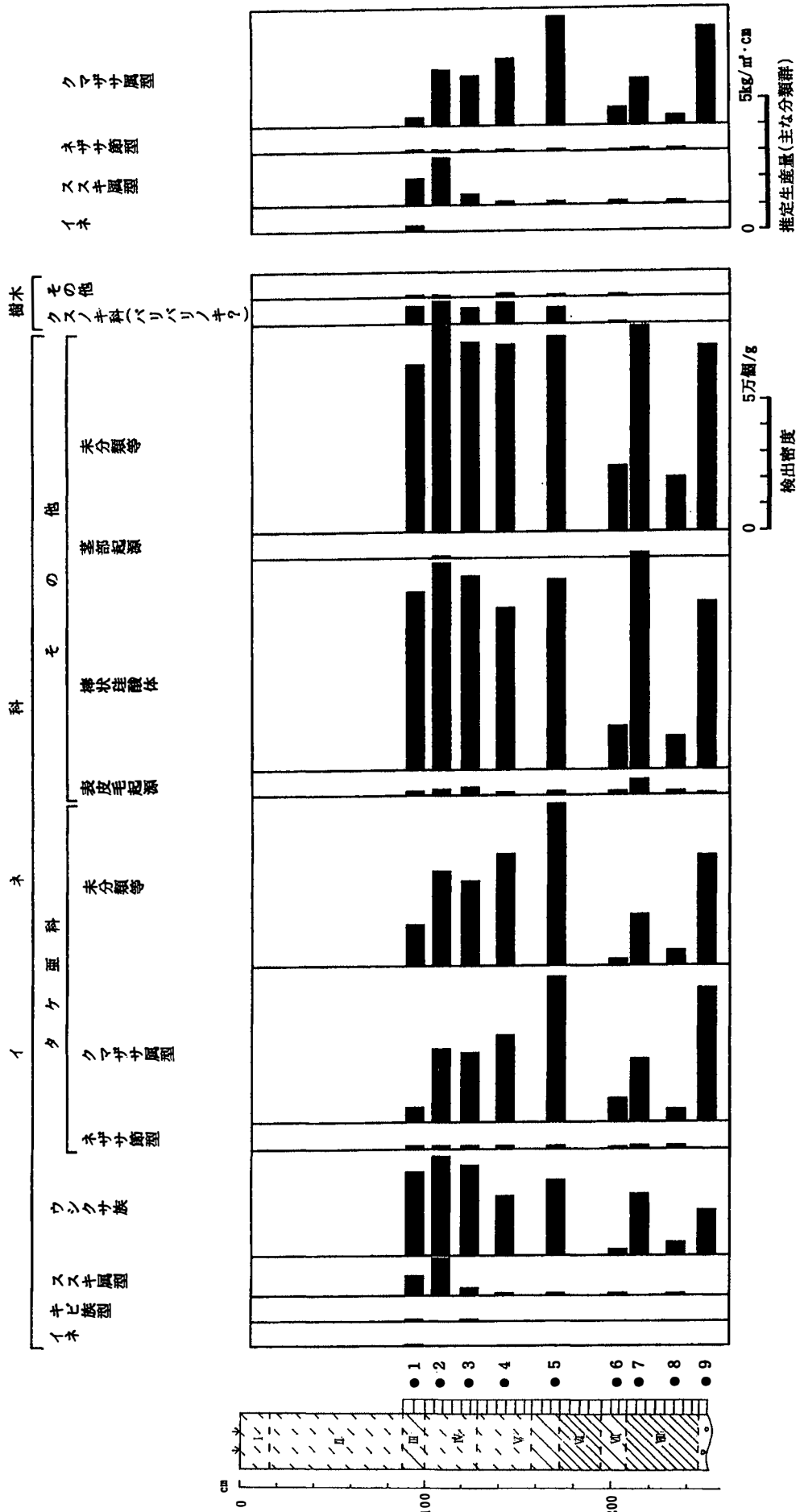


図1 山海道遺跡、オレンチ北壁の植物珪酸体分析結果

マザサ属)、タケ亜科(未分類等)

その他:表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[樹木]

クスノキ科(バリバリノキ?)、その他

マザサ属)、タケ亜科(未分類等)

その他:表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[樹木]

クスノキ科(バリバリノキ?)、その他

IX層(試料9)からIII層(試料1)までの層準について分析を行った。その結果、IX層(試料9)ではクマザサ属型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。VIII層(試料7、8)からV層(試料4)にかけても、密度に違いはある

ものの、IX層とおおむね同様の植物珪酸体組成である。

なお、VII層(試料6)ではクスノキ科などの樹木(照葉樹)が出現し、縄文時代早期とされるVI層(試料5)で増加している。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には、他の分類群よりも過大に評価する必要がある。

縄文時代後期後半とされるIV層(試料2、3)ではクマザサ属型が減少傾向を示し、ススキ属型やウシクサ族型が増加している。古墳時代以降とされるIII層(試料1)では、少量ながらイネが出現している。おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、V層より下位ではおおむねクマザサ属型が卓越していることが分かる。

表1 熊本県、山海道遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度(単位:×100個/g)

分類群 \ 試料	Oトレンチ北壁								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ科									
イネ	8								
キビ族型	8		7						
ススキ属型	85	146	36	8	8	7		7	
ウシクサ族型	315	376	341	234	294	22	248	59	172
タケ亜科									
ネザサ節型	15	15	14	15	15	7	15	15	
クマザサ属型	54	284	261	340	557	96	248	51	508
未分類等	154	361	326	424	610	22	196	51	426
その他のイネ科									
表皮毛起源	15	23	36	8	15	15	53	15	7
棒状珪酸体	661	784	732	605	715	170	812	125	635
茎部起源		8							
未分類等	645	791	725	718	745	251	797	206	709
樹木起源									
クスノキ科(バリバリノキ?)	69	92	65	83	60	7			
その他	8	8		15	8	7			
植物珪酸体総数	2036	2889	2544	2450	3027	606	2370	529	2456

おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m²・cm)

イネ	0.23								
ススキ属型	1.05	1.81	0.45	0.09	0.09	0.09		0.09	
ネザサ節型	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.04	0.07	0.07	
クマザサ属型	0.40	2.13	1.96	2.55	4.18	0.72	1.86	0.39	3.81

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

5 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

以上の結果から、山海道遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

Ⅸ層の堆積当時は、クマザサ属などのタケ亜科植物を主体としてウシクサ族型の給源植物なども見られるイネ科植生であったものと推定される。クマザサ属は常緑性であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカの重要な食物となっている（高槻, 1992）。Ⅷ層から縄文時代早期～後期後半とされるⅤ層にかけてもおおむね同様の状況であったと考えられるが、縄文時代早期とされるⅥ層の時期には周辺でクスノキ科などを主体とする照葉樹林が成立したものと推定される。

その後、縄文時代後期後半とされるⅣ層の時期には、クマザサ属が減少して、ススキ属やチガヤ属が多く見られるようになったものと推定される。ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は比較的開かれた環境であったものと推定される。古墳時代以降とされるⅢ層では、調査地点もしくはその近辺で稲作が開始されたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p.27-37.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—. どうぶつ社.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

報 告 書 抄 録

ふりがな	まんらくじでぐちいせき・やまかいどういせき		
書 名	万楽寺出口遺跡・山海道遺跡		
副 書 名	農村活性化住環境整備事業（寺迫地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査		
巻 次			
シリーズ名	熊本県文化財調査報告		
シリーズ番号	第185集		
編 著 者 名	木村元浩・福田信子		
編 集 機 関	熊本県教育委員会		
所 在 地	〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号 TEL096-381-9211		
発行年月日	西暦2000年3月		

ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まんらくじでぐち 万楽寺出口	くまもとしまんらくじまちあざでぐち 熊本市万楽寺町字出口					199405 -199501	6,000㎡	農業関連
やまかいどう 山海道	くまもとしたろうごこまち 熊本市太郎迫町 くまもとしまんらくじまちあざさきお 熊本市万楽寺町字笹尾					199501 -199603	3,500㎡	農業関連

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
万楽寺出口	集落 墓域	弥生時代 他	住居跡 甕棺墓 配石 など	弥生土器 他	
山海道	集落 墓域	縄文時代 他	住居跡 など	縄文土器 土 偶 他	

熊本県文化財調査報告 第185集

まんらくじ でぐち
万楽寺出口遺跡

やま かい どう
山海道遺跡

発行年月日 平成12年3月31日

発行 熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本県水前寺6丁目18番1号

印刷 株式会社 キャップ
〒860-0822 熊本市本山町189

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 185 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：万楽寺出口遺跡 山海道遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日